
傀儡師紫苑

秋月あきら（ししゃもにゃん）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傀儡師紫苑

【Nコード】

N0785E

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

妖系を自在に操る傀儡師の魔導。傀儡師は 闇 を操り、異界の者たちをもその系で操る。「傀儡師の召喚を観るがいい。そして、恐怖しろ！」操り人形たちは傀儡師の合図ともに踊り出す……。たぶん縦書きのほうが読みやすいです。

夢見る都（1）

暗い暗い闇の中。
傀儡師くわいじである彼の悪夢は覚めることを知らなかった。
彼は操ることができるからこそ、『その』心を知りたかった。

頭まですっぽりと覆い隠す茶色い襪褌布を身に纏い、その人影は壁に寄り掛かりながら深い眠りに堕ちていた。彼が見ている夢は悪夢。寝ても覚めても彼は悪夢を見ていた。

現実を起こる悪夢のようなできごとよりも、深い眠りの中で悪夢を見ていた方がいい。夢は所詮、夢に過ぎないのだから……。

青白い仮面の奥で瞼が微かに動き、紫苑は眠りから覚めた。眼が見開かれ、ゆっくりと腰を浮かせ立ち上がり、遠くを眺める。

廃工場の壊れた窓から陽の光が差し込む。その先の空よりも、さらに先にある向こう側のモノを紫苑しおんは見つめていた。

ここは以前、鉄工所であった場所。買い手もつかず、取り壊しもされず、完全に放置されてしまった場所。

襪褌布をマントのように大きく舞い揺らしながら、青白い仮面を付けた紫苑が振り向いた。

足音も立てず姿を現した三人の影。闇に潜む黒衣に身を包んだ三人は、皆、殺気を凶器のように身に纏い、紫苑に敵意を剥き出しにしていることは間違いなかった。

黒い三つの影が風を切るように動いた。右、左、そして正面から敵が襲い掛かって来る。だが、青白い仮面は常に無表情のまま、紫苑は動こうともしない。

恐れて身体が動かないのではない。恐れなどないからこそ、そこを動かない。それは自信ではない、『絶対』であった。

紫苑の手と手の間に光り輝く一筋の線が走った刹那、腕を飛び、脚が飛び、首が宙を舞い、地面に鈍い音を立てながら落ちた。全て

は一瞬の出来事であった。

バラバラに切断された刺客たちはパズルのようである。どのパーツが誰のものか、さっぱりわからない。

血生臭さが鼻を突く中で、無表情な仮面の奥にある口が小さく呟く。

「このような小者では召喚の必要もあるまい。組織は本気で私を捕らえる気がないようだな……。しかし、なぜ？」

地面に散らばるパーツを見下ろしていた紫苑は、しばらくして空を切るように手をすばやく動かした。手から放たれた煌々なかたが空間に一筋の傷をつくった。その傷は唸り声をあげ、空気を轟々と吸い込みながら広がり、空間に裂け目をつくったのだった。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

紫苑の指先が伸び、彼は声高らかに命じた。

「行け！」

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出した。

腕を伸ばし紫苑が高らかに命じた。

闇 が唸り声をあげると、地面に散乱していた肉塊は、一滴の血も残さず 闇 に呑み込まれ、 闇 は空間の裂け目に還っていた。

闇 は音すらも呑み込んでしまったのか、辺りを静寂が包み込んだ。

夜も完全に明けてしまった。

紫苑は風に呼ばれるようにして、この場を後にして行ったのだった。

悪夢を見続ける者が、ここにもひとりいた。

暗闇の中に響き渡る男の壊れた嗤い声。

「ククククク……ククククク……」

ギィィィという金属扉を開く音の後、世界を包んでいた暗闇の中

に、眩い光が流れ込んで来た。開かれた扉の先には黒い影立っている。

「獲物を狩りに行く気はあるか？」

影の言葉、それは『命令』だった。

金属でできた冷たい箱の中で、彼は手枷と足枷を嵌められ、壁の隅で蹲りながら嗤っていた。影の言葉など全く耳に入っていない様子だ。

「ククククク……白い手を差し伸べてくれ……そしたら俺は、俺は『巢食われる』……ククツ」

「おまえには新たな躰を与えてやる。そして、奴を消去して来い」

白い手袋を嵌めた手が差し伸べられ、鎖をジャラジャラと鳴らしながらミイラのような手が白い手を掴んだ。

「ククククク……契りを交わそう」

痙攣する手で咎人は悪魔との契約に署名をした。

夢見る都(2)

教室のドアが開かれ、いつもと同じように教師が入って来る。どこの中学でもあるような光景。ただ、今朝はひとつだけいつもと違うことがあった。

教室がざわめき立つ。今朝からこの教室には机がひとつ増えている。皆の予感が的中したのだ。

「みなさんこんにちは、雪村麗慈ゆきむらいたいじと言います」

担任の後に入って来た青年は、澀刺とした笑顔で挨拶をした。この挨拶に女子生徒の多くがうつとりとした表情を浮かべた。なぜなら、この青年が類稀なる美青年だったからだ。

このクラスにはこれで二人の美青年が存在することになった。今日転向して来た雪村麗慈と、二年のはじめに転向して来た秋葉愁斗あきはしゅうとだが、二人のタイプは違った。麗慈が精悍な顔つきをしているのに対して、愁斗は中性的な美を兼ね備えた顔つきをしていた。

静まりの無い教室で、担任の男子教師はわざとらしく咳をひとつして、出席簿の角で後ろの席を指し示した。

「あそこが今日から雪村の席になるから、着席しなさい」

教師に言われるままに、麗慈は物音も立てない華麗な足取りで着席した。横の席に座っていた瀬名翔子せなしょうこはその一部始終を瞬きもせずに見つめてしまった。翔子は自分の横に設けられた席にどんな人が座るのか、このクラスで一番楽しみにしていたのだ。

翔子の目が麗慈の目と合った。

「あっ、はじめまして、私、瀬名翔子っつています」

「やあ、翔子ちゃんこんにちは。俺の名前はさっき言ったから知ってるよね？」

爽やかな笑顔を向けられた翔子は、目の前にいる麗慈とは別の顔を頭に思い浮かべていた。

似ている。

顔のタイプも、しゃべり方も、全くの別の人間なのに、翔子は麗慈とある人物に共通のなにかを感じたのだった。しかし、それがなんでいるのかは、はっきりとわからない。漠然となにかが似ていると感じた程度だ。

「麗慈って呼び捨てでいいから、よろしく」

相手の声でふと我に返った翔子に、明るい顔をした麗慈の雪のように白い手が握手を求めてきた。翔子はその手を握って微笑み、あつる話を切り出した。

「この学校って部活動に絶対入らないといけないんだけど、麗慈くんはどの部活に入るかもう決めた？」

「いや、まだ転校して来たばかりだから、何も決めてないけど」

あたりまえの答えだった。麗慈はこの学校の部活や風習などについて、まだ何も知らないのだから、当然の答えと言えた。翔子の狙いはそこだった。

「だったら、うちの部活に入ってくれないかな？」

「何部？」

「演劇部なんだけど、入ってくれるだけでいいの。大丈夫、大丈夫、この学校の生徒って部活に入っても帰宅部な生徒たくさんいるから、演劇部も麗慈くんの名前だけ貸してくればいいから、ね？」

この学校の演劇部は弱小部の部類に入り、演劇部の副部长である翔子は、日夜部員の勧誘に励んでいたのだった。

「いいよ、入っても」

すんなりと二つ返事で麗慈は演劇部に入ること承諾した。これに対して翔子は少し驚いてしまった。自分から勧誘したものの、まさか、演劇部なんかに入ってくれるなんて思ってもみなかったのだ。「本当に本当？　ありがとう」

演劇部はこの学校ではあまりイメージがよくないらしく、勧誘してもほとんど断られるのだが、今年に入ってから勧誘の成功率が上がっていた。それも今年は二年生の転校生三人に勧誘したところ、麗慈を含めて一〇〇%の成功率だったのだ。

翔子が今年勧誘した転校生の一人目は秋葉愁斗。二年次のはじめに転校して来て、すぐに演劇部に入ることを承諾してくれた。

二人に勧誘したのが二学期のはじめに転校して来た涼宮撫子。翔子とは違うクラスなのだが、すぐに打ち解けて部活に入ってくれた。そして、三人目が季節外れの夏の暑さが残るこの時期に転校して来た雪村麗慈であった。

演劇部の二年は最初、翔子ひとりだったのだが、これで四人となり、ついに演劇部の部員の人数が二桁に到達することができた。

だが、相手が本当に演劇部の活動をしてくれるとは限らない。翔子もそれを条件に部員の勧誘をしている。存続のためには、それも仕方ないことだった。

「文化祭が近いから放課後毎日練習してるけど、嫌だったら来なくていいから」

「俺、実は演劇経験者なんだよ」

思わぬラッキーだった。演劇部には演劇のできる者がほとんどいなかったのだ。

「本当に？ だったら、帰宅部にならないでちゃんと活動してくれるってこと？」

「もちろん」

にこやかな笑顔だった。その笑顔を見た翔子も微笑んだが、あることに気が付いて、少し慌ててしまった。

「あつ、でも、今度の公演の役割はもう決まってるから、麗慈君が来てもすることないかも、どうしよう……」

「いいよ、別に、雑用でもするからさ」

「ごめんね、つまらないよね」

「いいって、いいって。次の公演からは俺が主役やるからさ、なんてね」

笑顔を絶やさない麗慈を見て、いいひとが演劇部に入ってもらえたと翔子は心から喜んだ。

「本当にありがとう。演劇部には放課後私が案内するけど、いいよ

ねそれで？」

「ああ、いいよ。今のところいつでも暇だからね」

朝のHRが終わり、いつもどおりの授業が展開していく。この点に関しては転校生が来ても、いつもと変わらなかつた。

やがて学校は終わり放課後が来た。

家に帰る者も入れば、部活に向かう者もいる。そんな中、授業道具をバッグに放り込んでいた麗慈の前に、約束どおり翔子が現れた。「準備がよかつたら案内するけど？」

「ああ、今終わったとこだから、案内してよ」

「じゃあ、私について来て」

廊下には下校する生徒たちなどがまだ多く残っている。

窓のある壁を右手にして、そのまま廊下の端まで行き、そこから階段を一階下りて二階に行く。そして、すぐ近くの渡り廊下を進んだ先に、別館として建てられたホールが存在する。

このホールは音響設備や舞台から観客席などが行き届いて整っており、学校内の敷地に建っているが、市民ホールといった感じの施設なのだ。

このホールは日曜日などになると、劇団やミュージシャンが公演をしに来るが、ここ一週間はほとんど演劇部の貸し切りだった。

ホール内の廊下を歩きながら、翔子は間じかに迫った公演の話をした。

「いつもは教室で練習してるんだけど、うちの学校の文化祭まで一週間切ってるから、本番と同じ場所で練習してるの。でもうちって弱小部なのによくホールを使わせてもらえたなあ。あっ、そう、このホール内にはいくつかホールがあつてね、私たちとは別の場所では吹奏楽部が練習してたりするんだよ」

「そう言えば、学校の見学してた時、そんなこと聞いたような気がするな。そんな季節なんだな……」

「あ、あの、ひとつ聞いてもいいかな？」

麗慈ははっとして顔を上げ、すぐに笑顔を作った。

「何でも質問しちゃっていいよ」

「どうしてこんな時期に転校して来たの？ あ、別に言わなくてもいいんだけど」

こんな時期転校してくるなんて、よほどの事情があるのかもしれない。両親の仕事や家庭の複雑な事情など、想像すればいくらでも出てくる。翔子は質問をした後で、聞かなければよかったと、少し後悔をした。

「両親がいきなり離婚しちゃってさ、突然引越すことになっちゃって、俺も驚いてんだよねまさか両親が離婚するなんて思ってなかったし、母親に連れられていきなり引越したもんな」

麗慈は明るい顔をして言っではいるが、翔子は聞かない方がよかったと思った。

「ごめん、聞かない方がよかったかな……」

「別にいいって、そんなに深刻でも暗い話でもないし」

十分深刻な話のような気がするが、本人の感じ方はいろいろあるのだと思う。

このままこの話をするのも気まずいので、翔子は話題を変えることにした。

「うちの学校の文化祭って、星稜祭って名前だね、結構壮大にやるから外部からも人がいっぱい来るんだよ。でね、今の時期になると文化部はみんな張り切ってどたばたしてるんだよね」

「星稜祭か、全くひねってないな、その名前」

「たしかに中学校の名前そのまんまだもんね」

「で、意味は？」

「意味？ そんなの知らないよ。でも、カッコイイ感じはするけど？」

「カッコイイか。『稜』っていうのは、多面体における平面と平面との交わりの線分のこと言うから、簡単に言っちゃうと、星と星が交わる場所ってことか」

「うちの学校って、そんな意味があったんだ。麗慈くんって物知り

なんだね」

「こんなことで物知りだなんて言われるなんてね」

雑談をしているうちにホールの座席を抜けて、舞台の上まで来た。そこには眼鏡をかけた背の高い男子生徒が立っていた。

この男子生徒は翔子の先輩である三年の中山隼人。なかやまはやと演劇部の部長でもある。

「やあ、こんにちは翔子さん。そちらはどなたですか？」

「こんにちは部長。この人はうちの新入部員の雪村麗慈くんです」

「また、勧誘成功したんですね。すごいね翔子さん」

隼人は微笑みながら麗慈に握手を求めた。

「よろしくね雪村くん」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

相手の手を取った麗慈は軽く微笑んだ。

演劇部は麗慈を含めると全員で一〇名となる。だが、ここに集まっているのはまだ三人だけだ。

翔子は少し不満そうな顔をして辺りを見回した。

「部長、まだ、みんな来てないんですか？」

「さつき」

「あたしはとつくに來てるわよ」

突然翔子の背後から女性の声がして、彼女は驚きながら振り返った。

「あたしが一番早く来たの」

翔子の前に立っているのは三年の鳥海麻耶。とりうみまな彼女は一年生の頃から隼人ともに演劇部を続けているが、舞台に立って役を演じたことは少なく、いつも裏方の仕事をしている。

「麻那先輩来てたんですね」

「そんなことよりも、他の子たちは来てないの？」

麻那は釣りあがったキツイ目をして辺りを見回した。インテリな感じのする眼鏡のデザインのせいか、顔全体に少しキツイ印象を受ける。

しばらくして、残りの部員たちがぞろぞろとやって来た。

一年の女子三人組である早見麻衣子・野々宮沙織・宮下久美。そして、少し遅れて翔子とは違うクラスの二年生 涼宮撫子。

だが、残り二人が来ない。

演劇部は人数が少ないため、ギリギリの配役で公演の演習をしているため、ひとりでも抜けたらろくな練習ができない。もし、本番の日に休まれたりしたら、もっと最悪な事態になってしまう。

隼人は腕組みをして、少し困った顔をしている。

「おかしいなあ、須藤くんはいつも早く来るんだけど、もしかして休みとか？」

隼人に顔を向けられて質問された一年生の女子三人組は首を横に振り、麻衣子が代表をして答える。

「私たち、須藤くんと違うクラスなので知りません」

この三人組は同じクラスで、須藤も一年生なのだが、別のクラスなので全く交流がないのだ。

二人の部員が来ないことに麻那は少しカリカリして、腕組みをしていた。

「はあ、まったく、主演の二人がいなくてどうするのよ。翔子、愁斗はどうしたの？ あなたと同じクラスでしょ？」

「愁斗くんなら学校来てませんでしたけど……」

「休みなの？ じゃあ、まあしかたないわね」
しぶしぶ麻那は納得した。

愁斗は今までの練習を一度もさぼることなく一生懸命やっていた。学校を来ていないのなら、それなりの事情があるのだと納得するしかない。

だが、主演の二人がいなくては、練習がほとんどできない。

その時だった。この場にひとりの男子学生が現れたのは！？

「遅れてすみませんでした」

この場に飛び込んで来たのは、学校を休んだはずの秋葉愁斗だった。

クラスにも顔を出さなかった愁斗の顔を見て、翔子はびっくりしてしまった。

「愁斗くん、学校休んだのに……部活は来たの？」

「うん、僕が休むとみんなに迷惑かかるでしょ？」

「でも、病気とかじゃないの？」

「大丈夫だよ。少し大事な用があつて学校を休んだだけだからね」
柔らかな表情をしていた愁斗の顔が、麗慈と目が合った瞬間に、少し凍りついたのを翔子は見逃さなかった。だが、そのことには触れずに、翔子は改めて部員たちに麗慈の紹介をはじめた。

「あ、こつちにいるのは雪村麗慈くん。今日からうちの部員になってくれたの」

「雪村麗慈です。よろしくお願いします」

カツコイイ新人部員を見た三人組のひとりである、沙織がはしゃぎはじめた。

「きゃ〜、麗慈センパイってカツコイイですね。愁斗さんに負けず劣らずって感じですよ。沙織、この部活入ってよかったなあ」

少々はしゃぎすぎの沙織の横に立っていた久美が、ため息混じりに言った。

「あんた、はしゃぎすぎ。愁斗先輩目当てで部活に入って、雪村先輩まで入って来てくれてラッキーって顔いっぱい書いてあるわよ」
「そんなことないよお。沙織は演劇がやりたくて、この部活に入っただだよお」

「どうだかねえ」

沙織を見る久美の眼差しは冷たい。

「何その目は、久美ちゃん沙織のこと疑ってるの？ ひっど〜い。そついう久美ちゃんは何で演劇部なんて入ったの？」

「私はどの部活でもよかつただけ、あんたが演劇部に入るつていつから」

二人の会話を遮るように隼人が手を叩いた。

「はいはい、おしゃべりはそこまでにして、みんな練習はじめるよ」

翔子が質問をするために手を上げた。

「あの、部長、メサイ役は誰がやるんですか？」

メサイとは今日休んでいる須藤がやるはずの役名だ。

隼人はすでに答えを考えていたらしく、手に持っていた台本を麗慈に手渡した。

「はい、これが台本。セリフを読むだけでいいから」

「俺がですか？」

思わぬことに麗慈は驚いた顔をした。だが、隼人は麗慈に代役をやらせる気が満々だった。

「棒読みでもいいから、協力してよ、ね？」

「はい、わかりました」

台本の表紙に印刷された演目の名は『夢見る都』。

こうして演劇部の今日の練習がはじまった。

夢見る都(3)

薔薇の聖堂で二人の魔導士 フロドとメサイは対峙していた。フロドは姫アリアを奪い返すため、メサイは婚約者アリアを守るため。

二人の間に挟まれたアリアは困惑した。

「お二人とも、お止めになってくださいまし。フロド様、わたくしはメサイ様の妻になると天に定められたのでございます」

「何が天命だ、親が勝手に決めた縁談が天命だと言うのか!？」

「フロド様、わたくしは……」

それ以上言えなかった。アリアにはそれ以上の気持ちをお口に口に出して言うことができなかった。

親同士が決めた縁談。だが、メサイはアリアを心から溺愛していた。

「私はアリアを愛しておるのだ。貴様などにアリアを渡してたまるか!」

「私とてアリアを愛している。そして、アリアも」

「お止めになって、フロド様!」

アリアの叫びも空しく、フロドはメサイに飛び掛り相手を押して倒していた

床に背中をついたメサイにフロドは手を上げた。

その時だった!

「止めて!」

聖堂内にアリア悲痛な叫びが響き渡る。アリアの瞳からは涙が頬を伝わり地面に零れ落ちている。

正気に戻ったフロドは、あと一步のところまでメサイに手を振りかざすのを止めた。アリアが涙を流さなければ、必ずやフロドはメサイに手傷を負わせていたに違いない。

「メサイよ、今日のところは引くが、私はアリアをあきらめたわけ

ではない。必ずやアリアを私のものに……」

フロドはマントを翻し、静寂に包まれた聖堂から去って行った。その姿を見るアリアの瞳には先ほどとは違う涙が浮かび、とても儂い表情をしていた。

アリアを見るメサイはとても哀しい表情をしていた。

メサイとて、アリアとフロドの仲は知っていた。しかし、メサイはアリアを愛してしまった。そして、何があるうとも自分の手に入れない大切なものなのだ。

「わたくしはもう少しここに残りますゆえ、メサイ様はお先にお帰りになられてくださいませ」

このアリアの言葉にメサイは少し躊躇したが、しかたなく承諾した。

「わかった、私は先に帰ろう。だが、遅くならぬように気をつけるのだぞ」

「わかりました」

アリアがうなずくのを見てメサイは去って行った

静かな聖堂に残されたアリアは床に膝をつく、指を組み神に祈りを捧げた。

「わたくしは、わたくしは、あの方を愛しております。それは罪なのでしょうか？」

神は答えてはくれなかった。

沈黙が辺りを包み込み、時間が過ぎてゆく。

目をつぶり祈り続けるアリアのもとへひとりの女性が歩み寄って来た。

聖堂に響く足音を聴き取ったアリアは、目を開けて顔をその方向に向けた。そこに立っていたのはアリアの侍女であった。

「お帰りが遅いので心配になり、様子を見に来てしまいました、どうやらお邪魔だったようでございますね、申し訳ございません」

「いえ、いいですよ。あなたが謝ることではありませんわ。あなたはわたくしの侍女である前に、大切な友人ですもの」

「温かいお言葉、大変に嬉しゅうございます」

侍女はにつこりと微笑んだ。それを見てアリアも笑みを浮かべるが、どこかぎこちない感じがする。

侍女は聞くべきでないかわかっている、友人として聞いてしまった。

「悩み事がありなのですか？」

「ええ、わたくしは深く悩み、その悩みに胸を酷く苦しめられています」

「わたくしは恐らくアリア様の悩みの原因を知っております。ですが、そのことに私めが口を挟んでいいものか……」

「わたくしに意見を言ってくれるのはあなたしかいないわ」

「では、友人として申し上げさせて頂きます。ですが、これはわたくしの個人的な意見ゆえに、聞かれたらすぐに忘れてください」

「……………」

「わたくしはアリア様とフロド様が一緒になると信じておりました。いいえ、そうなって欲しかったのです。本当はこんなことを申し上げてはいけないのですが、三日後に迫った婚姻式を破談させたいとも思います。ですが、わたくしにはそんなことはできません」

婚姻式を破談させるなどという話を聞いて、アリアは深く悩んだ。そして、深く考えた末に答えた。

「メサイ様はあなたの考えているほど悪いお方ではないわ。わたくしをとて愛してくださいませ」

「…………嘘です。アリア様は嘘をついておられます」

「わたくしは嘘などついておりませんわ！」
怒鳴り声が静かな聖堂に響き渡った。これは侍女に言ったのではなく、自分を言い聞かせるものだった。

侍女は全てわかっていた。だからこれ以上はこのことには触れなかった。

「アリア様、帰りましょう」

「わかりました」

二人はそれ以上会話をすることなく、この聖堂を後にして行った。

夢見る都（４）

舞台の照明が一気に明るくなった。

「ここでいったん止めましょう」

隼人の声が舞台に響いた。

すると緊張が解けたのか翔子が深く息を吐く音が舞台に響いた。

「ふう、衣装のお腹回りが少しキツイんだけど？」

アリア役を演じていた翔子はそう撫子に訴えた。アリアの衣装を作ったのは裁縫が得意だと自負した涼宮撫子だ。

「そんなにやハズにやいよお、三週間前に翔子のウエスト測ったじゃん」

三週間に役者全員のサイズを測って撫子が全ての服飾を作ったのだ。そして、その服飾ができあがり、役者たちは今日始めて衣装に袖を通したのだ。

「でも、キツイんだもん」

「それって、翔子が太ったんじゃないの？」

「ひどい！」

「じゃあ、翔子以外にサイズがあつてにやいひと手上げてえ」

撫子がそう聞くと手を上げたのは翔子だけで、他のみんな首を横に振った。

自分の採寸と裁縫技術が正しいことを確信した撫子は満足げな笑みを浮かべた。

「じゃあ、そういうことで翔子はダイエットってことで、よろしく

」

「……う、うん」

翔子が不満げに押し黙ったところで、隼人は全員の気を引くために手を叩いた。

「はい、じゃあ、翔子さんはダイエットをするってことで一件落着いですね。え〜と、翔子さんが祈りを捧げるシーンで、侍女役の早見

さんの出るのがちょっと遅かったかな。たしかにあそこは間が必要なんだけど、動きも会話もないシーンって観客に結構不安を与えるんだよね。だから、もうちょっとだけ早く出てみてください」

「はい、わかりました」

麻衣子が返事をしたのを確認した隼人は話を続ける。

「それで、秋葉くんはいつもよりよかったと思うよ……。雪村くんの演技がよかったせいかな？」

愁斗の演じるフロドの敵役であるメサイ役は、今日休んだ須藤が演じる役なのだが、今日はその代役を麗慈がした。

麗慈はひとりだけ制服で台本を片手に持って演技をしていたが、その演技は迫真の演技だったと言えた。本当に愁斗と麗慈は仲が悪いのではないかと思わせるほど、二人は役に入り込んでいたのだ。

新人部員の思わぬ活躍に撫子は麗慈をはやし立てた。

「烈すごかったよ麗慈クンの演技。麗慈くんってさあ、演劇とかやってたの？」

「まあな。それよりも、今の烈ってなに？」

「超に変わる新アレンジだよ」

撫子は常にテンションが高く、撫子語という特殊言語を操る。

みんなが集まる輪からひとり外れて立っていた愁斗に、麻那が近づいていつて声をかけた。

「今日の愁斗、ちょっと変ね。何かあったの？」

「いいえ、何もありませんよ」

返事には少し冷たい響きが含まれていた。

明らかにいつもと違う愁斗の雰囲気、麻那は珍しいものを感じて微笑する。

「新人部員くんが気になるとか？」

「いいえ、違いますから、気にしないでください」

「いつもは優男くんなのに、今日はちょっとトゲがある感じじゃない？これが本性なのかしら？」

「……さあ、僕にもよくわからないんですよ」

惚けているわけもなく、翳のある表情をする愁斗に対して、麻那は素っ気無く言った。

「ふ〜ん、麗慈に嫉妬とかしてるんじゃないの？」

「どうして？」

「好きな女の子を取られそうでに決まってるじゃない」

悪戯にそう言う麻那の視線の先には、麗慈と楽しそうにおしゃべりをする女子生徒の姿が映っていた。

からかわれた愁斗は何の反応も示さずに、仮面のような無表情な顔をしていた。

相手の反応がなく、つまらなくなつた麻那は隼人のもとへ向かった。

「隼人、今日の部活動はこれでお開きにしましょう」

この言葉を聞いた部員たちは少し驚いた顔をした。公演が近いのに早めに練習を切り上げるなんて、どういうことだろうと思つてしまった。

しかし、部長である隼人は麻那の要求をすんなりと呑み込んだ。

「じゃあ、今日の練習はこれでおしまい。ということで、涼宮さんが入部した時みたいに」

隼人が言い終わる間に、それをされた本人である撫子がいち早く反応した。

「アタシの時みたいに、麗慈クンの爆歓迎会するんですよっ！」

撫子の言葉に隼人はうなずき、それを見た撫子は隼人に手を差し出した。

「はい、部長」

「なに？」

撫子の手には何も乗っていない。つまり、何かをくれという意味表示だ。

「お菓子とか買って来ますから、お金くださいよお」

「いや、あのさ、ピザでも注文しようと思っただけ……」

「じゃあ、ピザも注文してください。アタシと翔子でお菓子とか飲

みもの買って来ますから、ねっ?」

人懐っこい満面の笑みで、撫子は手のひらを隼人の腹に差し込んでグリグリした。笑いながら隼人を脅迫しているのだ。

「あはは、涼宮さんには負けましたね」

と言つて、嫌な顔もせず隼人はポケットから財布を取り出し、千円札を二枚取り出して撫子に渡した。

「これで足りるでしょ?」

「二千円ですかあゝ、ケチッ」

「ピザもあるから、そんなにいらなと思いますよ」

しぶしぶ撫子は納得して、素早い軽やかな身のこなしで動き、有無を言わせないままに翔子の腕を掴んだ。

「行くよあゝん、翔子」

「本当に私も行くの」

「もちちだよ」

『もちち』とは、『もちろん』と言う意味である。

翔子の腕を強引に引つ張つていく撫子の背中に隼人が声を浴びせた。

「部室で歓迎会だからね」

「わかつたにやゝん」

まさに猫撫で声で撫子は翔子を引きつれ飛び出して行ってしまった。

翔子たちの通う星稜中学は昼食がお弁当で持参であり、朝の登校中に学校のすぐ近くにあるコンビニで、昼食を買ってくる生徒たちが多い。そこまではいいのだが、下校時にもコンビニに立ち寄る生徒が多いために、溜まり場となっていることが問題になっている。

コンビニに到着した二人は辺りを見回した。たまに教師たちが校外パトロールをしていることがあるからだ。

辺りを確認し終わった二人はコンビニの中に入った。

翔子が買い物カゴを持ち、撫子がその中にどんどんお菓子や飲み

物を入れていく。

迷うことなく買い物が続けていた撫子の足が止まった。彼女の視線の先にはデザートがあった。

「どれをチョイスしようかじゃあ〜」

「もしかして、自分用のデザートとか言わないよね？」

わざわざこうやって翔子が聞くのは、すでに撫子が自分専用のデザートを買うことを確信していて、『止めなさい』というニュアンスが含まれている。

「翔子はどれチョイスするっ〜？」

「だから、勝手に自分の物買ったらマズイでしょ？」

「そうかにゃあ〜、で、翔子はどれチョイスする？」

「だ〜か〜ら〜、もお〜！」

「ハイハイ、アタシだけプリングチョコイスしちゃお」

カゴの中に撫子がプリンを入れたのを見て、翔子は露骨に嫌な顔をしたが、ため息をついて、もうそのことについては何も言わなかった。

レジで会計を済ませようとしたのだが、そこで思わぬことが起こった。合計金額が七九円オーバーしたのだ。

もらったお金よりも合計金額が超えたとたんに、撫子は仔猫のような瞳で翔子を見つめた。

「翔子お〜、お金プリーズしてえ〜」

「あなたが自分用のデザートなんて買うから」

と少し怒りながらも、自分たちの後ろに客が並んでいることに気づいた翔子は、しぶしぶ自分の財布から一〇〇円玉を出して会計を済ませた。

コンビニの袋を受け取った翔子は、撫子の腕を強引に引っ張って、足早にコンビニの外に出た。

「今のお金は貸しだからね」

「ええ〜、アタシたちの友情はウソだったの!？」

「そういう問題じゃないでしょ。お金にルーズなひとは生活もルー

ズなんだよ」

「いいよおん、アタシはいつも緩みっぱにやしだもん」

撫子はお金を返す気ゼロだった。

「もお！」

いくら翔子がこのことについて話しても、会話は平行線を辿るに違いない。だが、その前に二人の会話を割り込んできた人物がいた。「あなたたち、コンビニでお買い物かしら？」

二人が振り向いた先に立っていたのは、もりしたれいこ森下麗子先生だった。この先生は演劇部の顧問でもある。

撫子はすぐにしまったという顔をして、翔子の後ろに隠れた。

「ビツクリ麗子先生じゃにやいですかあ、こんなところで遭うにやんてミラクルですねえ、あははーっ」

「森下先生こんにちは」

翔子の顔もしまったという表情をしまっている。さすがにコンビニの袋を持った状態では、いい言い訳が思いつかない。

教員たちは文化祭が近いことから、校外パトロールをしていたのだ。そして、たまたま翔子たちは森下先生に見つかってしまった。

「コンビニでずいぶんとお買い物したみたいだけど、パーティーでもするのから？」

言い訳をするのも面倒だったので、翔子は正直に話した。正直に話すのは、この先生だったら見逃してくれる可能性があるからだ。

「実は、これから部室で新入部員の歓迎会をすることになりました……………」

「新入部員？ また新しい子が入ったの？」

「はい、私と同じクラスの雪村麗慈くんが部活に入りました。後で先生のところに言いに行こうと思っていますのですが……………」

「ふ〜ん、歓迎会じゃしかたないわね」

この言葉を聞いた撫子は翔子の後ろから急に飛び出してきた。

「麗子先生、話わかるう〜！」

「いいわよ、見逃してあげるわよ。でも、交換条件として……………」

森下先生は翔子の持っていたコンビニ袋の中に手を入れてプリンを取り出した。

「これで黙っててあげるわ」

「あ、それアタシのプリン！」

「駄目なら交渉決裂よ。そもそも学校内で、しかも部室でお菓子食べてパーティーなんて本当は駄目なんだからね」

しゅんとした撫子はプリンをあきらめた。しかし、その目はうらめしそうだ。

このままだと撫子はずっとプリンを見ていそうなので、翔子は強引に撫子の腕を引っ張って歩き出した。

「森下先生、失礼しました」

「他の先生に見つからないように、気をつけなさいよ」

森下先生と別れて、すぐに撫子は元気になった。撫子は気持ちの切り替えがいつも早いのだ。

「プリンを食べたかったけど、人生山あり谷あり、波乱万丈だもんね」

「ちょっと大げさよ、それ」

「そうかじゃあ、人生は苦難が多いと思うよ。例えば恋愛とか？恋愛という単語に翔子の耳がピクリと反応した。

「恋愛？」

「そうそう、恋愛。で、結局翔子はどっちチョイス？」

「どっちって何が？」

聞き返しながら、翔子は少し動揺していた。そして、撫子は悪戯な笑みを浮かべながら翔子をからかう。

「言葉に出しちゃって、いいのにかじゃあ」

「言ってみなさいよ」

「愁斗くん一筋だと思ってたのに、今日の翔子が麗慈くんを見る目……明らかに怪しかったにゃあ」

「だから、何が言いたいのよ」

何が言いたいのか答えを聞かなくてわかっているし、翔子の顔は

すでに桃色に染まっている。

「どっちの子が好きにやのって聞いているの」

「どっちって言われても……」

「もしかして二股ってのはダメだからね。翔子は好きな方を選んでいいよおん、余り物をアタシがもらうから」

「二人を物扱いしないでよ！」

「じゃあ、どっちどっち？」

「……もお、聞かないでよ！」

「じゃあ、両方アタシがゲツチュだね」

「それはダメえ〜っ！」

「だから、二股はダメだって、 あっ、翔子がハッキリしにやいから学校ついちゃったよお」

学校内に入った二人はコンビニの袋を隠しながら、先生たちに会わないように部室に急いだ。

部室の中に入った二人がすぐに目にしたのは、不機嫌そうに腕組みをする麻那の姿だった。

「あんたたちおっそいわよ、パシリとして三流ね」

「アタシたちパシリじゃにやいですよお。慈善活動で買い出しに行つて来たんです」

「ハイハイ、慈善でもパシリでも、どっちでもいいから、買ってきたものを机の上に出しなさい」

いくつかの机を並べて大きなテーブル状になったその上に、ペットボトルのジュースやポテトチップス、そしてなぜかお酒のツマミまであった。

麻那はサラミを手に取り聞いた。

「何で酒のツマミまであるの？」

顔を向けられて聞かれたのは翔子であるが、カゴにどんどん入れていったのは撫子だった。

「私に聞かれても……、選んだの撫子ですから」

「だって、爆デリシヤスじゃにやいですかあ」

撫子のいう『爆』とは、『烈』よりもスゴイ時に使う表現である。
「あっそ」

と呟いて麻那はサラミを遠くに放り投げて、ポテトチップスの袋を開けた。

翔子は買って来た紙コップをみんなに手渡している途中で、あることに気がついた。

「麗慈くんがいないみたいですけど？」

その問いに、みんなにお酌している隼人が答えた。

「雪村くんには学校からちよつと離れた通りでピザを待ってもらってます」

翔子は疑問を抱いた。麗慈のための歓迎会なのに、麗慈をお使いに出すなんて。

「あの部長、これって麗慈くんの歓迎会じゃないんですか？」

「ジャンケンで公平に決めろつて、麻那が言うからさ」

歓迎会というのは表向き理由で、実際はパーティーがしたいだけなのである。だから、誰をお使いに出そうと別にいいのである。

そのことは翔子も承知の上だ。

「でも、新入部員をこき使うなんて、よくないですよ」

新入部員が部活に対して悪いイメージを抱くかもしれない。それが翔子には心配だった。せつかく部活に入ってくれたのに、辞められては困る。

だが、麻那はジュースを飲みながらさらりと言い放つ。

「弱肉強食よ。人生、強いやつが生き残つていくの。ジャンケンという勝負は学生時代には、ポピュラーな勝負方法よ。それに勝たなくてどうするの？」

「はい？」

翔子は思わず口をぽかんと空けてしまった。麻那の言っていることは、イマイチ理解できなかった。

撫子はお菓子の袋をひとつ持って、部室を飛び出そうとした。

「じゃあ、アタシは麗慈クンのところ行って来るにゃ〜ん」

部室を出て行く撫子の後ろ姿を見て、翔子のはつとした顔をした。だが、すぐに気持ちを切り替えて愁斗の方を振り向くが、愁斗の回りにはすでに三人組の女子がまとわり付いている。

その場に立ち尽くしてしまっている翔子に部長が声をかけた。

「ずっと立っていないで、座ったらどうですか？」

「あ、すみません」

声をかけられてはつとした翔子は近くにあった席に腰掛けた。

席についた翔子に隼人よりも先に麻那がジュースを注いだ。麻那がこんなことをするなんて、珍しいことだ。

「困ったことがあるなら、いつでも麻那お姉様に相談しなさい。相談料を弾んでくれればいい答えをあげるわよ」

「相談料取るんですか？」

「初回はタダにしてあげるわよ」

悪戯な笑みを浮かべる麻那。こんな人に相談なんてしたら、それを弱みに一生強請られそうだ。

しばらくしてMサイズのピザを三枚持って、麗慈と撫子が部室に戻って来た。

「お待ちい〜、ピッツアの到着だよ〜ん」

ピザが到着したことにより、パーティーに華ができた。

麗慈は翔子の横に座り、撫子は麗慈の横に座った。つまり、麗慈は翔子と撫子に挟まれる形となった。

一息ついた麗慈は、腕を伸ばしておつりを隼人に渡した。

「これ、おつりです」

「はい、どうも」

隼人そう言いながら撫子を見つめた。お菓子のおつりはどうしたの？ という意思表示だが、撫子は知らん顔をしている。

撫子を見つめる隼人の意思を感じ取って翔子が弁解した。

「えっと、予算オーバーしちゃって私が少し出したので、おつりはないんです。ごめんなさい」

「あ、いや、別に謝らなくてもいいよ。こっちこそごめんね、翔子

ちゃんにお金出させて」

「でも、部長だけにお金出させるなんて……」

「いちよう僕は年長者だし、それにお金を出し　痛いつ！」

急に隼人は声をあげて、横に座っていた麻那の顔を見た。もしかして、見えないところで麻那に足でも蹴られたのかもしれない。ということは、麻那もお金を出したのかもしれない。

部室の中に誰かが入って来た。部員たちは少し焦る。パーティーをしているのが部外者にバレるとマズイ。

だが、部室に入ってきたのは顧問である森下麗子先生であった。

「あなたたち、盛り上がってるかしら？」

入って来たのが森下先生で、部員たちは一斉に息を吐いた。

森下先生は撫子を無理やり退かして、麗慈の横に座った。

「麗子先生、それは職権乱用ですよ」

「ハイハイ、顧問に口答えしない。私は新入部員に興味があるの」紙コップを手を取った森下先生は、誰かに注げと目で訴えている。それに麗慈がすぐに反応する。

「なにを飲みますか？」

「お酒はないのかしら？」

「あるわけにゃいじゃん、爆横暴教師！」

撫子は森下先生の真後ろに立って、うらめしそうな顔をしてそう言った。だが、森下先生は完全に無視だった。

「じゃあ、お茶でいいわ」

お茶をコップに注ぐ麗慈を森下先生はうつとりした瞳で見つめていた。他に誰もこの場にいなかったら、食いつきそうな目でもある。「いい男ね。演劇部に華が二輪も咲いちゃって……嵐が来なければいいけど」

嫌な含みを持たせる森下先生に麗慈は聞いた。

「嵐とはどういうことですか？」

「だって、いい男が二人もいたら、取り合いになって派閥でもできて、部活崩壊なんてこともありえるわよ。現にね」

森下先生は愁斗を中心に群がる女子三人組とこつち側を見て、再び口を開く。

「まあ、今日は一日目だから、今後の展開が楽しみね、ふふ」
悪戯ね笑みを浮かべる森下先生。それを見て翔子は少し不機嫌な顔をする。

「部活崩壊なんて言わないでください。せっかく、ここまでやって来たのに……」

演劇部は翔子が一年生に入った時から弱小部で、二年目の今年はいい雰囲気できているのだ。それを崩壊だなんて、ひどい。

少しの間、殺伐とした空気が流れたが、その後はどんどんパーティーは盛り上がった。いった。

夢見る都(5)

森下先生が乱入して来たことにより、パーティーはドンチャン騒ぎとなり、やがて終わりを迎えた。

「あなたたち、そろそろ下校しなさい。部員の帰りが遅いと私の責任問題になるのよ」

一番騒ぐだけ騒いでいた森下先生がそう告げると、ちらばったお菓子の袋などを全員で片付けはじめた。

ゴミを見て森下先生が忠告をする。

「ゴミは各自持ち帰りよ、間違っても学校のゴミ箱になんか捨てるんじゃないわよ。わかったわね」

みんな適当に返事をするが、ゴミを持ち帰るのは少し嫌な感じがする。そのことをわかっている隼人はゴミ袋を全部自分の方に回収しはじめた。

「僕が持ち帰るから」

それを聞いて翔子は慌てる。

「ダメですよ、部長ばかり」

「いや、いいって、僕にできるのはこんなことぐらいだからね。じやあ、みんな解散」

部長の言葉を合図にみんな帰っていく。

森下先生がまず部室を出て行き、愁斗がその後を足早に帰って行き、女子三人組も帰って行った。

身体を伸ばして大きなあくびをした撫子は翔子の方を振り向いた。

「じゃあ、アタシたちも帰りますか」

「うん」

「アタシと翔子で帰るけど、麗慈くんも一緒に帰るう？」

「俺も？ いいよ、一緒に帰ろう」

部室を出て行く三人に隼人が手を振る。

「じゃあね三人とも、また明日」

「お疲れ様でした」

翔子は隼人に頭を下げて、二人とともに部室を後にした。

廊下を抜けて、下駄箱に来ると、外からの秋風が昇降口に流れ込んで来た。

外はすっかり黄昏色に染まり、秋の哀愁が漂っていた。

グランドでは運動部が練習をしている。それを尻目に三人は学校の正門を抜けた。

「爆楽しかったよねえ」

撫子はお腹をパンパン叩きながらそう満足そうに言った。楽しかったというより、お腹いっぱいといった感じである。

麗慈は遠い空を無表情に眺めているので、翔子はそれが少し不安になる。

「麗慈くん、もしかして楽しくなかった」

「え、ああ、楽しかったよ。ひさしぶりにおもしろかったかな」

笑顔でそう答えているが、本当にそうだったのか、少し疑問が頭に過ぎる。

「本当に楽しかった？ 撫子にまわり付かれて迷惑だったとかないよね？」

「ひつどい翔子。アタシは麗慈クンを楽しませようとかんばってんだよ」

顔を膨らませる撫子を見て麗慈は笑顔を浮かべた。

「楽しかったよ、本当に……ただ」

麗慈は寂しそうな顔をした。

「俺、秋葉に嫌われてるのかな？」

思わぬ発言に翔子は戸惑ってしまった。彼女はふたりをよく見ていたから、今日のふたりが口を聞いていないこと、視線を合わせなかったことを知っていた。愁斗は明らかに麗慈のことを避けていた。「そういえば愁斗くん烈機嫌悪そうだったかもねえ、もしかして、麗慈クんに嫉妬だったりしてね」

「俺に、どうして？」

「愁斗クンの専門家の翔子ちゃんに聞いてみたらあ〜。じゃあ、アタシはあつちだからおふたりさん、さらばにゃ〜ん」

Y字路に差し掛かったところで、撫子はふたりと別の方向に走っていつてしまった。残された翔子はひとりで気まずい雰囲気になる。翔子は最後にあんなことを言い残した撫子を少し恨んだ。

「何で別れ際にあんなこと言うかな……」

「ところで、愁斗クン専門家って何のこと？」

「え、いえ、あの、別に専門家じゃないです！」

しどろもどろになった翔子の顔は真っ赤だった。それを見た愁斗は笑みを浮かべる。

「もしかして、翔子ちゃんって秋葉のことが好きなの？」

あまりにもストレートな言い方に翔子は頭の中が真っ白になった。

「あ、あ、あああ、あの、別に……」

「わかりやすいな翔子ちゃんは、そんな翔子ちゃん、好きだよ」

優しい笑顔で見られた翔子の頭は爆発した。

「ええーっ!? あの、なに、今の!」

「俺は翔子ちゃんのことを好きなのに、翔子ちゃんが秋葉のこと好きなら……あきらめるしかないな」

「だから、それって、どういう意味!？」

聞かなくても、相手の反応を見ていればわかるが、それでも『好き』という意味を聞かずにはいられなかった。

「俺は翔子ちゃんのことを愛してるってことさ」

「……………」

はつきり言葉に出されると、もう何も言えない。翔子その場に固まってしまった。

「大丈夫翔子ちゃん？」

「……………」

「俺の声聞こえてるよね？」

麗慈は自分の手のひらを翔子の目の前で上下に動かすが、反応がない。

「大丈夫？」

「……………」

「動けないなら、おぶって行くのか？」

この言葉に翔子ははっとした。今の状態で麗慈におぶられるなんて、自分がどうなってしまうかわからない。

まだ動けずにいる翔子の肩に麗慈の手がそっと触れた。

「きゃっ！」

「あ、ごめん」

「……………あ、あのごめんなさい！」

翔子は顔を真っ赤にしたまま逃げるようにして行ってしまった。残された麗慈は悪戯な笑みを浮かべた。そして、麗慈は何事もなかったように無表情な顔をしてひとりで歩き出したのだった。

住宅地を抜けて、ビルかなにかであろう巨大建造物の建設現場の前で、鋭い目つきをした麗慈の足が止まった。

回りに人がいないことを確かめた麗慈は建設現場の中に入って行く。

人の気配はない。鉄骨やそれのできた建物の骨組みがあり、クレイン車などの重機がある。

誰もいないはずの建設現場で、麗慈は声をかけた。

「ずっと見張っていたんだろ、そろそろ出て来いよ」

秋風が吹いた。それと同時に物陰から茶色い布を羽織った人物が姿を現した。布はフードのようになっていて、顔はよく見えない。

謎の人物を確認した麗慈は嗤った。

「ひさしぶりでいいかな、紫苑」

「挨拶はいらない。これは愚問だが、なぜ貴様は私の前に現れたのだ？」

「自分で愚問だって言うなら、わかっているだろ。おまえを殺りに来た、ククッ」

殺伐とした空気が二人の間に流れる。部外者がここにいたならば、

息もできないくらいに苦しい空気だ。学校では見ることでできなかつた麗慈がそこにはいた。

紫苑が麗慈に一步詰め寄る。

「では、なぜ私をすぐに殺さない？」

「俺はいつでもおまえを狙っている。そして、俺はいつでもおまえを殺せる。だから殺らない」

「目的は自己の欲求を満たすためか？」

「気まぐれさ、おもしろいやつらがいつぱいで、嗤い転げるほど楽しい。俺はもう少し学校生活つてやつを楽しみたい。おまえを抹殺したら地獄に逆戻りだろうからな。だからおまえもいつでも俺のことを殺そうとしていいぜ」

「では、今だ！」

細い線が煌いた。麗慈の頬に紅い線が走る。

「危なかつたな、おまえのテンポが遅くなかつたら、俺の首は宙を舞つてたな」

「次は外さん」

再び線が宙に煌く。だが、それは輝く線によってプツリと切られ、揺ら揺らと地面に舞い落ちた。

地面に落ちたそれは、細い糸であつた。

紫苑の操る武器　それは魔導具である妖糸であつた。そして、麗慈の操る武器もまた妖糸である。

「クククツ、古の血を受け継ぐ魔導士も、現代の科学には形無しだな」

「それは違うな。貴様は出来損ないのコピーだ」

「俺様が出来損ないだと!?　訂正しろ、俺は完璧だ、完璧だ、完璧だ！」

狂気ならぬ狂喜に打ち震える麗慈は高らかに嗤つた。

「クククククククククク……」

狂つた麗慈の手から妖糸が放たれた。

茶色いぼろ布が裂けた。

しかし、紫苑は上空を舞い、建設中の建物の骨組みに降り立った。その飛翔距離、実に一〇メートル以上。人間とは思えない業だ。「ククツ、逃げるなんて卑怯だぞ、かかって来い！」

紫苑が宙を舞い降りてくる。襪褌布が風に揺れ音を立てる。

頭上から襲い掛かってくる紫苑を向かい撃つべく麗慈の手が動く。地面に落ちていた鉄骨が宙に浮いた。麗慈が妖糸で持ち上げたのだ。その光景はまるで魔法を見ているようだ。

鉄骨が矢のように飛び、舞い降りる紫苑の腹に直撃した。

鈍い音が鳴り響く　骨や内臓が砕けたのかもしれない。

トラツクに轢かれたような衝撃を受けた紫苑の身体は高く吹っ飛んだ。

上空で紫苑の身体が回転する。そして、落下。

蛙のような格好になりながらも紫苑は地面に着地した。なぜ、紫苑は動くことができるのか？

蛙飛びをした紫苑が麗慈の横を掠め、その瞬間に麗慈の胸を切った。しかし、紫苑が狙ったのは腕であった。

制服が切られ、そこから鮮血が滲み出す。

「ククツ……制服を切るのは止めてくれないか？　一張羅なんでね、明日から学校に行くのに困ってしまう、ククツ」

麗慈は余裕であった。彼は明日も何食わぬ顔をして学校に行く気だった。

紫苑の手が煌いた。

妖糸が針のようにして幾本も麗慈に襲い掛かる。それを麗慈は軽々とアクロバットを決めて避けながら、紫苑に近づいた。

白い腕が紫苑の顔を掴んだ。否、顔ではなく、別の物を掴んでいた。

対峙する二人。麗慈の腕の先にあるもの　それは仮面であった。そして、麗慈の手は獲物を？　む鷲のように、真の顔を隠す仮面を剥ぎ取った。

なんと、そこには美しい女性の顔があった。

糸が煌く。麗慈は慌てて後ろに飛び退いた。

「クククククククク……雌の顔か。はじめて見た顔がそんな顔だったとは、可笑しくて笑っちまうな。本物はどこだ？」

「私が紫苑だ」

玲瓏たる声を発した紫苑に、麗慈は仮面を投げつけ走った。

その後を紫苑が追う。

建設中の鉄骨の上を飛び回る麗慈に妖糸が浴びせられる。だが、鉄骨が切断されるだけで、麗慈は無傷だ。

建物が揺れた。行く本もの柱を切られたために建物は崩れようとしている。

大きく建物が揺れた、そして 轟音を立てながらついに倒壊した。

二人は同時に空にジャンプした。地面との距離は三〇メートル以上ある。

地面を碎き、足をめり込ませながら二人は着地した。

「ククク、地面が少し軟らかいな」

「落ちながら考え事をしていた」

「落ちながら考え事なんて、おまえも頭がだいぶイッてるな」

「組織はどこにある？」

最大の目的はそこにある。組織への復讐と私怨。紫苑は麗慈のような刺客を待ち望んでいた。

「さあな、俺が知るわけないだろ」

これは惚けているのではない。麗慈は本当に知らない。そう教育されているのだ。

「では、私が逃げた後の状況は？」

「おまえとおまえの親父がいなくなっても、プロジェクトはまあまあ進んでる。が、俺以降は全部戦力にならない遣いっパシリだ。やっぱオリジナルがいないとダメなんだろ」

「そうか、なおさら貴様を殺す理由ができたな」

「殺れるもんなら殺ってみな。オリジナルにコピーが劣るなんて大

間違いだ。俺はただの複製じゃなくって、そこに科学のうんたら
のブラスアルファがあるからな」

「その代わりに、魔導の力は削られている。真物を知れ！」
紫苑の糸が空間に一筋の傷をつくった。その傷は唸り、空気を吸
い込みながら広がり、空間に裂け目をつくった。

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が
聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

紫苑の腕が前に伸びた。
「行け！」

完全なる使役。

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出した。それは麗慈に襲
い掛かった。

闇 に腕を掴まれ、足を掴まれ、胴までも掴まれてしまった。

「な、何だこれは!？」

身体に纏わり付く 闇 振り払おうとするが、妖糸を操る手が動
かないのでは、どうすることもできなかった。

「放せ、放せ、放せ、放せ、放せ、放せ、放せてイッてんだろーが！」

「 闇 に侵食されるがいい」

「これはいつたい何だ!」

麗慈の身体は顔を残して全て 闇 に包まれていた。

「ヒトの 闇 だ。これがオリジナルの技であり、あやとりで遊ん
でいるだけのコピーにはできぬ芸当だ」

次の瞬間には麗慈の身体は全て 闇 に呑まれ、 闇 は空間の

裂け目に吸い込まれるようにして還っていった。

空間の裂け目は轟と言う音を立てながら閉ざされた。

戦いは終わった。

いや、まだだ！

空間の裂け目から白い手が、こちらの世界を覗いている。

この場を立ち去ろうとした紫苑の腕が宙に飛んだ。血飛沫が地面
を紅く染める。

「クククククククククク……帰還成功だ。オリジナルも大したことないな。詰めが蕩けるくらいに甘すぎる」

裂けた空間から声がして、手が出て、次に足が出て、麗慈が姿を現した。

「ま、まさか!？」

この時はじめて紫苑の顔に表情が浮かんだ。

驚愕する紫苑。まさか、闇に呑まれたものが還ってくるとは

……!？

「ククツ、地獄を生きる俺様が、天国でぬくぬくと生きる紫苑ちゃんに犯られるわけないだろ？」

残った紫苑の腕が素早く動く。が、妖糸はプツリと切られてしまった。

「俺、ちよつとハイになって来ちゃってさ、もう抑えらんないって感じ……ククク」

嗤い震える麗慈の目が紫苑を舐め回すように見た。

「クククククク……切り刻んでヤルよ」

相手の動きが速すぎて紫苑は出遅れた。

残った腕が飛んだ、

成す術もなく、やられるがままだった。

足が切断され、胴が地面に落ちた。それを見て麗慈が舌なめずりをする。

「メインディッシュだ」

首が飛んだ。美しき女性の頭が宙を舞った。そして、地面に鈍い

音を立てて落ち、転がる。

「クククククク……ヤツちゃった」

麗慈は地面に落ちた頭を蹴飛ばして、嗤った。

「クククククククククク……クククククククククク……ククク」

遠くからサイレンの音が聴こえる。パトカーがこっちに向かって来ているのだ。

建設中の建物が倒壊した時に、誰かが警察に電話したのであろう。

警官がこの場に駆けつけた時には、麗慈の姿はなく。残っていたのは地面を染める紅だけだった。

麗慈から走って逃げた翔子の顔は真っ赤だった。もちろん走っているせいもあるが、それ以上に麗慈のあの言葉が、頭を振っても振っても耳から離れない。

俺は翔子ちゃんのことを愛してるってことさ。

あれは愛の告白以外の何でもない言葉だ。

翔子は頭が可笑しくなりそう、何度も躓きそうになった。

自分は麗慈さんに告白してしまった。でも、自分が本当に好きなのは、どっちなのだろうか。翔子の頭の中で二人の男が戦っていた。

頭の中で戦う二人の男 それはまさにあの演劇と同じであった。しかし、それは翔子の頭の中での出来事。愁斗が自分のことをどう思っているのか、翔子にはわからない。

二人のどちらが本当に好きなのか、本当にどちらかが好きなのか。真実が全く見えなかった。

今日始めて逢ったばかりの男性を好きになって、愁斗への愛は嘘だったのか？

嘘ではなかった。でも、麗慈のことも好きなんだと思う。そう、二人はの性格は違うけれど、何かが同じような気がする。翔子はそこに惹かれた。

どこを走ったのか覚えていないまま、翔子は自宅の前に立っていた。

こじんまりした家だが、一軒やであることには変わりない。

家の中に入った翔子は二階に駆け上がって、自分の部屋に飛び込んだ。

部屋に入った翔子はそのままベッドに飛び込む。そして、枕をぎゅっと抱きしめた。

「あーっ、まあ、何だかわからないよお！」

今まで男性を好きになったことは何度もあったけど、ふたり同時に好きになったことははじめてだった。いつも一途に想い続けて、成就したことなんて一度もなかったと翔子は思った。

今回は違う。麗慈も自分のことを好きだと言ってくれた……けど、愁斗への想いは消えない。消えるはずがない。

二人の男性に想いを寄せるなんて、罪の意識を翔子は感じてしまった

愁斗が二年生のはじめに転校して来て、すぐに翔子は声をかけた。誰よりも早く。

もちろん、演劇部の部員勧誘のために声をかけたのだが、最初はいい返事がもらえなかった。それでも、声をかけ続けていたら、最初は冷たい態度だった愁斗が明るくなってきて、愁斗は誰にでも優しい人になっていった。転校してきたばかりで、きっと他の人にもどっしり接していいのか、わからなかったのだと思う。

翔子は愁斗への想いを馳せた。
「優しい愁斗くんが本来の姿だったんだと思う……。笑顔の愁斗くんが好き」

でも、今日の愁斗は様子が変わった。撫子の言うとおり、今日の愁斗は麗慈を避けているようだった。

冷めたような表情を時折みせる愁斗は、転校して来た時と同じだ。そして、哀しい顔をする時もある。最近は笑顔だけだったのに、愁斗はどうしたのだろうか？

愁斗のことを考えると胸が苦しくて、でも、どうしたらいいのかわからなくて……。

自分は愁斗に何もしてあげられないのだろうか……。と翔子が想った時、答えが少し見えて来たような気がした。

部活の勧誘を何度もして、ついに部活に入ってくれと言ったあの時の笑顔。その笑顔は翔子の脳裏に鮮明に残っている。

「……あの笑顔が一番うれしかった」
その時、答えがはつきりと出た。

「やっぱり、私は愁斗くんが大好き。麗慈くんへの想いは、麗慈くんが愁斗くんと重なって見えたら……でも、何でだろう?」

全く違う人間なのに、どうして? とその疑問だけは解けなかった。

枕を抱きしめて、ずっと考え事をしていたら、部屋の前に誰かが歩いて来る音が聴こえた。

足音は翔子の部屋の前で止まり、コンコンというドアをノックする音が聴こえて、そのすぐ後に翔子の母親の声が聞こえた。

「夕飯とつくにできてるわよ」

「いらなーい」

ベッドに横になりながら、翔子は気のない返事をした。すると、ドア越しに母親はまだ話し掛けてくる。

「どうしたの、体調でも悪いの?」

「ピザ食べたからお腹いっぱいなの」

「もお……」

呆れた声を出して母親は行ってしまった。

遠ざかっていく足音を聴きながら、翔子はため息をついた。

お腹がいっぱいというのは本当だが、いろんなことを考えすぎて、物が喉を通らないという理由の方が大きい。

麗慈に告白されて、愁斗が好きだと確認した。けれど、明日から麗慈にどんな顔をして接したらいいのかわからない。翔子はいつものこと明日学校を休んでしまおうとも考えた。

けれど、それは問題の根本的な解決にならないので、翔子の中ですぐに却下された。

「お風呂入ろう。お風呂入って全部水に流……せないよね」

ため息をつきながらも、翔子は結局お風呂場へと向かった。

脱衣所についた翔子は服を脱ぎ、お風呂場に入った。

少しお風呂場は寒かった。床のタイルに足の裏が触れると、全身にゾクゾクと寒気が走る。

シャワーを出して床を濡らして温め、その後に自分がシャワーを

浴びる。

ボディソープをスポンジに取って、足の先から上へと洗っている。そして、全身の泡を流して、お湯に浸かる。

「はあ〜」

と思わず年寄りのような声が出てしまう。

目をつぶり、至福の時を満喫する。

だが、お風呂に入り目をつぶると、いろいろなことを考えてしまう。お風呂に入っている時と寝る前は、考え事をしたくなくてもしてしまう。

「はあ〜」

と今度はため息が出てしまった。

やはり、翔子は麗慈にどう接していいかわからない。こんな経験はじめて、対処の仕方が全く思いつかない。

テレビやマンガの恋愛物で、同じような話はなかったかと考えるが、思いつかない。

お風呂で全部水に流すつもりが、すっかり浸かってしまっている。いつもよりも早くのぼせてしまった。そこで、お風呂を出て、少し冷たいシャワーの水を頭から浴びた。

「はつきり言わなきゃ……全部」

翔子は決心した。麗慈に自分の気持ちをはつきと告げて、そして、愁斗にも……。

夢見る都(6)

翌朝、教室に入り席につくと、すでに横には麗慈が座っていた。

「おはよ、翔子ちゃん」

「おはよう、麗慈くん。……頬の傷どうしたの？ それに制服の上着は？」

麗慈の頬には切り傷があり、セーターを着ていて制服の上着を着ていなかった。

「この傷は、うちで飼ってる猫に引っ搔かれて、制服は汚れちゃってさ」

「麗慈くんのうち猫飼ってるんだ。いいね、うちもペット飼いたいんだけど、お母さんがダメって言うんだよね」

「うちの猫は躰がなくなってさ、この有様だよ」

笑ってみせる麗慈。翔子はその笑顔を信じきっている。

「麗慈くんが何かしたんじゃないの？」

「そんなことないよ、あいつが喧嘩っ早いだけ」

「ふ〜ん。ところで飼ってる猫は一匹だけ？」

「二匹だよ。もう一匹はわけわかんない性格しててさ、まあ、猫っぼいって言ったら猫っぼいんだけどな」

「にゃ〜んと、おはよ、お二人さん」

声をかけて来たのは撫子だった。それを見た翔子は小さく呟く。

「ここにも猫がいた」

「にゃ〜ん、撫子は猫だよ〜ん」

翔子は撫子のお尻にしっぽが生えていても可笑しくないと考えている。

「ああっ!?!」

突如、撫子が声をあげて、クラス中の人が振り向いた。

「激ショック! 麗慈くん、その傷どうしたの!?!」

「うちの猫に引っ搔かれてさ」

「痛くにやいの、だいじょぶう!? だいじょぶじゃにやかったら、撫子は夜も眠れません」

呆れ顔で翔子は撫子を見つめた。

「心配しすぎだよ撫子。騒いでないで自分のクラス帰ったら?」

「もしかして、アタシお邪魔にやのおく、ふたりの邪魔しちゃった?」

「違うから、まあ、どうでもいいからクラス帰りなさいよ、先生もうすぐ来るよ」

「ええ〜っ、だってアタシ一番前の席でさ、先生にロックオンされちゃって、びしばし注意されまくり」

「それって、撫子が授業中に騒いでるからでしょ?」

「うっそ〜、騒いでにやいよお。それに違うクラスにやんだから、翔子が知ってるわけにやいじゃん」

「知ってるよ、だって撫子の叫び声が授業中に聴こえてくるもん」

撫子は翔子のとなりのクラスで、授業中に翔子のクラスが静かだと、撫子の大声がよく聴こえて来ていた。

「爆マジ!? アタシの声聴こえてるの?」

撫子が横を見ると麗慈が笑っていた。

「そう言えば昨日も聴こえてた。『うっそ〜、爆マジ!?』って叫び声がさ」

「うっそ〜、爆マジ!? それって烈恥ずかしいじゃん」

「恥ずかしいって思うんだったら、授業中叫ぶの止めなさいよ。何だか、私まで恥ずかしくなるでしょ?」

「にやんで翔子が恥ずかしがる必要あるの?」

「今も恥ずかしいよ。ここで撫子が大声出して、友達として一緒にいると恥ずかしくなるよ」

「ええ〜っ、翔子ったらアタシのことそんなに目で見てたの……爆裂シヨック! もう翔子と友達やってける自信ナサナサあ〜、ぐすん」

目頭に手を当てて泣いたフリをはじめめる撫子。人々の視線が撫子

を中心にかくさん集められる。近くにいる翔子と麗慈まで変な目で見られている。

「うあ〜ん、翔子ちゃんが苛めるよあ〜ん。この学校来てはじめてのお友達だったのに、こんな破局を迎えるにやんて、劇的展開って感いい」

人々の視線が次第に痛くなり、翔子は耐えられなくなっただけでなく撫子に謝った。

「ごめんね撫子、私が爆悪かったから許して」
「にや〜んてね」

顔を上げた撫子は満面の笑みを浮かべていた。嘘泣きだったのわかっていたが、こんなことをされると腹が立つ。だが、また嘘泣きをされると困るので、翔子は怒りをぐつと腹の中に押し込めた。

「もう、いいから早くクラス帰りなさい」

「だから、今の席イヤにやんだって。早くクラス替えしにやいかなあ。それで、麗慈くんか愁斗くんと同じクラスにやったら爆ラッキー。そうそう、そう言えばさあ、愁斗くんまだ来てにやいみたいだけど？」

愁斗の姿はまだなかった。もしかしたら、今日も休みなのかもしれない。

翔子の顔に少し不安の色が浮かんだ。

「愁斗くん、どうしたのかな？もしかして、昨日無理して部活来てたのかな……？」

チャイムが鳴り、急に撫子が慌て出した。

「烈ヤバヤバって感いい。急いで帰らにやいと遅刻にされるよあんとにやことで、うんじゃ、さらばにや〜ん!!」

撫子は軽快なステップで走り去っていた。

なぜか翔子はどつと疲れた。

「あーっ、何か疲れた」

「撫子ちゃんって、いつでもハイテンションだよな。本人は疲れないのかな？」

「私の知る限りは二十四時間あんな感じ」

机に突っ伏しながら翔子はそう麗慈に話した。麗慈はそれを聞いて笑みを浮かべた。

「そうなんだ。毎日だと付き合ってる方が死ぬかもな」

「今の私を見たとおり」

『今の私』とは、机に突っ伏して疲れきった表情をしている翔子のことである。

しばらくして、先生が教室の中に入って来た。そして、今日もいつも通りの授業が展開されていく。

放課後になり、翔子は麗慈に声をかけた。

「麗慈くん、部活行こうか？」

「ああ、行こう」

教室を出て廊下を抜け、ホールの中に入る。

廊下と違ってここには人がいない。いたとしても演劇部の部員たちだけだ。

「麗慈くん」

「なに？」

「あのね……」

「顔赤いよ」

「えっ、嘘!?!」

どうやら自分でも気づかない間に翔子の顔は真っ赤になっていたらしい。それを指摘された翔子はすぐに顔を伏せた。

そんな翔子の顔を意地悪く覗き込もうとする麗慈。

「顔下向けることないじゃん」

「止めてよ、覗き込まないでよお」

「だって、そんな翔子が可愛いからさ」

「……麗慈くん、そのことなんだけど」

急に翔子の声のトーンが下がった。

「麗慈くんのこと、嫌いじゃないんだけど、でも、ダメなの」

「やっぱり、秋葉のことが好きなの？」

「うん、だからダメ」

「ふ〜ん。昨日は翔子ちゃんが秋葉のこと好きなら、俺はあきらめるって言ったけど、あれ撤回。俺はいつまでも翔子ちゃんのが好き、で、絶対自分の方を振り向かせて見せるから」

「えっ、でも……」

口ごもる翔子を麗慈は壁に無理やり押し付けた。翔子は身動き一つできなくなった。

「麗慈……くん？」

「俺、翔子ちゃんが欲しい」

麗慈の顔が自分の顔に近づいて来て、はっとした翔子は、麗慈の身体を思いつきり突き飛ばしながら叫んだ。

「ダメッ！」

押し飛ばされた麗慈は床に倒れ、翔子はその場から居た堪れなくなつて逃げだした。

麗慈から逃げた翔子は舞台に急いだ。誰かにいて欲しいと翔子は思った。麗慈とふたりつきりになるのが嫌だったのだ。

運良く、舞台では隼人と麻那が他の部員たちを待っていた。

「部長こんにちは、麻那先輩もこんにちは」

麻那が掛ける眼鏡の奥で瞳が妖しく光った。

「顔が赤いわね、風邪？ それとも他に何かあったのかしら……あたしの相談窓口はいつでも開いてるわよ。初回相談料はタダだから、いつでも相談しなさい」

この言葉に翔子は少し考えた。いつもは即答で断るのだが、今の気分は違った。

「あの、麻那先輩、ちょっと……」

「あら、本当に相談事があるの？」

翔子は小さくうなずき、それを見た麻那は隼人に言った。

「そういうわけだから隼人、舞台裏に誰も近づけないように」

麻那は翔子の腕を引っ張って舞台裏に向かった。

舞台裏は薄暗く、そこを抜けて廊下に出た。

「あの、舞台裏で話すんじゃないかったですか？」

舞台裏を通り過ぎて翔子はどこに連れていかれようとしているのか？

麻那は妖艶な笑みを浮かべた。

「いいとこよ」

「あ、あの変なところに連れ込まれたりしないですよね？」

「さあ、どうかしら？」

「わ、私帰ります」

逃げようとした翔子の腕を麻那が力強く掴んだ。

「冗談よ、楽屋に行くの」

「でも、楽屋つて鍵が掛かってるんじゃないですか？」

このホールにはもちろん楽屋が存在している。だが、その楽屋は外部から公演に来る人たちのもので、演劇部が使うことは本番当日以外には許可されていない

「あたしと隼人が鍵持つてるの知らなかったの？」

「そうなんですか、でも、なんで鍵持つてるんですか？」

「だいだいうちの部活に受け継がれてるのよ。あたしたちが卒業する時に鍵はあなたに託してあげるわ」

「楽屋の鍵なんて持ってて、何に使うんですか？」

「こういう時みたいに内密の人と話す時とか、後は学校にばれないようにドンチャン騒ぎする時とか、部室でパーティには限界があるからね」

「そうなんですか」

二人が話しているうちに楽屋の前まで来た。

麻那が鍵をドアに差し込むと、本当にドアが開いた。

「開いた、本当に開くんですね」

「信用してなかったの？ こんなことくだらない嘘つくわけないでしょ」

二人は楽屋の中に入り、麻那はすぐに鍵を閉めた。

ガチャという音が聴こえ、翔子は閉じ込められた気分になる。相手が麻那だから、そういう気分がするのだ。

「適当なところに座りなさい」

床は畳で鏡台やテーブルなどもある。大部屋らしく結構広い。

翔子が適当に畳に腰を下ろすと、麻那がその前に座った。

「さてと、話を洗いざらい聞かせてもらいましょうか、とその前に

「

麻那は制服のポケットから二本の缶飲料を出した。一本はコーヒ
ー、もう一本は炭酸飲料水だった。

「どっち飲む？」

「そんなのポケットに入れてたんですか。もしかして、いつでも持ち歩いてるとか？」

「さっきホールの自販で買ったのよ」

二本買ったということは誰かと一緒に飲むつもりだったのか？

ちなみに、この学校には自動販売機が職員室前とホール内に設置されていて、生徒も買うことが許可されている。

「じゃあ、PONTAオレンジをください」

「はい、どうぞ。もし、コーヒーを選んでたら屠ってたわよ」

「屠るってなんですか？」

「コーヒー選んでたら、殺ってたってことよ」

『やってた』という言葉はすぐに翔子の頭の中で『殺ってた』に変換された。

「……コーヒー好きなんですか？」

「別に好きでもないけど、雰囲気」

「雰囲気？」

「悪い？」

翔子の背中にゾクゾクと寒気が走った。麻那な目が少し恐かった。

「い、いえ似合ってると思います」

「ありがと。じゃあ、話の本題に入りましょうか。で、どうしたの？」

そう言って麻那はコーヒーを飲みはじめた。翔子もプルトップを引いて、ジュースを飲もうとすると、プシューと少し泡が出た。きつと、麻那のポケットに入っている時に少し振られてしまったに違いない。

翔子は異様に喉が渴いていたらしく、ぐびぐびっと一気に半分くらいを飲み干して、大きく息を吐いた。

「はあ、あの、実は、愁斗さんと麗慈くんのこと何ですけど」

「ふうん、あなたはどっちが好きなの？ 今までは愁斗一筋だったのに、昨日は麗慈を見る目が妖しかったわね」

「……そんなにわかりやすいですか、私？」

「顔や行動に出すぎ」

ちよつと翔子はショックだった。昨日は撫子に凶星を突かれて、今日は麻那に突かれてしまった。この分だと、もっと多くの人に自分の気持ちがバレバレかもしれないと、翔子は焦った。

「あの、どのくらいの人にバレてると思いますか？」

「それは地球の人口比で言った方がいいかしら、それとも演劇部内限定で言った方がいいのかしら？」

「演劇部内をお願いします」

「そうね、あんたが愁斗のことを好きだと思ってる人は八割くらいかしら。麗慈の方はまだあんまり気づかれてないと思うから気をつけなさい」

「ほぼ全員じゃないですか」

「でも、愁斗は演劇部&学校のアイドルだから、好きな人いっぱいいるし、あんたもその中のひとりってことで、そんなに気にしなくてもいいと思うわよ」

翔子は黙り込んでしまった。『その中のひとり』という風に括られてしまったことがショックだったのだ。自分は他の人とは違うという感情が翔子の中にはある。

「私は愁斗くんに憧れてるだけじゃありません。本当に好きなんです。愁斗くんはアイドルなんかじゃありません！」

「ふ〜ん、愁斗の方が好きなわけ？」
「……そうですね、愁斗くんが好きです」
「ふ〜ん、いい脅しのネタができたわね」
「ええっ!？ ひどい、ひどい、ひどいです麻那先輩!」
「冗談よ、あなたのことは嫌いじゃないから、からかうぐらいで本気で傷つけようとはしないわ」
「からかわれた時点で傷つきます」
「あら、そうなの。それはあなたの判断基準であたしの判断基準外」
「やられてるのは私ですけど」
「やってるのはあたしよ」
「この問題についてはどこまで行っても平行線を辿りそうなので、翔子の方が折れた。」
「この件についてはいいです。それよりも、話の本題していいですか？」
「どうぞ、ぶっちゃけなさい」
「麗慈くんに告白されちゃって」
「いいじゃない、付き合いなさいよ」
「だから、私は愁斗くんが好きなんです!」
「知ってるわよ。そんなに好き好き連発して恥ずかしくないの?」
「この言葉を言われた瞬間に翔子の顔は一気に沸騰した。」
「からかわないでください」
「翔子みたいのってからかい甲斐があるのよね。で、コクられてどうしたの?」
「断りました。そしてら、それでも好きだって言われて、キスされそうになって、逃げたんです」
「ふ〜ん、それでさっき走って来たわけ」
「私、どうしたらいいんですか?」
「あんたがフリーでいるのがいけないのよ。早く愁斗にコクって、付き合っつて、愁斗に守ってもらいなさい」
「ええっ!？ あの、えっと……」

翔子は思わず声を荒げてしまった。息も少し苦しくて荒い。

愁斗に告白する　そうしようとして昨日誓ったけど、改めて人から言われると動揺してしまう。それに、もし断られたと考えると、この世界から消えたくなくなってしまおう。

麻那は呆れたような顔をして翔子見つめた。

「あんたたち、どっちもどっちね」

「どういうことでしょうか？」

「愁斗もあんなこと好きだと思っ。けどね、愁斗は翔子に好かれてると思ってないみたい。あの子も隼人と一緒に超鈍感クンね」

「愁斗くんが私のことを！？」

そんなまさか、そんなことあるはずがないと翔子は思っていた。

愁斗が自分のことを好きだったら、それほどうれしいことはないけれど、そんなこと……ない。でも、何を根拠にそう思うのか？

愁斗が自分のことを好きじゃなかった時の保険。最初から、ありえないことだと思っていれば、傷つかなくて済むと翔子は自分でも気づかないうちに思っっていたのだ。

「じゃあ、ちゃっっちゃか愁斗に告白してみなさい。それで何かトラブルが起きたら、またあたしに相談しなさい、そしてたらまた新しい助言をあげるから」

「……はい」

「じゃあ、部活やりに行くわよ。あんたが戻らないと練習が進まないからね」

麻那に相談をしたのは正しかったのか。翔子の気持ちは少し楽になって、新たな問題ができて、収穫もあった。これからどうするかは翔子次第だ。

夢見る都（7）

すでに部員はほとんど集まっていた。ほとんどというのは二人来てないからだ。

今日来ていないのは愁斗と、そして、須藤拓郎　メサイ役を演じるはずの一年生が来ていない。

麻那は昨日に引き続きご立腹だった。

「愁斗は今日も学校休みだったの？」

翔子は麻那に睨まれて、背筋をピンと伸ばした。

「は、はい、今日も休みでした」

「一年！　須藤はどうだったの！」

理不尽な麻那の怒鳴りに、女子三人組は後ろに大きく下がった。

女子三人組の状況はこうだ。野々宮沙織は完全に怯えて宮下久美の後ろに隠れてぶるぶる震えている。久美はどうでもいいような感じで上の空。そして、早見麻衣子が代表して前に出た。

「須藤くんは今日もお休みだったみたいですよ」

「この大事な時期に休みっていうの！」

カリカリしている麻那の肩に隼人がそつと手を乗せた。

「まあまあ、仕方ないと思うよ。須藤くんにもいろいろ事情があると思うし」

「でも、やっと漕ぎ着けた公演でしょ！　ここでおじゃんなんてあたしは嫌よ！」

麻那は隼人の襟首に掴みかかった。

「あんたはいつもそう、周りに流されて、自分のやりたいことを押し込めて」

「仕方ないだろ、来てないんだから！」

隼人は怒鳴り声をあげた。思わず部員たちは身体を強張らせた。部長が怒ったのを誰もがはじめて見た。

沈黙が流れた。その沈黙を破ったのは彼女だった。

「あら、みんな練習はどうしたのかしら？」

この場に現れたのは顧問の森下麗子先生だった。

翔子はすぐに森下先生に駆け寄った。

「森下先生が練習見に来るなんて珍しいですね」

「大事な話があつて来たのよ」

いつのなく森下先生は真剣な顔をしていた。先ほどのこともあり部員たちは全員黙つてしまつている。

「一年生の須藤拓郎が行方不明なのよ。家出かもしれないし、何か事件に巻き込まれたのかもしれないけど、とにかく行方不明なの。それをあなたたちに伝えに来たのよ。じゃあ私は臨時の職員会議があるから」

森下先生がいなくなつても声が出なかった。誰もが愕然としてしまい、頭を抱えてしまった。

あまりにも急な出来事。それも、最悪の出来事が起きた。

演劇部の活動は決して順調とは言えない。それでも、ここ数日間には世話しなく動いていた。それが突然の急ブレーキを踏まれてしまったのだ。

翔子が小さく呟いた。

「公演中止ですかね？」

誰もがその問いに答えられない中、麗慈が発言した。

「俺でよければ、メサイ役やりますけど？」

公演まで一週間を切り、万全の準備でいつでも公演をしてもいいような状況だった。それなのに今更配役を代えるとは、無謀としか言いようがなかった。だが、今はその可能性に賭けるしかなかった。麻那がうなずいた。

「メサイ役は麗慈。それで、他の配役も少し代えておきましょう。隼人、フロド役できるわよね？」

「僕が？」

「みんなのセリフと動きを完璧に覚えてるのあんたしかいないんだから、愁斗がもしも当日に来れなかった時は隼人がフロドを演じる

のよ。それで、宮下はあたしの補助はいいから、隼人の代わりに音響を覚えて」

急に音響をやれと言われた久美は反論した。

「でも、先輩ひとりで照明やるんですか？」

「どうにかするわよ、その辺りは」

撫子が大きく手を上げた。

「はい、はい。やっぱり二人分の衣装作り直した方がいいんですかあ？」

「作り直すんじゃないかって、もう一着作りなさい」

麻那の言葉に撫子は言葉も出なかった。正直、心の中では何て無理な注文をする女だと撫子は思った。

無理な注文は続いた。

「撫子はフロド役としか絡みないから、帰ってよし。さっさと衣装作りなさい」

「爆うつそ〜！？ でも、部長とアタシの練習はどうするんですかあ？」

「隼人とならぶつつけ本番でも大丈夫よ。それよりも麗慈の練習をみっちりするわよ」

こうして撫子が強制的に帰された後、猛練習がはじまった。

麗慈は呑み込みも早く演技も上手だった。そして、隼人のフロドは、彼にしかできない隼人のフロドであり、その演技は完璧だった。隼人は演技ができるのにも関わらず、自ら裏方に回っていたのだ。それを知っていた麻那はどうしても今回の公演を成功させたかった。最後の公演は絶対に成功させなければならなかった。

最初は順調であった練習も途中から乱れはじめた。原因は麻那と久美だった。二人とも勝手が変わり、ミスを連発してしまったのだ。舞台は演技だけでどうにかなるものではない。照明を点け間違えたり、音楽をかけ間違えたりしたら、その時点で観客たちは現実世界に引き戻されてしまう。

「駄目だ、いったんここ止めましょう」

隼人の声が舞台の上に響き渡った。その声はいつもより厳しく焦りが含まれていた。

隼人の周りに部員たちが集合する。その顔は皆険しい。誰もが息が合っていないことに自覚を持っているのだ。

最初は麻那と久美のミスではじまり、その次にメサイとアリアのシーンでアリア役の翔子がミスをするようになって、ミスがミスを呼び全員動きが徐々に可笑しくなってしまった。

翔子がミスをしてしまうのは、相手役が麗慈だからだ。演技の技術的な問題ではなく、翔子が自然と麗慈を避けてしまうのだ。

それに対して麗慈は翔子に対して何の素振りも見せない。麗慈は翔子と何もなかったように役に入り込んでいた。

隼人は髪の毛をかき上げて頭を抱えた。

「みんなどうしたんですか。麻那と宮下さんはまだわかりませんが、他の人もミスが目立ちますよ 特に翔子さん」

「はい、ごめんなさい」

自分でも自覚しているだけに、翔子はよけいに罪の意識を感じる「翔子さん、何かあったんですか？」

「いいえ、別に……」

隼人に聞かれ、言葉に詰まってしまった翔子はうつむいてしまった。そんな翔子に麻那が鋭い口調で食って掛かる。

「あんたが演技に集中しないでどうするのよ！ 私情を捨てて演技に集中しなさい」

「でも、麻那先輩ひどいじゃないですか！ 私の事情知ってるくせにそんな言い方ないと思います」

「あなたの事情を舞台まで引きずって来ないでくれるだから、相談乗ってあげたんじゃない！」

須藤が行方不明になったと聞いてからの麻那は、いつになくイライラして、怒りやすくなっている。

急に麻那は麗慈を睨み付けた。

「あんたが翔子に変なことするからいけないのよ！」

「俺が？」

「そうよ」

「俺が翔子ちゃんに何したって言うんですか、麻那先輩は何を知ってるんですか？」

麗慈の態度は少し挑発的だった。それに麻那はつい乗ってしまい、口を滑らせてしまった。

「あんたが翔子に無理やりキスしようとしたのがいけない言っんの！ 翔子は愁斗が好きなんだからちよつかい出さないでくれる！」

この言葉に回りの部員たちは凍りついた。まさか、麗慈が翔子にキスを迫ったとは、衝撃的な発言だった。

当事者である翔子はものも言えなくなったが、やがて身体が熱を帯びて来て怒鳴り声をあげた。

「サイテーです麻那先輩！ 麻那先輩なんて大ツクライ！」

そう叫んで翔子は泣きながら走り去ってしまった。

「待ちなさい翔子！」

頭に血が上っている麻那は自分が酷いことを言った自覚がない。

場の空気が完全に悪くなり、一年生の久美が呆れた口調で言った。

「私帰ります」

そのまま久美はスタスタと歩いて行ってしまい、その後を沙織が追った。

「待ってよ久美ちゃん、沙織も行くわ〜」

これに続いて麻衣子までも隼人に頭を下げて二人を追って行ってしまった。

残っていた麗慈もだいぶ不機嫌そうな顔をしている。

「俺も帰らせてもらいます」

麗慈はそう言って走ってこの場を後にした。

「もお、何なのみんなで勝手にしなさいよ！」

喚き散らす麻那の前に真剣な顔をした隼人が立った。

「いい加減しろ！」

バシッ！ と隼人の手が麻那の頬に強烈な一撃を加えた。麻那

は頬を抑えてうずくまる。

「……打つんじゃないわよ！」

「いい加減にしるよ麻那。僕は怒ってるんだ」

「……………」

麻那は泣いていた。

「あたしは、あたしは……最後の公演を成功させたいだけなのよ」

「知ってるよ。でも、麻那が輪を壊してどうするんだよ」

「知らないわよ、あたしだって壊したくて壊してるんじゃないもの。でも、そうなっちゃうんだから仕方ないでしょ……………」

体育座りをしている麻那は、嗚咽しながら身体を震わせ、うつむき何も言わなくなってしまうた。

隼人はそつと麻那の傍らに座った。

「明日みんなに謝んだよ」

「……わかつてる。でも、みんな部活に来てくれないかも」

顔を上げないまましゃべる麻那の声は震えていた。そして、隼人の服の袖をぎゅっと握り締めていた。

「じゃあ、今からまず翔子さんの家に行って謝る？」

「……今日は駄目、気分が落ち着きそうにないから」

「……じゃあさ、まず僕に謝るとか？」

少し間があつて、麻那は顔を上げた。

涙で潤む瞳が隼人を見つめ、震える声で麻那は小さく呟いた。

「ごめんなさい」

この言葉のお返しに隼人はニツコリと笑った。それを見た麻那も少し笑顔を見えたが、またうつむいてしまった。

会話の無い時間が続く。そして、ややあつてから隼人が適当な話題を話しはじめた。

「麻那ってさ、何で演劇やってるの？ どう考えても、好きだからとは思えないんだけどさ」

「好きだよ、隼人の好きなことはあたしも好きなの」

「それってどういうこと？」

「超鈍感クンはこれだから困るわよ」

「そんなに鈍感かな、僕って？」

うつむいていた麻那が急に顔を上げて、自分の顔を隼人の顔に重ねた。そして、すぐに離れた。

隼人は一瞬何が起きたのかわからなかった。自分の唇に残る軟らかい感触。きつと、自分はキスをされたんだと隼人は認識した。

「あ、あのさ、今の……その、え」と

「……思ってたのと、何か、違うね」

「いや、だからさ、その、何ていうか」

「あたし帰るね」

「うん」

「最後の公演、頑張ろうね」

「うん」

麻那は悪戯に笑いながら行ってしまった。

残された隼人はしばらくの間、頭から湯気を立てながらぼーっとしてこの場に座っていた。

夢見る都(8)

学校を飛び出した翔子は、泣きながらポケットからケータイを出して、ある人物に電話をかけた。

「……………今から家行つていい？」

《アタシンち来るの、爆マジ！？》

電話の相手は撫子だった。

「うん……………だつて……………うつつ……………うつつ」

目からボロボロと涙を流し、ケータイを持つ手はぶるぶると震えていた。

《翔子、もしかして泣いたりしちゃってるの！？ にゃにがどうして、どうしたの？》

「だから……………うつつ……………撫子の家行つていい？」

《翔子アタシンち知らないじゃん》

「じゃあ、迎えに来てよ」

《それ烈マジで言つてんの？》

「やっぱりいい、家の場所教えて」

《えっと、いつも別れるY字路を進むと酒屋さんがあって、その前におつきくて新しいマンションがあるから、その505号室》

「……………わかった。電話切るね」

撫子と話をしたせいか、翔子の気持ち少し落ち着いた。涙が止まり、身体の震えが止まった。

翔子はとりあえずいつも撫子と別れるY字路まで向かい、そこで自分がいつも帰る道とは違う撫子が帰る道を進んだ。

この辺りは自転車で来たことがあるので翔子も知っている。

小さな公園があり、しばらくすると酒屋の近くにある大きなマンションが翔子の視界に入つて来た。やっぱりここなんだと改めて翔子は実感した。

一年ほど前にできたマンション。この場所は知っていたが、撫子

の家がここだったと翔子は今日始めて知った。

マンション内に入った翔子はエレベーターで五階に上った。そして、505という数字を頭の中で反復させながら、505号室の前まで来た。

表札には撫子の苗字である『涼宮』と書かれている。

表札に間違いないことを確認した翔子はインターフォン押した。

すると、ややあつたインターフォンから声が聞こえた。

《どにやたですかあ？》

「撫子？ 私、翔子」

《本当に来たんだ翔子》

「本当に来たってどういうこと？ それよりも中入れてよ」

《ちよつと待ってて》

ガチャと鍵の開く音がして、少し開いたドアの隙間から撫子の顔が覗いた。だが、チェーンロックが掛かっている。

「にやば〜ん！ 翔子」

明るい感じで撫子は翔子に挨拶するがチェーンロックは掛かったままだ。

「撫子……チェーンロック外してくれないかな？」

「にやんで？」

「家の中に入れたくないの？」

「入りたいの？」

「当たり前でしょ」

「……にやがあつても人に口外しにやいことが条件」

「……家の中に何かあるの？」

「いいから、とにかく約束してよあ」

「約束します。入れてください」

「しかたにやいなあ〜」

撫子はしぶしぶと言った感じでチェーンロックを外した。

玄関を潜った翔子を歓迎しようと、撫子は片手を大きく部屋の中に向けて言った。

「じゃじゃ〜ん、撫子んち、爆初公開だよ〜ん！」

しぶしぶ家の中に入れたわりには、先ほどと態度が豹変して明るい。

玄関で靴を脱ごうとした翔子はあることに気がついた。靴が一足しか出されていないのだ。他の靴は全部下駄箱に入れてあるのだろうか。だとしたらとても几帳面な家族なのだろう。

ダイニングに通された翔子はまた少し疑問を感じた。家具がほとんどなく、生活観があまりなのだ。置いてある家具といったら、こじんまりしたテーブルとテレビだけであとの家具がない。

「あのさ、翔子……聞いてもいいかな？」

「ダメ、ダメダメだよ、うちの家庭事情についてはあんまり聞かなくていい。あと、トイレとお風呂とここ以外は入っちゃダメだからね」

「……そういう言い方されると、気になるんだけど。もしかしてなんだけど、ここに住んでるのって撫子だけ？」

「にや、にやに言ってるのぉ！？ あつははあ〜、まっさか中学生に分際でマンションに一人暮らしにやんて、爆裂ナイナイだよ」

「してるんだ。でも家族はどうしてるの？」

「だから、してな」

『してない』と言おうとしたのだが、翔子が自分のことをじーっと見つめているので、撫子はため息をつきながら白状した。

「星稜中学に転校して来てから、ずっと一人暮らししてる」

「それって大問題なんじゃないの？」

「お願いだから、これ以上はアタシんちの家庭事情に触れにやいで、お願い」

すぐにでも涙が零れ落ちそうな瞳で、撫子は翔子を見つめた。

中学生がマンションで一人暮らししているなんてとんでもない話だが、撫子が触れられたくないようなので翔子はもう何も聞かなかった。

「ごめんね、もう聞かないから」

「翔子物分り爆いいね。じゃ、飲み物持って来るけど、にやに飲む

？」

一気に撫子は元気を回復した。撫子は気持ちの切り替えがとても早いのだ。いや、もしかしたら気持ちなど、最初から変わっていないのかもしれない。

「何があるの？」

「ええつと、牛乳とミルクとホットミルク、それともイチゴミルクにする？ あつ、バナナミルクもあるよ」

「全部牛乳じゃない。他の飲み物はないの？」

「アタシ飲み物牛乳しか飲まにやいんだよねえ」

そう言えば翔子は撫子が乳製品以外の飲み物を飲んでいるのを見たことがなかった。いつも学校でもイチゴミルクを飲んでいるのしか見たことがない。

「牛乳ばかり飲んでるのに、撫子ってちっちゃいよね」

「ちっちゃいって言うにや」

「ちっちゃくても可愛いんだから、怒らない怒らない。じゃあ、私はバナナミルク」

「うんじゃ、ちよつくら待ってて」

しなやかな脚を弾ませ、風のような台所に走って行った撫子は、風のようにグラスを二つ持って戻って来た。

「お待ちいゝ、バナナミルク一丁」

「ありがとう」

「適当にやとこ座っちゃって」

「うん」

バナナミルクを飲みながら翔子は床に座った。それに合わせて撫子も床に座る。

「ところで翔子にはやんでうちに来たの？ さっき電話越しに泣いてたけど……ま、まさか！ 変にや男教師に襲われて、体育館裏に無理やり連れられて……きゃゝ、みたいにや感じ？」

「うゝん、ほんの少しだけ近いかも」

「じゃあ、センパイたちに校舎裏に連れて来られて、きゃあ？」

「あのね……」

翔子は言葉に詰まり、ゆっくりと深呼吸をして改めて言った。

「あのね、麗慈くんは無理やりキスされそうになって、逃げて、そのことを麻那先輩に相談して、その後みんなの前でそのことを麻那先輩がバラしたの」

「……掻い摘んで話し過ぎでわかんないよお」

「だから、麗慈くんが私にキスしようとしたことを麻那先輩がみんなにバラしたの！」

「大したことじゃないじゃん」

あっさりと撫子に言われてしまつて翔子はショックだった。撫子に相談に来たのに、そんな言い方されるなんて夢にも思っていないかったのだ。

適当にあしらわれたような感じのした翔子は頭に血が上つてしまつた。

「そんな言い方ないでしょ！ 私には大したことなんだから」

「翔子カリカリし過ぎだよお。バナナミルク飲んでカルシウム摂つて。イライラにはカルシウムがいいんだって」

撫子に言われた翔子は当て付けでバナナミルクを一気に飲み干して、顔を膨らませてムスツとした。

怒つて何も言わない翔子に撫子は呆れてしまつた。

「翔子、子供みたい」

「まだ子供だもん」

「そうやってほつぺた膨らませるところが子供だね。それにキスされそうにやったことぐらい、誰に知られてもいいと思うけどにやあ」

「だって、恥ずかしいし、みんなにどう思われるか心配で……」

「アタシは別にキスにやんで恥ずかしくもないから誰でもできるよ。でも、愁斗クンとか麗慈クンみたいにや人だと、爆いいかにや」

「だ、誰とでもできるって……撫子、男の人とキスしたことあるの！？」

「わあ、烈うつそお、翔子キスの経験にやいんだあ、きやはきやはだね」

「あ、あるわけないでしょ!?!」

翔子怒りはどこかに吹き飛び、今度は別のことで顔が真っ赤になっってしまった。

「アタシはにやん度もあるよ〜ん。でも、女の子とはまだ一度もにやいかにや」

「女の子とないのは普通でしょ。まさか、女の子ともしたいの?」

「翔子とだったらキスしたいにやあ、にやんていつも思ってるよ」

ニッコリと言う撫子だが、翔子には衝撃的だった。自分が撫子に狙われていたなんて考えたくもない。

「私はお断り」

「女の子同士のキスならぜんぜん平気って子よくいるけどにやあ」

「私はノーマルなの」

「女の子同士でキスする子たちもノーマルだよ。親友同士のスキンシップだよあ」

翔子は背筋がゾクゾクとして、勢いよく立ち上がった。

「私帰るね」

帰ろうとする翔子を見て撫子も立ち上がり、熱い眼差しで引き止めた。

「ええ〜っ、せっかく来たのに帰るのお〜、夜はまだまだ長いのに」

「絶対帰る」

「ジョーダンだよあ。翔を襲いたって気持ちはあるにはあるけど、自制心で抑えてるから、ね?」

「襲いたって気持ちがある時点でダメ。もう、今日から友達止める!」

「ごめん、許してよあ。翔子は引越して来て一番初めにできた友達にやんだから、翔子に嫌われたら、これからの人生、ぶっ落ちるよ。アタシは翔子のこと親友だと思ってるんだよ、そんにやアタ

シを見捨てるの？」

段ボール箱の中に入れられて、電信柱の影に捨てた猫みたいな表情をした撫子に、翔子は根負けした。

「……変な素振り見せたら絶交だからね」

「うん！」

翔子はゆっくりと床に再び座った。

「絶対変なことしないでよ」

「ごめん、全部ジョーダンだから、怒らにやいでね。本当に翔子に嫌われると、泣きそうににやっちゃうから」

そう言う撫子はすでに泣いていた。

泣き出してしまった撫子を見て、翔子はひどく慌てる。

「泣かないでよ、絶交しないから」

「爆うれしい〜！ そんにや翔子が爆裂大好きだよ」

泣いていたと思ったのに、次の瞬間には撫子は笑顔だった。それを見て翔子は疑いの眼差しで撫子を見る。

「嘘泣きだったの？」

「ウソ泣きじゃにやいよお〜。本当に涙が出たの、でもすぐに爆裂元気ににやっただよお」

「……どっちでもいいか」

「あ、信じてないの、ひっど〜い」

「信じる信じる」

翔子態度に撫子は頬を膨らませた。もし、撫子にしっぽがあったならば、きつと立っているに違いない。

「ふんふんふ〜んだ」

「怒らないでよ」

「怒ってにやんか、にやいによ〜ん」

「じゃあ、今度イチゴミルクおごってあげるから」

「えっ！？ イチゴミルクおごってくれるの？ 爆うれしい〜」

「撫子って簡単ね」

「そんなことはいよ、撫子の攻略はA難度にやんだから」

『難度って何?』と翔子は聞こうとしたのだが、そんなことよりも重要なことを思い出した。

「それよりも、ここに私が来た理由。私は撫子にいろんな相談があつて来たの」

「でも、もう烈元氣そうだから、相談にやんてぶっ飛んでいいんじゃないのぉ?」

「ダメ、撫子の家に押しかけたからには相談聞いてもらう」

話が途中でだいぶ逸れてしまったが、翔子は再び麗慈のことから話しはじめた。

「さつき、麗慈くんにキスされそうになつたつて言つたでしょ?」

私、麗慈くんより愁斗くんが好きだつて気づいたから、麗慈くんに言い寄られて来られても困るの」

「ちゃんと、愁斗くんが好きだから変なマネしにやいでつて言つたの?」

「愁斗くんの方が好きつて言つたのに、『絶対自分の方を振り向かせて見せるから』つて言つたんだよ麗慈くん」

「麗慈クンつて自信アリアリの過剰クンにやんだ。じゃあ、アタシから麗慈クンにガツンと言つてあげるよ」

「本当にいいの?」

「翔子とアタシの仲だもん、爆裂いいに決まつてるじゃん」

胸を堂々と張つて言い切つた撫子であるが、翔子には心配事があった。その心配事が自分でもつとガツンと麗慈に言えない理由でもある。

「でも、ガツンと言つてケンカとかにならないよね……もし、撫子と麗慈くんがそれで仲悪くなつたら、私のせいだし……」

「その時は笑つて相手を屠ればいいよん」

「屠るつて……麻那先輩みたいな言い方……!?!?」

翔子はあることに気がついて騒ぎ出だした。

「ダメ、ケンカはダメ。私のせいとか、そういうことじゃくてケンカはダメなの!」

「どうして、害虫駆除のどこが悪いのお？」

「麻那先輩最近ピリピシしてて、私とケンカまでしちゃったし、このまま部の雰囲気が悪くなると公演ができなくなっちゃうよ。撫子がいなくなってから練習最悪だったんだから……」

最悪だった要因に自分が大きく関わっていることを思い、翔子は胸を締め付けられる思いだった。

「翔子言うとおりだよ。公演できなくなったら嫌だもんね。明日までにアタシ衣装仕上げて部活出るよ」

「……本当？ 撫子がいてくれると場の空気が少しはよくなると思う」

「じゃあ、そういうことで、翔子ちゃんさらばじゃ〜！」

「帰れってこと？」

「そうだよ、これからアタシは衣装作りで、美容と健康に悪い徹夜だもん」

翔子はうなずいた。相談はあんまりできなかった気がするけれど、少し気持ちが楽になったような気がする。

「じゃあ、よろしくね撫子」

「おうよ、任せとけ！」

翔子は撫子に玄関まで見送られ、自宅への岐路に着いた。

黄昏時はすでに過ぎ去り、冷たい青が世界を包み込み、日はすっかり暮れてしまっていた。

夢見る都（9）

蒼白い月明かりの下、冷たい墓地に耳障りでけたたましい警報音が鳴り響く。

十字の墓標の下から褐色の枯れた手が突き出した。それも幾本もの手が唸りや叫びをあげながら、地の底から伸びて来る。

ホラー映画のワンシーンのような光景を前に、紫苑は仮面の奥で笑った。

「死人の研究を墓地でやっていたとは、ブラックジョークのつもりか……」

地の底から這い出て来たのはゾンビであった。そのため墓地には鼻を覆いたくなるような生臭い腐臭が漂う。

身体が腐食し、腕がない者や眼のない者などがある。放って置けばいつかは朽ち果てるだろうが、今はそうもいかない。

紫苑の手が動く。放たれる妖糸。

ゾンビたちの身体の部位が切り飛ばされる。だが、ゾンビの動きは止まることがなく、紫苑になおも襲い掛かるうとする。

「頭を飛ばされても、魂で動いているのか……、なるほどゾンビを相手にするのははじめてだが、いい勉強になった」

魂を楔に繋がれ、安らかなる眠りにつくことを許される亡者たち。哀れ悲しき死人を前にしても、紫苑の声に慈悲は含まれていない。

「安らかとまでは行かぬが、私が深き眠りに就かせてあげよう」

何十匹というゾンビたちの間を疾風のように走り抜け、月光を浴びた紫苑の妖糸が煌きを放つ。

細切れにされていくゾンビたち。血は出ないが、腐敗臭が酷くなつた。

紫苑の足元で蠢く切断されたゾンビの腕。腕だけになっても動くそれは執念か怨念か、それとも……。

骨を砕く音が静かな墓地に木霊した。紫苑がその方向に目を向けると、そこには人影がしゃがみ込み、地面に崩れたゾンビを貪り喰っているのが見えた。

「屍食鬼　グールか、いや、あれはグーラか」

墓地などで死人の肉を貪る怪物をグールといい、特に女の姿をしているものに関してグーラと呼ぶ。

ゾンビの腕を頬張りながらグーラは立ち上がった。そして、口の中に入れていた腐肉を吐き出す。

「やっぱり、ゾンビの肉は喰えたもんじゃないわね。鮮度のいい肉が喰いたいわ」

グーラは妖艶な笑みを紫苑に向けた。

「私の肉は喰っても不味いぞ」

「あら、それはどうかしら。どこの誰かは存じないけど、ゾンビ兵をあつさり倒す手際はとても頼もしかったわよ。さぞかしお肉も美味しいと思うわ」

グーラは妖艶な顔をしながら舌なめずりをした。そして、いった「あたしの名前はナディラ、ここの副所長よ。今は所長がお出かけ中だから、ここで問題が起きたら全部あたしのせいにされるのよね。わかったらあたしに喰われてくれないかしら？」

紫苑の身体を包むぼろ布が風に揺れた。

「私の名は紫苑」

「紫苑……昔どこかで聞いたことがあったような……思い出せないわね。でも喰ったら思い出すと思うわ」

「ならば、力づくで喰ってみるがいい」

紫苑の鋼の声はナディラをよりいっそう燃え上がらせた。

地面に一度手をつき、紫苑に飛び掛かるナディラの姿は獣ようであつた

醜悪な顔で紫苑に牙を向けるナディラ。が、紫苑には決して予想できなかった事態が起きた。

ナディラは紫苑に襲い掛かると見せて、地面に突然開いた大穴の

中に逃げ込んだのだ。紫苑は当然ナディラを追うため、穴の中に飛び込もうとしたが、それを穴から飛び出して来たあるものが阻止した。

ナディラの消えた穴から替わりに飛び出してきたものは、全長三メートルを越すマシンであった。

マシンのボディは不恰好であるが、人型である必要はない。相手を滅ぼせばそれでいいのだ。

灰色のボディに搭載されている小口径の機関砲が紫苑を狙っている。そして、鉤爪の間に搭載されているロケット砲もまた紫苑を狙っている。

機関砲から五〇ミリ程度の弾丸が発射された。紫苑はそれを避けようとするが、紫苑の超人的な能力を持ってしても近すぎる。

連射された弾丸がぼろ布を貫通し、紫苑の身体が後方に吹き飛ばされた。

地面に手をつき着地する紫苑。すぐさまマシンの鉤爪の間からロケット砲が発射された。

向かって来るロケット砲を交わし、爆風を背に紫苑は走る。

煌く妖系がマシンに襲い掛かるが、切断することは叶わず、傷すら付いていない。時として空間をも切り裂く妖系がびくともしないのだ。

鉤爪が大きく振られ、そこから出る高圧電流が紫苑の身体に流れ込む。が、紫苑はびくともせずマシンとの間合いを取った。

再びマシンの鉤爪の間からロケット砲が発射された。

物凄いスピードで迫り来るロケット砲。紫苑は微動だにせず避けなかった。

ロケット砲と紫苑との距離が三メートルとなった時、目にも止まらぬ早さで紫苑の手が動き、ロケット砲が一瞬止まったかと思うと、すぐにロケット砲はマシンに向かって放たれた。

紫苑の眼前で止まったロケット砲。それは紫苑の仕業である。紫苑の妖系がロケット砲を優しく包み込み方向を転換させたのだ。

ロケット砲はそれを放ったものへと飛んで行く。

マシンは動かずにロケット砲の直撃を受けた。爆音と煙が立ち込める。そして、煙の中から無傷のマシンが現れたではないか！そう、マシンは避けることができなかったのではなく、避けるまでもないと判断したのだ。

砂煙が少し付いただけのマシンを見て、紫苑が呟く。

「やはりか。妖系が効かぬのだから、ロケット砲など痛くもないということだな」

納得したようにうなずいた紫苑の手が動く。

妖系が凄まじいスピードで伸び、一直線にマシンに向かって行く。

紫苑はいつたい何をやる気か？ まさか、妖系をマシンに突き刺すというわけでもないだろう。

学習機能により、妖系が己のボディを傷つけることができないと知っているマシンは微動だにしない。

妖系はくねりマシンの各部を突いている。やはり、突き刺すことは不可能なのだ。

「やはり、無理か……」

この呟きは突き刺せなかったことに対して発せられたものではない。紫苑の狙いは妖系がマシンの内部に侵入できるだけの隙間がないかを探すことだった。

マシンの内部に妖系を侵入させ、内からマシンを破壊しようとしたのだ。しかし、妖系が入れそうな隙間はなかった。

このマシンは水中でも活動するため、水が内部に浸入できない構造になっている。そのため、細い妖系でも内部に侵入することができなかったのだ。

発射される機関砲を避けながら紫苑は策を練る。マシンはその間に機関砲を打ちつつ紫苑との距離を縮めて来る。

振り上げられる鉤爪　それは紫苑の腕を捕らえた。

紫苑の右腕が肩から根こそぎ奪い去られた。傷口から大量の血が

吹き出るが、苦しみもがく様子はない。

飛翔する紫苑はマシンの頭上に軽やかに降り立ち、そのまま再び飛翔する。

地面の降り立った紫苑の背中に機関砲が浴びせられ、紫苑はよるめくがそれ以上何も無い。紫苑は痛みというものを感じていないのかも知れない。

妖系の直接攻撃が効かなくなれば、他の方法でマシンを倒すしかない。だが、どうやって？

紫苑の選んだ方法とは？

「仕方あるまい、召喚を使うか」

召喚とはそこにいながらにして、時間と空間を超越し、超常的な力を持つ異界の住人をこの世に呼び寄せること。そして、それを使役することができれば、あらゆる望みが叶えられると云われている。

「傀儡師の召喚を観るがいい。そして、恐怖しろ！」

紫苑の残った腕が素早く動き、それに合わせて妖系が空に魔方陣を描く。

奇怪な紋様が空に描かれ、それが呻き声をあげた。

それの呻き声は空気を振動させ、大地を震えさせ、おぞましい死をこの世に解き放った。

黒馬に似た怪物に跨る黒くたくましい巨大な躰。手には投げ槍と蠍の尾でできた鞭を持っている。そして、皮膚の全くない頭蓋骨には王冠が戴いている。

二つの世界を繋ぐ門を守る者　それが　死　だ。

死　は紅く燃え上がる地獄の瞳でマシンを見据えた。

恐怖を知らないはずのマシンが震えた。高知能を持つマシンは恐怖を知ってしまったのだ。

耳を覆いたくなるような　死　の叫びが、空気を凍らせる。

欲望のままに　死　は吼えた。そして、黒馬に似た怪物は翔けた。機能停止状態になってしまっているマシンに近づいた　死　は、

蠍の鞭を大きく振るった。

大地が墓標ごと搔つ攫われ、マシンに強烈な一撃を浴びせた。あまりの衝撃にマシンはその場で粉々に大破してしまい、大きな爆発が巻き起こり金属片が四散する。

マシンの破片は紫苑の足元まで飛んで来た。

「さて、これからどうするものか……」

ため息の混じったような声を発した紫苑を 死 が紅の瞳で睨んでいた。

呼び出された 死 はその場にいる者全てを殺戮する。呼び出した本人である紫苑とて例外ではない。

死 は紫苑によつて無理やり呼び出された。還す時も無理やりでなければならぬのだ。

妖系が煌きを放ち、 死 の身体を拘束しようとした。しかし、暴れ回り抵抗する 死 に身体を抑えきれず、紫苑の身体が空中を振り回される。

投げ飛ばされる形となつてしまった紫苑は上空で回転し、華麗に地面に降り立った。

「一筋縄ではいかぬか」

紫苑はまだ 死 に絡みついた妖系を放していない。

幾重にも絡み取られた 死 の筋肉の躍動感が、妖系を伝わり紫苑の指先に振動を与える。

腰を据えて紫苑は妖系を引いた。が、引き戻そうとした妖系は、死 によつて無理やり断ち切られてしまった。

死 の反撃が開始される。

片時も放されなかった 死 の投げ槍が、ついに投げられた。それは光速で空気を焦がしながら飛び、紫苑の身体を貫いた。

貫かれた紫苑の身体はそのまま投げ槍ごと地面に突き刺さった。

投げ槍を回収しようと 死 が紫苑に近づいたその瞬間 紫苑の手が動き、妖系が空間を切り裂いた。

裂けた空間は 闇 とこの世を繋ぎ、 闇 は悲鳴があげ、泣き

声をあげ、呻き声があげ、苦痛に悶えた。

「行け！」

裂けた空間から 闇 が叫びながら 死 襲い掛かった。

闇 に 死 は包まれそうになるが、 死 は必死に抵抗して

闇 を振り払う。勝つのは 闇 か 死 か？

勝利を治めたのは 闇 だった。

死 は 闇 に完全に吞まれ、 闇 は空間の裂け目に吸い込

まれるようにして還っていった。

轟という音を立て、空間の裂け目は閉ざされた。

そして、紫苑の腕からは力が抜け、身体全体が槍に突き刺さりながら垂れた。

紫苑は完全に動かなくなった。

夢見る都（10）

研究所内に侵入した紫苑は辺りを見回した。

金属でできた冷たい廊下に警報音が鳴り響き、遠くからは大勢の走る音が聴こえる。

紫苑の前に現れたのは、黒い防護服で身を固め、ビームライフルを構えた一団だった。その数約七名。

紫苑を確認した一団はビームライフルによる一斉射撃を開始した。収束された光の粒子が一直線に伸び、紫苑の顔の横を掠め飛び、紫苑は横の通路に手から飛び込み、身体を回転させながら逃げ込んだ。

逃げて来た横の通路の床を見ると、超合金の床が溶けている。もし、ビームの直撃を喰らっていたら、ただでは済まなかっただろう。敵は建物を多少壊しても侵入者を抹殺する気だ。

廊下を駆け抜ける紫苑の後ろからは追っ手の足音が聴こえ、ビームが紫苑の身体を掠め飛んで行く。

無くしたはずの紫苑の『右手』が動いた。

廊下を塞ぐように張り巡らされる妖系 それはまるで蜘蛛の巣のようだ。

追っ手たちはナイフを構え、張り巡らされた妖系に切りかかるが、妖系はびくともしない。それどころか、妖系は蜘蛛の巣のように手や腕に絡みついてしまった。

妖系は外そうとすればするほど身体に絡みつき、妖系に捕らわれた仲間を助けようとした者の身体にも妖系は絡みついた

妖系は普通の人間には切断することはできない。それができるのは人間外の力を持った者たちだけだ。

獲物が自分の張った巣に掛かったことを確認した紫苑は、空に魔方陣を描いた。

奇怪な紋様から それ の呻き声が聴こえた。その声を聴いた追

っ手たちの顔からは血の気が失せ、身動き一つできなくなっていました。

空に描かれた紋様は 死 を呼び出した時とは異なっている。つまり、 死 とは別の者を召喚しようとしているのだ。

それは汚らしい嗚咽を漏らし、この世に巨大な蜘蛛の怪物を生み出した。

五つの妖しく光る眼が獲物を捕らえ、蜘蛛は迷うことなく六本足で巣に掛かった獲物を喰らいに行った。

生きたまま喰われる人々。背中で苦悶の叫びを感じながら紫苑は先を急ぐ。

だいぶ走ったところで、追っ手の足音がまたも聴こえる。

紫苑が横を見るとそこには金属でできた扉があった。扉には電子ロックが掛かっているが、妖系を忍ばせることにより、いとも簡単にロックは解除された。

部屋の中に飛び込み、再び妖系を忍ばせロックを掛ける。扉の向こうからは大勢が走り去る足音が聴こえた。

部屋の中は薄暗く、淡く青い光が各所に灯っている。その中でも最も輝いているのは部屋の中央にあるガラス管だった。

ガラス管の中は液体で満たされ、裸の幼い子供が浮かんでいた。

紫苑は妖系を放ち、目の前にいるモノをガラス管ごと破壊しようとした。だが、急に開かれた子供の瞳を見た紫苑の腕は止まった。

哀しそうな瞳で紫苑を見つめる子供。その哀しそうな表情を見た紫苑は、鏡に映った自分を見ているように思えてならなかった。

そつとガラス管に触れる紫苑。

「おまえの運命はすで呪われている。だが、おまえがこれからどう生きるか、組織に飼われるか、私のように飼い主に噛み付くか、それとも別の道を選ぶかはおまえ次第だ」

だが、紫苑にはわかっていて。この子供は一生組織からは逃げられないと……。

部屋の奥にはいくつかの扉があり、紫苑はその中の一つに入った。

何者かが侵入して来たことにより、その部屋の中は耳を覆いたくなるような鳴き声で満たされた。

鳴いているのは動物たちだ。紫苑が部屋に入って来たことにより、動物たちが喚きだしたのだ。

この動物の中ではチンパンジーが一番うるさい。金切り声をあげて、檻を手で揺さぶっている。

犬は喉を鳴らし警戒している。猫は尾を立てて怒っているのがよくわかる。

「この動物たちは、人間を憎んでいるらしいな」

紫苑はすぐにわかった。ここにいる動物たちはペットとして飼われているのではもちろんない。生物実験のためにここに閉じ込められているのだ。

墓場で見たゾンビたちやこの動物たち、そして、さきほどの子供。この研究所はいったい何を研究しているのか？

動物たちを尻目に紫苑は別の部屋に移動した。

部屋の中に入った瞬間に泣き叫ぶ人間の声が聴こえた。

「お願いだから家に帰して！」

牢屋の中には若者や幼子をひとまとめにして大勢入れられていた。「ここから出して！」

紫苑の視線の先で泣き叫んでいるのは若い女性だった。牢屋の中に入っている人々の中で唯一この女性だけが泣き叫んでいる。

この女性以外の者たちは痩せこけた顔をして、何も言わず地面に座り、生気の失った顔をしていた。もう、泣き叫ぶ気力も残っていないのだろう。

泣き叫んでいる女性の顔にはまだ精気が見受けられる。ここに入られてまだ日が浅いのだろう。

「出して、出して、出して……」

鉄格子に手を掛けながら泣き崩れて地面にへたり込む女性。その女性に紫苑は声を掛けた。

「ここから出たいのか？」

「ここから出してくれるの？ あなた、ここの人じゃないの？」
女性の声には少し歓喜が混じっている。

「私はこの研究所の人間でない」

「もしかして、私たちを助けに来てくれたの!？」

「違う。この部屋には立ち寄っただけだ」

「でも、ここの人じゃないんでしょ。お願いだから私をここから出して!」

「用が済んだらまたここに来る」

冷たく言い放った紫苑は女性に背を向け歩き出した。

「待つて、いかないで! ここから私を出して!」

悲痛の叫びなど耳に入っていないように紫苑は淡々と歩き、部屋の外に出た。

仮面の奥から深い息が吐き出された。紫苑は何を思ったか？

沈黙が落ちた。誰も入り込めない沈黙。この場の時間は紫苑のためだけに存在を許された。

ふと、紫苑が顔を上げた。部屋の電気が点けられ、大勢の戦闘員が部屋の中に駆け込んで来た。

ビームライフルが紫苑に向けられる。だが、発射される様子はない。この部屋にある機具にビームが当たることを危惧しているのだ。敵が自分に攻撃できないことを悟った紫苑は疾風のごとく走った。敵も紫苑を向け打つためにライフルからナイフに武器を持ち替えた。光の筋が走った。先に攻撃を仕掛けたのは紫苑の妖系であったが、敵には何ら変化が見受けられない。戦闘員はナイフを構えたまま立っている。

しかし、次の瞬間!

戦闘員がナイフで紫苑に切りかかろうとした刹那 その者の胴体が滑らかに地面に崩れ落ちた。紫苑の妖系はたしかに敵を切っていた。だが、その切り口が滑らか過ぎたために切られた本人も気づかず、動いた時にはじめて切られたことを知ったのだ。

残った戦闘員たちは動けなかった。自分たちも動いたら、今の者

ように胴が地面に滑り落ちるのではないかと考えたからだ。

戦闘員たちの身体が恐怖で震えた。その瞬間、音を立てて全員の胴体が地面に滑り落ちた。やはり、全員切られていたのだ。

床に落ちたモノは少しの間苦しみもがいていたが、すぐに動きを止めた。

床の上を浸蝕した紅の絨毯の上を紫苑はぴちゃぴちゃと音を立てながら歩いた。

部屋の外に出ても、紫苑の歩く後には紅い模様が残る。紫苑は過去を引きずっているのだ。血塗られた過去を。

この後、紫苑は出遭う敵たちを無感情に切り刻んでいった。紫苑の通った後には肉塊だけが残っていた。

紫苑の内に潜む者が言う。

おまえは傀儡だ。傀儡に感情はいらない。

自分を言い聞かせるために紫苑は小さく呟いた。

「私は人間だ。だから『その』心を知りたい」

目の前にあつたドアを紫苑は開けた。

部屋に入った紫苑を出迎えたのは、ビームライフルの照準だった。並び立つ戦闘員を掻き分けて、後ろからナディラ副所長が姿を現した。

「ついにここまで来てしまったのね。でも、どうしてこの研究所の場所がわかったのかしらね？」

「私の知り合いの情報網に引っかけた」

「それは、どこのどなたかしら？」

「それは言えないな。言ったとしても、貴様たちはここで死ぬ運命にあるがな」

「物騒なこと言うのね。でも、あたしたちの研究を邪魔されるのは困るわ」

妖艶な笑みをナディラが浮かべた次の瞬間、ビームライフルが発射された。

身に纏うぼろ布に穴を空けられながらも、紫苑は辛うじてビーム

を避けた。しかし、ビームは連続で発射される。

妖系が煌き、ビームが伸びる。

戦闘員たちの腕が飛び、頭部が飛び、胴が地面に落ちた。が、発射されていたビームが紫苑の左肩を掠め、布と肉の焦げた臭いが鼻を突いた。

「くっ……」

紫苑の口から苦痛が漏れた。

最後にただひとり残ったナディラは不適に笑った。

「あら、マシーンとの戦いでは痛みを感じてないように見えたけど、やはり痛覚はちゃんとあつたのかしら？」

マシーンに取り付けられていたカメラで、ナディラは紫苑の戦闘の様子を一部始終見ていた。その時の紫苑は機関砲で蜂の巣にされようが、平気だったように見えた。

「最初に会った時と少し雰囲気が違うみたいね」

「同じだ」

紫苑の手が素早く動く。だが、ナディラの方がワンテンポ速かった。

消えた　ナディラの姿が紫苑の視界から消えた。

次の瞬間、紫苑の両腕は背中に回され、ナディラによって拘束されていた。

「可笑しいわね……左腕はもぎ取られたはずだけど、治したのかしら？　もう一度もいで見ればわかるかしらね」

紫苑の左腕が強引に曲げられ、骨の折れる音が生々しく響いた。

「くっはっ……」

折れた左腕を胴の力で無理やり引っ張り、紫苑はナディラの拘束から逃れ、すぐさま残った腕で妖系を振るった。

紫苑の狙いは完璧であった。だが、妖系はことごとく交わされてしまった。

「そんな遅い攻撃じゃ、あたしは仕留められないわよ！」

ナディラの移動速度は、この地上最速の動物と言われるチータに

匹敵する、時速約一〇〇キロメートルに達していた。

そう、この移動速度こそがこの研究所の研究の一成果であった。獣のように飛び掛かって来るナディラを向かい撃つ紫苑

「だが、目で追えないほどの速さではないな」

ナディラの頭上から股までを一筋の光が走った。

空中でナディラの身体は対称に真つ二つに分かれ、床にずっしりとした音を立てながら落ちた。

この場にいる全ての敵を葬った紫苑は、近くにあったキーボードのボタンを押し、コンピューターの中にあるデータを検索しはじめた。

ディスプレイには生命科学に関するデータが表示されていく。

片手でキーボードを叩いていた紫苑の指が止まった。画面には『アクセス拒否』と表示され、パスワードを要求している。

パスワードを要求された紫苑は、コンピューターの中に妖系を忍び込ませようとしたその時だった。

「くっ……まだ生きていたのか!？」

紫苑の左腕には切断されたはずのナディラが喰らい付いていた。

相手の肉を引きちぎり、ナディラは租借しながら後ろに下がった。「若い男の味がするわね」

肉を呑み込み、舌なめずりをしたナディラは妖々と笑みを浮かべたその顔には紅い線が縦に走っている。その紅い線は血だった。

左腕から血を地面に流す紫苑は感嘆の声を漏らした。

「大した再生能力だ」

「お褒めの言葉ありがとう。あなたのお肉も美味しかったわよ」

「……だが、次はない」

冷たい声はナディラの心を凍らせた。

刹那、ナディラは声をあげる猶予も当てられず細切れにされていた。

妖系が空間を裂く。

空間に生まれた裂け目はこの場の空気を吸い込み、細切れにされ

た肉を全て、血一滴も残さずに呑み込み、そして、閉じられた。

何事もなかったように再びディスプレイに向かい、キーボードに妖系を忍び込ませようとする紫苑。だが、その左腕からは大量の血が地面の零れ、血溜りを作っている。

ディスプレイに表示されたものを見て紫苑の手が止まった。

「なるほど……これはおもしろい」

再び紫苑の妖系が動き、最後に紫苑は自らの指でボタンを押した。画面で数字がカウントされはじめた。

急いで紫苑は部屋の外に出た。すると廊下ではアナウンス放送による退避命令が出ていた。

紫苑が最後に押したボタン。それはこの研究所を破壊するスイッチであった。

この研究所を造った組織が、もしもの時のために重要な証拠を隠滅するために設置した爆破スイッチを紫苑は押したのだ。

廊下では戦闘員や研究所職員が急いで退避していた。紫苑はそれに見つからないように先を急ぐ。

爆破までの残り時間がアナウンスされる。残り約二〇分。

廊下を走っていた紫苑の足が急に止まった。横には扉がある。

「なぜ……助ける？」

自問しながらも紫苑は扉を開けて中に入った。

ここはあの時の部屋だった。部屋の中央にはガラス管がある。

「爆発に巻き込まれて死ぬことが、おまえにとっては幸せだろう…」

…

それ以上何も言わず、紫苑は次の部屋に移動した。

人々が囚われていた部屋。

紫苑の姿を確認したあの女性がすぐさま鉄格子を掴んで泣き叫んだ。

「助けに来てくれたの！？早く、早く出して！」

「鉄格子から少し離れている、破壊する」

女性が鉄格子から離れたのを確認した紫苑は妖系を振るった。

鉄の棒が床に一気に落ちて、鉄格子は破壊された。

喜んだ女性は外に出ようとしたが、その前にここにいる他の人々に声をかけた。

「早く、みんな逃げましょう！」

誰も口を開かず、うつむいていた。

紫苑が女性の腕を掴んだ。

「おまえ以外は置いていく」

「ど、どうしてよ、みんなで逃げましょうよ！」

女性は床に座る生気のない人間たちに声をかけるが、誰も立ち上がろうとしない。

紫苑は女性の腕を引っ張り、冷たく言い放った。

「ここにいる者たちは外の世界に戻っても、生きていけない」

「どうして!？」

「魂が傷つき過ぎたのだ」

紫苑は女性を強引に片腕で抱きかかえて走り出した。女性を抱きかかえるために妖系の補助も使用している。

廊下に戻ると、すでに爆発まで一二分となっていた。

「少し時間がないな」

走り続け、前方に蜘蛛巣が見えて来た。あの巨大蜘蛛もいる。

女性を一度地面に降ろし、紫苑は妖系を振るった。空間を裂

けた。

「行け！」

紫苑の合図とともに裂け目から闇の触手が伸び、蜘蛛を捕らえて還っていく。

再び紫苑に抱えられた女性は恐ろしい光景を目の当たりにして、紫苑の腕の中で声も出せずにぶるぶると震えていた。

爆発まで後八分。

走り続けていた紫苑の足が再び止まり、女性を床に降ろした紫苑は上を見上げた。

天井には扉が開いている。紫苑が研究所内に侵入した外と繋がる

扉だ。

妖系が外に伸び、紫苑は妖系を引っ張り、何かに固定されたことを確認した。

自分の身体に妖系を巻きつけ、片腕には女性を抱えた状態で紫苑の身体が浮いた。妖系によって二人の身体が持ち上げられているのだ。

墓地の戻った紫苑はなおも女性を抱えながら走った。

地面の底で轟音が鳴り響き地震が起きた。

地盤が沈下していく。そして、紫苑の足元が地面の底に呑み込まれそうになった時、紫苑は高く飛翔した。

地面に着地する紫苑。その真後ろの地面は陥没していた。

紫苑は女性を地面に降ろして言った。

「私のこと、そしてここであつた全てのことを他言するな。それがおまえのためだ」

「……………」

女性は沈黙しながらも深くうなずいた。もし、他言すれば自分がどうなるか、この女性にはわかつていた。

紫苑は女性をここに置き去りにして立ち去ろうとした。だが、女性のはつとして最後の気力を振り絞って叫んだ。

「こんなどこだかわかないとここに置いて行かれても困る！」

紫苑の足が止まり、仮面の顔が振り向いた。

「あと、自分の力で家まで帰れ」

「嫌よ、置いていかないで！ 人がいるところまで連れて行ってよ！」

女性は紫苑の右腕を掴み、激しく揺さぶった。

「置いていかないで、お願いだから！」

「仕方あるまいな……私の知り合いに向かいに来てもらおう」

ケータイを取り出した紫苑はある女性に電話をかけた。

「亜季菜さん迎えに来てください」

紫苑の口調は明らかに違っていた。柔らかな口調で落ち着いてい

る。先ほどとはまるで別人のようだ。

《こっちは指定の場所で待っているのよ、今更替える気なの？》

「いえ、へりを奴らの研究所に寄越してください。僕はそちらに向かいますから」

《研究所はどうなったのよ？ それにあなたがこっちに来るって、

へりは何のために必要なの？》

「研究所は壊滅しました。女性をひとり助けたので、その人の保護をお願いします」

《ふくん、あなたが人を助けた……か。まあいいわ、そっちにへりを向かわせるわ》

「ありがとうございます」

《こっちは忙しいのだから早く来なさいよ》

電話は向こうから切られた。

ケータイをしまった紫苑は女性に顔を向けた。

「迎えが来る。ここで待っている」

声をかけられた女性はきょとんとしている。電話で話していた紫苑とのギャップに驚いているのだ。

返事もしない女性を紫苑は再び置き去りにして行こうとした。

「待つて、行つちやうの!？」

「向かいが来る」

「でも、ひとりでこんなところで待つなんて嫌よ!」

夜の闇は深く、元墓地であったここは森に囲まれ静寂に満ち溢れている。こんなところで女性がひとりでいられるわけがない。

「へりが来るんでしょう？ それまでここに一緒にいてよ」

「私にできることは終わった。連れが待っているのにな」

紫苑の手から妖系が放たれ女性を拘束した。

女性は何かを言おうとするが口が開かない。

動けなくなつた女性を尻目に、紫苑は闇の中に溶けていった。

夢見る都（11）

星稜祭前の三日間は授業がなく、星稜祭の準備が全校生徒総出で行われる。

文化部は部の出し物の準備をし、運動部でも屋台などをやったりし、クラスではクラスの出し物がある。

演劇部もこの日は朝早くから練習をすることになっていた。

舞台の上で他の部員を待っているのは二人　隼人と麻那だ。

「みんな来ませんねえ」

呑気な口調で言う隼人を麻那は睨みつける。

もし、自分たち以外に誰も来なかったら、それは全部自分のせいだと麻那は思つて、酷く取り乱すに違いない。

「来るわよ……たぶん」

麻那には自信がなかった。もしかしたら、自分たち以外は誰も来ないのでないかと内心では思っている。

不安で胸が苦しくなり、麻那はうつむいてしまった。昨日の夜もよく眠れなくて、朝起きたら目の下に隈ができていた。

麻那はポケット中に手を突っ込んで、そこに入れてあつた物に気がついた。

「そつだ、さつき買ったんだつた」

ここに来る前に買ったコーヒーと炭酸飲料。麻那は炭酸飲料を隼人に差し出した。

「はい、隼人PONTA好きでしょ？」

「あ、うん、ありがと」

二人は同時に缶を開け、飲み物を少し喉に通した。

「ぶはあゝつ、やっぱりPONTAはオレンジが一番だよね」

満足そうにジュースを飲む隼人を見て、麻那は微笑を浮かべた。その笑みはとても温かい。

時間が流れていくが、誰も来る様子がない。もしかしたら、本当

に誰も来ないのかもしれない。麻那の不安が募る。

「来ないのかな……みんな」

「大丈夫、きつとみんな来るさ。あんなことで水の泡なんて、せっかく練習して来たんだから」

隼人は麻那に微笑みかけるが、麻那の心配は解けない。

客席を駆け下りてくる音が聴こえた。

「にやばくん！ 遅れてゴメンにやさしい」

「私まで遅れてごめんなさい」

舞台上上って来たのは撫子と翔子だった。

二人が来てくれたことにより、麻那の心は少し落ち着いた。

「よかった、翔子来てくれたんだ。翔子が一番来てくれないんじゃないかって心配だったのよね」

「私が練習サボると思ってたんですか？ 今日遅れたのはこいつのせいですよ」

翔子は『こいつ』の腕を引っ張って、麻那の前に突きつけた。

「アタシが行けにやいんですう。アタシが寝坊して翔子との待ち合わせに遅れたからあ。アタシ、どんな罰でも受けますから翔子を責めにやいでください。煮るにやり焼くにやり召し上がるにやりしちやってください」

「許すから、そんな潤んだ目であたしのこと見ないでよ。それよりも許して欲しいのはあたしの方……翔子、ごめん」

麻那は翔子に向かって勢いよく頭を下げた。

頭を下げられた翔子の方が戸惑う。麻那が人に頭を下げるなんて、翔子は信じられなかったからだ。

「あ、いいです、もう気にしてませんから、私の方こそ練習抜け出してごめんなさい。私が飛び出した後、練習ちゃんとできたか心配で……」

この言葉を聞いた麻那は頭が上げられなくなった。翔子が帰った後、より険悪なムードになって隼人を除く全員が帰ってしまったことを麻那は思い出した。

「麻那先輩、どうしたんですか？ 頭上げてくださいよ」

翔子が心配そうに麻那に声をかけるが返事は返って来ない。

頭を上げない麻那を見て、隼人の表情が暗くなった。

「実はね、翔子さんが帰った後、みんな勝手に帰りはじめちゃってね。練習どころじゃなくなっちゃったんだよ」

頭を下げたままの麻那の顔から雫が地面に零れた。

「ごめん、あたしが全部悪いんだよね。みんなに当たり散らして…
…あたしが、あたしが全部悪いんだよね」

泣き出した麻那を目の当たりにして、翔子まで泣けて来た。

「違いますよ、悪いのは私です。私があの時、笑って済ませればよかったです」

二人の女性が泣き出してしまい、隼人は困惑して何もできなかった。それに引き替え撫子は明るいものだ。

「二人とも爆ネガティブ。泣いてたつてしよーがにやいよ二人とも泣いてにやいで他の部員どもを連れて来るとかしたらどうにやの？」

「私、行って来ます」

翔子は泣くのを止めて、残りの部員たちを探しに行こうとした。だが、その前に女子三人組が現れた。

最初に沙織が挨拶をする。

「おはよーございま〜す！」

次に麻衣子が挨拶をする。

「おはようございます。練習に遅れて申し訳ありませんでした」

最後に残った久美はふて腐れて何も言わなかった。そんな久美のわき腹に麻衣子の肘鉄が入る。

「ちゃんと挨拶しなさいよ」

久美は沙織と麻衣子に説得されて強引にここに連れて来られたのだ。

「痛いじゃない！」

それだけ言つて久美は再び黙り込んでしまった。

すすり泣く声が聴こえた。それに気がついた沙織は思わず声をあ

げてしまった。

「ま、まさか麻那センパイが泣いてるんですかあゝ!？」

麻那が泣いていると聞いて、久美もビツクリして麻那を見つめた。「ご、ごめんなさい……あたしが全部悪いの……」

涙をぼたぼた流しながら麻那が顔を上げた。それを見た三人娘は度肝を抜かれた。まさか麻那が本当に泣いてるなんて思わなかったし、ましてや謝るなど考えられなかったからだ。

泣いて謝る麻那を見て久美は慌てた。

「泣かないでください先輩、私怒ってるわけでもありませんし、先輩のこと責めてるわけでもありませんから」

本当はさつきまで怒っていたし責めてもいた。だが、泣きじゃくる麻那を前にしたら、本当のことなど言えなかった。

隼人は泣いている麻那の身体をそっと抱き支えて言った。

「誰も麻那のこと責めてないから、泣かないで。ほら、元気出してさ」

「うつつ……で、でも……麗慈が……うつつ……」

麗慈が来てなかった。状況は最悪だった。麗慈が来るまで麻那は泣き止むことがないだろう。

「私、探してきます!」

翔子はそう言って走り出した。あんな麻那を目の前にしたら何かをせずにはいられなかった。

走り出した翔子の後をすぐに撫子が追って来た。

「アタシも行くよゝん」

「じゃあ、手分けして探そう」

「オーケー。じゃ、アタシはこっち行くから、翔子はあっちね」

「うん、わかった」

撫子と分かれ翔子は走った。

部活の練習には来ていないが、もしかしたら教室にはいるかもしれない。そう思った翔子は自分のクラスが割り当てられている教室に向かった。

向かう先は中学ではなく高校だった。翔子の通う学校は星稜大学付属・高等部・中等部となっていて高等部と中等部は隣同士に建っているために、毎年合同で文化祭を行っている。

合同で行われる星稜祭は高等部と共有施設のホールが会場となっている。

走りながら翔子は思っていた。麗慈は練習にも来てないんだから、きつと学校内にもいるはずないと。そう思いながらも、少しの希望に賭けて走っていた。

廊下を曲がるうとした時、急に曲がり角から出て来た三人組の男子生徒と鉢合わせとなり、翔子はそのうちのひとりとぶつかってしまった。

「きゃっ……ご、ごめんなさい」

すぐに頭を下げ謝るが、相手の三人は翔子を睨んでいる。

この学校は見た目から不良という生徒は少ないが、それでもいるにはいる。しかも翔子がぶつかったのは高等部の生徒だ。制服のデザインが異なるのですぐにわかる。

シルバーアッシュの髪色をした男子生徒が舌打ちをした。

「ごめんなさいで済むと思ってるのかよ！」

「だ、だから本当にごめんなさい」

翔子は後退りながら頭を下げるが、男子生徒たちは足踏みを揃えてじりじりと詰め寄って来る。

この男子生徒たちと翔子以外の生徒たちも周りにいるが、誰も翔子を助けようとしてくれない。皆、無視して見ないフリをしている。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「だから、謝って済むと思ってんのかって聞いてんだよ！」

翔子はもう逃げるしかないと思って相手に背を向けて走ろうとした。だが、翔子の腕はガシツツと掴まれてしまった。

もうダメだ、逃げられない。と翔子が思った時、救世主が現れた。

「そのひと俺の友達なんで、放してくれませんか？」

救世主はちょうどこの場を通りかかった雪村麗慈だった。

「聞こえませんでしたか先輩？ そのひと放してください」

麗慈の言葉づかいは丁寧だが、口調は明らかに喧嘩を売る挑発的な態度だった。

「んだと、うるせえな！ あっち行ってるよガキのクセして！」

この言葉を受けて麗慈は相手を睨み、口元を歪めて鼻で嗤った。

「ふ〜ん、この学校にもこういう頭の悪い奴らがいるんだ」

この言葉が相手らを逆上させた。

「クソガキが！」

いきなり殴りかかって来た男の腹に強烈な蹴りが入った。

「おまえら程度の相手に手は使わない、足だけで十分だ」

床に崩れる仲間を前にして二人目が麗慈に襲い掛かった。だが、麗慈の強烈な回し蹴りを喰らって噎せりながら床に崩れた。

翔子を掴んでいたシルバーアツシユの男が、翔子を掴んだまま逃走しようとした。しかし、男の足は動かなかった。

焦る男の前に立った麗慈は嗤った。

「俺さ、卑怯者だから約束守れないんだよな」

麗慈の拳が男の顔面に炸裂して、男は大きく吹っ飛び床に転がった。

真横にした翔子は啞然としてしまった。

「麗慈くん……ケンカ強いんだ」

「いちよう問題児だからな」

「……そう、なんだ」

周りにいた生徒たちも今の出来事は無視できず、呆然として眺めてしまった。

生徒たちは動きを止めて沈黙が流れる。

麗慈は翔子の手を取ると、周りの生徒たちにニッコリと笑顔を見せた。

「みんな、今見たことは黙っててよ。俺が後で呼び出し受けたら困るからさ」

誰も返事はしなかったが、誰も教師たちに言いつける人はいないだろう。やられた相手が不良だったこともあり、別に教師に報告するまでもないという気持ちと、それとは別に麗慈と関わるのはよくないと瞬時に判断したからだ。

歩き出して翔子はすぐに麗慈の手を振り払った。

「手握られるの嫌だった？」

「私たち、そういう関係じゃないし……」

「えっ！？ そんなこと気にしてるの？」

悪気なく麗慈はやっているのか、すごく驚いた表情をした。それに対して翔子は丸い目をして声を荒げる。

「き、気にするよぉ！」

「ごめん、ごめん。気をつけるよ」

「それから……」

翔子は麗慈と視線を外しながら呟いた。

「もう、変なことしないで」

「変なこと？」

「キス……しようしたり」

麗慈は翔子の顔をじつと見つめているが、翔子は決して視線を合わせようとはしなかった。

「ごめん、もしかして傷つけた？」

翔子は少し怒った顔をして麗慈を見た。

「あ、あんなことされた普通は怒るでしょ！？」

「そっなんだ……これからは気をつける」

遠く見つめる麗慈の横顔を見て翔子は思った。麗慈の顔も性格も雰囲気も、全部どこか浮世離れしている。具体的に何がと聞かれると答えはすぐに言えないが、どこかが変な気がする。

「麗慈くんって、やっぱり愁斗くんと似てるかもしれない」

「俺があいつと！？ あいつと一緒にしないでくれよ」

「どうしてそんなこと言うの？ 麗慈くん愁斗くんのことまだあんまりよく知らないでしょ。もしかして、愁斗くんのこと嫌いなのか？」

「今はどうだか知らないけど、昔のあいつなら知ってる。俺はあいつが憎い」

『嫌い』ではなく 『憎い』と言った。麗慈の言葉からは翔子の胸が苦しくなるほどの憎しみがこもっていた。

「麗慈くんって愁斗くんともともと知り合いだったの？」

「昔々のお話さ」

翔子は恐くてこれ以上聞くことができなかつた。二人の過去に何があつたのか、知りたい。けれど、それを自分は知ってはいけなような気がした。

夢見る都（12）

翔子はホールに戻る道すがら、ケータイで撫子に麗慈を見つけたことを告げて、麗慈とともにホールに戻って来た。

舞台の上では撫子を含めて全員が集まっている。愁斗を除いては麻那もすでに泣き止んで普段どおりの表情をしている。この場に残ったメンバーで懸命に声をかけて宥めた結果だった。

練習を開始せずに少しの間だけ愁斗を待ってみたが、やはり来る気配はない。

撫子はわざとらしくぐるっと辺りを見回した。

「愁斗くん来ないねえ〜。もしかして交通事故とかに遭って、入院してたりしてね」

すぐに翔子が怒ったように言葉を返す。

「嫌なこと言わないでよ」

昨日の練習からもわかるが、メサイ役の須藤拓郎が抜けた穴は、麗慈が入ることにより頭数だけは揃うが、二人目が抜けるとどうにもならなかった。愁斗が抜けた分、麻那と久美にミスが目立ってしまった。

麻那のことや他のことではいろいろと演劇部内に不和が起きたが、今はどうか解決することができた。後は人数的な問題だ。

今、練習を開始してもうまくいかないことは隼人にもわかっていた。

「誰か愁斗くんに連絡つく人いませんか？」

隼人は麻那に睨み付けられてしまった。

「いたらとづくに連絡してるわよ」

麻那はすでに愁斗の家に電話をかけていた。今朝早く職員室に行つて愁斗宅の電話番号を聞いて電話をかけたのだが、留守番電話にしか繋がらなかったのだ。

撫子が手を大きく上げて発言した。

「はあ〜い、これを機に部活の連絡網ちゃんと作っておいた方がいいと思いま〜す。ケータイの番号はわかるけど、みんなの自宅の番号知らにゃいもん。それにケータイ持ってにゃい人いるしい」

この意見に隼人は賛成した。

「そう言えば連絡網ってなかったね。みんなちゃんと練習来てたから、そこで連絡できたからね」

先ほどから、なぜか黙り込んで下を向いていた翔子が小さく手を上げた。

「あ、あの、私が愁斗くんのケータイに電話してみましようか？」

翔子の言葉に一同はビックリした。愁斗はケータイを持っていないと本人が言っていたのだ。その愁斗のケータイ番号をなぜ翔子が知っているのか!?

「爆抜け駆けつけて感じの翔子ちゃ〜ん!？」

素っ頓狂な声を上げて飛び跳ねるオバリアクションの撫子。愁斗ファンのひとりである沙織も声をあげる。

「何で翔子センパイが愁斗センパイの番号知ってるんですかあ〜!

? 沙織が聞いても、持ってないって言い張ってましたよあ〜」

「そ、そうなんだ……私が聞いたら、すぐに教えてくれたけど……」
ここにいる大半の人は愁斗にケータイの番号を聞いている。だが、誰も教えてもらっていなかった。持っていないとウソまでつかれて、それなのになぜ翔子だけ?

翔子は痛い視線を浴びながら、ポケットからケータイを出して愁斗に電話をかけた。

「あ、あの、愁斗くん？」

《ああ、瀬名さん。どうしたの?》

「ど、どうしたのじゃなくって、愁斗くんこそ何で部活来ないの?」
《ちよつと、いろいろあつてね。今日は病院に寄つた後に練習に出られると思うよじゃあ病院内に入るから電話切るよ》

「あ、うん」

ケータイをポケットにしまった翔子の次の言葉に一同が耳を傾け

る。

「病院に寄ってから、練習に来るそうです」

と言われても、誰も納得しない。なぜ部活を休んだのか？ なぜ病院なのかわからない。

今の説明では不十分だと麻那が腕組みをしながら翔子を見つめる。

「他に何か聞かなかったの？」

「え」と、病院内に入るからと言って電話切られちゃいました」

今の説明で仕方なく一同は納得した。愁斗が練習に来ると聞いただけでもよかったと思うしかない。

隼人が手を叩いて大きな声を出した。

「さあみんな、練習するよ」

愁斗が来るとわかったのでメサイ役以外の配役は元通りに戻され練習が開始された。

昨日と違ってミスはひとつもなかった。

麗慈は撫子が徹夜で仕立てた衣装に身を包み、セリフも完璧に覚えている。それに合わせて照明も音響も息がぴったりだ。昨日のことは全て嘘だったみたいだ。

後は愁斗が来れば完璧だ。

その愁斗も練習が開始されてだいぶ経った頃に姿を現した。

「遅れてすいませんでした」

愁斗の声で練習が一時中断された。

愁斗に駆け寄り寄る部員たち。その表情は暗い。皆、撫子の悪い冗談が本当になってしまったと思った。

翔子が愁斗の腕の怪我見て聞く。

「どうしたの……その怪我？」

「ああ、これは車に轢かれてね。死ぬかと思ったよ」

冗談が現実になった瞬間だった。愁斗の左腕には包帯が巻かれ、その腕は首の後ろに回した布で、胸前あたりで固定されていたどう見ても腕を折った怪我人の格好だった。

部員たちの顔が落胆の色に変わる。これで公演は中止だと誰も思

った。

一番公演の中止を嫌がっていた麻那が呟いた。

「公演は中止ね。怪我じゃしょうがないわよね」

「僕なら平気です。フロド役をやらせてください。僕の怪我のせいで公演が中止になったら嫌ですから」

だが、怪我をしたままできる役ではない。フロドは劇中、舞台の上を動き回り、メサイと取っ組み合いをするシーンもある。隼人は大きく息を吐いた。

「さあ、練習するよ」

「爆裂うっそお〜！ 部長、爆マジで言ってるんですかあ!？」

「本人がやりたいって言ってるんだから。でも、愁斗くん、無理しないようにね」

「はい、わかりました」

愁斗はうなずき、練習は再開された。

練習は思っていたより順調に進んだ。愁斗のフロドは隼人のフロドとは別の魅力を持っている。そして、麗慈のメサイも愁斗が相手だと何か違った。

フロドとメサイの迫力を凄い。二人の間にある想いが激しくぶつかり合っているのがよくわかる。その二人に挟まれた翔子は麗慈のある言葉が脳裏に甦った。

俺はあいつが憎い。それが演技に出ているのかも知らない。

問題の取っ組み合いのシーンも愁斗は片腕だけでどうにか乗り切り、怪我をすることを覚えている人々に忘れさせた。

そして、三日はすぐに過ぎ去っていった。

夢見る都（13）

星稜祭の幕が壮大に開かれた。

二日間の星稜祭の日程のうち、演劇部の公演は二度行われる。一日目と二日目の午前中だ。

一日目の公演は盛況のうちに無事終わった。誰もが満足するできた。

そして、二日目の今日、昨日と同じように翔子たちは衣装に着替えて中等部演劇部の公演チラシを配っていた。

翔子はドレスを着て、撫子も魔導士の衣装を着ている。

「撫子、昨日も言ったけど二人で回ってたら効率悪いでしょ？」

「言われたっけ、そんなにやこと？ いーじゃん、いーじゃん、二人でいた方がインパクト強くてみんなにやチラシ受け取ってくれるよ」「そう言いながら撫子はすれ違う人たちに片っ端からチラシを配っていく。

翔子は自分たちの配っているチラシをまじまじと見ながら呟いた。「愁斗ちゃんと麗慈くんはこれでいいけど、私のこと少し綺麗に描きすぎだよ」

このチラシを製作したのも撫子だった。チラシにはメインキャストの三人が描かれている。それもかなりの画力で写實的に描かれている。

「翔子が二人に負けにやいように二〇〇%美化で描いたんだよお」

「それって私に失礼じゃないの？」

「ウソウソお、翔子を見たまんま描いただけだよ。翔子は十分ビューティホーだよ」

翔子はチラシを顔に近づけたり遠ざけたり難度も見ていた。その時、チラシの向こうの景色にあるものを見た。

「……あれ、須藤くん!？」

翔子は行方不明のはずの須藤拓郎を人ごみの中に見た。

「どこどこ？ いやいじゃん」

「本当にいたんだって……たぶん？」

「そっくりさんじゃいやいの？」

「見間違えかなあ……？」

公演の一五分前となり、急いで翔子と撫子はホールに向かった。

二人が舞台裏に行くと、すでに他の部員たちは揃っていて、いつでも公演が開始できる状態だった。

翔子は須藤を見たことを話さなかった。公演直前にみんなの気を惑わすようなことは言わない方がいいと判断したからだ。

「公演最終日、みんな悔いを残さないようにがんばりましょう」

隼人はみんなにニッコリと微笑を投げかけた。隼人の微笑みはみんなの緊張を解きほぐしてくれる微笑だ。

この公演が隼人と麻那にとって中学最後の公演となる。

公演を華々しく成功させて、二人を見送ってあげたいと翔子は考えていた。

「部長も麻那さんもがんばってくださいね」

演劇部を代表しての気持ちを込めた翔子の言葉だった。

徐ろに愁斗が包帯を取りはじめた。それを見た部員たちは驚きの表情をする。

翔子は愁斗に近づき目を丸くした。

「愁斗くん、腕平気なの？」

「治ってないけど、やっぱり包帯したままだと目立つからね」

「でも、怪我が悪化するんじゃないの？」

「だから、最終日まで外さなかったんだよ」

愁斗は微笑んだ。

いつもどおり隼人は大きく手を叩いて合図をした。

「よし、そろそろみんな準備して」

「はい！」

声を揃えて大きな返事をした。観客席まで聴こえてしまったかもしれないが、そんなことはどうでもよかった。悔いを残さなければ

それでいい……。

星稜大学付属・中等部の演劇部による公演
演じた。

『夢見る都』が開

夢見る都（14）

ステンドグラスから淡い光が聖堂内に差し込む。

美しき薔薇の庭園に囲まれた聖堂の中で、ひとりの女性が祈りを捧げていた。

この者の名はアリア。明後日に結婚式を控えた女性だ。

光差し込むステンドグラスに描かれた聖母に跪き、アリアは両手を組んで静かに目を閉じていた。

この辺りを治める領主の息子に愛慕われ、縁談の話が強引に進められてしまい、アリアの心は深く傷ついていた。

婚姻相手の名はメサイ。決して悪い人ではないとアリアは思っている。だが、アリアには意中の男性が他にいた。

アリアの恋い焦がれる男性の名はフロドドロウ侯爵配下の近衛魔導士団に所属する魔導士であり、蒼玉戦争で没落した貴族の家に生まれ、家名再興のために魔導士としての名を成そうとしている。

静寂の聖堂に呟きが響く。

「明後日と迫った結婚式　やはりわたくしはメサイ様を愛することができるせん」

目を開きステンドグラスの聖母を見上げる。

「なぜ神は、わたくしとフロド様の仲を引き裂こうとするのでしょうか……。なぜ、わたくしはフロド様と一緒になんてはいけないのでしょうか？」

アリアの頬に光の筋が走り、それは地面に零れ落ち、四方に弾け飛んだ。

「なぜ、なぜ、なぜ、神はわたくしに試練を課すのですか？　わたくしはなぜ苦しまなければならぬのですか？」

冷たい床に両手をつき、下を向いたアリアの顔から雫がぽたぽたと地面に零れた。

「わたくしの声が届いておいでなら、答えてください！　わたくし

に答えを……うつつ……くつ……」

唇を噛み締め悲しみを抑えるアリア。彼女に救いの手を差し伸べる者はいないのか？

肩を震わせ嗚咽しながらも、自分の内に秘める感情を抑え込もうとしている。

アリアは涙を拭いて、もう一度ステンドグラス描かれた聖母を見た。

涙は止め処なく流れている。

「わたくしは、わたくしは人の決めた道を歩むなどできません。わたくしは、わたくしで決めた道を生きたい。愛してもいないひとなど結婚なんてできません！」

再び咽び泣き、顔を下げるアリア。

「自分の感情に嘘をつくことはこれ以上できません。わたくしはフロド様だけに愛されて生きたい。そして、フロド様と……」

目を瞑っても涙が溢れて来る。胸を抑えても苦しみは消えず、震えは止まらずに身体が押し潰されそうな感覚に陥り、心臓が砕けそうになる。

静かな聖堂に自分の泣く声と心臓の鼓動だけが鳴り響く。

「フロド様と結ばれぬのなら、死んだ方がまだだというのに、わたくしには死ぬ勇氣もないのです。そんな自分が惨めで、結局は何もできない人間なのです」

咽び泣く声とは別に、相手を気遣うような静かな足音が聴こえた。

アリアの耳にも足音は届いていたが、顔を上げることができず、相手を確認することができなかった。

「また、ここで祈りを捧げていたのですね」

アリアの背中に優しい言葉をかけたのは、アリアの侍女であった。言葉をかけてもアリアは振り向こうとはしなかった。いや、振り向けなかったのだ。

侍女は何も言わずアリアを見守っていた。そして、やがてアリアが顔を上げ、侍女の方を振り向いた。

「わたくしが泣いていたなどメサイ様には決して言わないでください」

「承知しております」

ゆっくりと立ち上がったアリアは侍女に崩れるように抱きついた。

「あなたの顔を見たら、また涙が溢れて来てしまいましたわ」

「アリア様、貴女がお嘆きなられたら、わたくしまで悲しくなってしまう。どうか涙をお拭きになって、泣くのをお止めになってください」

侍女はアリアの肩を掴んでしつかりと相手を立たせた後に、白いレースのハンカチでアリアの顔についた悲しみを拭き取った。

「ごめんなさい、あなたまで悲しい思いをさせてしまって、わたくしのために涙を流してくれる友人はあなたしかいないわ」

侍女の目からも涙が溢れ出ていた。それをアリアは自分のハンカチで拭き取ってあげると、微笑を浮かべた。

微笑をもらった侍女は胸が苦しくなった。

「アリア様の笑顔はこの世で一番素敵でございます。貴女様にお使いできて、わたくしは大変嬉しゅうございます」

「わたくしもあなたのようなひとが近くにいてくれて、とても心強いわ。わたくしが何度あなたに助けられたことか、あなたはいつもわたくしを支えてくださった。いつでもあなただけがわたくし味方でした。感謝の言葉を何度言おうとも、決して足りませんわ」

アリアの言葉を心で真摯に聞き入りうなずく侍女。彼女はアリアの一番の理解者であり親友であった。

「アリア様、貴女様が命じてさえくれれば、明後日の式を力ずくでも破談させてしまう覚悟はできております」

「いけませんわ、わたくしのためにそんなこと……」

「いいえ、わたくしはアリア様のためならば、この命捧げる覚悟でございます」

侍女は服の上から自分の心臓を鷲掴みしてアリアに訴えた。

「アリア様はフロド様と一緒にいるべきなのです」

「ありがとう、昨日もあなたはそんなことを言っていましたね。でも、いいのですよ、わたくしの運命はもう決まっていますのです」

「そんな……アリア様……」

「わたくしなら平気です。これからもあなたが傍にいてくださるのですもの」

「……アリア様」

「お行きなさい。わたくしはもう少しここにいますから」

言葉に詰まった侍女は何も言わず、頭だけを下げ足早に立ち去ってしまった。

再び独りになるアリア。彼女は床に跪き目を閉じた。

しばらくして、また足音が聴こえた。今度の足音は歩幅の広い人の足音だ。

アリアは足音の持ち主の顔を見た。そして、はっとした。

「フロド様!？」

「ここに来れば貴女に逢えるような気がした。しかし、いざ出逢ってみると逢ってはいけなかったのだと胸が痛む」

「わたくしも貴方様に出逢ってはいけなかったと思いますわ。貴方様と出逢ったことにより、わたくしの心は掻き乱され、苦しみが増み上げてきます」

うつむいたアリアはフロドと視線を合わせないようにした。声を聴くだけでも苦しいのに、そのひとを見てはもつと苦しみが増してしまう。だが、フロドが傍にいるのを感じ、胸に熱いものが込み上げて来るのがわかる。

「なぜ、わたくしたちは引き離される運命なのでしょうか……?」

「私は貴女を手放しはしない。メサイの手から貴女を取り戻してみせる!」

「いけませんわ、いけません。そのようなことを成されては、貴方の名に傷が付いてしまいますわ」

「いいのだ、貴女さえいてくれれば」

「家名再興を成し遂げるのではなかったのですか? お忘れではな

いでしよう、メサイ様の父君は貴方が使えていらっしやるお方でもあるのですよ」

フロドはドロウ侯爵配下の近衛魔導士団に所属する魔導士だ。ドロウ侯爵の息子であるメサイからアリアを奪い返すなど、許されることではないのは誰もがわかっていた。

「だが、しかし！ 私は貴女のことを……こんなにも想っているというのに！」

片手を大きく振り乱し、フロドは感情を爆発させた。

「私は貴女を愛している。そして、貴女も私のことを」

「言わないで！ 言わないでくださいそれ以上。わたくしはメサイ様の妻となる身なのですよ。わたくしを困らせないでください
胸が、胸が苦しくなって、涙が……」

目に涙を滲ませるアリアにフロドは近づき、彼女を抱きしめようと腕を伸ばした、その瞬間だった。

「触らないで！」

フロドはアリアによって突き飛ばされた。

「わたくしの身体に触れないでください。わたくしに優しくしないでください。わたくしを苦しめないで……」

突き飛ばされた時に床に座り込む体制になってしまったフロドは、立ち上がることもできずに黙り込んでしまった。

沈黙が流れる。そして、フロドは床に座りながら言った。

「すまない、私が悪かった。だが、わかってくれ、苦しいのは貴女だけではないということを……私とて胸が張り裂けそうなくらい苦しくて堪らないのだ」

「フロド様……」

アリアは何かを言おうとして首を振った。

「いいえ、これは運命なのです。わたくしたちには逆らえない運命なのです」

「何が運命だ！ これが運命と言うのなら、この世には神はいない
いるのは悪魔だけだ！」

「フロド様は神を愚弄なさるのですか!? 神はおりますわ、いつもわたくしたちを見守ってくださいます」

「ではなぜ私たちはこのような運命を歩まねばならんだ? これは神が私たちに与えた試練だとしても言うのか!？」

「……それは」

「答えられぬではないか、神はやはりいないのだ。私たちの運命は悪魔によって弄ばれているのだ」

フロドに激しく罵られ、アリアは返す言葉が何もなくなってしまった。

打ち震えるアリア。激しい憤りを感じ、この行き場のない感情をどうしていいのかわからない。

そして、ついにアリアの感情はフロドにぶつけられることになった。

気丈とした態度でアリアは命じた。

「早くここから出て行ってください。わたくしと貴方は逢ってはいけないのです!」

アリアの言葉を受けたフロドはゆっくりと身体を起こし、服についた埃を振り払って哀しい表情をした。

「わかった……貴女がそう言うのであれば仕方あるまい。さらばだ……あ……よ」

小さな声でフロドは呟き、マントを翻してこの場を後にした。だが、最後の呟きが耳に

届いてしまったアリアは叫ばずにいられなかった。

「お待ちになってフロド様!」

声が出した後もフロドは歩いていったが、やはり止まらずにいられなかった。だが、振り向くことはできない。決して振り向いてはいけない。

フロドに駆け寄るアリア。彼女は堪えられずフロドの背中に抱きつき、そして泣いてしまった。

「フロド様、行かないで……行かないでください」

「触るなど言ったのは貴女だぞ」

「いいのです……わたくしは、貴方を愛しているのですから」

「私もアリア」

ついに振り向いたフロドは、自分の顔をアリアの顔にそっと重ねた。

どこかで鐘の鳴る音がする。この鐘は廃滅の序曲なのか……それとも？

アリアとメサイの結婚式が行われる前日、フロドはまた薔薇の聖堂を訪れていた。だが、今日は誰もいない。

静かな聖堂 明日ここで二人の結婚式が行われるとフロドの耳には入っていた。

「私は何をすればよいのだ。いや、その答えは考えなくとも出ている。だが、後のことはどうする？ 現実甘いものではないのだ」

フロドはステンドグラスに描かれた聖母を見上げた。

「貴女ならば神が本当にいるのかご存知でしょう、神はいらっしゃるのですか？」

答えはなかった。フロドは鼻で笑った。

「先日は神がいないと自分で言い、今は神に頼ろうとしている。なんと都合のよい男であろうか私は」

拳を強く握りフロドは目を閉じた。

「だが、今は誰かにすがりたい 神の助けが欲しいのだ。こんな都合のよい男でも想いを寄せてくれるひとがいるのだ。私は目の前にいる大切なひとを手放したくはない、この腕で抱きしめていたのだ」

想い人を頭に描き、フロドは己の身体を強く抱きしめた。

「漆黒の闇に魂を貫かれる気分だ。悲しみは海より深く、苦しみは空より高い、私の魂を癒してくれるのはあのひとしかおらぬ」

失意の底に打ちのめされたフロドは、床に両手をついてこう叫んだ。

「ふざけるな、こんな運命など受け入れてたまるものか！」
床を力いっぱい殴りつけた。それも一度ではなく、何度も何度も激しく殴りつけた。

フロドの拳から紅い血が滲み出して来た。

「この右手が真つ赤な血で穢れようと、私はアリアを奪い返してみせるぞ！」

血に染まる右手を眺めながら、フロドは決意を固めた。

立ち上がったフロドはマントを翻して歩き出そうとした。しかし、聖堂の中に入って来るフロドと同じ法衣を身に纏う人物を確認して足を止めた。

聖堂に入ってきたのはフロドの友人の女性であるティータであった。

ティータはフロドと同じく、ドロウ侯爵配下の近衛魔導士団に所属する魔導士でひとりである。

「探しましたよフロド。ドロウ侯爵殿がお呼びになっていますよ」

「ありがとうティータ。だが、侯爵様のもとへは行かなぬ」

「どうしてですか……まさか!？」

ティータはフロドとアリアに仲を知っている。そして、フロドとは長い付き合いだ。だからすぐに気がついてしまった。

「まさか、あなたは侯爵様のことを裏切る気なのか!? そうなのかフロド、答えるのだフロド!」

「いやあってフロドは深くうなずいた。

「わかつてくれティータ。侯爵殿を裏切るのは本意ではないが、しかし、そうせねばならぬのだ」

「アリアだな、あの女のせいだな!」

「あの女などと呼ぶな……あのひとは私の大切なひとだ」

言葉よりも目で激しく訴えるフロドを見て、ティータは落ち着きを取り戻した。

「すまなかつたフロド。しかし、明日の式の邪魔でもしようものなら、あなたは殺されてしまうのですよ」

「覚悟のうえだ」

「……そうですか。では、私もあなたに協力しましょう」

「それは本当かティータ!?」

相手の目を見据えてティータはうなずいた。

「あなたと私は男女を超越した親友です。あなたが死を覚悟するのなら、私もこの命を架けましょう」

真剣な眼差しでのティータの目を見つめながら、フロドは首をゆつくりと横に振った。

「気持ちだけで十分だ。ティータまで巻き込むわけにはいかない。

君は将来有望な魔導士だ……君の輝かしい誉れ高き未来を潰すわけにはいかない」

「それはフロドとて同じではないか!? フロドは私なのよりも未来のある者だ!」

「私の未来は君が思う場所とは違う場所にあるのだよ」

遠い眼差し。フロドは未来に何を見ているのか?

「フロド……やはり駄目だ。今からでは遅くはない、考え直してくれぬのか?」

「それはできない。私はアリアをこの手で奪い返すと決めたのだ」

「どうしてだ、どうしてできぬのだ! 輝かしい未来を捨てて、なぜ彼女を得ようとするか私には理解できない」

「すまない、私の我が侘でしかない。だが、未来を決めるのは私自信だ」

その先の未来がどうなろうと、自分の未来は自分で決める。だが、ティータには理解に苦しむことだった。

フロドは人一倍努力をして、仲間たちからも慕われ、将来を有望視されていた。それをなぜ全て捨ててまで愛する女性を得ようとするのか? そこまでしてあの女性は得る価値のあるものなのか。いろいろな想いが交差するティータは唇を噛み締めた。

「なぜだ、なぜ侯爵殿を裏切る!」

「それ以上言うなティータ。命を架けてくれると言ったのは嘘だっ

たのか？」

「嘘ではない！ でも、違うのだ、何もかも違うのだ……」
押し黙るティータ。フロドはマントを翻した。

「私は行く」

「待てフロド！」

「止めるなティータ」

ティータに背を向けこの場を立ち去ろうとしたフロドの腹が真っ赤に染まった。

「く……くはっ！」

フロドの腹から突き出る輝くナイフ。フロドの背中にくっ付くようにティータが立っている。その手にはしっかりとナイフが握り締められていた。

血に染まる自分の腹を見てフロドは叫んだ。

「謀ったのかのティータ！」

ナイフが抜かれ、フロドは床に膝をついた。

哀しい瞳でティータはフロドを見下ろしていた。

「済まないフロド、私はドロウ侯爵殿には逆らえんだ。侯爵殿のご息を敵に回した君は多くの者から命を狙われている。ならば、せめて私の手で……」

「最も信頼していた友人に裏切られるとは……はははっ、何たることだ。やはり神はおらぬな」

自分の腹を押さえたフロドは、その手にべっとりついた血を眺めた。

「くっ、ははは……涙が出て来る。『せめて私の手で……』か……」
フロドは腹を抱えながらゆっくりと立ち上がり、そして歩きはじめた。

「待てフロド！」

「私はもう誰にも止められぬ。私は私の道を行かせてもらおう」

フロドの手から魔導で作り出したエネルギーの塊が放たれ、ティータの身体を大きく後方に吹き飛ばした。

「すまないなティータ」

消え行くフロドに手を伸ばすティータ。だが、その手は届かない。
「ま、待て……フロド……くっ」

床に倒れたままティータはフロドを追うことができなかった。

しばらくして自らの力で立ち上がったティータ。そんな彼女の前にある人物が姿を現した。

「フロドはどうなったのだ？」

ティータの前に現れたのはメサイだった。

「申し訳ございません、しくじりました」

「そうか、フロドは逃げたのだな……」

メサイは床に残る血の跡を見た。

「これはあ奴の血か？」

「左様でございます」

「なるほど、これだけの血……重症だな」

「左様でございます」

ティータの手にはまだ血のついたナイフが握られていた。

「そのナイフには毒は盛ってあったのか？」

「いいえ」

バシン！ という音がしてティータは頬を押さえながらよろめいた。

「毒でも盛ってあれば褒美でもくれてやろうと思ったが、この役立たずが！」

「申し訳ございません」

メサイと視線を合わせず、ティータは抑揚のない声で言った。その態度がメサイの怒りを逆なでする。

「何だその態度は？ 私に反抗でもするつもりなのか？」

次の瞬間、ティータは二度に渡って平手打ちを受けた。だが、ティータは何も言わず歯を食いしばり、なおもメサイと視線を合わせようとできなかった。

メサイは再びティータを打とうと構えたが、その手は天高く上げ

られたところで止まった。

「何も言わず打たれるだけの者を打つても何の面白みもない。少しはやり返して来てはどうなのだ！」

「……………」

「クソツ……………つまらぬ」

メサイはそれ以上何も言わず聖堂を立ち去ってしまった。

友裏切り独りとなったティータの目からは涙が溢れていた。

「やはり、私にはできなかった。フロドを一思いに殺すことができなかった。フロドの肉をこの短剣で突き刺す瞬間、その瞬間に私の心に迷いが生じた。だが、今は迷いなど存在しない……………済まない友人よ」

ティータは一思いに自らの喉元を短剣で刺した。

崩れ落ちるティータ。床が紅く染まっていった。

友人の裏切りにあつたフロドは失意の底から這い上がれぬまま、結婚式当日に薔薇の聖堂に向かった。

薔薇の聖堂にいたのは、アリアとメサイだけだった。他の者はどうしたのか、結婚式はどうしたのか？

「待つていたぞフロド！」

「結婚式はどうしたのだ、ここで行われるはずではなかったのか？」

「結婚式は明日に延期だ。今日ここで貴様との決着をつけるためにな！」

「何っ!？」

今日ここで結婚式が行われるという情報はティータから聞いたものだった。そう、全てはメサイの罠だったのだ。

「またしても私はティータに謀られただな」

ティータという名を聞いてメサイの口元が歪んだ。

「貴様は知らぬかもしれんが、あのティータという女は昨日自害したぞ」

「何だと!? ティータが、そんなはずがない! ティータが死ぬなど!」

信じられぬことだった。まさか、あのティータが自害しようとはフロドの心はより失意の底に沈んでしまった。

「死んだ友人を想うのか……貴様を裏切った友人を!」

「彼女には彼女の生き方があったのだ。私を刺したとしても、彼女は永遠に私の友人だった」

「刺されても友人だと? 戯言をぬかすな、あの女にそのような価値はない」

はつきりと言い切ったメサイをフロドは鋭い目つきで睨みつけた。

「ティータを愚弄するつもりか!」

「あの女には愚弄する価値もない」

「貴様!」

今にもメサイに飛び掛かりそうなフロドを悲痛な叫び声が止める「お止めになってフロド様、メサイ様もですわ。もう止してくださいませ」

メサイはアリアの腕を引き、自分の後ろへ強引に移動させた。

「これは私とあ奴の問題だ」

「いいえ、違いますわ。わたくしの問題でもありません」

前へ出ようとするアリアを再び自分の後ろに押し込めるメサイ。

アリアには運命を選ぶ権利はないのだ。

「これは私とあ奴の問題だと言っているだろ、おまえは下がっている!」

「わたくしは人形ではないのですよ、私には魂があるのです!」

「うるさい黙っている!」

「……なっ!?!」

アリアの身体が動かない。上半身は動くのに、足だけが上がらないのだ。

「私とあ奴の話が付くまで、おまえの足は石と化した。そこで全てを見届けておれ」

メサイは何かを考えながらフロドの前を行ったり来たりした。

「私とフロド……どう決着を付けるべきか」

「魔導力を競おうではないか！」

「いや、アリアに近くで決着を見届けてもらいたい。魔導で私らが戦えばアリアに危険が及ぶだろう。それにこの聖堂で明日結婚式をするのでな、建物を壊されては困る」

「では、こうしよう」

どこからか輝く剣を取り出したフロド。彼は剣による決闘を申し込んだ。

「昔ながらの剣による決闘を申し込む。アカデミーでの貴公の魔導剣士として腕前は聞いていた。いつか手合わせを願いたかったが、アカデミーでは叶わなかった。そこで、ここでお手合わせ願いたい」

「面白い」

メサイの手にも輝く剣が握られた。

「実に面白い、私も貴様の名は聞いていた。魔導の腕も剣の腕も随一だと言われていたのを覚えている」

二人の男は愛するものために剣を取った。その二人の男性を見つめるアリア。

「お止めになつて、わたくしはお二人が争うのを見たくありません」

アリアの言葉は二人に届くことはなかった。

剣を構えた二人は互いを見据え、目を離すことなくある程度の間合いを取りながら攻撃の機会を窺っている。

先に仕掛けたのはメサイだった。

「うおりゃーっ！」

地面を蹴り上げ切っ先を天高く振り上げるメサイ。そして、剣は光を放ちながら大きく振り下げられた。

相手の剣戟を受け止め、フロドは相手を睨みつけた。

交わる剣と剣を挟み、互いの闘志が燃え上がる。

素早い動きでメサイの足が振り上げられた。不意を突かれたフロドは相手の蹴りを受け止めることができず、腹に蹴りを受けて床に

転がった。

この機会をメサイは見逃さない。

剣は床を激しく叩き砕き破片がフロドの顔にかかる。振り下ろされた剣を辛うじて避けていなければフロドは即死していたに違いない。

狂喜の形相で迫り来るメサイの剣を、フロドは己の剣を下から掬い上げるようにして弾いた。メサイの剣が宙を回転しながら舞う。

床に落ちる剣。フロドは一刀を放つべくメサイに襲い掛かる。

だが、メサイの手が煌きを放った瞬間。メサイの剣が糸で引つ張られたように手元に戻ったではないか！？

フロドの剣戟を不敵な笑みで受けるメサイ。彼は魔導を使ったのだ。

「使わぬとは言っていない」

「なるほど、ならば私はアリアに危害が及ばぬよう、それだけを考えて戦おう」

二人は同時に相手の剣を突き放し後ろに飛び退いて間合いを取った。

メサイが風を巻きながら走る。そして、剣を横に振る。

しゃがんだフロドの頭上を剣が掠め、フロドはそのまま回し蹴りを放った。

足を取られて転ぶかと思われたメサイだが、彼はバク宙を決めつつフロドと間合いを取った。

メサイは剣の切っ先をフロドの顔に向けて、声高らかに叫んだ。

「貴様は生まれながらのエリートだ。私は貴様の幻影ばかりを追って生きて来た。貴様は優秀で私は出来損ない　だから私は貴様に嫉妬した！」

「私は天才ではない。私は家族を崩壊させた者どもを怨んだ　怨念が私の力」

「怨念か　では、私は憎悪の力だ」

なんと！？　メサイは剣を捨てた。

「やはり、魔導で戦おう、古の血を引きし魔導士よ！」

「望むところだ」

フロドもまた剣を捨てた。

二人の間に煌きが放たれ床に落ちた。二人が手を動かすたびに一筋の閃光が走り、そして、消える。

フロドがメサイとの距離を縮めて手を横に振るった。メサイの真横を光の筋が通り抜けた。

次の瞬間、メサイの姿が一瞬にしてフロドの視界から消えた。殺気を感じた時には遅かった。

フロドは背中を激しく蹴られ、地面に手を付きながら倒れてしまった。

床に落ちていた剣を拾い上げたメサイはフロドに止めを刺すべく、剣を突き刺そうとした。だが、その時だった。

「止めてっ！」

床に倒れるフロドに覆い被さるようにアリアが！

剣はアリアの身体を通り抜け、そして、引き戻された。

「な、なぜだ……なぜこ奴を庇った……!？」

メサイの手から剣が滑り落ちた。

起き上がりつつフロドはメサイの落とした剣を拾い、大きく剣を振り上げた。

「なぜだっ！」

叫びをあげたメサイは、ゆっくりと背中から床に倒れて動かなくなった。フロドが勝利を治めたのだ。だが、アリアは……。

フロドは床に倒れたアリアを抱き起こし、涙を流した

「どうして……どうしてだ……」

「フロド様……やはりわたくしと貴方様は……引き裂かれる運命なのですね」

アリアの声はか細く息も荒い。もう、助からない。

「何を言っておるのだ。私とアリアは永遠に一緒だ」

「貴方の言とおおり……神はいませんでした……ありがとうフロド

……」

アリアの身体から力が抜け、フロドは叫び声をあげた。

「アリアーっ！」

愛するひとの亡骸を抱きかかえ、フロドは泣いた。これまでで最も激しく泣いた。

「はははっ……神はいないか……ならば悪魔に魂を売るうではないか！」

辺りが急に暗くなり、外では雷鳴が轟いた。

フロドはアリアの亡骸を床に丁寧に寝かせ、大きく手を広げた。

狂気の形相をするフロドは何かに取り憑かれたように、ぶつぶつと小声で何かを言いはじめた。

「……アズ……我は時の……契約……者……悠久……を経て……禁じられた契約……署名……開か……魔……扉！」

呪文を唱え終わると同時に雷鳴が再び轟いた。

床に横たわるアリアの顔と自分の顔を重ね合わせ、ゆっくりと顔を離れたフロドはアリアを抱きかかえた。

ゆっくりと目を開けるアリア。だが、その瞳は虚ろだった。

「ふる……ど……サマ」

無表情なままアリアはぎこちなくそう言った。

「そうだ、私はフロドだ。貴女は私によって永久を与えられた」

アリアは何の反応も示さず、宙を虚ろな目をして見ている。いや、宙に顔を向けているだけだ。今の彼女には感情が全く感じられない。

「アリア、貴女は夢の中で私と生きるのだ。……永遠に一緒にいよう、アリア」

フロドはアリアを地面に立たせ、彼女の手を取りワルツを踊りはじめた。

ぎこちない人形のように踊らされるアリア。無表情なその瞳からは大粒の涙が零れ落ちる。

無表情なアリアを見て笑いかけるフロド。彼の瞳には以前のアリアが映っている。

薔薇の聖堂で踊り続ける二人の男女。

ワルツを踊る二人は、覚めることのない夢を見る。
人の夢見る都。

ここは二

夢見る都（15）

静寂がホールを包み込んだ。拍手が全くないのだ。

しばらくして誰かが拍手をはじめると、それに合わせて他の者も拍手をはじめ、ホールは拍手喝采となった。

舞台の幕が開かれ、舞台に並ぶ役者たちが頭を下げて、再び幕が下ろされる。余計な挨拶はしなかった。演技を見てもらえればそれが全てなのだ。

ホールの電気が点けられ、席を立った客たちが帰って行く。その音を聞きながら舞台裏では部員たちが歓喜の声をあげていた。

「爆裂サイコー！最後の最後で最高の舞台にやったねえ」

撫子は翔子の両手を取りながらびゅんびゅん飛び跳ねている。

隼人が音響室から急いで舞台裏に走って来た。

「みなさんお疲れさまでした。本当にすばらしい演技だったと思います。特に愁斗さんと麗慈くんのアドリブには驚かせられましたね」
アドリブとはラストでフロドとメサイが対決シーンのことだ。あそこはほとんど二人のアドリブだった。

二人がアドリブをはじめて一番驚いて焦ったのは翔子だった。

「本当にあのシーンはよかったよ。でも、麗慈くんが剣を投げ捨てた時はどうしようと思っちゃった。どこで私が飛び出したらいいのかわ冷や冷やしちゃったよ」

麗慈は笑いながら手を頭の後ろにやった。

「ごめんごめん、気づいたら俺、いつの間にか剣を捨てててさ。愁斗が俺に合わせてくれてなきゃ舞台が滅茶苦茶になるとこだったよな」
あのシーンは二人の息がぴったりで演技とは思えないほどのきだった。

びよんびよん跳ねながら撫子は麗慈の前まで行った。

「あのシーンってさあ、二人で打ち合わせとかしてたのお？」

「いや、全部本当にアドリブだよ」

全部本当にアドリブだった？ その言葉に突っかかる麻那。

「あの光る筋は何なの？ 二人の間で飛び交った光る筋のことよ、あれもアドリブだったって言うの？」

麗慈は人差し指を唇に当てて言った。

「あれは俺と愁斗との間の企業秘密です」

完全にはぐらかされてしまった。あのシーンを見ていた全ての人
が思っていた。その光の筋は何なのだろうか？

辺りを見回す翔子。彼女はある人を探していた。

「あの、愁斗くんが見当たらないんですけど？」

一同ははっとした顔をした。舞台が終わったばかりで興奮して
いて、愁斗がいないことに気づいていなかったのだ。そんな中でひ
りだけは愁斗がいないことに最初から気がついていました。

「愁斗なら怪我が悪化したからって言って、さっさと楽屋に行っ
たわよ」

愁斗は舞台の幕が下りてすぐに楽屋に向かおうとした。その途中
で麻那に会って、そのことを告げて楽屋に向かって行ったのだった。
そして、いつものように隼人が手を叩いた。

「はい、ではみなさんお疲れ様でした。後の時間は星稜祭を楽し
んで来てください。それから、星稜祭が終わった後に楽屋で打ち上
げをしますから、他に用がない人は楽屋に集合してくださいね」

女子三人組が舞台裏を出て行き、麗慈もすぐに出て行ってしま
った。

翔子は急に撫子に腕を引っ張られて無理やり走らされた。

「な、何するのいきなり!？」

「早く衣装着替えて楽しい星稜祭を満喫しよー、お〜!」

拳を上げて自分の意気込みを現す撫子を見て、翔子はため息をつ
く。

「もう、そんなに急がなくても時間は十分あるから」

「今日は最終日じゃんだから、ばば〜んとエンジョイしなきゃ」

「昨日も私を連れまわしたのに、今日も連れまわす気？」

撫子は女子の更衣室に割り当てられ楽屋のドアを開けながら答えた。

「アタシと一緒にじゃイヤイヤにやのお？」

「そうじゃないけど」

楽屋では麻衣子と沙織が着替えをしており、役を演じてない久美がその二人の着替えに付き合っていた。

翔子は豊んであった自分の服を取り、着替えをはじめた。横では撫子も着替えをはじめている。

「翔子さあ、さっきの『そうじゃないけど』ってどういう意味？もしかして!？」

撫子が声をあげるの、翔子はブラウスのボタンに手を掛けながら、動きを止めて相手の顔を見てしまった。

「もしかして何よ」

「愁斗クンと星稜祭ツアー御一行様ラブラブデートするつもり？」

「別にそんなこと考えてない！」

頬を膨らませて顔を赤くした翔子は中断していた着替えを再びはじめた。

二人の会話を聞いていた沙織が大きな声を出した。

「わあ、撫子センパイ言いこといいますねえ〜。沙織、愁斗センパイのことデートに誘ってみようかなあ」

この発言をわざと聞き流しているフリをして、着替えをしている翔子のわき腹に、撫子が肘を押し付けてグリグリする。

「いいによかにゃ〜ん、沙織ちゃんあんにゃこと言ってますぞ親分」「何のこと？ 誰が愁斗くんをデートに誘おうと個人の自由でしょ」

翔子の発言を聞いて、撫子のひとり芝居がはじまった。

「じゃあ、アタシも愁斗クンのことデートに誘っちゃお。それで、公演の後はテンション上がっちゃってるから、デートの最後にはあ〜んなことやこ〜んな展開が待ってる、きゃあ愁斗クン何するの!？」
「がはは、いいじゃねえか、きゃあ止めて愁斗クン、ああ〜んってなことがあるかもよ」

少し調子に乗り過ぎた撫子を翔子が睨んだ。

「ダメ、愁斗くんで変な想像しないで！」

「じゃあ、デートの申し込みしたらあ？」

意地悪く言う撫子に対して、翔子は下を向いた。

「したくないもん」

着替えの終わった沙織が翔子の覗き込むように立った。

「翔子センパイがしないなら、沙織が先に愁斗センパイに申し込みして来ます」

走ろうとした沙織の背中を久美が引っ張った。

「あんたは今から私たちと高等部吹奏楽部の演奏聴きに行くんでしようが。まさか、私と麻衣子との約束破って私利私欲に走る気じゃないでしょうね？」

据わった目をしている久美に見られた沙織は、身体を縮めて泣きそうな顔をした。

「ごめんなさ〜い、沙織が悪かったですう〜」

「わかればよろしい。じゃあ、麻衣子も行きましょう。先輩お疲れ様」

沙織の服を引っ張ったまま久美は楽屋を出て行き、麻衣子もその後を急いで追おうとする。

「先輩お疲れ様でした。後ほど打ち上げで」

麻衣子も頭を下げて出て行った。

翔子と撫子の着替えも終わった。

「うんじゃ、アタシらも星稜祭の屋台めぐりで食い倒れしに行こう」

「……あのさ、やっぱり、あの、その」

「ふふ〜ん、翔子ちゃんの言いたいことは、この美少女名探偵撫子ちゃんにはお見通しだよ。アタシは勝手に食い倒れて来るから、うんじゃ、さらばにゃ〜ん！」

全てお見通しの撫子は笑顔で走りながら楽屋を出て行った。

残された翔子は小さく呟く。

「そんなに見通されやすいのかな、私？」

これから翔子は愁斗のところに行こうとしているのだ。だが、デートの申し込みに行くのではなく、愁斗の怪我の具合が心配で見に行くのだ。

楽屋を出た翔子は少し考える。愁斗はどこにいるのか？

楽屋に戻ったと麻那は言っていたが、男子更衣室に割り当てられた楽屋か、みんなが待機に使っていた大部屋の楽屋なのかわからない。

翔子は男子更衣室に割り当てられた楽屋には入れないので、とりあえず大部屋の楽屋に向かうことにした。

大部屋に愁斗はいた。その他にも隼人と麻那もいる。

隼人は部屋の隅に座って読書中で、麻那は昼寝中、愁斗は拳に巻いた包帯を取り替えていた。

翔子は包帯を替えている愁斗の横に座った。

「愁斗くん、手大丈夫だった？」

愁斗の右の拳には出血の痕があった。

公演中に床を殴りつけるシーンで、少し本気になって殴ってしまった本当に血が出てしまったのだ。舞台裏に引込んだ時にすぐに包帯を巻いて応急処置をして、アリアとメサイの結婚式に乗り込むシーンでは包帯を巻いて舞台上がっていた。

「大したことはないから平気だよ。あんなことで怪我するんてバカみたいだよな」

「そんなことないよ、それだけ演技に入り込んでたつてことだよ」
心から翔子は愁斗を尊敬していた。

この学校に来て初めて演劇をやったと言う愁斗であったが、その才能は素晴らしく、今では演劇部の誇る優秀な部員のひとりだ。

「役を演じてる時は本当にその役になっちゃうんだよね」

「それからさ、あの愁斗くんのアドリブもよかったよ。本当に血が出ちゃった時にアドリブやったでしょ？」

目を輝かせながら自分を見る翔子の顔を見て愁斗は微笑んだ。

「この右手が真っ赤な血で穢れようと、私はアリアを奪い返してみせるぞ！ ってセリフのことだよ。自然と出て来ちゃったんだ」
「本当は『この手で必ずやアリアを奪い返してみせるぞ！』だよ。あ、ごめん包帯巻いてる最中だったね。止めちゃってごめん」
「いいよ別に」

再び包帯を巻き始めようとする愁斗の手を翔子は掴んで言った。
「私が巻いてあげる」

包帯を巻こうとしている愁斗の手を自分の手で止める行為、それは翔子にとって少し冒険的な行為でもあった。何気なく愁斗手を触れる そんなことでも翔子にはすぐドキドキした。

一生懸命愁斗の拳に包帯を巻いていく翔子。ふと顔を上げると愁斗と目が合った。だが、すぐに視線を外してしまった。

「これでよし……かな？」

疑問系の声を発した。翔子の巻いた包帯は少し不恰好で肉団子みたいになってしまっている。

「ごめん、失敗しちゃった」

「いいよ、ありがと瀬名さん」

この演劇部内で唯一翔子のことを苗字で呼ぶ愁斗。翔子は本当は下の名前で呼んでもらいたかった。

「あ、あの愁斗くん？」

「何？」

「やっぱりいいや……」

『翔子』って呼んで、と本当は言いたかった。でも、言えなかった。

「言ってみてよ」

「あのね、し、『翔子』って呼んで欲しい……かも」
愁斗は微笑んだ。

「呼び捨てがいい？ それとも『さん』とか『ちゃん』とか？」

「……呼びやすいほうがいいよ」

「じゃあ、翔子ね。でも、僕からも条件」

「何？」

「僕のこと呼び捨てで呼んでくれたら、これからも下の名前で呼んであげるよ」

「……意地悪う」

寝ていたはずの麻那がむくつと起き上がった。

「あんたらウザイ。あなたたちさ、それでも付き合ってるの？」

翔子と愁斗の動きが同時に止まった。

「あたしが許すから、二人ともお付き合いなさい。これは命令よ」

「あああ、あの、麻那先輩が許すとか命令とか、そういう問題じゃなくって、愁斗くんだって私となんか付き合いたくないと思うし、その、迷惑っていうか……」

大層な慌てぶりの翔子を見て麻那は笑った。

「ホントわかりやす過ぎね翔子は。今の発言って愁斗くん好きですって言うてるようなもんじゃない。しかも、当の本人は今のあたしの発言でようやく気づいた感じだし」

本を読んでいた隼人が、本を下にさげて顔を出し、麻那に忠告した。

「また口が滑ってるよ麻那」

「だって、この二人見るとムズムズして来るのよ。いつまで経っても進展しないで平行線。せつかくキスシーンまでやった仲なんだから、このまま付き合いなさい」

「麻那先輩！ 本当にキスしたわけじゃないですよ。頬が少し触れただけです！」

頬が少し触れただけでも翔子にしてみれば心臓が飛び出しそうな体験だった。

麻那の攻撃はまだまだ続いた。

「最後のシーンで本当にキスしちゃえばよかったのに、聞いているの愁斗？」

「あ、はい……」

苦笑いを浮かべている愁斗。だいぶ困っているのが表情から窺え

る。

「あんたも翔子こと好きなんですよ？」

「麻那また僕に叩かれないのか？」

隼人の鋼の声が楽屋内に響いた。

翔子は啞然とした。いつあの部長が麻那のことを叩いたのだろうか？

やや間があつた。そして、最初に愁斗が口を開いた。

「僕も瀬名さんのことが好きだよ」

翔子の身体の中で銅鑼が鳴った。全身が痺れて動けない。

「え、あ、え、そそ、ええっ!？」

動揺する翔子を見る麻那と隼人も動揺している。

麻那はガッツポーズを決めた。

「よっし！ あたしがバシンと言ったから愁斗は翔子に告白したのよ」

たぶんそうだったのだろう。麻那がこの場であれだけ言ったから愁斗はここで告白したに違いない。

動きがロボットのようになってしまっている翔子は精一杯こう言つた。

「あ、あの、愁斗くん腕大丈夫？」

どうしてこんなことを聞いてしまったのか翔子にもわからない。

翔子の的外れなことに愁斗は笑って答えくれた。

「だいぶ赤く腫れ上がったよ」

「あ、そう……なんだ」

二人の展開を間じかで見守る麻那はイライラしていた。

「翔子、そんなこと聞いてないで、あんたも自分の気持ちを伝えなさいよ。あんたの場合はバレバレだけど、はっきりとはまだ伝え」

「

麻那の口は隼人の手によって塞がれた。

「麻那の出番はここまで。僕らは別の場所に移動するね。それと、これはここの鍵」

隼人はポケットから代々演劇部に受け継がれているという鍵を出して、翔子手のひらの上に置いた。

隼人に続いて麻那も楽屋の鍵を出して、こちらは愁斗の手のひらの上に置いた。

「あんたら戸締まりよろしくねそれから、翔子が今日から部長で愁斗が副部長ね」

それだけ言つて、麻那は微笑みながら隼人と楽屋を後にした。

愁斗と二人つきりにされてしまった翔子は困ってしまった。

「あの愁斗くん？」

「何？」

「あのさ、折れた腕固定しなくいいの？」

どうしても翔子には言えない。また別の話をしてしまった。

「あ、そうだね」

「私が手伝つてあげる」

翔子は布を取つて愁斗の首の後ろで結んであげた。

「ありがとう」

微笑みかけられる翔子。余計に言えなくなった。

沈黙が流れ、翔子は気まずい気持ちになる。

翔子は大きく息を吐いて、大きく息を吸つて、ついに言った。

「愁斗くんのが好きです」

「僕も瀬名さんが好きだよ」

「うん」

顔を真っ赤にして翔子はうつむいた。そんな翔子を見て、愁斗は翔子の手を取つて立ち上がった。

「僕らも星稜祭を楽しみに行くぞ」

「うん！」

二人は楽屋を駆け出して行った。

夢見る都（16）

手を繋ぎながら翔子と愁斗は楽屋の戸締まりをして行ったそして最後の楽屋の戸締まりをして、これから星稜祭の会場に行こうとしたその時、翔子が急に愁斗と手を離れた

「やっぱりダメ。愁斗くんと普段並んで歩いてるだけで痛い視線浴びるのに、手繋いでるとこ見られたら絶対暗殺されちゃうよ」

「おもしろいこというね」

「おもしろくないよ、マジで言ってるんだよ」

愁斗は少し考えた後、微笑んだ。

「じゃあ僕がいつでも瀬名さんのこと守ってあげるから」

「えっ!？」

「どんな時でも僕は瀬名さんのことを守る」

「……うん」

二人は星稜祭の会場へ歩き出した。

星稜祭の会場は星稜大学付属・高等部の教室内と校庭が基本で、翔子たちは教室の会場に向かった。

ホールは中等部と高等部を繋いでいるのですぐに行くことができ

る。
廊下は行き交う人々でごった返し、時折食べ物匂いが空気に運ばれて来る。

「愁斗くん、お昼どうしようか?」

時計は十二時を過ぎている。昼食を摂るにはちょうどいい時間帯だった。

「瀬名さんは何か食べたいものある?」

「三組の友達にクレープ食べに来てって言われてるけど、クレープはお昼ご飯にはならないよね」

「あっ、ほら」

愁斗の指差す方向にはヤキソバと飲み物売り歩いている人がい

た。

「あれでいいと思うんだけど、翔子ちゃんはどう？」

「うん、お昼はヤキソバにしよう」

愁斗がヤキソバ売りを呼び止めて注文をした。

「ヤキソバ二つと、翔子ちゃんは何飲む？」

「私はウーロン茶でいいよ」

「じゃあ、ヤキソバとウーロン茶を二つずつ」

ヤキソバ売りは二人いて、ひとりがヤキソバを持ち、もうひとりが飲み物の入ったクーラーボックスを担いでいる。そのふたりはさきほどから交互に翔子の顔をちらちら見ている。

ヤキソバ売りだけではなかった。先ほどから生徒たちにこそそこそ見られている。

ヤキソバと飲み物を受け取った愁斗がお金を払い終わると、翔子は愁斗の腕を引っ張って大急ぎで歩きはじめた。

「どうしたの瀬名さん」

「やっぱり楽屋で食べよう、それがいいよ、うん」

翔子は愁斗の腕を強く掴んで、そのまま楽屋まで早足で戻った。

楽屋の中に入り、翔子は一息つく。

「はあ、やっぱりみんなに見られた。中には殺気出てるひともいたよお」

「ごめん、僕のせいだよ」

「ううん、別にそうじゃないんだけど。明日になったら変な噂が学校中に蔓延してそうで怖い」

愁斗のカッコよさは隣の高等部にも知られているほどで、愁斗が女子生徒と二人で何かをしていると、愁斗のファンでなくとも誰もががついつい見てしまう。誰もが愁斗のすることに興味を持ってつい見てしまうのだ。

困った顔をしながら愁斗はヤキソバと飲み物を翔子に渡して適当な場所に座った。

「二人で生徒のいるところ歩けないね」

「うん」

翔子は少し不安になった。学校内に二人でいるところを見られると変な噂が立ち、下手をするとイジメに遭うかもしれないと翔子は思った。愁斗は自分のことを守ると言ってくれたけど、イジメに遭ったらきつと黙っていると思う。

ヤキソバの入れ物に掛かっている輪ゴムを外し、憂鬱そうなため息をつく翔子は、そのまま愁斗の顔を見上げた。

「せっかくの星稜祭なのにな」

「じゃあ、今度の休日デートしようか？」

「えっ、ホントに!？」

割り箸をパチンと割り、憂鬱そうな顔をしていた翔子の顔が一気に華やいだ。それを見て愁斗がニッコリと微笑む。

「よかった、元気になってくれて」

「本気で言ったの？ 撫子っばく言つと爆マジで!」

「思いつきで言ったから、どこに行くとか決めてないけどね」

「だったら愁斗くんの家に行きたい」

やや間があつた。ヤキソバを無言で食べる愁斗の表情が一瞬曇つたように翔子には見えた。

「僕のうちに……か」

「ダ、ダメならいいよ、うん」

本当は愁斗の家や愁斗の部屋を見てみたいという気持ちが翔子にはあつたが、撫子の例が急に頭に浮かんで自宅訪問の夢はあきらめた。家庭には家庭の事情がいろいろあつて家に人を呼びたくない場合もあるに違いない。

少し考え込んだ様子の愁斗が口を開いた。

「いいよ、大丈夫だと思う」

「本当に大丈夫なの、家族の人に迷惑とかじゃないよね？」

『家族』という言葉聞いた瞬間、少しだが愁斗は翔子から視線を外した。一瞬だったためと何気ない行動なので翔子は気づいていない。

「大丈夫だよ、でも実はさ……」

翔子はもう一度撫子のことを思い出してしまった。『実はさ……』の後に何が来るのか少しドキドキする。

「実はね、僕さ、ひとり……いや、二人暮らしなんだよね」

少し引つかかる言い方だった。父や母のどちらか一方と二人で暮らししているのならば、その名が出るだろう。だが、愁斗は『二人』という濁した言い方をした。

翔子は聞いていいべきか困ってしまった。二人暮らしと聞いた翔子の頭の中では、二人暮らし＝同棲＝恋人という変換が行われていた。「あ、あのさ、二人暮らしって、その、いい、言わないで、聞いちやいけないような気がするから」

「別に聞かれたらマズイにはマズイかもしれないけど、瀬名さんには知ってもらった方がいいかな」

「私に知ってもらった方がいいこと？」

「僕さ、母と父がいないんだ」

翔子はショックを受けた。何で自分の周りには家庭事情に問題がある人が多いのだろうか。麗慈は両親が離婚したらしく、撫子は独り暮らしをしていた。

愁斗の話は続く。

「母は僕が小さい頃に死んだ。父は数年前にどこかに消えてしまった。それで今は姉と住んでるんだけど、その姉に瀬名さんを会わせたくないんだよね」

話を聞き終えた翔子は、愁斗の両親のことにはあえて触れず、姉のことについて尋ねてみた。

「どんなお姉さんなの？ やっぱり愁斗くんのお姉さんだから、すごい美人なんだろうね」

「たしかに美人だと思うけど、僕とは似てないし、歳も十歳以上離れてるんだ。性格は少し麻那先輩に似てるかも……」

失笑を浮かべる愁斗になおも翔子は聞き続けた。

「麻那先輩に似てるって、キツイこと言うとか、人に当り散らすと

か？」

「両方合ってるね。あと、自己中心的で我が侂で人を人だと思つてないとか、自分が世界のトップで、自分が命令すれば誰でも言うことを聞くと思ってる」

翔子の中で自分が会ってきた最低な人々の性格が統合され、あからさまに嫌な顔をしてしまつてつい口が滑ってしまった。

「その人サイテーな人間だね。……あつ、ごめん愁斗くんのお姉さんだった」

「いいよ、たしかに最低な人間だから」

「愁斗くんとお姉さんつて、もしかして仲悪い？」

「別に、この世界で一番いい姉だよ。僕はあのひとのこと好きだよ。さつきと言つてることがまるで違う。それにもう一つ、翔子には引かかる愁斗のある言い方があったがそのことには触れないことにした。」

ヤキソバを食べ終わり、ウーロン茶を飲み干した翔子はお腹を擦った。

「まだ、ちょっと足りない感じ。デザート食べたいな」

翔子は急に立ち上がり楽屋を出て行くこうとしている。

「私、クレープ買って来るね。愁斗くんのも適当に買って来る」
ボタンとドアが閉められた。

楽屋を出た翔子は食後の運動というわけではないが、走つてクレープを買いに向かっていた。愁斗のもとへ早く戻りたいのだ。

クレープを売っている二年三組はグラウンドに店がある。飲食関係の店のほとんどが外にある。

この学校は外靴のまま校内に入ることができるので、靴を履き替える手間もなく生徒は外と校内の出入りが楽にできる。

翔子は外に向かう途中の廊下である人物を発見した。

「……須藤くん？」

この時まですっかり忘れていた。翔子は公演前にも行方不明になっているはずの須藤を見ていた。

須藤は行方不明ということになっているが、そのことはまだ生徒の一部にしか知らされていない。

クレープのことなど忘れて翔子は須藤を追った。

「きゃっ！」

須藤のことばかりに気を取られていた翔子は何者かにぶつかってしまった。

また絡まれるのではないかと冷や冷やしながら翔子が顔を上げると、そこにいたのは森下先生であった。

「瀬名、前見て歩きなさい！」

「ごめんなさい、急いでたので」

「以後気をつけるようになさい」

「……そうだ、先生、須藤くん見ました」

「ああ、彼ね、そのことなら知ってるわ。今日突然学校に来たらしらなくて、担任の先生が直接須藤と話したらしいわ。でも……」

森下先生は今日に曇った表情をして口を止めた。

「あの、どうしたんですか？」

「実はね、ここだけの話なんだけど、様子が少し可笑しかったらしいのよね。話を聞いても虚ろな目をして首を動かして答えるだけ。

それで須藤のことはひとまず解放して、その担任の山本先生が自宅に連絡したらしんだけど、電話に出た母親は『ありがとございまして』ってひとこと言っただけで電話切っちゃったらしいのよね。それでね」

「ごめんなさい、急ぐんで」

この後も森下先生の話はだいたい続きそうだったので、翔子は森下先生に頭を下げて再び須藤のことを追いかけた。

須藤の姿はない。見失ってしまった。

近くに封鎖されている階段があった。今日は学校の二階までを使い、三階から上は立ち入り禁止になっている。

翔子は周りを確認して急いで上の階に駆け上がった。須藤が上にいるとは限らないが、もしかしたらという気持ちで翔子が階段を上ら

せたのだ。

三階まで上ったところで翔子は上の階を見上げた。

須藤がいた。須藤が翔子のことを踊り場から見下ろしている。その瞳は虚ろだ。

「須藤くん、あ、待って！」

須藤は翔子に背を向けて階段を上って行ってしまった。翔子は急いで追いかける。

四階に辿り着き、翔子はまた上の階を見た。やはり須藤が自分のことを見ている。追いかけて来いということなのか？

四階の上は屋上である。普段は鍵がかかっているはずで誰も入れない。

ドアを開け閉めする音が翔子の耳に届いた。

屋上に続くドアの前に立った翔子。この先に須藤がいるのは間違いない。

いろいろな不安を思いつつ、翔子はドアを開けた。

屋上は少し風が吹いている。そして、コンクリートの上に立つ二人の人物。翔子を抜かして二人だ。

「撫子！？」

翔子が見た二人組、それは須藤と撫子だった。

「ごめん翔子」

いきなり謝りだす撫子。その表情はいつもの撫子とは違った。

翔子はすぐに撫子たちのもとに駆け寄った。

「何で、どうして、撫子がいるの？ 須藤くんと……わからない、どうしていきなり謝るの？」

「ごめん翔子、翔子のごとは本当に親友だと思ってた。でもね、ここ遊びも今日でお終いなんだ」

翔子は気づかなかったかもしれないが、撫子は『にゃんだ』とは言わずに『なんだ』と言った。『な』を『にゃ』といつものように言わなかった。

「どうしたの撫子、何かいつもと違う。わからないけど、いつもと

違うよ」

「だから『ごっこ遊び』は終わりなの。そう、須藤クンにももう用ないね」

こう撫子が言い終わったとたん、須藤の身体がまるで糸を切られた人形のようにボタンと地面に崩れ落ちた。

「どうしたの須藤くん!？」

突然のことに驚く翔子であったが、撫子は驚く素振りも見せず、静かに言った。

「もうとつくに死んでたから、今からじゃどうにもならないよ」

「死んでた？ そんなはずないよ、さっきまで歩いてたもん」

翔子は須藤の首に触れた。肌が冷たく脈がない。

「えっ!？ 何で、何でなの!？」

取り乱しはじめた翔子。須藤は撫子の言うとおり死んでいた。だが、なぜ須藤は先ほどまで動いていたのか？

「翔子、須藤くんのはほつといてアタシの話聞いて」

「ほつとくってどうして？ 死んでるんだよ、誰か呼ばなきゃ!」

「いいからアタシの話聞いて!」

撫子が怒鳴ったことにより翔子は撫子の言葉に耳を傾けた。

「アタシね、さっきも言ったけど翔子のこと親友だと思ってるし、

大好きだったよ。でもね、そんな友人を裏切らなきゃいけないんだ」

「裏切るって、どうして？」

「もう、ひとりの方の命令でさ……。この学校に転校して来たのもあることをするためだったし、演劇部に入ったのもそうだった。でもね、演劇楽しかったし、翔子と友達になったのも楽しかったから、うれしかったよ翔子と友達になれて」

「わからないよ撫子の言ってること!」

撫子の瞳が少し潤んでいることに翔子は気づいた。それにもうひとつ、撫子の瞳がいつもと違う。いつもは茶色い瞳をしているのに、今は人間の瞳じゃない。

撫子の瞳はまるで猫の瞳のようだった。

「あ、それからアタシ、実は人間じゃないんだ」

「だから、さつきから何言ってるの！」

「ちゃんとした両親もいないし、ずっと研究所で育ったんだ。はじめてできた友達が翔子でね、友達ってこういうものなんだって思った。アタシさ、猫のDNAを埋め込まれた人間なんだよね……だから普通の人間とは言えないんだよ」

撫子が猫のDNAを埋め込まれた人間。撫子が言うのと冗談としか思えないが、彼女は普段決して見せることのない真剣な表情をしていた。

「わかんない、わかんない、わかんない！ 言うてことわかんないつて。私は撫子が猫だろうが宇宙人だろうが別にかまわない、ずっと親友だよ！」

「だから、ごめん裏切らなきゃいけない……ごめん翔子。友人裏切るなんて、まるであの劇でアタシが演じた役回りと同じになっちゃたね」

撫子の腕が素早く動くの確認したところで、翔子の意識はプツリと切れた。

地面に倒れる翔子の姿を見下ろしながら、撫子は何度も繰り返したある言葉を繰り返していた。

「ごめん、ごめん、ごめん……」

撫子の涙が翔子の制服を濡らした。

夢見る都（17）

楽屋で愁斗が翔子帰りを待っていると、突然ドアが開かれた。

部屋の中に入って来たのは翔子ではなかった。猫のきぐるみを着た誰かだ。

警戒心を抱く愁斗にきぐるみを着た何者かは、一通の手紙を手渡した。そして、何も言わず部屋を後にして行った。

手紙の内容を見た愁斗の表情が険しくなる。

「なるほど、人質か……」

鋭く尖った氷のような声。

「恐らく、これが私とあいつとの最終決戦だな」

すぐに外に出れば手紙を渡しに来た奴に追いつくかもしれない。

だが愁斗はそれをしなかった。きぐるみの人物を捕まえて話を聞いても無駄なことにはわかっている。

「本人ではなかった 傀儡だった」

愁斗はこの部屋に置いてあった自分のバッグを開けようとした。

このバッグにはご丁寧にも南京錠が付けてある。

南京錠を外し、バッグを開けた愁斗は、その中からあるモノを取り出した。

紫苑は町外れにある、いつかの廃工場に来ていた。

工場の入り口には制服姿のある人物が立っていた。そこで紫苑を出迎えたのは撫子だった。

「早かったね。何時間もここで待たされたらどーしよーかと思ってたところだよあ」

いつもどおりの明るい撫子に、紫苑は冷たい声で言った。

「やはり、貴様も組織の人間だったか」

この言葉に撫子はため息を洩らしながらうなずいた。

「やっぱりバシテたかあ。でもどうしてわかったの？」

「魔導の匂いがした」

紫苑の口調が冷たいのに対して、撫子はわざとらしく驚いて言った。

「さっすがは古の血を引く魔導士だねえ。でもさあ、じゃあどうしてアタシを殺さにやかったの？」

「貴様は私を観察し組織に報告をしていただけで、組織の直接的な動きはなかった。あいつが現れてからも同様。私は貴様らの様子を窺っていた。それに貴様は翔子の大切なひとだった」

そして、紫苑は断言した。

「だが、今ならば殺せる」

鋼の響きを聞いてしまった撫子は、これ以上ないため息をついて肩を落とした。紫苑は何があるかと自分を生かしてはくれないだろうと撫子は悟ったのだ。

「やっぱり、アタシ殺されちゃうんだあ。はあ、仕方ないね……翔子のこと裏切っちゃったし」

紫苑の手が動いた。

「……死して償え」

「ちよつと待った、タイムタイム。このゲームにはあいつの決めたルールがあるから、アタシと戦う前にちゃんと聞いて」

地面に力を失った糸が落ち、紫苑は動きを止めた。

「じゃあ話しまゝす。これはあいつのゲームで、この建物の中に入ったら外に出れにやくて、えゝとそんでもって、無理やり出ようとした時点で囚われの姫が殺されちゃうし、アナタが死んでも姫は殺される。それから、この中はこれを機に組織が野外で実験した異世界とかいうとこに直結してるの」

「なるほど、組織は異世界を創り出せる力を手に入れたのか」

「さあ、アタシはよく知らにやいけど、そうにやんじゃにやいの。

でね、アタシを倒して中に入ると、中では組織の実験サンプルやいろいろにやのがいるらしいの。で、最後はあいつを倒して囚われの姫を救出すればゲームクリアだつてさ。わかったあ？」

「組織は私たちを使って実験をするつもりか。おもしろい、最高の

データ組織にくれてやるう」

「はあ、じゃあアタシと勝負だね……爆裂憂鬱う」

うつむく撫子に容赦ない紫苑の妖系が繰り出される。シュツという音が撫子の耳元で聴こえた。撫子が後少し妖系に気がつくのが遅れていたら、殺られていた。

「反則だよ、卑怯者！ 不意打ちにやんて聞いてにやいよお〜」

シュツとまた空気を切る音が聴こえた。撫子は辛うじて妖系を避けた。

「実践に反則はない。目を離していると首が飛ぶぞ」

「か弱いプリティ撫子ちゃんに暴力を振るうにやんて、男として爆裂サイテー！」

速攻を決める撫子に紫苑の妖系が襲い掛かる。だが、その妖系は撫子の特別な爪によっていとも簡単に切断されてしまった。

撫子の鋭い爪が紫苑に振り下ろされた。

茶色いぼろ布が少しさかれたが紫苑は無傷だ。そして、紫苑は撫子の攻撃と同時に自らも攻撃を仕掛けていた。

妖系が撫子が着る制服の胸部を切り裂いた。

「爆エツチだぞ！ これ着てにやかったら胸が見えてた……じゃなくって、切り裂かれてたよお〜！」

裂かれた撫子の制服の下から黒いスーツが覗いていた。

「このスーツは組織が開発した、うあっ！」

妖系が撫子の横を掠めた。

「卑怯者！ アタシが説明してるんだから攻撃しにやいでよ」

「そんな説明いらん。私の目的は貴様を葬ることだけだ」

「そんなにやこと言わにやいで、説明聞いてちよ〜だいよ。アタシ緊張すると口が止まらにやくにやるんだよお〜」

撫子はしゃべりながら紫苑の妖系を軽やかな身のこなしで避けていた。

「あのね、このスーツは伸縮自在で爆裂丈夫にやんだよ。その妖系も完璧じゃにやいけど防げるって聞かされた」

「戦いに集中しないと首が飛ぶぞ」

妖系が撫子の首を掠り一筋の血が滲み出る。首を飛ばすまではいかなかったが、やられた本人は冷たい汗をかいていた。

「爆裂死ぬかと思っただあゝ」

撫子はほぼ全身に特殊スーツを着ている。肌を露出している部分は首から上と手首から先のみだ。つまり紫苑はそこを狙えばいい。

煌く妖系が乾いた地面を抉った。砕け散った地面の塊が砂埃とともに周囲に散乱し、細かい破片が撫子を襲う。

思わず撫子は腕を顔の前にやり、一瞬だが目をつぶってしまった。紫苑の目的はまさにそれだった。

目をつぶった一瞬の隙を愁斗は見逃さなかった。

唸る妖系が撫子の首を狙う。だが、撫子はすぐにそれに気が付き、アクロバティックなバク転を二度三度として後ろに下がった。

「マジで殺す気!？」

真剣な勝負で相手に『マジで殺す気!？』と聞く者はそうはいないだろう。

撫子は焦っていた。自分では紫苑に勝てないことを知っているのだ。だからおしゃべりをする事によって自分を落ち着かせ、それとともに紫苑の気を少しでも散らせようとしていた。

「プリティーボンバーでちょく爆裂力ワイイ撫子サマを殺したら、動物愛護団体に屠られるぞあゝ!」

紫苑は撫子の言葉など耳に入っていないようで、独り言を呟いた。

「魔導力が高まったようだ　これで使える」

妖系が煌きを放ち、宙に奇怪な魔方陣が描かれた。紫苑は召喚をする気だ。

駿足の撫子が地面を蹴り上げ高くジャンプした。そして、何と宙に描かれた魔方陣を自慢の爪で切り裂いてしまったではないか!?

「爆焦ったあゝ、召喚にやんてされたら爆マジで殺されるよ」

紫苑は腕を下ろし戦闘態勢を崩していた。魔方陣を破られたのはこれがはじめてだったのだ。

「まさか魔方阵が切り裂かれるとは……。なるほど、召喚を行う前に魔方阵を無効とすれば、召喚は破られるわけか、いい勉強になった」

「家庭教師が必要ににやったら撫子先生を呼んでねん」

呆然と立ち尽くしていた紫苑の右腕に鋭い爪が一撃を喰らわした。切り裂かれた腕には猫に引つ搔かれたようなそれよりも大きな傷ができていた。

「クリティカルヒット！ 撫子ちゃん会心の一撃で爆ハッピー」

挟られてしまった紫苑の右腕は重症であった。それに紫苑は左腕も怪我をしている。今までは右手で操る妖系で『無理やり』左腕を動かしていたが、その余裕もなくなった。

酷使する紫苑の右手が動いた。

煌く妖系が空間を裂いた。そう、紫苑は 闇 を呼ぶつもりなのだ。

空間の傷が唸り、蛇がシュウシュウと鳴くように空気を吸い込む。そして、大きな裂け目ができあがった。

闇 が慟哭する。耳を覆いたくなるほどに苦しく、何かか救いを求めている。

「行け！」

命じられた 闇 は泣きながら撫子に襲い掛かった。

「にゃ〜ん！ にゃにするのエッチ、巻きつかにゃいで！」

闇 は撫子の身体を舐め回すように絡みつき、腕を拘束し、脚を拘束し、這うようにして胸を拘束した。

「ヤダヤダヤダよお〜！ こんにちはのに呑み込まれるにやんで、爆美人女子中学生撫子ちゃん、愛に死す（最終回）」って感じい！」

闇 に身体を包まれ、顔だけが残った撫子の表情が急に真剣になった。

「翔子のことよろしくね。絶対救ってあげるんだよ……さらばにゃん」

悲しそうな声を最後に撫子は完全に 闇 に呑み込まれ、裂けた

空間に引きずられようとしていた。

「待て！」

紫苑が叫び、妖系が激しく煌いた。

闇の塊が剥げ落ち中から撫子が現れた。だが、撫子の身体の大部分はまだ闇に包まれている。

闇 激しく叫んだ。この時、信じられぬことが起きた。

撫子の身体を覆っていた闇が自らの意思で剥がれ落ち、愁斗に向かって触手を伸ばしたのだ。

唸る 闇は愁斗の左腕に絡みついた。

「傀儡師が闇に喰われては冗談にもならん」

紫苑は開かれている空間の裂け目を妖系によって縫合した。無理やり扉を閉めることによって、新たな闇が出て来るのを防いだ。

次はこの世に残った闇の処理だ。

「この魔導は自信がないが、やるしかあるまい」

妖系が煌き空間を裂いた。闇を再び呼ぶのか 否。

空間の傷がフルートのような音を発し、外に柔らかな光と空気を吹き出した。

光色の裂け目から笑い声が聴こえる。賛美歌が聴こえる。詩が聴こえる。息吹が聴こえる。どれも輝きに満ちている。

光が微笑んだ。次の瞬間 審判が下された。

純粹すぎる光が闇を優しく包み込み浄化させた。そして、光は歌を歌いながら還っていった。

「どうやら成功したようだ。私が光を呼び出し、浄化されずに済んだのは神の奇跡というやつか」

光を呼び出すことは紫苑にとって一か八かの賭けだった。もしかしたら、闇に近い紫苑自信が光に浄化されることもあり得たのだ。

横たわり気を失っている撫子を見ようとせせず、紫苑は廃工場の中へ入って行った。

夢見る都（18）

組織の創り出した異世界の中には、天を突く巨塔が立っていた。

「ゲームと言っていたが、RPGのつもりか？」

古ぼけた塔には蔓が生い茂り、辺りには霧が立ち込めている。亡霊でも出そうな雰囲気である。

遠くからは何かの鳴き声が聴こえてくる。そして、バイオリンの物悲しい曲がどこからか流れてくる。

肌寒い風が吹き、世界は淀んでいた。

紫苑の前には塔へ続く廊下の入り口が大きな口を開けている。その先は見通すことができない。

廊下の中は薄暗く、蝋燭の淡い光によって長い廊下が照らされていた。

廊下の先にある硬く閉ざされた扉　その左右には、今にも動き出しそうな甲冑が飾ってある。

ガタンと何かが動いたような音がした。その音には鋼の響きが混じっていた。

「なるほど『動き出しそう』ではなく、『動く』のか」

二体の甲冑が手に持ったハルベルトを振り上げて襲い掛かって来た。

ハルベルトとは長柄の一種で、長さ約三メートル・重さ約三キロ。槍状の頭部に斧のような形をした広い刃が付き、その反対側には小さな鉤状の突起が付いているという複雑な形状をした武器で、これひとつで切る・突く・引つ掛ける・鉤爪で叩くといった四種類の攻撃が可能だ。

ビュンと風を切り、広い刃が横に振られたのを紫苑は高く飛翔して避けた。だが、二体目の甲冑が紫苑を突こうとする。

紫苑の身体を突く筈のハルベルトが突如甲冑のグローブから擦り抜けた。妖系の成した業だ。

紫苑は地面に優美に着地し、それと同時に奪われたハルベルトの先端が一体目の甲冑を突いた。突かれた甲冑は音を立てて崩れ、ただの甲冑と化して床にパーツごとに四散してしまった。

操られているハルベルトが二体目の甲冑に襲い掛かる。と思いきや、宙に浮いていたハルベルトは地面に音を立てて落ち、紫苑は高い天井に妖糸を引つ掛けて上空に舞い上がった。

『一体目』の甲冑が紫苑を掴もうとしたが、大きく空を抱きしめた。上空に紫苑が舞い上がらなければ捕まれていたに違いない。

「生きていたのか……いや、この表現は正しくはないな。核を壊さなくてはいけないようだ」

音もなく妖糸を伝い下に降りた紫苑は呟いた。

「視えた」

妖系がうねうねと動き、二体の甲冑の内側に忍び込み何かを突いた。

突如動きを止めた甲冑。そして激しい音を立てながら床に崩れた。

上を見る紫苑。紫苑は上空を飛ぶ生物に目をやっていた。

天井には一匹の蝙蝠が飛んでいた。その口には何かを啜えている。蝙蝠は銀色に輝く何かを紫苑に向かって落とした。

落下して来た何かを手で掴み、手を広げてそれが何か紫苑は確認した。

「鍵か」

紫苑の手のひらの上にある物。それは銀色の鍵だった。

前方には甲冑が守っていた扉がある。どうやらあの甲冑を倒すことにそこにある扉の鍵が手に入る仕組みになっていたらしい。

扉の前に立ち、紫苑は鍵穴に先ほど手に入れた銀色の鍵を差し込んだ。鍵はぴつたりと合い、鍵の開く音が聴こえた。

自動ドアのように勝手に開かれたドアの先には大広間があり、上へと続く螺旋階段があった。どうやら塔の内部に入ったようだ。

大広間の中心には斧を構えた怪物が腰を据えて立っている。

怪物の全長は約三メートルで、手には身の丈よりの高い斧を持っている。鎧を着ているが顔は牡牛だ。そう、神話に出てくるミノタウロスに似ているかもしれない。

ミノタウロスとはギリシア神話に出てくる怪物の名で、上半身が牡牛で下半身が人間というのが一般的には通っているが、実際は少し違う。顔は人間であったが潰れていて怪物のようで、目は赤く、巨大な反った歯、頭からは二本の角を生やし、身体は短くて茶色い毛で覆われていると言うのがラビュリントスにいた怪物だ。

だが、紫苑の目の前にいるのは一般的に知られたミノタウロスのようで、顔はまさに牡牛である。

この生物が組織の実験により生み出されたことが紫苑にはすぐにはわかった。

魔導の世界では科学よりも早くキメラ生物の実験を行っていた。

キメラとはギリシア神話のキマイラ　ライオンの頭、ヤギの胸、へビの尾を有し、口から火を吐く獣が語源であり、二つ以上の異なる遺伝子型を有する生物体というのが一般的な説明で、突然変異や接ぎ木や肝移植などによって生じる。

だが、ここで言うキメラとはキマイラのような生物を人工的に創り出すことで、ここにいるミノタウロスもその一種だろう。

『組織』とは古の魔導士の知識を受け継ぐ者たちが組織したグループで、今は主に魔導と科学の融合を試みている。

ミノタウロスは雄叫びをあげた。紫苑を見てだいぶ興奮しているようだ。そのような暗示でもかけてあったのだろうか。

「さて、階段は見える場所にあるが、こいつを倒さねば上へは行けぬのか？」

思案をしている間に敵は目の前まで迫っていた。考えている必要もなかった。次の瞬間にはミノタウロスの首は中を舞っていた。

だが、紫苑はこう叫んだ。

「まだか！」

首のないミノタウロスは斧を力強く振りかぶった。

空気を切りながら襲い掛かって来る斧をジャンプして避けた紫苑は空中から妖系を放った。

妖系は鎧によって弾かれた。

地面に着地した紫苑はぼやいた。

「まったく困ったものだ、組織の作るものには私の妖系がことごとく通用しない」

ミノタウロスは今はなき頭以外の場所は鎧に包まれている。これでは紫苑には歯が立たない。

紫苑は螺旋階段に向けて疾走した。ミノタウロスは頭がないためか、少し動くのに戸惑っているように見える。

螺旋階段を上ろうとした紫苑であったが、何かを感じ立ち止まり、何も見えない空を手で叩いた。すると何か硬いものがあることがわかった。

「……壁か」

そこには見えない壁が立ち塞がっていた。やはりここにいる敵を倒さなければ上には行けないらしい。

だが、紫苑は妖系を見えない壁に向かって振るった。すると硝子でも砕けたような音がした。

上へ行こうとした紫苑であったが、どこからか聞こえるアナウンスを耳にして足を止めた。

「警告します、警告します、ゲームのルールを破った場合、囚われの姫は瞬時に殺されることとなります」 警告します、警告します

》

「……裏技はなしか」

紫苑の後ろからは、首のないミノタウロスが斧を振り回しながら走って来ていた。

妖系の効かぬ相手をどうやって倒すのか？ 敵は首を落とされても死なない怪物だ。

ここは召喚を使うしかないだろう。だが、今の紫苑には召喚は不可能だった。召喚はいつでも使える万能な魔導ではないのだ。

頭上に振り下ろされようとしている斧の柄を紫苑は切断した。斧刃が地面に落ちる。これで敵は武器を失ったことになる。

武器を失ったミノタウロスだが、武器がないわけではない。ミノタウロスの大きな拳は十分相手を殺傷できる武器だ。

振り子のように大きく振られる左右の拳はまるで鉄球のようで、一撃でも受けたら身体の骨が砕けるだろう。

敵の攻撃は簡単にかわすことができるが、紫苑の頭には名案が浮かばない。どうやったらこの怪物を倒せるのか？

妖系が動き出した。ミノタウロスがいる方向とはまるで違う方向へ妖系は伸びる。

ぐんぐん伸びた妖系はある物を掴んで猛スピードで戻って来た。

ガツンという音とともにミノタウロスの身体が前につんのめった。ミノタウロスの背中には折れた斧の刃が突き刺さっていた。

自分の妖系が効かぬとも、組織の開発した斧ならば組織の開発した鎧を貫けるのではないか 『目には目を刃には刃を』 旧約聖書の言葉だ。紫苑の予想は的中した。

斧は見事に鎧を貫き、内側の怪物を傷つけた。だが、喜ぶのはまだ早い。この怪物は首を落とされても死なない怪物だ。

ミノタウロスは背中に手を回して自ら斧を抜くと、その斧を紫苑に目掛けて激しく投げつけた。

斧は紫苑に避けられ地面を砕きながらホップした。

妖系が煌き、蛇のようにミノタウロスの身体に巻きつき拘束した。身動きが取れずに雄叫びをあげながら暴れ回るミノタウロスは、ついにはバランスを崩して床に大きな音を立てて倒れてしまった。

《ミノタウロスは戦闘不能と見なし、上の階へ行くことを許可します》

アナウンスの声が終了すると、ミノタウロスは突如地面に開かれた大穴の中へ落ちていってしまった。

螺旋階段を上りはじめた紫苑であったが、螺旋階段はまさに天まで続いていそうな長さがあり、上へはいつ着くとも知れない。

階段を轟かせながら何かが転がって来た。巨大な丸岩が上から転がって来る。

《階段を転がって来る岩を、螺旋階段の途中にある壁の隙間に入つてやり過ぎてください。岩を破壊して前に進もうとするとルール違反になります》

「手間のかかることをやらせるものだ」

人ひとりが入れるくらいの壁の隙間が紫苑の目に入った。岩は目の前まで迫っているのそこに入ってやり過ぎすしかない。

壁の隙間に入った紫苑の横を岩が通り過ぎて行つた。

螺旋階段に戻り再び走り出す紫苑の耳に岩が転がる音が届いた。

「一度ではないのか」

紫苑は仕方なくと行つた感じで壁の隙間に身体を滑り込ませた。

岩が横を通り過ぎて行くのを確認して、紫苑は全速力で階段を駆け上つた。次の岩が可能性は大いにあり得る。次が来る前に上へ行きたい。

天井が見えて来たところで壁の横から岩が出て来るのが見えた。

紫苑はこれが最後だと思ひ壁の隙間を探した。だが、壁の隙間は前方にはなかった。あつたのは後ろだ。

急いで来た道を戻り壁の隙間に入った。岩は紫苑の横を通過したが、紫苑は隙間から出なかった。

岩が出て来るタイミングに合わせてこの壁の隙間から出口までの距離を走るとなると、それは紫苑の全速力でギリギリの時間で通り抜けることが可能だった。まるでそう設定してあるようだ。

次の岩が壁の隙間を通過した瞬間に紫苑は全速力で走るとともに妖系を出口に伸ばした。

出口に引つ掛けられた妖系は、走る紫苑の身体を宙に浮かせて、走る速さの二倍以上のスピードで出口まで運んだ。

楽々と出口を抜けた紫苑は呟いた。

「念には念をだ。どうやらルールとやらには違反していなかったら
し」

出口の先は屋上ではなかったようだ。上に続く螺旋階段があり、一階と同じ構造になっている。

大広間に敵の姿はない。

《部屋の中央にあるサークルに入ってください。終了の合図前にサークルを出るとルール違反になります》

部屋の中央には直径一メートルの円が描かれていた。

紫苑がその中に入ると、前方の石畳の床が一枚宙に浮いた。

三〇センチ四方にカットされた厚さ五センチのブロック状の石が、ぐるぐると回転して紫苑に向かって来た。

妖系が煌きブロックを粉碎する。だが、紫苑は背中に打撃を受けて思わずサークル内から出そうになってしまった。

紫苑が辺りを見回すと、ブロックが四方を取り囲うように自分に向かって飛んで来ている。

妖系が躍り飛び、次々にブロックを粉碎していく。そして、紫苑は床を妖系で砕きはじめた。ブロックが宙に浮く前に破壊するつもりなのだ。

警告のアナウンスは流れなかった。

ブロックの破片が地面に散乱し、終了のアナウンスが入った。

《このテストを終了します》

やはりこの塔で紫苑に課せられることは、全て組織がデータを取るための実験というわけらしい。

紫苑は螺旋階段を駆け上った。今度は岩が転がって来ることはなかった。その代わりに上からは腐臭を辺りに撒き散らすゾンビ兵たちが下りて来た。

妖系が煌き、一瞬にしてゾンビたちは細切れにされた。

上に行くこうとする紫苑の足に切断されたゾンビの腕を掴みかかるうとしたが、紫苑によって蹴飛ばされ螺旋階段の下へと落ちて行った。

出口は近い。次こそ最上階か？

夢見る都（完）

塔の屋上は強風が吹き荒れ、その中で麗慈は形のいい唇をニヤリと崩しながら立っていた。

「思ったよりは早かったけど、それでも俺をイライラさせるだけの時間はなかったな。もう少しで人質を殺しちまうところだった」

麗慈の後ろには十字架に磔にされた翔子の姿があった。首が垂れ下がり、気を失っているらしいことが見て伺える。

「貴様のお遊びに付き合っついていられるほど私は暇ではないのでな、一気に形を付けてやるう」

妖系が煌き空に魔方陣を描いた。

「させるか！」

空に描かれた魔方陣に妖系を放つ麗慈。してやったりと歪んだ笑みを浮かべた麗慈だったか、紫苑の仮面の奥からこんな声が聴こえて来た。

「困だ」

「何だと!？」

二つ目の魔方陣がいつの間にか地面に描かれているではないか！石畳に描かれた紋様に深奥で、それが呻き声をあげた。

それの呻き声によって、地震が起きたように地面が激しく揺れ、石巨人がこの世に創り出された。

体長五メートルを超える石巨人の拳がブウオンと横殴りに振られた。

麗慈がしゃがみ込み攻撃をかわすと、石巨人はもう一方の拳で麗慈のことを叩き潰そうとした。

後ろに飛び退き敵の攻撃をかわした麗慈の視線の先には、粉々に砕かれ穴の開いた石の床があった。

「ククク、攻撃力は大したもんだがな、そんな亀みてえなのろまヤロウの攻撃なんて喰らわねえんだよ！」

「では、私の攻撃はどうだ」

前にいる石巨人に気を取られていた麗慈であったが、背後から迫る殺気に気がつきすぐさまそれをかわした。

妖系が麗慈の髪先を少し切断した。

「おまえの攻撃も簡単に避けられるぜ、ククク……。それに前に殺り合った時よか攻撃のスピードが落ちてるんじゃないか？」

「貴様を殺せればそれでいい」

「殺れるもんなら殺ってみな」

石巨人の身体が麗慈の妖系によって細切れにされ、バラバラと地面に落ちた。

天高く飛び退きながら麗慈は妖系を放った。紫苑の妖系がそれを切断する。

疾走する紫苑。麗慈の真後ろには霧に深い空が広がっている。足の踏み場がないということだ。

互いの妖系が煌き地面にはらりと舞い落ちた。

一瞬のうちに麗慈は紫苑の右手をしつかりと掴んでいた。紫苑の左手は動かない。紫苑の妖系は完全に封じられた。

「傀儡師が系を使えなきゃ、ただの人間だ」

紫苑の腕が大きく引つ張られ、遠心力によって宙に浮いた紫苑の身体は遙か底へと落ちていった。

塔の底に落とされては紫苑とて生きてはいないだろう。

つまらなそうな顔をする零慈の身体が少し振動した。

麗慈が振り向いたその先にはあの石巨人が立っていた。

「何でまだ生きてやがるんだ！」

横殴りに振られた石巨人の腕を妖系が切断した。だが、地面に落ちた腕は磁石が引き寄せられるようにもとの位置に戻ってしまった。

「クソっ、不死身かこのバカ巨人は！」

この石巨人には核があり、それを壊さなくては砂になろうとも復活する。

妖系の舞。鞭のようにしなり、槍のように突き、剣のように切り

裂く。

「クククククククク……ククク……」

嗤いながら麗慈は石巨人を細切れにしていく。

床に散乱する石の破片の中に麗慈は妖しく輝く石を見つけ出した。

「みつけた……ククク、手間取らせやがって」

「その言葉を返してやるう」

塔の下から舞い戻った紫苑は、そのまま天高く飛翔して麗慈の頭上向かって降下して来た。

「ククク、生きてたのか」

「外れた肩を戻すのに手間取った」

二人の間に閃光は走り、血潮が床を彩った。

斬られたのは麗慈だった。彼の右手首が地面に転がっている。

「クククククククク……この痛みは快感だな。ククク……俺の負けだ、さつさとヤツちやってくれよ」

麗慈は紫苑とは違い、右手からしか妖糸を出すことができない。つまり右手首を切断された麗慈は負けを認めるしかなかった。

床に座り込んだ麗慈を見下ろす紫苑。仮面の奥で紫苑は何を思っているのか？

「早くやれって言っただろ、待たせるなよ俺様を！」

「貴様は私にとってもはや無害だ。殺す価値もない」

「ククククク……俺に慈悲なんてかけやがって、後で後悔するぞ」
紫苑は何も言わず麗慈に背を向けて歩き出した。

礫にされている翔子の前に立った紫苑は、彼女を解放しようと腕に巻かれている縄に手をかけようとしたその時だった。

「……だ、誰あなた！？ えっ、ここ……？」

「名は紫苑だ、君を助けに来た」

仮面の奥で聞こえる声には優しさが含まれていた。

「私、どうして……、あそこに倒れてるの麗慈くん！？ あれ血なものしかして！？」

混乱する翔子は全く事情が呑み込めていなかった。それについて

言葉少なげに紫苑が説明をする。

「あいつが君を攫えと撫子に命じた。それ以上は何も聞くな……君はこれからもと生活に戻るのだから、私たちのことには関わらない方がいい」

紫苑は片方の手を解放して、もう片方の手に巻かれた縄を外そうとしていた時、翔子がこんなことを口にした。

「愁斗くんでしょ、愁斗くんだよねその声？」

「……………」

無言のまま紫苑の動きが止まった。

「愁斗くんに決まってる、私が愁斗くんと他人の声を聞き間違えるなんてないもん！」

「……………」

紫苑はやはり何も言わなかった。

「その仮面取って顔見せてよ！」

何も答えず紫苑が再び縄を解こうとした時、後ろから殺気を感じ、それと同時に翔子が叫んでいた。

「避けて！」

反射的に紫苑は避けた。だが、それが不幸を呼び、紫苑は悲劇を目の当たりにして動けなくなってしまった。

翔子の腹が剣で突き刺され、剣の切っ先は十字の礫台を貫いていた。

剣を持った男は人間ではなかった。タキシードで正装し、背中には巨大な蝙蝠の翼が生えていた。

剣を翔子の腹から抜いた男は笑った。その唇の間からは異常に尖った犬歯は妖しく覗いていた。

「申し訳ありません、後ろにいたレディーを刺してしまっただ」

「……………貴様」

全身を打ち振るえさせ、紫苑は憎しみのこもった声でそう呟いた。「貴様よくも……………」

「だから謝ったじゃありませんか。それにレディーひとりを刺され

たくらいでムキにならないでください。私はあなたに大切な研究施設を壊されたのですから、それに比べれば他愛もないことですよ」

「他愛ないだと……万死に値する、死して罪を償うがいい！」

凄まじいスピードで妖系が放たれた。が、しかし、妖系は剣に糸も簡単に断ち切られてしまった。

「こんな弱い相手に私の研究施設が壊されたとは、ああ嘆かわしい」

「まだまだ、貴様には地獄の苦しみを与えて殺さねば気が済まん」

「ほざくだけほざきなさい、悠久なる時を生きる高貴な貴族である私に殺され前に」

次々と妖系は剣に切断され、華麗なるまでの剣戯を前にして紫苑が一方的に押されている。

紫苑は圧倒的に不利であった。この数日の間に起きた戦いによって傷つき、耐え難い苦痛の中で戦っていた。

いつの間にか紫苑は妖系を出すほんの僅かな時間も与えられずに、相手の剣を避けるのに精一杯になっていた。

切っ先が紫苑の顔の横を突いた。

「避けてばかりでは、私は倒せませんよ」

「くっ」

仮面の奥で紫苑は唇を噛み締めた。

傀儡さえあれば少しはましな戦いができたかもしれないと紫苑は悔やんだ。

自らだけの力では負けると悟った時、紫苑の目に床で倒れている麗慈が映った。

麗慈に向かって走り出した紫苑を見て翼人はあざけ笑った。

「勝てないと悟って逃げる気ですか？」

紫苑は相手の言葉を無視して麗慈の横に跪き、床に転がっていた手首を拾い上げた。

床に寝そべっていた麗慈の目がゆっくりと開かれた。

「うるせえと思ったら誰かとやり合ってたんのかよ」

「縫合する」

麗慈の言葉など無視して紫苑は話を続ける。

「この手を傷口に押し付けている、縫合してやる」

何も言わずに麗慈は受け取った手首を切断面に付けた。すると紫苑が目にも留まらぬ速さで縫合手術をした。もちろん普通の縫合手術ではなく魔導による手術である。

「ククク……恩を売る気か……売られてやろうじゃねえか！」

麗慈の右腕を動き妖系を放った。

針と化し紫苑の顔を貫こうとする鋭い妖系。紫苑は避けなかった。

麗慈が不適に嗤う。

妖系は紫苑の顔を掠め、後ろにいた翼人の肩を貫いた。

肩を押さえ顔を歪ませる翼人。

「麗慈、貴様は組織を裏切る気か！」

「ククツ、俺は最初から組織になんて忠義なんて誓ってねえよ。俺はあいつらの使い捨ての駒だからな」

立ち上がった麗慈に紫苑は小さく耳打ちした。

「時間を稼げ、奴に地獄の苦しみを与える準備をする」

「ククク、それは楽しみだ」

今度は麗慈が翼人の相手をする。

「ククツ、ヴァンパイアが相手なら不足はないな 血祭りにあげ

て殺るぜ」

「下等な人間風情がよく言う。血祭りになるのは裏切り者の貴様だ！」

切っ先を麗慈に向けてヴァンパイアが突進して来た。

「天然記念物級の絶滅寸前ヤロウがよく言うな……ククツ」

「ほぜけ！」

向かって来る切っ先を辛うじて避けた感じの麗慈はすぐに妖系を放った。

相手との距離は三〇センチもなかったが、それでも妖系はかわされ、それどころか剣による猛襲を仕掛けて来た。

麗慈の妖系を放つスピードが遅い。それは仕方あるまい。魔導に

よって縫合されたとはいえ、完治したわけではないのだから。

妖系が煌きヴァンパイアの腕一本をどうにか切断することに成功した。

「クソっ、腕じゃ意味がねえ」

麗慈の言葉どおり、腕では意味がないのだ。ヴァンパイアはその格や力にもよるが、腕くらいならすぐに再生できる。

「残念でしたね、我ら夜の眷属の伝説はあなたもご存知でしょう？」
床に転がったヴァンパイアの腕は急速に干からびていき、塵と化してこの場に吹き荒れる強い風によって跡形もなく消えた。その代わりの腕がヴァンパイアの切断された傷から生えた。

「私の場合は他の仲間より再生能力が高い　科学の力というやつですね」

「首を刎ねられても再生するのか？」

「ええ、私の場合は、心臓を潰されない限りは不死身ですね。それからもうひとつ、十字架を嫌うというのは嘘ですよ、全てヴァンパイアの弱点がそれである筈がない。私は神など恐れていませんからね」

最近の通説では十字架はヴァンパイアには無効であるとするものが多い。十字架を恐れるヴァンパイアは、元々敬虔なキリスト教の信者だった者などがヴァンパイアになり神を裏切ったことなどに後めたさを感じるからだという。

「じゃあ、おまえのハートを貫いてやるぜ！」

麗慈の手から放たれた妖系が一直線にヴァンパイアの胸を貫いた。そこは心臓があるべき場所だ。しかし、このヴァンパイアはわざと喰らって見せたのだ。

「また残念でしたね、私の心臓は身体の中を動き回っているのです。このヴァンパイアは自分の心臓を自由に体中に動かすことができますのだ。」

顔をしかめた麗慈は次々と妖系を放つ。だが、ヴァンパイアは、もうわざと敵の攻撃を受けることはなかった。

再び剣による猛襲が麗慈に襲い掛かる。

「弱い、弱すぎる　他の研究所はこんな実験生物などを造って遊んでいるとしか思えませんね。こんなものを造るのなら、もっと私のところに資金を回して欲しいものです」

敵の猛襲に押され、麗慈は少しずつ後ろに後退していた。

「俺の力じゃ歯が立たねえ……ククク、このままじゃホントに殺られちゃうな」

後一步でも下げれば地面に落ちてしまふところまで麗慈は追い詰められていた。

「ククツ、少しは足しになるか」

「くっ!？」

ヴァンパイアが一瞬怯んだ。その後ろには撫子が鋭い爪を構えて立っていた。

「にやば〜ん！　みんなやピンチに登場プリティ撫子姫だよ〜ん」

ヴァンパイアの剣が撫子に向けて横に振られた。

「貴様も裏切る気か！」

「だってえ〜……にやんとにやくう？」

「余所見してんなよクソヤロウがっ！」

麗慈の妖系が放たれたが、ヴァンパイアはそれをあっさりと切断した。

「雑魚が二人になろうと私は倒せない。こつも組織の者が裏切り行為をするとは組織の掃改革が必要ですね、まずはこの二人を始末しましょう」

目にも留まらぬ速さで剣が振られ、麗慈は避けたつもりだったが胸を少し斬られた。そして、撫子の着ていた特殊スーツまでもが少し切られていた。

「爆裂危ない！　微かだけど肌まで斬られたあ。これ着てなかったら死んでたよお」

「黙ってヤレ撫子！」

「ほ〜いさ」

二人掛かりで戦っているというのにヴァンパイアに攻撃を喰らわすことができない。それどころかヴァンパイは表情ひとつ崩さずに息も切らせていない。汗をかき、息を切らせているのは麗慈と撫子の方だ。

「ククク……役立たずのクソ女が」

「いにやいよりはマシマシだよ！」

「俺の攻撃の邪魔になる」

「麗慈のばかぁ！」

怒りの矛先をヴァンパイアに向けて、撫子の爪がヴァンパイアの肉を剥ぎ取ること成功した。だが、それも空しい一撃でしかない。ヴァンパイアの傷はすぐに再生してしまった。

「戯れも終わりにしましょう。お死になさい二人とも！」

「ふざけんな、紫苑のクソはまだ終わんねえのか！」

遠くで名を呼ばれた紫苑は呟いた。

「……今ならば呼べる」

とてつもなく大きく奇怪な魔方陣が宙に描かれていた。

「傀儡師である私が成し得る最高の魔導　喰らわれるがいい！」

召喚は傀儡師の体調や精神状態と密接に関係しており、いつでも呼び出せるものではない。それにもうひとつ、周りの環境などの条件と呼び出すものの相性が合わなくてはいけない。

通常の傀儡師による召喚は　それを　呼び出すことから始まる。

巨大な魔方陣が呻き声をあげると、皆、その場に立ち尽くしてしまった。

呻き声は世にもおぞましくも美しく、この世のものではないことがすぐにわかる。

振動する。全てモノが振動する。

地面や空気や空間までもが振動する　いや、何かの圧倒的な力

に無意識に震えているのだ。

魔方陣の内から、悲鳴にも似た叫びが聴こえて来た。紫苑以外の全員が耳を反射的に塞いだ。

腐臭にも似た臭いが辺りに立ち込め、魔方阵の内から粘液に包まれたべとべとの触手が蜿蜒と伸びて来た。

巨大な眼が魔方阵の内から外を覗いた。その瞳を見てしまったヴァンパイアは心を打ち砕かれた。麗慈は本能的に目を伏せており、撫子はしゃがみ込み震えている。

だが、紫苑の呼び出したものは違う。

悲鳴があがり、魔方阵の内から血飛沫が雨のように地面に降り注ぎ、外に出ていた触手が内に強引に引き戻された。

力のある存在が呼ばれてもいないのに外に強引に出ようとして、その存在を大いなる力を持つものが内に引きずり込んだのだ。

魔方阵からはいったい何が出て来ようとしているのか？

紫苑は仮面の奥で唇を緩めた。

「魔方阵の内には無限の世界が存在し、それ という存在が棲んでいるのだ。私が召喚するものは それ の産物であり それ 自身ではない。そして、それ は固有名詞ではない。私の呼び出すそれは闇に属する存在だ」

紫苑の言葉に口を挟むものはいない。紫苑の言葉など誰の耳にも届いていないのだ。

「闇 と 光 は魔導士の属性であるとともに存在でもある。」

闇 と 光 は それ に仕えるものであり、管理者と言ってもいいだろう。闇 などは召喚されたものたちが自ら元の世界に還ら

ない時に強制的に還す役目を担っている。だが、こいつはどうかな

……？」

魔方阵が内から引き裂かれていく。何かが出ようとしている。

それ が呻き声をあげた。

紫苑は顔を下に向けた。麗慈も撫子も見していない。決して見てはいけないことを知ったのだ。

ヴァンパイアはすでに身を固まらせ、瞬きもできずにいる。そして、心臓も止まっているのだが、死ぬことができない。意識もすっかりとしていて恐怖に狂うこともできない。全ては それ のこの

世ならぬ魅了する力。

魔方陣は内から壊された。

それ の片手と思わしきものが外に出た。思われるというのは、人間やこの世の生物の手には似ても似つかぬものだからだ。おそらくその用途から手と思われる。

それ のもう片方の手が外に出て、外と内の間に指を引つ掛けて奇怪な音とともに空間を無理やりこじ開けた。

何かを破る音に似ているが、悲鳴にも叫びにも似ている。その音を形容する言葉がこの世にはない。

こじ開けられた空間から それ の一部が外に出たが、その部分が人間やほかの生物でいうどの部分に当たるのかわからない。頭かもしれないし、足かもしれない、もしかしたら、これが手だったのかもしれない。

ここが組織の創り出した異世界でなければ地球は滅びてしまっていただろう。それだけがはっきりしている事柄だ。

それ はヴァンパイアを確認した。そして、笑ったように思える。いや、泣いていたのかもしれないし、怒っているのかもしれない。

それ はヴァンパイアに向かって行き重なった。呑み込んだという表現が近いかもしれない。

それ が還っていく。全ては それ の気まぐれであったのかもしれない。

全ての事柄は意味のあるものかもしれないし、意味のないことが繋がって世界が成り立っているのかもしれない。

紫苑が顔を上げた。

世界は空虚に満ち溢れていた。

ゆっくりと歩き出した紫苑は礫にされている翔子の前に立った。

紫苑の手がそっと翔子の頬に触れた。とても冷たく身体中の体温が失われているのがわかる。だが、微かに息がある。

翔子がゆっくりと目を開けた。

「……スゴク、寒いよ……死ぬのかな……私」

紫苑は身に纏っていた茶色い布を取り、仮面のゆつくりと外した。

「死にはしない、決して君は死なない」

「やっぱり……愁斗くん……じゃん」

微笑んだ。死相を浮かべているのに、愁斗の顔を見て微笑んだ。

「僕は誰も失いたくない……もう、大切な人が死ぬのは嫌なんだ」

「……ごめん」

小さく呟き、静かに静かに息を引き取った。

「ふふ……君のことを守るって約束したのに……くははは……なぜだ……全て僕のせいなのか？」

震える手をゆつくりと上げ、紫苑は涙を流した。

頬にもう一度触った愁斗は礫にされていた翔子の身体を開放して、地面の上に優しく下ろした。

「……禁じられた契約を交わそう」

凍てついた床の上に横たわる翔子の横に跪く愁斗。

「これが正しいことなのか、それはわからない。けれど、あの時の僕にはできなかつたけど、今の僕にはできる」

愁斗の手が素早く動き妖系を放った。

翔子の胸に煌きが走り、鮮血が迸った。

開かれた胸の中へ手を入れて愁斗は、その中で何かをした。

造り変わる躰　翔子は愁斗の傀儡となろうとしている。

鋼の頬に紅が差していく。

永久に続く生命を与えられ、妖系によって胸の傷が縫合された。

そして、愁斗は翔子の胸の中心に契りを交わした証拠として印を残した。

まだ、深い眠りにについている傀儡を目覚めさせるため、愁斗は傀儡の柔らかな唇に自分の唇を重ね合わせた。

覚醒めはじめる。

愁斗が顔を離すと翔子のゆつくりと目が開けられた。

汚れの無い黒く澄んだ瞳の奥に愁斗の顔が映る。そこに映るすべて

ては許されるのだろうか？

「愁斗くん……？ まだ、私、死んでなかったのかな？」

この問いに愁斗はゆっくりと首を横に振った。

「いや、君死んだ。……そして、僕の傀儡になった」

「傀儡？」

「……ここを出てからゆっくりと話そう。空間が壊れる音がする」

空間が壊れる音など翔子の耳には聴こえなかった。それどころか世界は静寂に満ちている。

翔子を両腕で抱きかかえ、愁斗は立ち上がった。愁斗の左腕は妖糸によって強引に動かされている。愁斗は翔子のことをしっかりと抱きしめたかった。

この異世界は それ を呼び出したことにより狂いが生じていた。もうすぐ世界は硝子のように砕け散る。

愁斗は呆然と立ち尽くしている麗慈と、しゃがみ込んで頭を抱えながらまだ震えている撫子に声をかけた。

「おまえたちも早く外に出た方がいい」

「ククククククク……傀儡にされちゃったのか。いや、それよりもさっきのあれは何だ……ものスゴイ威圧感で俺を感じさせたのは？」

「真の傀儡師ではない貴様の知ることではない」

世界に輝が入った。誰にでもわかる崩壊がはじまった。

立ち上がるうとしない撫子を見て紫苑は呟いた。

「手が空いているのなら運んでやれ」

これを言われた麗慈は苦笑した。

廃工場の出口に戻ると撫子は地面に降ろされた。

翔子が地面にゆっくりと降ろされる途中で麗慈は愁斗に背を向けた。

「俺は組織が来る前にさっさと逃げるぜ」

愁斗は妖糸を麗慈の背中に振るったが、それはあっさりと切断さ

れた。麗慈入ってしまった。愁斗はそれ以上何もせずに麗慈を行かせた。

頭をぶるぶると震わせて正気を取り戻した撫子は、ポケットからケータイに似せて作ってある通信機を取り出してどこかに連絡した。「コード000は紫苑の暗殺に成功。愁斗の遺体は突如崩壊した異世界に閉じ込められて回収不能。麗慈は異世界から抜け出した後に逃亡 以上」

撫子は通信機のスイッチを切って愁斗と翔子の顔をなんとも言えない表情で見つめて言った。

「……今の罠かもよ。これからアタシはアナタたちを裏切るかもしれないにやいしい、アタシを殺すにやら今がチャンスかもねえ。うんじや、アタシはフツの学生さんに戻るから、さらばにゃくん！」
背を向けた撫子に妖系を振るおうとした愁斗。だが、それを翔子が止めた。

「まだ、私たち親友だから……手を出さないで、お願い」
ゆっくりと手を下げた愁斗は翔子を見つめた。

愁斗に笑いかける翔子。そして、愁斗も笑った。

夢見る都（完）

未完成の城（1）

星稜大学付属・中等部は明日から冬休みを向かえ、生徒たちは心が浮き浮きして、じつと腰を落ち着けていることができなっていた。二年二組の教室ではホームルームが行われていて、生徒たちが席に座って教師の話を聞いている中、涼宮撫子だけが椅子から腰を浮かせていつでも駆け出せる準備をしていた。

中野洋介先生は生徒たちが自分の話を上の空で聞いていることに苦笑した。

「みんなさあ、明日から冬休みで浮かれているのはわかるけどさ、私の話聞いてくれないかな？」

中野先生は若い先生で生徒には好かれている方だが、それとともに少々なめられてもいた。

「いや、だからさ」

「さつさと終わらせるよー」

中野先生は何か言おうとしていたが、男子生徒のバッシングにより口を止めて、言いたかった内容を言えずに他のことを言った。

「じゃあ、みんな、また来年。はい、終わりにします」

「起立、気をつけ、礼」

事務的な挨拶が終わり、生徒たちが帰りはじめた。

瀬名翔子が秋葉愁斗にかけようとした瞬間、二人の間を遮るように素早い身のこなしで何者かが現れた。

「翔子、愁斗くんビミョーに借りま〜す！」

二人の間に割って入って来たのは撫子だった。

撫子は愁斗の腕を掴むと強引にどこかに連れ去ってしまい、それを見て翔子は口をポカンと空けてしまった。

強引に腕を引っ張られる愁斗は嫌がるでもなく、無表情な顔をして撫子に合わせて走っている。自分がどこに連れて行かれようと愁斗にはどうでもいいことだった。

二人は廊下を駆け抜け、階段を駆け上がり、屋上に通じるドアの前まで来た。

撫子はドアノブに手をかけて、はっとした顔をして叫んだ。

「うっそ〜、爆マジ!? 何で開いてなかったりしちゃってるわけえ〜?」

どうやら撫子は屋上に行こうとしていたらしいのだが、屋上に通じるドアの鍵が開いていなかったらしい。

うんざりした表情をわざと撫子に見せ付けた愁斗は、掴まれていた腕を丁重に外して、撫子をドアの前から退かした。

愁斗の手から妖系が伸び、鍵口の中に潜り込んで行った。そして、ガチャという音が聞こえた。鍵は愁斗の放った妖系によって開けられたのだ。

ドアを開けた愁斗はさっさと屋上に出て行ってしまい、撫子が慌てて追いかけた。

屋上は少し肌寒かった。

撫子はぶるぶるっと身体を振るわせた。

「烈寒いよお」

「寒いんだつたら僕のことを何で屋上に連れて来た?」

「だってさあ〜、雰囲気ってあるじゃん?」

「何の雰囲気?」

撫子は急に腕組みをして考え込んでしまった。適当な発言が仇となった。つまり撫子は答えを用意してなかった。

「とにかく、大事にや話と言ったら屋上。愛の告白と言ったら校舎裏って、決まっているようにや決まっていにやいようにや」

「なるほど、それで僕の大事な話って?」

「マジカル!? どうしてアタシが愁斗に大事にや話があるってわかったねえ〜。もしかしてエスパー愁斗?」

「……答えは自分で考える」

「てゆーか最近、愁斗くんアタシに対してドライだよな。口調が冷たいし、口調が冷たいし、口調が冷たいし、みたいな」

確かに撫子の言うとおり、愁斗の撫子に対する態度は前に比べて冷たくなった。冷たくなったというよりは、素を見せるようになってしまった方が正しいかもしれない。

「撫子の口調は最近拍車をかけて変になってる」

「うっそ、爆マジ？ ナイナイだよ、前と少しも変わらにゃいよお」

撫子は撫子語という特殊言語を操り、その言語は常に進化している。そして、実は普通の言語でしゃべることもできる。

ため息をついた愁斗は屋上を出て行こうと歩き出した。

「もう行く、きつと瀬名さんが待ってるから」

「待つてよ、大事にや話がるんだって！」

愁斗の足が止まった。だが、撫子に背を向けたままだ。

「できれば手短かに」

「組織についての話があるの」

撫子の口調が急に大人びて、真剣ものへと変わった。そして、『組織』という単語を聞いた愁斗の顔つきは険しいものへと変化した。

急に振り向いた愁斗は撫子に詰め寄った。

「早く続きを言え」

その言葉は冷たく、撫子の背筋を凍らせた。

「組織にウソがバレた」

「なんだと！？ それはどういうことだ！」

愁斗は今にも撫子に飛び掛かりそうな勢いだった。

「紫苑が死んでないことがバレた、というかバレてみたいなの。

組織は紫苑が生きているのを知っていてわざと見逃している。アタシはその監視役にまたなっちゃって……ごめん、ホントごめんね、だって組織を裏切ったらアタシが殺されるから」

「私がおまえを殺すというのは考慮に入れてなかったのか？」

撫子は愁斗の声を聞いて震え上がってしまった。

「だ、だから、話をとりあえず最後まで聞いてよ。組織は紫苑に替わるものを見つけたから、今のところは紫苑を必要としないの。

それで、今は紫苑を自由に泳がせてデータを取っているだけ。紫苑が組織に危害を加えない限り、組織も紫苑に危害を加えない」

「なるほど、保護観察というわけか」

「ホントにごめん。アタシ翔子や愁斗クンのこと裏切るつもりなんてないの。アタシの立場ってやつも理解してよ」

「立場など私は知らない。私がおまえを殺さないのは翔子が悲しむからだ、だがな」

愁斗の手から放たれた焔きを撫子は辛うじて避けた。

シュツという音が撫子の耳元でした。

「爆殺されると思ったよお!？」

「殺すつもりだ」

「ちよつとタイム! アタシを殺すつてことは組織に危害を加えるつてことにやるんだよ」

「そのつもりだ」

「最近愁斗クン、感情的ににやつたよね。冷静な判断ができてにやいよ。愁斗クンだけだったらいけど、翔子も他のみんなにやにも、愁斗クンの周りにいるみんなにやに危害が及ぶかもしれないにやいんだよ。だから、組織に危害を加えないで!」

撫子の首元に迫っていた妖系が愁斗の手に引き戻された。

「仕方あるまい 約束しよう。だが、組織の系が掴めない……なぜ?」

二人が先ほどから言っている組織とは、古の魔導士の知識を受け継ぐ者たちが組織したグループで、今は主に魔導と科学の融合を試みている。その素性はなぞに包まれており、愁斗その組織から逃げ出した経緯を持っている。

「なぜ組織は僕を泳がせているのか……不自然な行動だ。それに僕に替わるものというのは……。撫子、知っていることがあるのなら教えてくれないか?」

「はぶつ! 知ってても言えるわけにやいじゃん。それにアタシは下っ端だから本当に何も聞かされてにやいんだよねえ」

「……そうか」

愁斗は屋上を出ようとしたが、何かに気づき足を止めた。そして、撫子は何かを見て後ろに大きく後退りをした。

後ろを振り返った愁斗の視線に入ってきたものは、黒いコート来た長い黒髪を持った男で、赤く丸いサングラスをしている。そして、その男の肩には鴉が止まっていた。異様な雰囲気醸し出している男だ。

「はじめまして愁斗くん、わたくしは影山彪彦　現代の魔導士です」

「組織の人間だな」

「ええ、そうです」

彪彦の口元が上り上がった。相手の言葉を受けて、愁斗の手から妖系が放たれそうになったが、先ほどの約束があるので手はゆっくりと下ろされた。

「僕に何か用？」

「いいえ、近くに用事がありましたので、あなたがどんな人物かこの目で確かめたかったです」

この影山彪彦はこの辺りで最近起きている怪事件の調査のために組織から派遣されて来たのだった。だが、愁斗にしてみれば自分を始末しに来た刺客と思えた。

「僕に直接用があるわけじゃないんだな、ならいい」

愁斗は彪彦に背を向けて屋上を出ようとした。聞きたいことは山ほどあるが、今の愁斗には守りたいひとがいる。そのひとに危害が及ぶのはどうしても避けたい。

「お待ちなさい、愁斗くん」

彪彦は愁斗を呼び止めた。

「わたくしに聞きたいことはないのですか？　失礼ながら、そこにいる子との会話を最初から聞いていたものでして、なぜ組織があなたを泳がしているのかでしたよね？」

会話を最初から聞かれていた。そのことに愁斗は衝撃を受けた。

相手の気配を全く感知できなかったのだ。

何も言わずに屋上を出て行こうともしない愁斗を見て、彪彦は話を続けた。

「組織は麗慈くんのことを必死になって探していましたが、組織のトップが代わったりといろいろありましてね。愁斗くんを泳がせるように命じたのは新しくトップに成られた方の命令でしてね、最近の組織は丸くなったものですよ」

愁斗はこの話を背中であら聞き、何も言わないまま屋上を出て行った。残された彪彦はずれたサングラスを直して、後ろにいた撫子の方を振り向いて口元をつい上げた。

身体全体がゾワゾワとした撫子は大きく後退りをして身構えた。

「用が済んだんにやら早く帰ってよお〜！」

「あなたは今までどおり愁斗くんと仲良くしていなさい、というのが組織の命令です。では、またいつかお会いいたしましょう」

「会いたくにはいいよ〜ん」

撫子があっかんべーをしたのを見た彪彦は風のように走り、屋上を囲んでいる高いフェンスをひと飛びに越えて下に落ちて行った。

今日は終業式がメインだったので学校は午前中に終わった。太陽はまだ一番上まで昇りきっていない。

撫子は軽やかにフェンスに登り腰を掛けると、遠くの町並みを眺めた。ここからでは活気に溢れているのかいないのかわからない。絵に描いた町を覗いているようだ。

撫子は目をつぶり、息をゆっくりと吐いた。

二年次の二学期に撫子はこの学校に転校して来た。転校の理由は組織を逃げ出した紫苑が学校に潜伏しているかどうかを調査するため。正確には愁斗が紫苑であることを確認するために組織から派遣されて来た。

撫子はその後、愁斗と同じ部活に入部して翔子と友達になった。それは撫子にとってはじめての友達であった。組織の実験生物として育てられた撫子には、それまで友達と呼べる存在がいなかったの

だ。

そして、撫子はその友達を裏切った。だが、撫子は裏切り切れなかった。

「もうすぐクリスマスかあ、翔子と愁斗クンの仲は進展してるのかにゃ〜?」

想いに耽る撫子の眼前に黒い影が現れた。その影は影山彪彦であった。

「わっ!?! にゃ、にゃに?」

撫子は身体を滑らせて地面に落下しそうになってしまった。

右手を高く掲げて舞い上がって来た彪彦の右手首には黒い翼が生えていた。この翼は彪彦の肩に止まっていた鴉が変化したものだ。

「申し訳ありません、驚かせてしまつて。言い忘れていたことがあります。わたくしが調査している事件の調査をあなたにも手伝ってもらわねばならなかつたのです」

そう言えば、彪彦は先ほどの話で怪事件の調査に来たと言っていた。

撫子はあからさまに嫌な顔をして相手の態度を伺うが、サンングラスの奥の瞳は何を思っているのかわからない。

「調査つてにゃにすればいいの?」

「そんな嫌な顔しても駄目ですよ。あなたには拒否権はありませんからね」

もつと嫌な顔をする撫子だが、これが彼女にとって最大の抵抗だ。彼女は組織に直接牙を向けて逆らうことはできなかつた。

「それでアタシはにゃにすればいいんですかあ〜?」

「ネバーランドとその世界を創り出す能力を持った子供たちの調査をしていただきたい」

「ネバーランドって?」

撫子はその名をはじめて耳にした。

「有名な架空の国の名前ですよ。いくら組織に飼われていたからとはいえ、このくらい的一般知識ぐらいは覚えておいてください」

「はあ〜い」

彪彦は話を続けた。

「この世界で最も有名なネバーランドは童話ピーターパンに出て来るもので、簡単に説明するといつまでも子供の姿でいられる国のことですね」

「そのネバーランドがどうしたの？」

「我々の組織が大規模な実験によってしか創れない異世界を創れる子供がいるそうなのです。その子供が創った世界のことを誰が呼びはじめたのかネバーランドと呼びます。あなたにはその調査をしてもらいます」

過去に一度だけ撫子は異世界を訪れたことがあった。その異世界はこの世界と何も変わらず、そこが異世界だと言われても信じられないくらいだった。

彪彦の腕に付いた黒い翼が大きく羽ばたいた。

「では、失礼します」

「あ、ちよつと待って、情報は!？」

「あとは、ご自分で調査なさい」

ずれたサングラスを直した彪彦は地面にゆっくりと降下して行き、姿を暗ませてしまった。

「爆裂めんどくさいにゃ〜」

フェンスから降りた撫子は頭の後ろに腕を回しながら屋上を出て行った。

未完成の城（2）

愁斗が学校の正門を抜けて少し歩いたところで、笑顔の翔子が待っていた。

「愁斗くん、一緒に帰ろう」

「うん、そうだね」

二人は付き合いはじめて一ヶ月以上の月日が流れるが、一応周りの人たちには秘密になっていて、そのことを知っているのは愁斗と翔子の所属する演劇部の先輩二人と撫子だけである。だが、最近は学校で一番カツコイイと言われている愁斗が翔子と付き合い合っているという噂が蔓延しはじめて、隠すに隠せない状況になって来ていた。明日から学校が冬休みを向かえることで、翔子は愁斗と長い時間一緒にいられることを楽しみにしていた。

二人はアーケード街に差し掛かった。もうすぐクリスマスということもあり、そこら中がクリスマスの色に染まり、どこからかクリスマスソングが流れて来る。

「ねえ、愁斗くん？」

翔子は愁斗の顔を覗き込んだ。だが、愁斗は全く気がつかないよううで、遠くの何かを見つめていた。

「ねえ、愁斗くん？」

もう一度翔子が呼びかけると、愁斗ははっとした表情をして振り向いた。

「あ、ごめん、なに？」

「なに見てたの？」

「いや、別に、ちょっとぼーっとしてただけだよ」

これは嘘だった。愁斗は遠くを歩いてきた少年を見ていた。その少年から愁斗は只ならぬ魔導の力を感じたのだ。

少年の年は愁斗よりも年下で、小学校高学年くらいに見えた。その少年も愁斗に気がついたようで、愁斗と目が合った時に笑った。

そして、姿を消した。

愁斗の目に焼きついてしまった少年の笑顔はとても不気味だった。妙に大人びている妖艶な笑い。魔導の力を持ったものは人間ならぬ妖艶な魅力を纏うことが多い。

「愁斗くん？」

「あ、ごめん、またちよつとぼーっとしてた」

あの少年はいったい何者だったのだろうか？　それが愁斗の頭を離れない。

物思いに耽っている愁斗の横顔を見て、翔子は少し顔を膨らませた。

「愁斗くん、もしかして私といるの退屈なの？」

「えっ！？　そんなことないって、瀬名さんといると心が落ち着くから、何ていうか安心して気を抜いちゃうんだよ」

「ホントかなあ〜」

疑いの目で翔子は愁斗の顔を覗き込んだ。これに愁斗は弁解を続ける。

「本当だよ、僕は瀬名さんのこと好きだから、世界で一番大切なひとといると安心するんだよ」

好きという愁斗の言葉は翔子にとって一撃必殺を喰らってしまったようなもので、その言葉を言われると嬉しくなって全てを許してしまう。

「こんなところで恥ずかしいからやめてよお〜」

そう言いながらも翔子は顔を桜色に染めて満面の笑みを浮かべていた。

翔子は愁斗の制服の袖をぎゅっと摘まんでモジモジしながら彼の顔を見上げた。

「あのね、明日から学校ないでしょ？」

「うん」

「でね、うちの両親も今日から一週間、海外に旅行に出かけちゃって、家に私しかいないんだよね」

「ふん」

愁斗は気のない返事をした。別に悪気があったわけではないが、翔子には悪い印象を与えてしまった。

「もういいよ、やっぱいいい！」

「何でいきなり怒り出すの？」

愁斗には翔子が突然に怒り出した理由がわからなかった。

不思議な顔をしている愁斗を置き去りにして、翔子は早足でどんどん前に歩いて行ってしまった。だが、翔子の足は何かによって強引に止められてしまった。

翔子の足を止めたのは愁斗の妖系であった。そのことにすぐに気づいた翔子は無言で怒った顔をしている。

「どうして怒ってるの？」

「こういう時に魔法使うのズルイ」

翔子は愁斗の操る妖系を魔法と認識している。間違っではないが、正確には魔導士と呼ばれる者たちを細分化した中の傀儡師が使う魔導だ。

少し早足で翔子のもとへ行った愁斗は以前、不思議な顔をしている。

「だって、先行っちゃうからさ」

「怒ってたんだから、当たり前でしょ？」

「だから、何で怒ってるのわからないって。もしかして、僕のせい？」

「そうだよ、『ふん』とか言ってる気のない返事するから」

相手のものまねをした翔子はすぐにそっぽを向いてしまった。愁斗にしてみれば、何でそんなことで怒っているのか理解できない。

「そんなこと？」

「そんなことじゃないよ」

そういうものなのかと愁斗は強引に理解するしかなかった。

今のままで怒っていたはずの翔子が急に機嫌を直して遠くを指差した。

「あれって部長と麻那先輩じゃない？」

部長とは演劇部の『元』部長のことで、今は引退した中山隼人のことだ。現演劇部の部長は翔子が引き継いだ。翔子は今までの癖で隼人のことを今でも部長と呼んでいる。

愁斗も二人を確認した。

「本当だ、久しぶりに二人を見た。声かけようか？」

「ダメだよ、何か邪魔しちゃいけないオーラ出てるじゃん」

「どこに？」

オーラというと愁斗は魔導士たちなどが発する特別な気のことだと認識しているので、自分にその気が見えないことを不思議に思った。だが、すぐに愁斗は自分の考えが間違っていることに気がついて言葉を訂正した。

「どうして邪魔しちゃいけないの？」

「何かいい雰囲気で、もしかしたらあの二人付き合ってるのかな？」

翔子に首を傾げて顔を覗かれた愁斗も首を傾げた。

「さあ、どうなんだろうね？」

「いや、絶対あの二人付き合ってるよ。でも、いつからなんだろう」

断言する翔子であるが根拠は特になく、今見た感じでそう断言した。

もともと翔子は麻那が隼人のことを好きなんじゃないかな、と漠然として思っていたのだが、一〇月に行われた星稜中学の学校祭で演劇部が公演の練習をしている時、翔子は麻那を見ていて、『絶対麻那先輩は部長のことが好きだ』と確信していた。

隼人と麻那の姿が見えなくなったところで愁斗はこう言った。

「気になるなら追いかけて行って直接聞いてみたら？」

「何で愁斗くんってそういうデリカシーのないこと平気で言うかなあ。デートの邪魔されたら、麻那先輩スゴイキれるよ」

「でもさ、別にデートしてるって決まったわけじゃないし」

「いいの、行きましよう」

とつくに愁斗の妖系から解放されている翔子は、またさっさと歩

き出してしまった。

再び一緒に歩き出した愁斗と翔子。だが、愁斗がすぐに足を止めて後ろを振り返った。翔子もそれにつられて後ろを振り向く。

二人が振り向いた先にいたのは影山彪彦だった。もちろん翔子知らない。

「知り合い？」

「いや、他人だ」

冷たく言い放つ愁斗に彪彦は口元をつり上げて見せた。

「わたくしは愁斗くんとは知り合いですよ、一応」

「僕たちのことを付けていたのか？」

愁斗の横顔を見る翔子は恐怖を感じた。愁斗は時折、冷たく無表情な顔をすることがある。翔子はその愁斗の顔が怖かった。

異様な雰囲気と見た目の彪彦だが、ここを行き交う人々の目を惹くことはない。なぜなら、彪彦は魔導の力で人々の死角に入っているからだ。彪彦の姿が見えているのは愁斗と翔子だけだ。

「付けるなんてとんでもありません。たまたまある人物を追って来たら、あなたの姿を発見しただけです」

「だったら、さっさと行け」

「それがですね、見失ってしまつて」

愁斗は遠くを指差した。

「あつちだ」

先ほど愁斗が見た少年が消えた方向だ。恐らく彪彦の追っている人物はあの少年だろうと愁斗は思った。

彪彦は愁斗の短い言葉を瞬時に理解した。

「情報提供ありがとうございます。では、わたくしは」

風のように去って行く彪彦の後姿を見ながら翔子は愁斗に尋ねる。

「今の人誰だったの？」

「他人だ」

あまりにも愁斗が冷たく言うので、翔子はそれ以上聞くことができなかつた。

未完成の城（3）

まだ付き合っているというわけではないが、麻那は隼人と一緒に歩いていると嬉しい気分になる。

この二人は幼馴染という関係であったが、今の関係は実に微妙な関係だ。

麻那は隼人ことをずっと好きだったのだが、隼人がそのことに気がついたのはつい最近のことだった。それも麻那に突然キスをされて気づいた。

「ねえ隼人、もうすぐクリスマスじゃない？ ヒマよね？」

「ヒマじゃないよ」

麻那は絶句した。いきなり会話が打ち切られるとは思ってもみなかった。彼女の計画では、隼人がクリスマスはヒマであるというところを前提に考えられていた。

「ねえ、ヒマでしょ!？」

「だからヒマじゃないって」

「ヒマなんでしょ!？」

強引にヒマと相手に言わせようとしている。だが、ヒマでもないのにヒマとは言えるわけがない。

「ヒマじゃないって言うてるでしょ？」

「もう、いいからヒマって言いなさいよ」

仕舞いには逆ギレをする麻那。隼人はいつものことだと軽くあしらう。

「あのね、何で麻那はいつもそう強引に自分の意見を人にぶつけるの？ 僕だけにだったらいいけど、他の人にそういう態度で接するといつか見放されるよ」

そんなことは麻那にもわかっている。最近は何でも直した方なのだ。だが、昔からそういう性格だったのですぐに直せるわけではない。

「これでも性格直そうと努力してるんだから、余計なお世話よ。で、ヒマなんでしょ？」

「はあ!？」

直そうと努力していると言った次の言葉は『ヒマなんでしょ?』。隼人は直らないと確信した。

啞然とする隼人のことなどお構いなしに麻那はまだ言い続ける。

「ねえ、ヒマでしょ? イヴでいいのイヴで、クリスマス・イヴ!」
「だから、あのね、イヴがヒマじゃないから」

「どうしてヒマじゃないのよ! あたしとデートするより大事な用事があるわけ?」

「デート? そんな約束してないよ」

「……あっ」

顔を赤くした麻那は隼人の顔がまともに見られなくなり、顔を伏せてしまった。

「もしかして、僕とデートしたかったの?」

「……」

何も答えずうつむいたままの麻那。口を滑らせてしまった自分の失態を悔やんでも悔やみきれない。恥ずかしくて、もう隼人の顔を見ることができない。

「麻那、顔上げて」

隼人が優しく言葉をかけるが、麻那は首を横に振った。

「嫌よ」

「はあ、いいよ別に、ヒマだよ」

「ほ、ほんと!？」

満面の笑みを浮かべて顔を上げた麻那に隼人は優しく微笑んだ。
「本当だよ、突然ヒマになっちゃったんだ。だから二人でどこかに出かけよう」

心の中でガッツポーズを決めた麻那はバッグの中から二枚のチケットを出して見せた。

「このチケット新しくできるテーマパークのフリーパスなんだけど、

ちょうど二人分あるのよねえ」

あからさまな麻那の行動を見て、鈍感な隼人でもすぐに理解した。「そこに行きたいってことね。ところで、そのチケットどうしたの？」

「今日たまたま森下先生から貰っちゃったのよ」

森下先生とは演劇部の顧問である。

「ふうん、あの先生が只で譲ってくれたの？」

「うん、彼氏と別れたから必要なくなっただったって」

「ああ、なるほど」

今日、学校で麻那が廊下を歩いていると、ケータイで彼氏と別れ話をしている森下麗子先生がいて、突然ケータイを切ってポケットに入っていたチケットを投げ捨てるように麻那にくれたのだ。

麻那はチケットに書かれている文字を指差して隼人に説明した。

「ほら、ここに書いてあるでしょ？ このチケット、ダイナー付きなんだよ」

「ダイナー？ 僕ら中学生なのにダイナーはないと思うよ。その日きつとカップルとか周りにすぐいるんじゃないかな？」

「カ、カップル！？」

この二人はまだ一応付き合っているわけではないので、麻那はカップルという言葉に異常に反応してしまった。そんなところで隼人と一緒に食事をしたら、カップルに間違えられるのではないかと思っただけだ。

自分でデートを半ば強引に誘ってにおいて麻那は慌て出した。

「違うわよ、デートじゃないから、ちよつとイヴに二人で遊びに行くだだけ、ダイナーなんて別にいいの、テーマパークの外に出てからファーストフード店に入って……違うの、違うから！」

「そうだね、二人でちよつと遊びに行くだだけだよね」

「こつあつさりつ『遊びに行くだけ』と言われると、それはそれでちよつと寂しい気分になる。」

「と、とにかく、イヴは予定を空けて置きなさいよ」

「うん、わかつたから麻那はチケットなくさないようにね」

「な、なくすわけないでしょ!？」

まだ少し麻那は取り乱している。

二人はアーケード街の中に入った。ここを通るのが家への近道なのだ。

アーケード街にはゲームセンターやファーストフード店があるので、この辺りの学生たちの溜まり場になっている。特に星稜大学付属・中等部・高等部の制服が目につく。

「まだ、ちよつと早いけど、そこで食べていく?」

隼人は目の前にあるファーストフード店を見て言った。「W」が目印の極悪なマスコットがいるワルドナルドだ。

店内に入ったところで隼人は麻那にこんなことを言った。

「今さ、翔子さんと愁斗くんがいたんだけど、声かけるべきだったかな?」

「駄目よ、二人の邪魔したら翔子がキレるわ」

「そうかな?」

「そうよ」

注文を済ませた二人は店内で食べることにした。この店は二階と地下が客席になっていて、地下は全席禁煙になっている。二人は迷わず地下に行った。

地下は異様なまでに静かで客が一人しかいなかった。それも少年がひとりしかいなかった。大抵は数人の客がいるのだが、珍しいこともあるのだ。

ジュースを飲んでいた少年と麻那の目が合った。そして、少年はこんなことを言った。

「可笑しいな、誰も入れないはずなのに?」

その口調は見た目に似合わず大人びていて、少し異様な感じがした。

麻那と隼人は自然と少年と離れた席に座った。すると、少年がわざわざ二人のもとへ歩いて来た。いったい何をしに来たのか?

「君たちさ、どうやって入ったの？」

この質問に麻那と隼人は不思議な顔をしてしまった。だが、隼人は律儀に答えを返してあげた。

「階段を下りて来たんだけど……？」

答えるまでもない答えだ。しかし、少年の聞きたいことはそういうことではない。

「この地下にはボク以外の人間は入れないはずなんだよ。いまいち言っていることがわからない。」

麻那は頬杖をつきながら少年に聞いた。

「つまり、貸し切りってこと？ でも、そんなこと聞いてないわよ」

「うーん、貸し切りとは違うかな。でも、普通の人間は地下に來られないはずなんだ。普通の人は自然と上に行くように細工がしてあったんだけど……変だなあ。まあ、いいや、ごめんね二人とも、お邪魔しました」

少年はぺこりと頭を下げて自分の席に戻って行った。

麻那と隼人は顔を見合わせて不思議な顔をした。

「なに今の子？」

麻那に小声で聞かれたが、隼人はそんなことを聞かれても困ってしまう。

「さあ？」

時間が過ぎていく。

二人が食事をはじめてしばらく経っても地下には誰も下りて來なかつた。このことに不信感を覚える麻那。

「何かちよつと変じゃない？」

「そうかな、静かでもいいと思うけ」

突然、硝子が砕ける音が鳴り響き、隼人の言葉を掻き消した。だが、何かが壊れたようには見えない。見えないのは当然だ。壊れたのは見えない壁なのだから。

少年が急に立ち上がり身構えた。自分が造つた壁が壊す者が現れるとは思ってもみなかったのだ。

ため息交じりの声で少年は呟いた。

「可笑しいなあ、どうしてこうもさつきから可笑しいことが起きるのかな？」

麻那と隼人は食べる手を止めて地下に進入して来た人物を魅入ってしまった。

鴉が肩に止まっている男　影山彪彦だった。

「一般人の方もお食事中でしたか、これは申し訳ないことをしてしまつた。我々には構わないでお食事を続けてください」

それは無理な話だ。どうしても彪彦に目を奪われてしまう。

彪彦は少年に軽い会釈をした。

「はじめまして、とある魔導結社からあなたをスカウトに参りました、影山彪彦という者です。よろしければあなたの名前をお聞かせ願いたい」

「ボクの名前は芳賀雪夜。でも、ボクの名前も知らないでスカウトに来るなんて変わっているね」

「名前は確認のために聞いたままでです。では、話を戻しまして、スカウトの件について返事をいただきたいのですが？」

「ヤダね、ボクは何でもボクがトップじゃないと気に食わないから彪彦はずれたサングラスを直しながら口元をつり上げた。そして、右肩に止まっていた鴉が右手の先に移動した。

「そうですか、仕方ありませんね。では、世界の均衡を保つために雪夜さんには死んでいただくことになります」

右手に移動した鴉が変形して彪彦の腕に巻き付き、大きくて黒い鍵爪へと変化した。その鍵爪の形はまるで巨大な鴉のくちばしのようで、人の頭など簡単に鋏めてしまいそうだ。

相手の魔導具を見て雪夜は妖艶な笑みを浮かべた。

「おもしろい玩具持つてるね。ボクも必殺技見せてあげるよ」

雪夜はテーブルに置いてあった何かを掴んだ。それはセットメニューに付いて来たおまけである人形であった。

その人形は象のような、ミジンコのような、そんな感じものに天

使の翼が生えたキャラクターだった。

人形を掴んだ雪夜は高らかに声をあげた。

「トウーンマジック！」

雪夜の手から床に放り投げられた人形は膨れ上がっていく。周りの椅子を撥ね退けながら人形は巨大化し、全長二メートルにまでなった。

人形は長く伸びた鼻を上げて象のような鳴き声をあげた。

ギャラリーと化している麻那と隼人は口をあんぐりと空けてしまった。

人形がその長い鼻で彪彦に襲い掛かる。

黒い鉤爪が人形の身体をあっさり切り裂き、切り裂かれた人形はシャボン玉のように弾けたと思うと、切り裂かれた状態でもとの人形に戻った。

雪夜は口に手を当てて大きなあくびをした。

「あらら、もうやられたのか。見た目どおりに弱かったなあ。じゃあ次はこれ」

テーブルに置いてあったジュースのふたを雪夜は開けて、中身の床に溢しながら高らかに声をあげた。

「トウーンマジック！」

すると黒い液体が増殖しはじめて、生き物のように動き出した。

液体はうねりながら彪彦に襲い掛かる。今度は液体が相手だ、どうする彪彦！？

「先ほどからこけおどしばかりでつまらないですね」

襲い掛かって来る黒い液体に向かって彪彦は鉤爪を向けた。

鉤爪が口を開けたかと思うと、それは唸り声を周りの空気を吸い込みはじめた。

黒い液体は抵抗するが簡単に鉤爪に吸い込まれ、どこからかゴクンという何かを呑み込む音が聞こえた。その後、誰かがゲップをした。

「さて、次はどうしますか雪夜さん？」

「そつだねえ、逃げるっていうのはどうかな？」

「なるほど、それは名案ですね。それで、どのようにして？」

「こつやつてさ！」

空間が揺れ、雪夜の姿がゆらゆらと霞んでいく。

麻那と隼人は目の前で起きていた怪現象に魅入られてしまっていて、逃げることを先ほどまで忘れていたが、空間が揺れ、歪み、そして、溶けていくのを目の当たりにして慌てはじめた。

「隼人、逃げない！」

「わかつてるよそんなこと！」

空間に溶けるように雪夜の姿が消えようとしている。

彪彦は雪夜を逃がさまいと鉤爪を振るった。

「待ちなさい！」

鉤爪は雪夜の腕に噛み付いたが、苦痛に顔を歪ませた雪夜は完全に溶けて消えてしまった。

「逃げられましたね」

先端を地面に向けられた鉤爪からは血が流れ落ちている。

彪彦はすれたサングラスを直しながら口元をつり上げた。

「いや、逃げられたのではなく、わたくし……たちが別の場所に飛ばされたようですね」

雪夜が別の空間に逃げたのではなく、彪彦たちが別の空間に閉じ込められたのだ。そう、閉じ込められたのは彪彦だけでなく、麻那と隼人も閉じ込められていた。

同じ場所に運悪くいたために、麻那と隼人も雪夜の創り出した異世界に閉じ込められてしまったのだ。

どこからか軽快なリズムの曲が流れて来る。

辺りを見渡すとジェットコースターや観覧車がある。そう、この場所はまるでテーマパークのような場所だった。

未完成の城（4）

野々宮沙織は珍しく一人で学校から帰っていた。いつもは仲のよい早見麻衣子と宮下久美といることが多い。

「ひさびさにひとりいゝ、寂しいなあ」

小さな影がとぼとぼと歩いて行く。

沙織は翔子の部活の後輩で、部活内では撫子に次いでテンションが高い。だが、彼女がテンションを高くすることをできるのは、周りに友達がいればこそだった。今の沙織はテンションが低い。

他人の輝きをもらって自分を輝かせることしか沙織にはできなかった。

ひとりで帰っていると特にすることがない。けれど、沙織は家に帰っても特にすることがなかった。

沙織の両親は共働きで仕事から帰って来るのはいつも夜遅くだった。というより、帰って来ないことの方が当たり前だった。

家に帰っても特にすることがない沙織は家に帰るのが嫌だった。

そのためいつもは仲のいい二人の友達とできる限り一緒にいる。

肩を落としながら歩く沙織は人の大勢いる場所に行こうと考えた。だが、今日は人のいない静かな場所に行きたい気分だった。

家に帰ればひとりになれるだろう。しかし、沙織は家でなく、ふと横を立ち寄った公園に入った。

家はひとりになれるが、外と完全に隔離されたような感覚を沙織は受けてしまう。人がいなくても外にさえいれば、誰かと繋がっているような気分になり、家にいるよりはましな気分にはなれた。寒空の下の公園は静かだった。

沙織は風に揺られていたブランコに座って空を見上げた。そして、いろいろなことを考えた。特に両親のことを考える。

「……嫌い」

その言葉は両親に対するものだ。沙織は両親のことを悪く思っ

いた。

沙織の両親は仲が悪く互いの不倫を認め合っている。だが、別れる気は今のところないらしい。そのため沙織の両親は家に帰って来ないで、不倫相手の家などに泊まり込んでいた。

どこからか猫の鳴き声が聞こえて来た。

沙織が足元を見ると、こげ茶色の仔猫が沙織の足に擦り寄っていた。

仔猫は可愛らしい声で鳴きながら顔を沙織の足に擦り付けている。何かをねだっているのだろうか？

泣き続ける仔猫を見ていた沙織はバッグの中から今朝コンビニで買ったチキンサンドの残りを取り出した。

「猫ってチキンサンド食べるのかなあ？」

沙織はチキンの部分を千切って仔猫に分け与えてみた。すると仔猫はチキンにかぶり付き、首のスナップを利かせながら口の中にチキンを放り込んでいった。

仔猫は鳴くのを止めて走り去ってしまった。

沙織は少しショックを受けた。自分に懐いたのかと思ったら、猫はエサをもらったら走り去ってしまったのだから。

どうしても沙織は仔猫を追いかけずにはいらなかった。

仔猫だけに視線を向けて走っていた沙織はいつの間にか道路まで出ていて、仔猫が急にアスファルトの地面から持ち上げられた。

沙織は仔猫が持ち上げられるのに視線を合わせて、そのまま仔猫を抱き上げた少年の顔を見た。

自分より年上の男の子だと沙織は思い、相手の少年も自分よりも年下だと思っただが、沙織がこの辺りでは有名な星稜の制服を着ていたので自分よりも年上なのだと確認できた。

「これ君の猫？」

「ううん」

少年はそう聞くと仔猫を地面に下ろしてやった。すると仔猫は走り去ってしまった。

走り去る仔猫を見て沙織は少し寂しい気分になった。

「あ、行っちゃった」

「逃がしちゃダメだった？」

「ううん、別に……あっ!？」

沙織は少年が腕に怪我を負っているのに気が付いた。

「腕から血出てるけど大丈夫なの？」

「あ、これ、ちょっと動物に噛まれたただだから平気じゃないかな？」

どう見てもちよつとは言いがたい怪我だった。遠くから見れば模様にも見えないこともないが、血が服にだいぶ染み込んでいる。

「大丈夫じゃないよお、動物に噛まれんでしょ、バイキンとかウジャウジャで化膿して……ううゝ寒気」

自分で言っておいて、沙織は全身に寒気を感じてぶるぶると振るえた。

「じゃ、ボクは行くね」

「あ、その怪我本当に大丈夫なの？ 病院とかちゃんと行ってね」

「血は止めたから病院には行かないよ」

少年は歩き出し、すぐに足を止めて振り向いた。

「ひとつ、聞いていいかな？ どうして公園にひとりでいたの？」

「見られてたの？」

「ボクと同じ感じがしたから、ちよつと目に留まったただけだけど」

少年は沙織から自分と同じ満たされない孤独を感じ取っていた。

人というと楽しく、人の傍にいたいと常に思っているが、人の輪に入っている時にふと我に返った時に感じる孤独。その孤独の理由はわからないが、少年は常にその孤独に付きまとわれていた。

自分と同じ感じのした沙織に少年は惹かれた。

「ちよつと君とおしゃべりとかしていいかな？」

「沙織とおしゃべり？」

「沙織って言うんだ。ボクの名前は影山雪夜、君よりは年下だから呼び捨てでも別に構わないよ」

「沙織って言うんだ。ボクの名前は影山雪夜、君よりは年下だから呼び捨てでも別に構わないよ」

この少年は芳賀雪夜だった。影山彪彦との戦いの後、この場所をたまたま通りかかったのだ。

「沙織よりも年下なの！？ てつきり上かと思ってた。え〜と、沙織は野々宮沙織、中学一年生で十二歳」

「なんだ、年は同じか。ボクも十二歳、小六だけだね。ブランコに座ってしゃべろうか？」

「うん」

うなずきながらも沙織は雪夜に不信感を抱いていた。不信感というよりも不思議な感じという表現の方が正しいかもしれない。それは魔導の力を持つものの魅力だ。

ブランコに座った二人は別に漕ぐわけでもない。ただ、ベンチの代わりとして座っているだけだ。

雪夜は自分の話をすることにした。それは相手に心を開かせるためだ。

「じゃあ、ボクの家環境の話でもしようかな。ボクさ、ここ数年父親の顔見てないし、母親は一ヶ月まえに見た……かな？ とにかく、あんまり親と関わりがないんだよ」

沙織は雪夜の話に少し興味を惹かれた。自分の家庭と似ていたからだ。

雪夜は相手が自分の話を聞き入っていることを確認して話を続けた。

「それでね、別に親が家にいないわけじゃないんだ。家にいても互いに顔を合わせない。互いのことに無関心で、どうでもいいと思ってる。食事はいつも部屋の前に時間になると置いてあったり、時にはお金が置いてある時もあるかな」

ゆっくりと息を地面に吐いた雪夜は沙織を見つめた。

「大人つてみんなあんな感じなのかな？」

その瞳は黒く見ていると吸い込まれてしまいそうな瞳だった。

雪夜は黙り込み、その間に沙織は考え事をした。自分の両親について考えた。だが、それは考えるのも嫌で一言で片付けられた。

「嫌い、沙織は沙織のパパとママが嫌い。あんな大人になんかなりたくない」

雪夜は妖艶な笑みを浮かべた。沙織の今の言葉を彼は聞いたかったのかもしれない。

大人になんかなりたくない。

今の言葉を雪夜は心に深く刻んだ。自分と同じ考えを持つ者の言葉として。

「沙織さんは大人になりたくないの？ 大人は大人で楽しいと思うけど？」

思ってもないことを言っただけ相手の言葉を確かめる。

「沙織は大人になりたくない。子供のままの方が楽しいこと、いっぱい、いっぱいあるもん」

「その願い叶えてあげようか？」

「どういうこと？」

「ずっと永遠に子供のままにしてあげようかって意味」

雪夜はいったい何をしようとしているのか？

困惑する沙織。困惑するには理由がある。冗談ではなく本当に雪夜が願いを叶えてくれそうだったからだ。それは雪夜の妖しい魅力だった。

子供のままでいられるなら……。

「できるの、そんなこと？」

「できるよ、実はボク魔法使いなんだ」

普通の人があんなことを言ったら冗談にしか聞こえなかっただろうが、雪夜に言われると納得するしかない。

「魔法使いなんだあ、そんな感じるかも……」

「じゃあ、こんなのはどうかな？」

雪夜は地面に落ちていた小石を拾い上げて、近くに軽く放りながら高らかに声をあげた。

「トーンマジック！」

すると、地面に落ちた小石がダンスをし始めた。

小石は回転したり、ジャンプしたり、確かに踊っている。

目を丸くして沙織は小石のダンスを見入った。言葉で魔法使いを信じるのと、実際に魔法を見て信じるのではまた違う。

「すっごーい！ カッコイイよ雪夜くん！」

興味津々で笑顔を浮かべる沙織は雪夜の顔を目を輝かせて見つめた。見つめられた雪夜は少し照れ笑いを浮かべる。

「これは、簡単魔法だよ」

「あのお、私にもできるかなあ？」

雪夜の使った魔導は確かに簡単なものではあるが、魔導を使うには類まれなるセンスが必要で誰にでも仕えるわけではない。

だが、雪夜はこう言った。

「きつと、できるよ沙織さんにも」

これは嘘ではない。雪夜は沙織から微弱な魔導を感じていた。

沙織は潜在的には魔導の力を持っている。ただ、それに本人が気づかずに使いこなせてだけなのだ。雪夜はそれに気がついた。

自分で知らないうちに魔導の力を持ってしまっている者は、大抵は魔導の力に気づくことなく一生を終える。特に自分で力に気がつく者は稀にしかない。ほとんどの場合は誰かに教えられてはじめて知ることになる。

魔法が使えると聞いて沙織は嬉しくなった。

「ホント！ 沙織にも魔法使えるの？ ウレシイなあ、じゃあ、沙織も魔法少女の仲間入りってこと？」

「魔法少女？」

「悪い奴らをやっつける正義の魔法少女だよお」

沙織は魔導を使えるということがあまりよくわかっていない。

雪夜はどうとでもとれる笑みを浮かべた。何を考えているのかわからない笑みだ。

「おもしろいねそれ。うんいいと思うよ、悪い大人を懲らしめるっていうのもいいと思うけど、どうかな？」

「悪い大人？」

「ボクの両親とか、沙織さんの両親とかね」

また、笑みを浮かべる雪夜。とても純粋な笑みだが、その笑みは何が純粋なのか？

純粋な悪、純粋な正義。それは人の価値観で決まることで、多くの人は正義が正しくて、悪が間違いだと主張する。だが、本当はどちらが正しいというわけではなく、主張が違っただけ、理念が違っただけ、考えていることが違っただけのこと。

微笑んでいる雪夜は沙織にこう言った。

「じゃあ、まずは沙織さんをボクの世界に案内しよう、そこにいれば永遠に子供でいられる」

「そんな世界あるの？」

「今すぐにも行けるけど、行くかい？」

「行きたい！」

「じゃあ、ボクの手を掴んで目をつぶってくれるかな？ ボクがいて言うまで開けちゃ駄目だよ」

沙織は差し出され手を掴んだ。それは新世界へ自分を導いてくれる手。

目をつぶった沙織は自分が溶けていくような感覚に陥った。そして。

「いいよ、目を開けて」

目を開ける沙織。

新世界への扉は開かれた。

未完成の城（5）

愁斗の自宅の前まで送ってもらった翔子は、未練を残しつつも愁斗の別れの挨拶をした。

「じゃあね、愁斗くん」

「あのさ、うち寄って行く？ 両親いないんでしょ？」

思わぬ愁斗の申し出に翔子は喜びつつも、少し複雑な心境になった。本当は自分の家に愁斗を呼ぼうとして言い出せなかったのだ。それを逆に家に呼ばれてしまった。

「行く、行く行く！」

妙に張り切ってしまった。そんな自分に気づいた翔子はちよつと恥ずかしそうな顔をした。本当に嬉しくて、ついはいでしまった。

翔子はこれまで一度も愁斗の家に行ったことがなく、どんなころなのかいろいろと想像していた。

愁斗は姉と二人暮らしをしていると翔子は聞いていて、その姉に愁斗はあまり合わせたくないらしい。では、今日はなぜ呼んでくれたのか？

「今日は姉が家にいないからさ、今日だったら瀬名さんのこと家に呼べるから」

「そうなんだ……。あ、ちよつと待ってて」

顔がにやけてしまうのが抑えられない翔子は愁斗をその場に待たせて家の中に駆け込んで行ってしまった。

しばらくして戻って来た翔子は私服に着替え、手にはなぜか大きなスポーツバッグを持っていた。

「なにそれ？」

「えっ、いえ、その、何でもないって、愁斗くんたら」

明らかに動揺する翔子。バッグの中にはいったい何が入っているというのか？

実はバッグの中には着替え一式やハブラシやドライヤーなどなど、お泊りセットが入っていた。翔子はいざ(?)と言う時のためにお泊りする気満々なのだ。

翔子はスポーツバッグを背中に回して準備万端の格好をした。

「じゃあ行こう、愁斗くん」

「ああ、うん」

愁斗はバッグの中身が気になったが、そのことにはもう触れないことにした。

二人は愁斗の家に向かって歩き出した。

少し歩いたところで翔子はあることに気がついた。

「もしかして、愁斗くんっていつも私を家に送るために遠回りして家に帰ってたの？」

「うん、そうだけど」

愁斗は翔子と帰る時はいつも遠回りをして翔子を送ってから自分の家に帰っていた。

こういう小さい気遣いに翔子はちょっぴり感動した。自分のことを大切に想ってくれているんだなと嬉しくなる。

入り組んだ住宅街を抜けて、翔子も知っている場所に出た。

「この辺りなら知ってるよ、撫子が住んでるマンションがあるんだよ」

「ふ〜ん、そうなんだ」

「ほら、あそこ！」

翔子は撫子の住んでいるマンションを指差した。それを見た愁斗は少し驚いた表情になった。

「僕のうちもそこなんだけど」

「えっ!？」

「撫子と同じだったんだ」

それも当然である。撫子はもともと愁斗を監視するために組織から派遣されて来たのだから。

マンションの中に入った二人はエレベーターに乗り込んだ。

「撫子が住んでるのって五階なんだよ」

「うちも五階」

そう言いながら愁斗は五階のボタンを押した。

愁斗は嫌な予感がしていた。撫子が五階に住んでいると聞いて、もしやと思うことがあったのだ。

五階でエレベーターを降りた二人は愁斗の部屋に向かって歩き出した。

撫子の部屋の横を通った時、翔子がそれを指差して言った。

「ここが撫子の部屋だよ」

「ふ〜ん、うちはその隣」

「えっ!？」

愁斗が指差している表札には、504号と書かれ、その下に愁斗の苗字である『秋葉』と書かれていた。その隣の505号室には撫子の苗字である『涼宮』と書かれている。

思わず固まる翔子。

「あ、あのさ、気づかなかったの？」

「いや、僕さ、近所付き合いゼロだから」

撫子が隣の部屋に引越して来てから四カ月ほどになるが、愁斗は隣に撫子が住んでいることに全く気がついてなかったのだ。

ドアの鍵を開けた愁斗は翔子を部屋の中に招き入れた。

「どうぞ」

「お邪魔します」

部屋の造りは以前翔子が入ったことのある撫子の部屋と同じだった。結構大き目の部屋だ。

辺りを見回す翔子はダイニングに入ったところで誰かと目が合った。愁斗はその誰かに気がついて、焦って翔子を家の外に追い出そうとしたが、もう遅かった。

「愁斗くん帰りい〜。そっちの娘はカノジョ？」

ビール缶を片手に色っぽい女性がソファでくつろぎながら話しかけて来た。ミニスカートから覗く足組みされた長く伸びたが脚線

が色つぽさを引き立てている。

普段見せないほどの動揺を顔に浮かべる愁斗。目の前にいるのは、愁斗が姉と翔子に説明していた人物だ。

「どうして、亜季菜さんが……！ ヨーロッパにいるはずじゃ!?」
「突然気が変わっちゃって、日本海上空くらいから引き返して来ちゃった」

日本海上空？ 空の上から引き返すことが可能なのか？

翔子は今の言葉が気になって聞いてみた。

「あの、日本海上空で引き返すって、普通できませんよね？」

「ああ、自家用だから」

「はっ?」

思わず翔子は変な顔をしてしまった。

「一家に一台自家用ジェットよ」

「はっ!?!」

納得はしたが、別の意味で納得できない。中流家庭の翔子の家は自家用ジェットなどない。

翔子は愁斗の服をくいくいと引っ張って、小さな声で耳打ちした。

「愁斗くんの家ってお金持ちだったの?」

「うちじゃなくて、亜季菜さんが金持ちなだけ」

「そう……」

翔子は愁斗の家の家庭事情がよくわからなくなった。愁斗に聞いた話によると、愁斗が小さい頃に母親が亡くなり、父親は行方不明、現在は姉と二人暮しと聞かされている。

亜季菜はビールを掲げて大きな声を出した。少しほろ酔いのようだ。

「ほら、あんたたちもこっち来て飲みなさいよ」

「僕たち未成年だから」

少しキツイ口調で愁斗は言ったが亜季菜は全く動じない。

「いいから、いいから、愁斗はいつも飲んでるんだから」

「飲んでないから」

愁斗がふと横を見ると翔子が不信の眼差しで愁斗を見ていた。

「愁斗くん、ワルなんだあ〜」

「だから、飲んでないから、本当に。あんなどうしようもない大人の言うこと真に受けたらダメだからね」

一生懸命弁解する愁斗を亜季菜がイジめる。

「カノジヨの前だからっていい子ちゃんしちゃだめよあ〜」

「……うるさいな！ 亜季菜さんは勝手に酒飲んでてください」

「おーこわ、今日の愁斗クン恐〜い。ふふ、それに人間っぽい、あたしの前じゃあんまり見せてくれないわよね、人間っぽいところ」

亜季菜が言う『人間っぽい』とは、普段、亜季菜に対する愁斗の態度が人形のようなからだ。だが、最近は昔に比べて感情が豊かになって来ていると亜季菜は感じている。

怒った顔をしている愁斗がここにはいる。それも冷たい表情をしてキれる愁斗ではなく、じゃれ合うように怒る愁斗がここにはいる。

「亜季菜さん、いい加減にしないと……」

「いいわよ、『愁斗』が出て行っても。ここあたしのマンションだし」

愁斗ははつきり言って亜季菜には頭が上がらない。それは亜季菜が姉だからというわけではない。亜季菜は『姉』ではないのだから、それは関係ない。

何も言えなくなった愁斗を見て亜季菜な勝ち誇った顔になってビールを口に運んだ。

「ぶはあ〜、勝利の美酒は美味しいわね。愁斗は家出するらしいから、あなたと一緒に女だけのパーティーしましょうよ」

「私!？」

亜季菜は翔子に向かって話しかけていたし、女は翔子と亜季菜以外にない。だが、翔子は突然の指名に驚いてしまった。

「あ、あの、その……」

翔子はこの時、誰かの名前を思い出そうとしていた。目の前にいる女性が誰かに似ている。翔子の知り合いの誰かに亜季菜が似てい

るような気がしていた。

急に立ち上がった亜季菜は翔子の首に腕を回して、強引に自分と一緒にソファ―に座らせた。

「今日は女同士で語りましょう。あたしの名前は姫野亜季菜、で、あなたの名前は？」

「私の名前は瀬名翔子です……じゃなくって」

「いきなり嘘？ 自己紹介でいきなり偽名を使うなんて、詐欺師の才能があるわね」

「そういうことじゃなくって、亜季菜さんって結婚なさってるんですね」

「生まれてこの方、結婚なんてしたことないわよ」

「でも、苗字が？」

愁斗の苗字は『秋葉』である。

「苗字？ ああ、苗字ね、愁斗と違っって言いたいよね。ぶっちゃけね」

「亜季菜さん！」

亜季菜の言葉を愁斗が遮った。

翔子が振り向いた先には着替えを済ませて来た愁斗が立っていた。

「亜季菜さん、余計なことは言わないでください」

「愁斗くんったら、秘密主義者。そうなんだ、この娘力ノジヨなのにぜんぜん話してないのね」

愁斗が翔子に話していないこと、それはいつたいどんなことなのか？

翔子も亜季菜の意味深な言葉が気になってしまったが、愁斗がその件について触れられたくないようなので、話題を変えた。

「亜季菜さんって、何かお仕事とかなさってるんですか？」

「自営業……かなあ、いちよう組織のボスで、例えば貿易とか？」

「女社長なんですか？ カッコイイですねえ」

「まあ、そんなところね」

ふと亜季菜が愁斗に視線を移すと、愁斗が鋭い目つきで亜季菜を

見ていた。何か変なことを言わないか目を光らせているのだ。亜季菜は酒を飲むと饒舌になるので何を言うか冷や冷やしてしまう。

残っていたビールを全部喉に流し込んだ亜季菜は、テーブルに空き缶を置くのと同時に立ち上がった。

「さあて、そろそろ仕事に行こうかしらね」

亜季菜は愁斗の顔を見て命令した。

「愁斗くん、途中まで送って行きなさい」

「何で？」

「いいから！」

亜季菜は愁斗の腕に自分の腕を絡めて強引に歩き出した。

「じゃあ翔子ちゃん、まったねえ〜！」

玄関を出たところで亜季菜は愁斗の腕を開放した。

「ちよつと話があるからそこまで付き合いなさい」

もう亜季菜は酒に酔っている雰囲気はなかった。もしかしたら、最初から酔っていなかったのかもしれない。

前を歩き出した亜季菜に合わせて、愁斗は何も言わずに歩き出した。

エレベーターに乗ったところで亜季菜が口を開いた。

「この娘にどれくらい話しているの？」

「……あのひとは僕の傀儡になりました」

「あの娘が!？」

この言葉と同時にエレベーターのドアが開かれた。

エレベーターを降りた愁斗は静かに言った。

「でも、ほとんど何も知りません。組織の話は全くしませんから」

「大切な娘ならちゃんと全部話してあげなさいよ、せめてあたしが知っていることは全部よ。でも、お遊びの娘なら別にどうだってかわないけどね」

「遊びなんかじゃありません！」

「だったら話なさいよ、すぐとは言わないけど、あなたの気持ちの整理がついたらね」

「……はい」

道路ではリムジンと運転手が亜季菜を出迎えていた。

「じゃあ、行くわね」

「じゃ」

少し歩いたところで亜季菜が振り返った。

「じゃないわよ、これから愁斗クンにも仕事に来てもらうのよ」

「今日ですか？」

愁斗は残して来た翔子のが心配だった。だが、行きたくないと言っても亜季菜は許してくれないだろう。それが条件なのだから。

「今からすぐよ、さつさとリムジン乗りなさい」

「でも、紫苑を部屋に置いたままです」

「愁斗クン自身でも大丈夫でしょ？ さつさとカノジヨのもとに帰りたいたら、さつさと仕事を済ませない」

「わかりました」

その口調は機械的な口調だった。この愁斗のことを亜季菜はまるで人形のようにだと思っている。

二人がリムジンに乗るとすぐに走り出した。

リムジンの中で愁斗は翔子のケータイに電話をかけた。

「瀬名さん、ごめん」

未完成の城（6）

愁斗と亜季菜が出て行ってしばらくして、翔子のケータイに電話がかかって来た。

ケータイのディスプレイには『秋葉愁斗』と表示されている。

《瀬名さん、ごめん。ちょっと急用ができて出かけて来るけど、だいぶ遅くなるかもしれないから、帰ってもいいよ》

翔子は相手には見えないがとても寂しい顔をした。せつかく愁斗の家に来たのに、という気持ちかが翔子の心の中に蓄積された。

「帰ってもいいよって、鍵は？」

《あのね》

「あ、いいよ、留守番してる」

《だから、遅くなると思うよ》

せつかく愁斗の家に来たのに帰ってしまったのはもったいない。それに翔子はお泊りの準備も実は万端だ。

「うん、一日でも二日でも待ってるよ」

《そう……冷蔵庫の中にあるものとか勝手に使っていいから、あとお風呂も。鍵はテーブルの上にあるんだけど、わかるかな？》

翔子は空き缶の横にあった小さなカゴに入っていた鍵をつまみ上げた。

「たぶん、見つけた。これだと思う」

《出かける時はそれで鍵閉めてね》

「うん、わかった。……でも、早く帰って来てくれたら、嬉しい……かな」

《なるべく早く帰るよ。じゃあ切るね》

「うん」

電話が切れた。まるで新婚家庭の一風景のような会話だった。

留守番を引き受けたが翔子はすることがなくて困ってしまった。

「あ、そうだ！」

翔子は名案を思いついた。撫子の家に遊びに行こうと考えたのだ。さっそく、翔子は先ほど見つけた鍵で戸締りをして、隣の部屋のインターフォンを押した。

《誰っ?》

いきなりキツイ口調の撫子の声がした。

「あの、私、翔子だけど……」

《翔子!? ごめん、ビビった? 悪気があったわけじゃにゃいから、うんと、にゃんつーか、忙しかったから》

撫子は組織の仕事を自宅で作っていた真っ最中だったのだ。

「ごめん、忙しいなら帰るね」

《えっ、何しに来たの? いいよ別に、ヒマヒマだから、上がっていきにゃよ》

「でも、今忙しいって言ったじゃん」

《いいよ、いいよ、別にいゝ、翔子ちゃんは特別だからね。ちよつと待ってて》

チーンロックのジャラジャラという音がした後、ガチャとドアが開かれ撫子の顔が覗いた。

「撫子ちゃんのお城へようこそーっ! どうぞ上がっちゃっておくんにゃまし」

「ごめん、いきなり押しかけて」

翔子は靴を脱いで家の中に入った。

前に翔子が訪れた時にも家具が少なかったが、今でも少ない。だが、前回よりは人が住んでいる雰囲気がある。家具がちよつと増えたせいだろう。

「もしかして家具増えた?」

聞くまでもなかった。前に来た時になかったこたつがある。

「翔子ちゃんチエキだね。こたつが増えたと、料理もはじめたから食器とかも増えたよ」

「料理はじめたんだ、すごい」

「エッヘン! なかなか上手なもんだよ」

撫子は長い間、組織で育てられて来たので、ものを覚えることが得意だった。どんな環境にも順応できるように教育されて来たのだ。翔子は料理が全くできないので心から撫子を尊敬した。

「私も料理とかできたらなあ、って思うだけ。いいなあ、料理できるって」

「翔子も料理覚えたら、結構楽しいよ」

「遠慮しとく、私は食べる専門でいいや」

「じゃあ、夕飯食べてく？ 翔子の両親旅行中でしょ？」

「……うーん、愁斗くんが帰って来なかったら食べてく」

「愁斗くん？」

撫子の頭の上にはなマーク飛んだ。

翔子はちょっと恥ずかしそうな顔をして、小さな声で撫子に説明した。

「実はね今日、愁斗くんのうちに遊びに来てたんだけども、愁斗くんが急用で出かけちゃって、留守番中なんだよね」

「ふふふ、愁斗クンの家に行ったの？ よかったじゃん、でも留守番かあ、そりゃーついてにゃいね。まあまあ、そこいらに座って、飲み物持って来るから」

翔子はこたつの中に入ったが電源が入っていなかったようだ。

こたつの電源を翔子が入れている間に、撫子が軽快なステップで台所に駆けて行って大急ぎで戻って来た。

「にゃに飲むか聞いてにゃかった」

「おつちよこちよいだね撫子は」

「にゃははは、ええつとメニューは、牛乳とミルクとホットミルクとイチゴミルクとバナナミルク、それと新メニューのチョコミルク。どれチョコイスする？」

全部牛乳関係だが、前回もそうだった。

「じゃあ、今日はバナナミルク」

「オッケー、うんじゃ待ってておくんにゃましまし」

風のように台所に走って行った撫子は風のように戻って来た。手

にはバナナミルクとチョコミルクを持っている。

「お待ちどーっ！ バナナミルクお持ちしましたよ〜ん」

翔子にバナナミルクを手渡した撫子はこたつの中に入った。

二人は飲み物に口を付けて少しの間だけ沈黙が訪れる。

グビグビつとチョコミルクを飲んだ撫子はコップをこたつの上に置いた。

「ぶはあく、うまい！」

撫子の口の周りにはチョコレートらしきものが付いている。それを撫子は猫がするように舌でペロりと舐め取った。それを見ていた翔子は、撫子はやっぱり猫だと思った。

実は撫子は猫の遺伝子を埋め込まれた人間で、翔子もそのことを知っているが、それ以前に翔子は撫子を猫みたいだと思っている。

「撫子のそういうところ好き」

「えっ？ どこらへんが？」

「別にい〜」

翔子はわざととぼけた。すると撫子はじゃれ合うように翔子に襲い掛かって来た。

「教えにやいと、お仕置きしちゃうぞ〜！」

翔子に飛び掛った撫子は相手のことをくすぐりはじめた。

「あ、ダメっ、あはは、あん、ズルイよ、ははっ」

撫子が一瞬手を止める。

「じゃあ、白状する？」

「撫子のこついう無邪気なところが好きだよ。スゴク可愛いと思うもん」

「そんなにや〜、照れるにや〜」

照れ笑いを浮かべながら撫子は翔子の身体から離れた。

急に撫子のケータイが鳴った。今流行の洋楽のメロディーだ。

「はい」

さっきまでふざけていた撫子の顔がケータイに出た途端に真剣なものになった。

「はい、わかりました。すぐ行きます」

ケータイを切った撫子は渋い表情をした。

「どうかした撫子？」

「うん、ちょっと急用ができたから、帰ってくれるかによ？」

「う、うん、わかった帰る」

翔子の飲み干したコップを撫子は受け取り、そのままコップを持ちながら翔子を玄関まで送った。

「翔子ちゃん、またのご来店、お待ちしてるにゃん！」

「あ、うん、じゃあね」

玄関の外に出た翔子は思った。最後に見た撫子の表情はいつもの笑顔だったが、電話で話している時の表情は普段見せない真剣なものだった。いったい、どんな内容の電話だったのか、誰からの電話だったのだろうか？

翔子は愁斗の部屋に戻りながら考えたがすぐに止めた。人のプライバシーを詮索するのはよくないことだと考えたからだ。

またすることがなくなってしまった翔子はダイニングのソファに座って、テーブルの上に置いてあったテレビのリモコンを取って電源を入れた。

最初に画面に映ったのはローカルテレビ局のニュース番組だった。それも翔子の知っている場所が映っているではないか。

たまたま他の取材で来ていたところで事件に遭遇したらしい。つまりスクープというやつだ。

画面に映し出されているLIVE映像は、翔子のよく知っているアーケード街の映像だった。それも今日行ったばかりの場所だ。

どうやらワルドナルドの地下から煙が上がったらしい。地下にはたまたま誰もいなかったらしく怪我人はいないと思われたのだが、客席が荒らされていて、現場には血痕も残っていた。それなのに人がいなかったのだ。

「うっそ、今日お店の横通ったじゃん」

などと言ってテレビに見入っていたら、コマーシャルになってし

まっつて熱が冷めてしまった。

「つまらないのお〜」

テレビの電源を落とした翔子はソファアーの上で寝転がった。

時間の流れがすぐくゆっくりに感じられる。退屈で退屈でたまらない。

「ヒマっ！」

辺りを見渡す翔子の目にいろいろな部屋に続くドアが映し出される。

他人の家を勝手にあさるのもよくないなあ〜と思いつつ、翔子は愁斗の部屋に興味を持ってしまった。どこかにある愁斗の部屋を見てみたい。そういう衝動に駆られてしまった翔子は立ち上がって部屋の中を歩きはじめた。

翔子の冒険気分の散策がはじまる。

このマンションの部屋は広くて部屋数も多い。翔子はここだといふところに目星を付けてドアを開けた。

ドアを開けた瞬間に香水の匂いが流れ出て来た。亜季菜の香水と同じ匂いだ。

「ここじゃないなあ〜」

と言いつつも部屋の中を見渡してみる。

華やかな色調のものが多く置いてある。だが、散らかっていて汚い。この部屋から性格が窺えるような気がする。

「愁斗くんはこんなズボラじゃないもんね」

ドアを閉めたところで翔子は思った。意外にカツコイイ人ってズボラだったり、どこか抜けてたりするかもと思ったのだ。だが、今の部屋は亜季菜の部屋だろうと思って次の部屋に移動した。

次のドアを開けた瞬間、ここだと翔子は思った。

無駄な物が一切なく、綺麗に片づけが行き届いた部屋。物が少ないせいか寂しい印象を受ける部屋は、間違いなく愁斗の部屋だった。部屋の中に入った翔子は大きく深呼吸をした。それをやっている自分に気づいた翔子は恥ずかしくなった。

「なにやってんだろ、自分」

翔子が部屋を見渡しているとクローゼットを発見した。翔子は愁斗がどんな服を持っているのか興味を惹かれて扉を開けてしまった。「きゃーっ！」

恐怖に叫び声をあげてしまった翔子。彼女はいったい何を見てしまったのか？

翔子はそれを死体だと思った。

大きめのクローゼットに座るよう置かれているナイトドレスを着た人間の形をしているもの。それは愁斗の傀儡だった。

見た目は人間と全く変わらない。だが、翔子はそれが傀儡であることに気づけた。

「眠っているみたい」

銀色の長い髪をした美しい女性の傀儡　翔子は魅入られてしまった。

翔子の手が傀儡の頬に触れた。それは人間の頬の感触と同じだった。だが、氷のように冷たい肌だった。

まるで安らかな眠りに落ちた姫のような傀儡。口元に耳を当てると寝息を聞こえて来そうだ。

大きくカットされたドレスの胸元に翔子の視線が移動した。

「何か模様がある」

胸の中心辺りに何か模様があるようだが、ドレスで隠れていて一部しか確認することができなかった。

ドレスから覗く模様が翔子は気になって仕方がなかった。そして、次の瞬間にはドレスに手をかけて脱がせていた。

露になった形の美しい乳房と乳房の中心にその模様はあった。目を奪われてしまう奇怪な紋様。それは翔子の胸にある紋様と全く同じものだった。

唖然とした。翔子にはショックだった。傀儡と同じ紋様が自分の胸にもある。

いつか翔子が死にかけた時、愁斗にその命を蘇らせてもらったこ

とがある。

いいや、君死んだ。……そして、僕の傀儡になった。

目を覚ました翔子に愁斗はそう言った。

傀儡になった翔子に愁斗いろいろと説明をした。自分が傀儡師であり、妖系と呼ばれる特殊な糸を操っているいろいろなことができること、そして、翔子を蘇らせたこと。

いろいろ説明したと言っても、完結に言つと上で説明したことだけである。

翔子は蘇ったことを聞かされたが、傀儡については何も聞かされていない。愁斗の操る傀儡とはどんなものなのか全く聞かされていない。かった。

翔子は目の前にいる傀儡を見て悲しくなった。自分には感情があり、人間らしく今も生きている。だが、自分も傀儡なのだと悲しくなった。同じ紋様があることがショックだったのだ。

胸に刻まれた印が目の前にいるモノと自分が同じものだといっている。

クローゼットをゆっくりと閉めた翔子は何も見なかったことにした。

愁斗の部屋を出た翔子はダイニングに戻りソファアの上に寝転んだ。そして、眠ることにした。

未完成の城（7）

「さて、どういたしたものでしょうか？」

影山彪彦は後ろの二人を見て言った。

「お二人をまず殺すと選択肢もあるのですが……」

この言葉が冗談ではないことを悟った麻那と隼人は後退りをした。麻那は強気な態度で出た。

「やれるもんなら、やってみなさいよ！」

彪彦の口元がつり上がった。

「やりませんから、ご心配なさらずに。最近は組織も丸くなりました、昔なら手当たり次第に抹殺していましたがね。さて、わたくしたちはどこかに迷い込んでしまったわけですが、どうしますか、わたくしについて来ますか？ そうしたらもとの世界に還れるかもしれませんよ？」

突然迷い込んでしまった異世界。そこはテーマパークのような場所だった。

この現実を麻那と隼人は受け入れなくてはいけない。ここに来る前にも彪彦を雪夜の戦いを目の当たりにしている。異世界の飛ばされたことも信じるしかない。

麻那は彪彦に詰め寄った。

「あんた本当にあたしたちをもとの世界に還してくれるの？」

「お二人で行動するより、わたくしと行動した方がいいと思いますか？」

この言葉に麻那はうなずき、後ろにいた隼人を見た。

「僕もその方がいいと思うよ」

彪彦はずれたサングラスを直しながら歩きはじめた。

「では、参りましょう」

「あんた、参りましようつてどこに行けばいいか知ってるの？」

「いいえ、勘です。ですが、あちらに何かがあるのは確かです」

遙か遠くにある城を彪彦は指差していた。

城は大部分が欠けていて、それが城だというのは辛うじて雰囲気からわかる程度だ。どうやら、城はまだ建設中のような感じが見受けられる。

テーマパークに先ほどから流れている音楽が急に軽快な旋律に変わり、何かが現れそうな感じがした。

現れたのはピエロだった。手にはナイフを持ち、今にもジャグリングを披露してくれそうな雰囲気だった。

「夢と冒険の世界、ネバーランドへようこそ！」

四本のナイフをお手玉のように回しながらピエロは大きな口で笑みを浮かべている。

すでに彪彦は黒い鉤爪を構えて戦闘体制に入っている。

鋭いナイフが彪彦に目掛けて次々と飛んで来る。それも四本だけではなく、ピエロの手で回されているナイフの数は減ることなく次々と投げられて来るのだ。

彪彦の身体が揺らめき、残像を残しながらナイフを避けていく。的を外れたナイフは地面に落ちた途端に消えてなくなる。

ピエロはナイフを全て投げ終えて、次に手を後ろに回して爆弾を取り出した。その爆弾というのが、まるでアニメに出てきそうな形をしている。黒くて丸い玉に導火線が付いているという形だ。

ピエロはどこからか取り出したマッチで導火線に火を付けて爆弾を投げた。綺麗な放物線を描いて爆弾は彪彦に向かって落ちて来る。その爆弾に彪彦は鉤爪を向けた。

くちばしのような鉤爪の口が開かれる。あの液体を呑み込んだ時と同じだ。だが、まさか爆弾を呑み込む気なのか!?

火のついた爆弾を鉤爪が呑み込んだ。次の瞬間、鉤爪が風船のように膨れ上がり爆発音がした。

元の形に戻った鉤爪の口から消炎が出ている。だが、鉤爪は無傷のようだ。

恐いほどの笑みを浮かべていたピエロの顔が焦りの表情を浮かべ

た。口元が少し引きつっているのが窺える。

彪彦が風となり地面を駆けた。

鉤爪が大きな口を開けて、ピエロの頭に喰らいついた。それを見ていた麻那は顔を伏せ、隼人は凝視してしまった。

ピエロの頭はもぎ取られ、身体が地面に背中から倒れた。血は一滴も出ず、その代わりにピエロの身体は縮んでいき、やがて小さな人形になった。

彪彦は地面に落ちたピエロの人形を拾い上げて呟いた。

「なるほど、これも彼のマジックですか」

テーマパーク内に流れていた音楽が別のもの変わった。今度はパレードの音楽のようだ。

しばらくすると巨大な何かのキャラクターを模った乗り物や、動物のきぐるみたちや妖精の格好をした者たちがぞくぞくと現れた。

道路をパレードに占拠されて我が物顔で進んでいく。

彪彦は興味深そうに自分の横を通り過ぎていくパレードを見物して、麻那と隼人は啞然としながらパレードを眺めていた。

パレードの参加者たちは彪彦たちに危害を加えるでもなく、ただパレードをしながら通り過ぎて行ってしまった。

しばらくしてパレードを追いかけるような感じのうさぎが現れた。うさぎは水色のジャケットにシルクハット、それにステッキまで持って、耳まで入るとだいたい一五〇センチほどの身長で、二本足でぴよんぴよん走っている。

鉤爪を鴉にすでに戻している彪彦はうさぎの耳を掴んで強引に捕まえた。

「人間の言葉をしゃべることが出来ますか？」

「ボクが思うに、人間の言葉をしゃべれるかどうかということより、ボクは早くパレードに追いつかないといけないと思うんだ」

うさぎは流暢な日本語で先を急いでいること告げるが、彪彦はうさぎの耳を離そうとはしなかった。

「急いでいるのはわかりましたが、どうかわたくしの質問に答えて

「いただきます」

「つまり、それは質問に答えないと、あ、ちょっと待ってください」
うさぎはそう言うとジャケットのポケットからケータイを取り出した。とても不思議な取り合わせだ。

耳を掴まれながらうさぎは誰かと話をはじめた。

「こんにちは王子様、何の御用ですか？」

うさぎはうんうんと何かにならずいてケータイを切った。

「耳を離してください、急用ができました」

「質問に答えたら放して差し上げます」

「すぐに済みますから放してください」

「仕方ありませんね」

彪彦に耳を放されたうさぎはぴよんぴよんと跳ねしながら麻那と隼人の前まで行った。麻那は身構え、隼人は物珍しそうにうさぎを観察している。

「なによ、なにかする気？」

警戒心を強める麻那の身体にうさぎはタッチして、すぐに隼人もタッチした。すると、麻那と隼人の姿がパツと消えてしまったではないか！？

「急用は終わりました」

そう告げたうさぎはぴよんぴよん跳ねて彪彦の前に戻った。

「今のは何をしたのですか？」

「王子様の命令で無関係な人たちには還ってもらいました」

「その王子様とは芳賀雪夜のことですか？」

「さあ？ 王子様といつも呼んでいるので本当の名前は知りません」
王子様が誰だろうとしても、彪彦の動きがどこからか監視されていることは間違いない。そうでなければ都合よく電話がかかって来るはずがない。

彪彦の手が素早く動き、再びうさぎの耳を掴んだ。

「最後の質問をします。あなたは先ほど二人をもとの世界に還しましたよね？ といことはあなたはわたくしをもとの世界に還す能力

があるはずです」

「さあ、どうでしょう？ ボクを捕まえたら教えてあげます」

捕まえるも何もうさぎはすでに捕まっている。だが、うさぎの耳が彪彦の手からスルリと抜けて、うさぎはびよんびよん跳ねながら逃走した。

彪彦はうさぎを再び捕まえようとしたが、それは叶わなかった。

うさぎのひと飛びは一〇メートル以上もの距離を跳躍し、すぐに姿を消してしまったのだ。

「不覚ですね、まさか逃げられるとは思ってもみませんでした」

ずれたサングラスを直しながら彪彦は口元をつり上げた。そして、肩に止まっている鴉を天に羽ばたかせた。

鴉は上空高く舞い上がり何かを見つけてその追跡をはじめた。

彪彦はその鴉を追って走る。

彪彦の前方に水色のジャケットを着たうさぎを見て来た。あのうさぎに間違いない。

「行け！」

彪彦の命令で鴉は急降下をはじめてうさぎ目掛けて飛んで行く。

そして、鴉は急降下しながらくちばしを広げた。

鴉のくちばしが信じられないほどの大きさになった。そのくちばしはうさぎを丸呑みできそうなくらいに大きい。

うさぎが鴉の襲来に気がついて上を見上げた瞬間、うさぎは鴉に丸呑みにされた。鴉のくちばしはもとの大きさに戻り、その身体は巨大なうさぎを呑み込んだというのにぜんぜん膨れ上がっていない。鴉の腹はいつたいたいどうなっているのだろうか？

地面で主人を待つ鴉に駆け寄った彪彦は『うさぎ』に話しかけた。「捕まえたので答えを聞かせていただきたい」

鴉が腹話術人形のようにパクパクと口を動かし、その内からうさぎの声が聞こえた。

「答えはできるけど、できない。もしキミを還したらボクが怒られるからね」

「それは殺されてもでしょうか？」

「それはそれで困るから、魂を消滅させられる前に人形に戻ろう」
何が起きたのか見た目ではわからないが、うさぎは鴉の内で人形に戻った。

「無駄足になってしまいましたね。いや、わざと城から遠ざけられたという可能性もありますね」

それがうさぎの狙いだったのかもしれない。うさぎが逃げたのは城の間逆だった。それを追った彪彦は城からだいぶ離れてしまった。自分の前に現れた人物を見て彪彦は最高の笑みを浮かべた。

「こんなところで出逢えるとおもいしろい、まさか麗慈くんがここにしようとは思ってもみませんでした」

「それはこっちのセリフだ、ククク……」

彪彦の前に現れたのは組織に追われている雪村麗慈だった。

麗慈は愁斗の抹殺に失敗して、組織を裏切って姿を暗ましたのだ。その麗慈がなぜここににいるのか？

「俺が何でここににいるか聞きたいか？」

「いや結構、組織に連れて帰ってから、その件についてはお話ししましょう」

「ククク……そう言うなよ。俺は組織から身を隠させてもらうのと交換条件で、この世界のナイトをやってるのさ」

麗慈の手が煌き、彪彦の横に光が走った。そう、麗慈は愁斗と同じように妖系を操ることができるのだ。

妖系が鞭のようにしなり地面を砕いた。

「ククツ、外したか」

「当たり前のこととは言わないように。あたながわたくしに敵うわけがないでしょう。大人しく保護されるなら今のうちですよ、麗慈くん？」

「俺が大人しくないのは知ってるだろ？」

「ええ、熟知しています」

彪彦から放たれた鴉は大剣と化して麗慈向かって飛んで行った。

黒い大剣をギリギリで交わした麗慈はすぐさま妖糸を放つ。

必殺の妖糸の舞が放たれた。妖糸が鞭のようにしなり、槍のように突き、剣のように切り裂く。

「クククククククク……ククク……」

嗤いながら麗慈は彪彦を細切れにしようとした。だが、麗慈の攻撃はことごとく軽やかにかわされていく。

「何で当たらねんだよ！」

「それは、あなたが偽者に過ぎないからです。真物の魔導士であるわたくしには絶対に勝てませんよ」

「くっ、バツクか!？」

麗慈が後ろを振り向いた時には大剣が振り下ろされる寸前だった。
「ぐぐっ……!」

大剣が麗慈の腕を斬った。だが、切り落とされるまでには至らなかった。それでも妖糸を扱う右手が負傷してしまっただけが悪い。

「クククク……ヤツてくれるじゃねえか」

「どういたしまして」

「だがな、俺様は悪あがきが好きだよ、ククク……」

煌きが放たれ空間に一筋の光が走った。それを目の当たりにした彪彦は驚愕した。

「まさか、君が……それを使えるのか!？」

空間に闇色の傷ができた。そして、それは周りの空気を吸い込みながら広がっていき、やがては大きな穴をつくった。

「ククク……愁斗が使うのを見て、俺も扱えるようになったぜ」

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。常人であれば耳を塞がずにはいられない。

麗慈の腕が彪彦に向けられた。

「喰らってやれ！」

裂けた空間から闇が叫びながら飛び出した。それは彪彦に襲い掛かった。

彪彦は瞬時に鉤爪を装着して 闇 を切り裂くが、 闇 の勢いには勝てなかった。

闇 は彪彦の腕を掴み、足を掴み、胴までも掴み、身体中に絡みついた。

「く、なかなかやりますね」

彪彦は 闇 を振り払おうとするが、すでに腕は 闇 に呑み込まれていた。

「ククツ、いいザマだな。じゃあ、俺は逃げさせてもらっぜ」

麗慈は彪彦を残して姿を消してしまった。

闇 は彪彦の顔を残して全てを包み込んだ。

「あの子は問題児ではありませんが優秀ですね」

そう彪彦が言ったと同時に 闇 が何かに吸い込まれはじめた。いや、喰われはじめたのだ。

闇 を喰らっていたのはあの鉤爪であった。

鉤爪は彪彦の身体に付いた 闇 を喰らっていった。だが、 闇 も負けてはいない。

空間の裂け目から 闇 が大量に出て来て彪彦に襲い掛かる。

「あの裂け目をどうにかしなくては……」

彪彦の腕が 闇 に掴まれ、彪彦の身体が空間の裂け目に向かって凄いい勢いで引きずられた。

空間の裂け目の中に引きずり込まれる瞬間、彪彦の鉤爪が裂け目を喰らった。鉤爪は空間にできた傷までも喰らったのだ。

空間の傷が消えると 闇 はもう出て来ることができなかった。

この世界に残った微かな 闇 を鉤爪に喰わせて、彪彦はひと息ついた。

「麗慈はどのくらい真理に近づいているのか？ 知らずして 闇 を扱っているようにも思えますがね」

彪彦は城を眺めた。

「おや？」

城が先ほどよりも遠くなっている。城が動いたのか、彪彦が動い

たのか？

この世界が大きくなっているのだ。この世界は成長している。

彪彦は全速力で地面を駆けた。悠長にしていたらいつまで経っても城に辿り着けなくなる。

風のように走る彪彦は人間の身体能力を超越した走りを見せている。足は全く動いていないように見えるのにも関わらず、その移動速度は時速八〇キロメートルを超えている。城はすぐに近づいて来た。

城は建設中のようにも見えるが、建設機材などは全くなくて壊れているようにも見える。

城の中に足を踏み入れた彪彦は思わず笑ってしまった。

「何ですかこれは!？」

城は中身がなかった。空っぽの城。城は周りの外壁しかなく、天井からは空が見えた。

外壁が音を立って崩れはじめた。いや、空間が崩れはじめた。

次の瞬間、彪彦はもとの世界にいた。

「さっぱりわかりませんね」

彪彦のいる場所は開園が明後日に迫ったテーマパークの敷地内だった。

未完成の城（9）

ネバーランドのアトラクションを満喫して、ご満悦な野々宮沙織は次のアトラクションを指差した。

「次はあれ乗ろうよお」

「ジェットコースターね。僕さ、実はちょっと苦手なんだよね」

苦笑いを浮かべている雪夜の腕を強引に引っ張って、沙織は乗り場に走って行く。

ジェットコースター乗り場には人がいなかった。無人でジェットコースターは動いている。

二人が待っているときジェットコースターが走って来た。やはり誰も乗っていない。この世界にあるアトラクションは人がいなくても動き続けているのだ。

二人が乗り込むときジェットコースターが走りはじめた。

加速していくジェットコースター。その先には二回転ループが待っている。それもループを回っている最中にジェットコースター自体も横に回転するというものだ。

「きゃーっ！ おもしろ〜い！」

「……………」

はしゃぐ沙織に対して雪夜の表情は優れない。

ジェットコースターは上へ下へを繰り返して、そろそろ乗り場が見えて来た。

「雪夜くん大丈夫う？」

「……………まあまあ平気」

ジェットコースターが止まると同時に雪夜の気分の悪さは悪化した。

「……………気持ち悪い」

「わあ、顔真っ青だよお！」

「乗り物酔いしやすい体質でさ」

沙織の肩を借りながら雪夜はジェットコースターを降りて、そのまま近場にあったベンチまで行った。

ベンチに座りながら雪夜がつつむいていると沙織が声をあげた。

「麗慈センパイ!？」

沙織の声に反応して雪夜は顔をあげた。

「やあ、麗慈、何か用？」

「この中で組織の奴に遭っちまった」

二人が話しているのを横で見ながら、沙織は驚かずにいられた。二人が話しているのを横で見ながら、沙織は驚かずにいられた。二人が話しているのを横で見ながら、沙織は驚かずにいられた。

「うっそ、二人とも知り合いなの？ どうして麗慈センパイがここにいるの？」

驚く沙織に麗慈は外面の優しい笑みを浮かべて答えた。

「久しぶり沙織ちゃん」

沙織はまさかここで麗慈に出会うと思ってもみなかったし、雪夜も沙織と麗慈が知り合いだったとは思ってもみなかった。

「沙織さんと麗慈って知り合いなの？」

「沙織と麗慈センパイは同じ学校の同じ部活だったんだよ。麗慈センパイがうちの学校転校して来て、一週間もしないうちに突然また転校しちゃったの。部活の打ち上げも来ないでいきなり転校でピツクリしちゃったよあ」

「俺さ、みんなに挨拶とかして転校すんの恥ずかしかったからさ、黙って転校しちゃんだよなあ。あの時はホントごめんごめん」

これは嘘である。沙織が転校という言葉を使ったのでそれに合わせずに過ぎない。

星稜中学の学校祭である星稜祭の演劇部による公演の後、翔子を入質に取った麗慈は愁斗との決戦で敗北し、姿を暗ませてしまったのだ。転校というのは組織の隠ぺい工作であり、そのようになっていたことを麗慈は沙織の言葉で今知った。

麗慈は沙織の顔をちらつと見てから雪夜に話しかけた。

「少し込み入った話があるんだけどさ」

と言って今度は沙織の方を向いて言った。

「二人つきりで話したいことあるから、沙織ちゃんはここで少し待っててくんない？」

「うん、いいよ」

雪夜は立ち上がり、麗慈とともに沙織の姿が見えるが声が聞こえない程度の場所に移動した。

麗慈は少し怒っているようだった。

「何で組織のヤロウがここにいんだよ」

「あの人が麗慈の言っていた組織の人だったんだでもさ、ボクは君から組織に追われてるとしか聞いてないし、組織がどんな組織なのかも知らなかった。ボクは君のプライベートには基本的に関わっていない。だから、あの人が組織の人間だなんて判断ができないと思うけど？」

雪夜は麗慈から『組織に追われてるから匿って欲しい』としか聞いておらず、組織のついての知識は全くなかった。今日、彪彦からスカウトされた時に魔導に関する組織らしいことを知ったくらいだ。「判断がどうこうなんっーのは関係ねえよ、何でいたのかを聞いてんだよ俺は！」

「ボクのことをスカウトに来たから、逃げるのに戸惑って仕方ないから一時的にここに封じ込めさせてもらっただけだよ」

麗慈の表情が変わった。彪彦と戦っていた時と同じ表情だ。

「ククク……おもしろくなってきた。だが、組織がおまえの能力に興味を持ったってことは俺の身も危ないな」

「だったら、早く逃げれば？」

「ククツ、そうもいかない。俺は紫苑って奴と決着をつけるためにあいつの近くで身を潜めてたんだ。組織から逃げるのはあいつと決着をつけた後だ」

「そんなライバルみたいのがいるんだ。あつちの世界で戦うのが不都合なら、この世界を使ってもいいよ」

「ククク……最初からそのつもりだ」

「まあ、がんばって」

雪夜は麗慈のやることに興味がないというわけでもないが、どちらかと言ったらどうでもいいのだ。麗慈に協力はするが、ほとんど傍観しているに過ぎない。

麗慈の表情がもとに戻った。

「ところで、何であいつがこの世界にいるんだよ？」

親指で麗慈は空をぼーっと見ている沙織を指した。

「沙織さんはボクの世界のお姫様に迎えようと思ったんだ」

「あいつに惚れたのかよ？」

「さあ？　ひとを好きになるって感情がボクにはわからない。でも、彼女の何かに惹かれた」

「そういうの惚れたっていうんじゃねえか？　まあ、俺もそういう感情を持ち合わせてねえからわかんねえけどな」

組織の中で問題児として扱われて来た麗慈は、持っている感情の多くが欠落しているか壊れていて、組織の手に負えないことが多く、牢獄の中に長い間、閉じ込められていたのだ。

麗慈の手が煌き、空間を切った。

「じゃ、俺はいつたんあつちの世界に戻るな」

「そう、じゃあね」

軽く手を振る雪夜に見送られ、麗慈は裂けた空間の中に飛び込んでいった。そして、空間の裂け目はすぐに閉じられた。

雪夜がベンチに戻ると沙織がビクリした顔をしていた。

「そんな顔してどうしたの？」

「今、麗慈センパイ消えたよね！？　もしかして、麗慈センパイも魔法使いだっただの？」

「そうだよ」

「すっごーい！　そうだ、沙織に魔法の使い方教えてよ、沙織にもできるって雪夜くん言ったよね？」

「魔法少女になりたいんだっけ？」

沙織は公園で雪夜に魔法少女になりたいようなことを言っていた。

沙織に魔導の才能があることを雪夜は感じたが、才能があってもすぐに使えるとは限らない。

瞳を輝かせて沙織は雪夜を見つめた。

「ねえ、どうやるの？ 早く教えてよぉ〜！」

「う〜ん、魔法は自分の得意な種類の魔法というのがあつて、例えばボクの場合は石を踊らせてみたり、こういう世界を創ったりするのが得意なんだ。沙織さんがどんな魔法が得意なのがわからないから、う〜ん、どうしようかな？」

雪夜の場合は努力も何もしないである日突然魔導が使えるようになったので、人にどう教えたらいいのかわからない。

「沙織も早く魔法使いになりたいよぉ〜！」

「待って、どうしたらいいか考えているから……」

「早く早く〜」

沙織は魔法を早く使えるようになりたくて小さい子供のように駄々をこねる。それに雪夜は困ってしまう。

「え〜と、そうだなあ、そうだ、いい考えが浮かんだよ」

「えっ、なにになにい？」

「まずはボクの力を借して沙織さんにこの世界に足りないものを補ってもらおう」

「どういうことお？」

「まずはボクの手を取って」

雪夜は沙織に手を差し伸べた。その手を沙織はぎゅっと握り締めた。

「次は目をつぶって」

「うん」

沙織は目をぎゅっと閉じた。

「最後はこのネバーランドを好きなように造り変えるんだ」

「どうやって？」

「想像するんだよ。こうだったらいいのになぁ〜って感じだね。できるだけ具体的に想像するんだよ」

「うん」

想像は得意だった。沙織は小さい頃から一人遊びばかりしていて、物語や世界を創造して遊ぶのが好きだった。

雪夜の目の前で世界が変わっていく。

アトラクションの形が可愛らしく変形し、テーマパーク全体がパステル調の明るい雰囲気になり、木々や花々が道の脇に生えはじめた。そして、最後に雪夜が足りないとの心の奥底で感じていたものが現れた。

乗り物に乗る者たちのはしゃぎ声が聞こえ、親子連れやカップルが道を歩いている。世界が華やいだ。しかし、それは全部人間ではなく可愛らしい動物たちだった。

雪夜はこの世界に虚しさを感じていた。だが、その問題は沙織によつて解決されたように思える。

ゆつくりと目を開ける沙織。

「うわあ、すごい、すごい！ みんな楽しそうでいい感じだよねえ？」

「うん、楽しい世界に生まれ変わったよ」

雪夜は沙織に向かって微笑んだ。それは自然に出た笑みだった。

この世界は沙織の力によつて生まれ変わった。だが、ただひとつ変わらなかつたものがある。

雪夜は遠くに聳え立つ城を眺めて呟いた。

「……やっぱり、あれだけはそのままか」

「どうしたのお雪夜くん？」

「いや、別に」

あの城は雪夜自身を象徴しているものなのだ。あれだけは雪夜にしか創ることができない城なのだ。雪夜が完成させようと思わなければ、いつまでもあの城は『未完成の城』なのだ。

雪夜はベンチに座りながら往来する動物たちを眺めた。みんな楽しそうだ。きつと、これが沙織の心なのだろう。だが、どうして沙織はこんな世界を創つたのか？

沙織の心を通して雪夜は自分の心を見ようとしたが、あまりよく見えなかった。だが、自分自身の心を直接見るよりは見えたような気がした。

「雪夜くんはどうしてこんな世界を創ったのぉ？」

「さあ？ どうしてだろうね。ボクもそれが知りたいよ」

何となく創り出したこの世界。きつと何となくでも意味はちゃんとあるのだろうが、雪夜にはそれがわからなかった。そして、それを知りたかった。

「雪夜くんって何かしたいことがあるの？ そうだ、雪夜くんの夢って何、教えて教えてよぉ！」

「夢？ そんなの考えたことないな。いや、待って、この世界とあつちの世界をごちゃ混ぜにしたいっていうのはあるけど、それって夢……かなあ？」

「それおもしろいよ、やろうよ、世界中をぜくんぶテーマパークみたいにするの」

別におもしろうそうだから雪夜はそれをしようと思ったのではない。向こうの世界を滅茶苦茶にしたかっただけだ。だが、雪夜は本当にそんなことがしたいのか、自分でもよくわからなかった。

雪夜にはすでに二つの世界を混ぜる計画を進めていた。

「実はね、このテーマパークとあつちの世界に新しくできるテーマパークをごちゃ混ぜにしようと思っているんだ」

「そんなことできるの？」

「まあね。クリスマス・イヴに開園するテーマパークがあるの知っている？」

「うん、ジゴロウランドのことだよな？」

「そうそう、そこそこを混ぜるんだよ」

クリスマス・イヴに開園するジゴロウランド。麻那が森下先生もらったチケットもそのテーマパークのチケットだった。

沙織は興味津々で本当に楽しそうな顔をしている。

「早くごちゃ混ぜにしちゃおうよー！」

「まだだよ、まだ開園してないから、開園と同時に混ぜるんだ。それがつましくいったら、徐々に世界全体を造り変えていく」

「ねえ、沙織もいろいろ造り変えたいよお」

「うん、二人で世界を変えよう」

そう言いながらも雪夜は自分に世界全体を変えられるだけの力があるのかわからなかった。このネバーランドの基盤を創り上げたのは雪夜の力だ。だが、もともとある世界を造り変えることが可能なのか？

そもそも世界というものは何によって創られているのか？

このネバーランドは雪夜の想像によって創造された世界だ。では、人間たちが住んでいるあの世界は……？

雪夜には疑問に思うことがあった。自分の創り上げたこのネバーランドは現実なのか幻なのか？

何をもって現実なのか幻なのか？

雪夜のつってこのネバーランドと向こうの世界を混ぜるというのは、答えを見出すための計画でもあるのだ。雪夜は世界の真理に近づこうとしていた。

物思いに耽っている雪夜に沙織は何度も声をかけていた。

「雪夜くん、雪夜くんつてばあ、聞いてるう？」

「あつ、なに？ ごめん、少し考え事してた」

「友達呼んでいいかなあ？ この世界に沙織のお友達も呼びたいの。友達という言葉聞いた雪夜は少し寂しい気分になった。今はこの世界で二人つきりで遊んでいたが、向こうの世界には沙織の友達がいる。」

「いいよ、沙織さんの友達なら歓迎するよ。何人でも何百人でも連れて来ていいよ。でもね、大人は駄目だよ。この世界に住む資格があるのは子供だけさ」

「うん、わかった。仲のいい久美ちゃんと麻衣子ちゃんを呼びたいんだ」

「ふん、どんな子たちなの？」

沙織は笑顔で二人の友達の話をはじめた。

「小学生の時から三人いつも一緒に遊んでいたの。星稜中学に入学するの、麻衣子ちゃんが星稜受験したっていうから、沙織と久美ちゃんて勉強したりしたんだよ。久美ちゃんはね、結構口がキツイんだけど、本当はすごく優しいの。麻衣子ちゃんはしっかり者で頭がスゴクいんだよ。でねでね、二人ともスゴクカワイイんだよお」
楽しそうに友達の話をする沙織。それを温かい眼差し見つめる雪夜。

「ボクもその二人と仲良くなれるかな？」

「うん、沙織とお友達になれたんだから、久美ちゃんと麻衣子ちゃんともお友達になれるよ！」

「そうだといいいね」

雪夜は自身がなかった。沙織には自分と同じものを感じたからこそ仲良くなれたが、沙織の友達だからといって友達になれるかというそれは別の話だ。

未完成の城（9）

町外れにある巨大な倉庫の中に亜季菜声が響き渡る。

「交渉決裂ね！」

そう言いながら亜季菜は札束の入ったブリーフケースを閉めた。

亜季菜はこの場所で翔子に説明した『貿易』をしている最中だった。だが、たった今、決裂した。

十数人の高級スーツに身を包んだ男たちが目の前にいる二人を睨み付けた。殺伐とした空気が辺りを包み込む。

睨み付けられた当の本人である亜季菜ともう一人の人物は怖気づく様子はない。このようなことはいつものことだ。亜季菜は横にいる人物とともに数々の修羅場を掻い潜って来ていた。

亜季菜の横にいる人物は大きな鎧のある黒い帽子を被り、黒いインバネスを纏い、全身は全て闇色に包まれている。ただ一箇所を除いて。

闇色の中に白い仮面が浮かんでいた。

異様な雰囲気のある人物であるが、亜季菜の護衛としてその筋では有名な人物だ。

帰ろうとする亜季菜の背中に一斉に銃が向けられた。これもいつものことだった。

次の瞬間、閃光が走った。宙を拳銃を持った男たちの腕が舞った。紫苑の妖系が放たれたのだ。

男たちの両足が切り飛ばされ、発狂死した男たちが地面に転がった。辺りは血の海と化した。おぞましい光景だ。

亜季菜が急に怒り出した。

「スーツに返り血が飛んで来たじゃないの！」

「近くにいるからだ」

紫苑は空間を切り裂いた。

裂かれた空間は唸りながら周りの空気を吸い込み、巨大化してい

った。

空間にぼつかりと開かれた先の見えない闇の中に何かいる。亜季菜の背筋に冷たいものが走り、彼女は耳を強く塞いだ。聞きたくない！

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

腕を伸ばし紫苑が高らかに命じた。

「行け！」

裂けた空間から 闇 が叫びながら飛び出した。

闇 が唸り声をあげると、地面に散乱していた死体は一滴の血も残さずに 闇 に呑み込まれ、 闇 は空間の裂け目に還っていた。

これならばここで殺人があつたなど誰も思わないだろう。

「帰るわよ、翔子ちゃんがお待ちよ〜ん」

亜季菜の態度もここで『何か』あつたとは思えない態度だったが、彼女は心の中では恐怖していた。いつ聞いても、いつ見てもあの 闇 は慣れるものじゃない。彼女がこの世で一番恐いと思うものはあの 闇 であつた。

何度も目の前で紫苑の技を見ている亜季菜であるが、それが何であるかを正確に認識しているわけではない。あんな恐ろしいものことなど詳しく知りたくもないのだ。

二人が倉庫を出ると亜季菜専属の運転手であり右腕の高橋宗太が出迎えた。リムジンもちゃんと用意されている。

素晴らしいタイミングで開かれたドアの中に亜季菜と紫苑は滑り込んだ。

走り出した車内で紫苑は帽子を取り仮面を外した。これが紫苑から愁斗に戻る瞬間である。

「早くマンションに帰ろう」

「実はもうひとつだけ仕事があるのよね」

「嫌だ」

愁斗は即答した。だが、愁斗はその権利が自分がないことを知っている。亜季菜には返しきれない恩がある。

亜季菜は缶ビールを飲みながら気軽な感じで言った。

「次の仕事は簡単だから大丈夫よ」

「何度その『大丈夫』という言葉に騙されたことか……」

亜季菜は大丈夫と言う言葉を裏返しの意味で使っているのではなく、大丈夫でないことの割合が多いだけのことだ。

だいぶ長い時間を走ったリムジンはビル街に入り、ある巨大ビルの前で停車した。有名な上昇企業のビルだ。

ビールをまだ飲み続けている亜季菜は完全に酔っ払った口調で命じた。

「この社長がターゲット」

亜季菜はノートパソコンの液晶画面に指をぐりぐりと押し付けた。そこには有名な社長の顔がある。すぐそこにあるビルの社長だ。

ターゲットを確認した愁斗の指がしなやかな動きを見せた。

妖系は開けられたリムジンのドアを抜けて、どんどん途絶えることなく伸びて行く。

地面を這いながら妖系は聳え立つビルの中に入って行った。

妖系は誰にも気づつかれることなくロビーを抜けて、そのまま非常階段を抜けて最上階まで上がった。

長い廊下を抜けて妖系は社長室のプレートが取り付けられた扉の前で一度止まった。

ビルの外に止まるリムジンの車内にいる愁斗の指が再び動かされる。

ドアの隙間から室内に妖系が進入する。まず、秘書たちがいる部屋がある。ここには三名の秘書がデスクに座り業務をこなしていた。

どれも美人揃いの秘書のひとりに妖系が絡みついた。この瞬間、この秘書は自らの意思で身体を動かすことも、声を出すことも封じられ、傀儡と化した。

妖系で操られた秘書が突然立ち上がり、社長のいる部屋のドアを

ノックした。すると中から社長の声がした。

「入りたまえ」

「失礼します」

と挨拶をしながら、秘書はドアを静かに開けながら中に入った。

ドアを閉め終えた秘書はお辞儀もせずいきなり無表情のまま社長に襲い掛かった。

「な、何をするんだ！」

社長が大声を上げると残り二人の秘書たちが室内に飛び込んで来た。だが、その時にはすでに社長はか細い手から想像もできない力で秘書によつて首を締め上げられてしまっていた。

「ぐぐ……」

泡を吐いて白目を剥いた社長から力が抜け、首を絞めていた秘書は昏倒した。

床に倒れる二人を見て、二人の秘書は血相を変えて顔を見合わせた。この瞬間、妖糸が切られた。

愁斗がゆっくりと告げた。

「終わった」

ビルの外にいたりジムジンがゆっくりと走り出した。焦る必要はない

証拠は何もないのだから。

亜季菜は新しいビール缶を開けて愁斗に手渡そうとした。

「祝杯よ、飲みなさい」

「いつも言ってますけど、僕は未成年ですから」

「ああん、連れないわねえん」

完全に酔っ払った亜季菜は美しく伸びた脚と腕を愁斗の身体に絡めて来た。

「怒りますよ」

そう言いながらも愁斗の表情は怒りではなく無表情だった。こちらの方が恐いかもれない。

「怒った愁斗くんも素敵よあ〜」

「高橋さん車を止めてください」

リムジンはすぐに道路の脇に停車した。

「僕、歩いて帰ります」

亜季菜の身体を振り払って愁斗はリムジンを降りた。すると亜季菜に有無を言わせぬまま高橋によってアクセルが踏まれ、リムジンは走り去ってしまった。

辺りを見回した愁斗の目に地下鉄の入り口が入った。

ここから愁斗のマンションまではだいぶ距離がある。電車を使わなければ帰れない距離だ。

迷わず愁斗は地下鉄を利用することにした。

地下に下った愁斗は券売機の前に立って、ある重大なことに気がついた。

「財布を持っていなかった」

以外にズボラな愁斗だった。

未完成の城（10）

行き詰まりを覚えていた調査の情報を得た撫子はマンションを飛び出した。

彪彦から何も情報をもたらっていなかった撫子は情報収集に苦労していた。そこへ組織からの電話があり、翔子を帰らせて家を飛び出したのだ。

「にゃ〜もう、忙しい〜！」

撫子の向かっている場所は雪夜の家であった。撫子の住むマンションからはそう遠い距離ではないが、走っている撫子には長い道のりだ。全く余裕で息を切らせる様子がないのは撫子が普通の女子中学生ではないからだ。

しばらくして、前方から撫子の知り合いが歩いて来るのが見えた。それは奇妙な体験をして来た麻那と隼人だった。

撫子は急いでいたがいちよう挨拶をする。

「にゃば〜ん！ こんにちはお二人さん」

そのまま撫子を通る過ぎようとすると、麻那の手が素早く動いて撫子の背中を捕らえた。

「待ちなさいよ〜！」

「うがっ！ にゃに？ アタシマツハで急いでるんですけどお〜！」

「いいから、あたしのお話を聞きなさい！」

出遭った途端に怒られて撫子は露骨に嫌な顔をして見せた。

「ぶう〜、横暴だあ〜」

「いいものあげるから手を出しなさい」

「いいもの〜！」

撫子の目がキラキラと輝いた。

麻那はバッグから二枚のチケットを出して撫子の手のひらに置いた。あのテーマパークのチケットだ。

「はい、大事にしなさいよ」

「爆マジ!? ってこれって隼人センパイとラヴラヴデートするた
めのじゃにやいんですかあ?」

鋭い撫子の私的に異様に麻那は動揺して顔を真っ赤にしながら怒
りだした。

「そ、そんなことないわよ! あたしと隼人がデートって、付き合
つてもないし、こんな頼りない優男なんて……その、もういいから、
黙って受け取りなさいよ!」

「ほい、黙って受け取って置きまゝす」

麻那がチケツトをあげた理由は隼人との相談の結果だった。二人
は当分の間、テーマパークには行きたくない気分で、あの出来事は
二人の中でなかったことにしようと思ったのだ。そこで、誰かにチ
ケツトを譲ろうとということになり、たまたま出会った撫子にチケ
ツトをあげたのだ。

チケツトを偶然にも手に入れた撫子はあるセリフを言ってから急
いで逃げた。

「お二人とも、お幸せにい〜!」

「違っつて!」

麻那の声を背中に浴びながら撫子は走った。

もらった二枚のチケツトを見ながら撫子は独り言をしゃべる。撫
子は独り言が多く、それは呟くというレベルではなく、普通のしゃ
べる声の大きさを独り言をしゃべる。

「このチケツトどうしょ!。これペアチケツトでしょ、アタシ一緒
に行く恋人にやいよ……あつ、翔子にあげて愁斗クンとのラヴラ
ヴデート大作戦に役立ててもらおう」

走り続けていた撫子はようやく雪夜の家に着した。

雪夜の家は住宅街のどこにでもあるような二階建ての一軒家だっ
た。

家を見回した撫子は何とも言えない感じを家から感じ取った。

「爆魔導波っ!」

普通の人にはわからないが、この家はもの凄い悶々と魔導を辺り

に撒き散らしていた。きつとこの辺りは事故などが多いに違いないと撫子は思った。

家の敷地に足を踏み入れただけで撫子の身体に静電気みたいなものが走った。

撫子は魔導士ではないが、魔導を感知する能力に関しては普通の魔導士よりも高い。だが、このように大きな魔導が渦巻く場所ではそれが仇となってしまう。撫子は魔導を感知する能力には優れていても、それに対する耐性は感知能力に見合っていないのだ。

玄関のドアにかけた撫子であったが鍵は開いていない。当然と言えば当然だ。

「ここで一発、撫子ちゃんマジック！」

撫子は人間とは思えないほどのジャンプ力で一気に二階の屋根に上った。そして、すぐにベランダに忍び込んだ。

窓は閉まっているが鍵が開いているのが見える。撫子はニヤニヤしながら窓を開けた。

が、窓を開けた瞬間、撫子は後ろに吹き飛ばされそうになった。家の中から外に魔導を含んだ空気が一気に流れたのだ。

家の中に入った撫子は驚愕するとともに、自分の行動が迂闊だったことに気がついた。

入って来た窓がない。それどころか窓越しに見た部屋の中とは全く違う部屋なのだ。

部屋の中は普通の家の中といった感じで、家具などが置いてあり生活観に溢れている。だが、撫子は息苦しさを感じた。

「うげうげえ〜」

撫子はヨロウロしながら歩き出し、雪夜の部屋を見つけに歩き出した。

どうやら撫子が現在いる場所は居間のようだった。

襖を開けて次の部屋に入った撫子は頭を抱える動作をしてうずくまった。

「烈にゃんじゃこりゃ〜！」

撫子のいる場所はトイレだった。居間の襖を開けてトイレに行くなど普通の家ではありえない。

「トイレに行きたいかじゃあって気持ちはあったけど、こういう展開は予期せぬ展開だよ。と思いつつも少しトイレタイム」

しばらくして水の流れる音が聞こえて撫子がトイレから出て来た。だが、ここはバスルームだった。

もう出す声もなかった。ということもなく、撫子は間を置いて叫んだ。

「にゃーっ！」

怒りを露にしながらも撫子はこういう時のためのマニュアルを思い出した。

撫子は浴槽に水が張ってあるのを確認すると、勢いよく飛び込んだ。

大きな水しぶきを上げて撫子の姿が水の中に沈んだ。次の瞬間、撫子は天井からベッドの上に落っこちた。水の中が別の場所に繋がっていたのだ。

全身ずぶ濡れの撫子は身体をぶるぶると震わせて水しぶきを辺りに撒き散らした。

「絶対アタシはこの家におちよくられてる」

ベッドのシーツを剥ぎ取ってタオル代わりにして全身を拭き、撫子はもう一度全身をぶるぶると振るわせた。

どうやらここは寝室のようで、ベッドが二つ並んで置いてある。

部屋にはドアは一つしかない。だが、撫子は迷わず窓を開けて外に出た。

窓は横開きであったはずなのに、なぜか撫子は冷蔵庫の冷蔵室から中から出て来た。

次に撫子は迷うことなく冷蔵庫の野菜室に入った。

撫子は住宅街のど真ん中のマンホールから這い出て来た。

辺りを見回す撫子。ここは普通の住宅街ではなく、おもちゃのブロックで作られた住宅街だった。ブロック一つ一つの大きさも通常

では考えられないほど大きい。

「うっそ〜、爆マジ!? もう、いい加減にしてよお〜」

撫子は心身ともにどっと疲れてしまって、プラスチックの地面にへたり込んだ。そして、そのまま背中から地面に寝転んだ。

空は青かった。だが、本物の空ではなくて、天井を空色に塗りつぶしたように見える。

「目的の部屋にはいつ辿り着けるんだろうか……しみじみ撫子ちゃんでした」

ここで撫子はある重大なことに気がついた。

「てゆうか、外に出れるの!?!」

このまま迷い続けたら、目的の部屋に着けないどころではなく、一生外の世界に出られないかもしれない。

「にははは〜、切実な問題だねえ〜」

撫子は完全に力尽きて目を閉じた。もう、どうでもよくなっちゃったのだ。

しばらくして、パトカーの音が聞こえて来て撫子は飛び起きた。

道の先からおもちゃのパトカーを大きくしたような車が走って来る。

「アタシだよね!?!」

撫子は逃げた。パトカーはその撫子を追って来る。

偽物のパトカーとはいえ、時速は八〇キロメートルを越えていた。だが、撫子の全速力もそれに負けず劣らずで、パトカーとの距離は広がりも縮みもしなかった。

撫子は電柱によじ登った。次の瞬間、パトカーが電柱に衝突して電柱を揺らした。

「爆マジですか!?!」

壊れたパトカーからおもちゃのブロックに付属していそうな警官の人形が二体出て来た。それも普通の人間サイズだ。

警官は拳銃を撫子に向けた。

「まっさかねえ〜」

まさかではなかった。拳銃が火を噴いたのだ。さすがの撫子でも銃弾は避けきれず、左肩を銃弾が貫通した。左肩から血を出しながら撫子は地面に落下し、両手を付きながらどうにか着地した。

空かさず銃弾が撫子に浴びせられる。

アクロバティックな動きで撫子は銃弾を交わしつつ、バク転をしながら塀を越えた。

庭に逃げ込んだ撫子を追って警官がすぐに駆けつけて来る。

「しつこいオトコは嫌われるよぉん！」

撫子は軽やかに飛び上がり家の屋根に上って、足を止めることなく屋根から屋根へとぴょんぴょん飛び移って行く。

どうやら警官は追って来れないようだ。だが、安心するのはまだ早かった。

撫子の耳がびくびくと動き、上空を飛んで来るものを感知して、それが飛んで方向を来る勢いよく振り向いた。

「爆マジですか奥さん！」

おもちゃのヘリコプターが撫子に向かって来ていた。もちろんサイズは本物と変わらない。

重装備のヘリコプターからロケットランチャーが発射された。

シューンと風を切る音を立てながらロケットランチャーが撫子に向かって来る。撫子は叫ぼうと思ったが、そんなことをする暇などなく、急いで地面にダイブして足を止めることなく逃げた。

爆音と爆風が撫子を背中から吹っ飛ばした。

「にゃ〜っ！」

地面に放り出された撫子の背中では少し焦げていた。

撫子は息つく暇もなく立ち上がって逃げた。

ヘリコプターからは機関銃が発射され、地面に穴を開ける。撫子だから避けられるのであって、普通の人間に避けることは不可能だ。道路を走る撫子の背中からは銃弾が追って来る。

突然、銃声が止んだかと思うと、撫子は別の場所にいた。今まで

いた世界の境目を抜けたのだ。

地面は発泡スチロールできていて土色に塗られている。周りには廃墟と化したビルがあり、煙が立ち昇っている場所もある。

巨大な影が撫子を呑み込んだ。それは人型をしているが人の巨人の影ではない。

撫子が後ろを振り向くとそこには巨大ロボットいた。頭頂高約一九メートル　撫子の身長約一三倍だ。

「爆裂サイター！　もう撫子ちゃんは脳天爆発でいっちょやってみつか！」

ロボットは撫子を踏み潰そうとしたが、撫子はそれよりも素早く動いてロボットの足をよじ登った。

撫子は鋭い爪でロボットの足を引っ掻いた。すると、ロボットの中身が見えたのだが、中身は空っぽであった。まるでプラモデルの内部のようであった。

ロボットは撫子を捕まえようと手を伸ばしてくるが、撫子はロボットの身体中を移動して魔の手から逃れた。だが、ついに撫子は捕まった。

大きなロボットの手に摘まみ上げられた撫子はそのまま地面に放り投げられた。

空中で回転しながら撫子は地面に華麗に着地した。けれども、足が発泡スチロールの地面に埋もれてはまった。

「うっ……… 抜けない」

足が抜けなくて悶える撫子の頭上に、ソードと思われる巨大なプラスチックの棒が振り下ろされようとしていた。

「にゃーっ！」

足がどうにか抜けて、そのまま撫子は横に転がって逃げた。すると、撫子のいた場所にソードが振り下ろされて、発泡スチロールがへこんだ。

「うん、逃げよう」

撫子は全速力で駆けた。後ろからソードを振り回しながら追って

来るロボットになど目もくれずに走る。

この世界の境を撫子は飛び越えた。

気がつくとも撫子は子供部屋にいた。どうやらやっと目的の場所に辿り着いたようだ。

この子供部屋にはブロックで作られた町やプラモデルのジオラマセットが置いてあった。それを見た撫子はため息を落とした。

「こんにゃとここで大冒険してたのか……バカらしい」

撫子が先ほどまでいた場所は子供のおもちゃの中であったのだ。机の上に置かれているパソコンに撫子は注目した。

パソコンの前に座った撫子はパソコンの電源を入れようと手を伸ばした先にあるものを見つけた。それは開かれた雑誌に付けられた赤丸印であった。

雑誌を手を取った撫子は印の付けられた記事に注目した。

「にやるほどねえ」

撫子はポケットに手を突っ込んで麻那からもらったチケットをまじまじと見た。印の付けられた記事に書かれている内容は、撫子が今手に持っているチケットのテーマパークのものだった。

雑誌を置いた撫子は改めてパソコンを起動させた。

まず撫子はデスクトップ画面に何かがないか調べた。するとWebページのショートカットアイコンがあったのでクリックしてみた。すると、先ほどのテーマパークのホームページにアクセスされたではないか。

「にゃんか、気ににやるにゃん」

撫子の鋭い勘がこのテーマパークに何かがあると訴えている。

テーマパークのホームページに一通り目を通した撫子は、他にも何かがないかパソコンの中を調べはじめた。

「にゃんかとヒット！」

撫子は日記を見つけた。この中には何か重要は手がかりがある可能性が高い。

日記を開こうとしたのだがパスワードを要求されてしまった。

「うつそ〜、爆マジ!? そんなにやの聞いてにやいよお」

と言いながらも撫子の指は異常な速さで動き、パスワードを入力することなく簡単に日記を開いてしまった。

日記は数年前から書かれているらしく、撫子は最新のものから読んでいくことにした。

撫子の表情が曇る。

日記の内容はネガティブな思考をだらだらと書き綴ったものが多く、読んでいるとだるくて気分が沈んでくる。

「おおっと!」

撫子は元気を取り戻して画面に食いついた。日記の文中に先ほどのテーマパークの名前が出て来たのだ。しかも、興味深い内容が書いてある。

このテーマパークとボクの作ったテーマパークを融合させてみたいと思う。そうすれば、ボクが常日頃から抱いていた『世界』についての謎が解けるような気がする。

「美少女名探偵撫子ちゃんの頭にビビツとひらめきがキラリ〜!」

他の日記を読むのがだるかった撫子は、このテーマパークに的を絞って今後の調査をすることに決めた。

撫子は日記の内容をネットを介してどこかに送り、次にハードディスクをフォーマットした。つまり、パソコンの中に入っていたデータを全部消してしまった。そして、極め付けに本体を分解しはじめて、中身のハードディスクを自慢の爪で壊した。

ひと仕事終えた撫子は腕を天井に向けてめいっばい伸ばして息を吐いた。

「よし、帰るか」

撫子は椅子から立ち上がり意気揚々とドアを開けて外に出た。

「……………あっ」

トイレに出てしまった。

「しまったーっ!」

便器に腰掛けて撫子はどっと肩を落とした。

未完成の城（11）

夜になってどうにかしてマンションに戻って来た愁斗を出迎えたのは、だいぶ前に帰って来た亜季菜と夕食をともししている翔子だった。

「あら、遅かったわね愁斗くん。どこ行ってたの？」

わざとらしく聞いて来る亜季菜に対して、愁斗は適当に答えた。「散歩です」

疲れた様子で愁斗はソファに座った。その前のソファテーブルには特上寿司が置いてあった。

「亜季菜さんどうしましょう、愁斗くんの分がないですよ？」

寿司は一つも残っておらず、残っているのはガリだけだった。

口をもぐもぐさせながら亜季菜はまたわざとらしく言った。

「可笑しいわね、三人前注文したはずだったのに……どこに消えたのかしら？」

それは亜季菜と翔子の腹の中に消えたのだろうか、愁斗は何も言わなかった。

亜季菜はケータイを取り出して愁斗に恩着せがましく言った。

「しょうがないから愁斗くんのために追加注文してあげましょうねえ」

「いいません」

はつきりと断った愁斗に亜季菜は少しムカツと来た。

「その態度はなあに？」

「走って疲れているので食欲がないんです」

これは本当だった。愁斗は走って自宅まで帰って来たのだ。

亜季菜は少し驚いた顔をしていた。

「あそこから走って帰って来たの!？」

「そうですよ」

「バツカじゃないの、それってスツゴイことなのに全然スゴク聞こ

えないのは何でなのかしらね」

亜季菜は愁斗のことをチクチク苛めるのが好きらしい。

翔子は壁に掛けてある時計の針を見た。夜の八時を少し過ぎてい
る。

「私もう帰りますね」

立ち上がった翔子の腕を亜季菜が引つ張って強引に座らせた。

「あら、今日は止まっていくんじゃないのかしら？」

「そんな、迷惑になりますから」

亜季菜の目が妖しく輝き部屋の隅に置いてあるスポーツバッグを
見た。

「あのバッグは何が入っているのかしらねえ、と言いつつ、さっ
き翔子ちゃんがトイレに入っている時に物色させてもらっていたり
するのよねえ」

亜季菜の物色したバッグは翔子が持つて来たスポーツバッグだっ
た。

バッグを物色されたことを知った翔子は顔を真っ赤にした。

「ひ、ひどいですよ、プライバシーの侵害です！」

「ええっと、着替えに、バスタオルにドライヤーと歯ブラシ、それ
からマンガもあつたかしらね」

イマイチ状況が呑み込めない愁斗はこんなやばな質問をした。

「何でそんな物を持つて来たの？」

「……そ、それはつまり」

「お泊りするために決まってるじゃないの」

亜季菜に答えを言われてしまった。愁斗何の疑問も抱かずに亜季
菜の言葉に納得した。

「そうなんだ、なら帰ることないね。今日はうちに泊まるといいよ、
瀬名さんのご両親は旅行中なんだしさ」

旅行中という単語を聞いて亜季菜の目が光った。

「翔子ちゃんのご両親お出かけしてるのね。で、どのくらいの期間
？」

この質問に何の疑問も抱かずに翔子は正直に答えてしまった。

「今日から一週間ですけど……？」

「あら、それは大変ね。そういうわけで一週間の間うちに泊まる」と決定ね」

翔子が声も出せずに驚き、愁斗もこれには驚いた。

「亜季菜さん、頭平気ですか？」

「自慢じゃないけど頭はいつもイッチャってるわよ。というわけで翔子ちゃんは明日家に帰って一週間分の着替えを用意してくるよ。翔子ちゃんがいいなら、一年分の着替えでもいいのよ」

これは愁斗と翔子の仲を歓迎しているのか弄んでいるのか、どちらなのだろうか？ 恐らく後者だろう。

冷めたばかりの顔を再び真っ赤にした翔子は立ち上がった。

「ちよつとトイレに行つてきます」

翔子は走つて逃げた。

亜季菜は不敵な笑みを浮かべる。

「トイレに逃げ込むっていい手ね」

「亜季菜さん、僕たちのことから楽しんでますか？」

「あたしの趣味に口出ししないでよ。でもね、あの娘のことあたし気に入っちゃった。だから、別れたらあたしが承知しないわよ」

これは亜季菜の心からの祝福の言葉であった。亜季菜は嬉しそうに微笑んでいる。

真剣な顔で愁斗はうなずいて見せた。

「僕は一度だけ彼女のことを守れませんでした。でも、次は絶対にありません。僕は彼女を守ってみせますから」

「……そういう歯の浮くセリフよく言えるわね、聞いているこっちが恥ずかしくなるわよ」

「……そういう風に言われると僕も恥ずかしくなります」

はにかむ愁斗の瞳に翔子が戻つて来るのが映った。まだ翔子の顔は赤い。

「この部屋暑くないですかあ？」

顔をパタパタと仰ぐ翔子に対して亜季菜は言う必要もないのにわざわざ言う。

「エアコンの設定温度は適温になってるわよ」

「わかってますよそんなの、亜季菜さんに言われてエアコンつけたの私ですから」

翔子の心に火が点いた。この小姑のような亜季菜とうまくやっていかなくは愁斗との関係はうまくいかない。

呼吸を整えて再びソファに座った翔子は何を言おうとしたのだが、亜季菜に先手を打たれてしまった。

「ところで二人はキスとかしたの？」

「してませんよ！」

翔子は激しく反論したが愁斗は無言だった。翔子はその時、意識がなくて知らないだろうが、翔子は愁斗とキスを交わしている。翔子を傀儡として蘇らせる時に愁斗は翔子にキスをして目覚めさせたのだ。

「してません、してません、してません！　ねえ、愁斗くんも亜季菜さんに言っちゃってよ！」

「……ごめん、した」

「えっ!？」

そんな記憶ないと翔子は思った。そんな大事なことを忘れるはずがない。ありえないことだ。

パニック状態になった翔子は愁斗に詰め寄った。

「したってどういうこと!？　いつどこで誰が？　ウソでしょ、ウソだよな？」

翔子に肩を揺さぶられながら愁斗は首を横に振った。

「瀬名さんの意識がない時にキスしたんだけど、それは」

「いいよ、聞きたくない、そういうのズルイと思う。私が寝てる時とかにこっそりキスしたんでしょ、卑怯、スケベ、エッチ、まさか愁斗くんがそんな人だとは思わなかった、ばかあ！」

「寝てる時……じゃなくって」

「言い訳なんか聞きたくないよ！」

翔子は愁斗が止める暇もなく家を飛び出して行った。

啞然とする愁斗に亜季菜は追い討ちを掛けた。

「あゝあ、泣いて出て出ちゃった。二人の初キッスを相手が寝ている時に奪うなんてサイテーね」

「だから違いますって！ 人の話をちゃんと最後まで聞いてくださいよ」

「はいはい、言い訳はいいから早く追いかけてあげなさいよ」

愁斗はそれ亜季菜に反論するのを止めて急いで翔子を追いかけた。

翔子には愁斗の妖系がいつでも巻きつけてあった。それを使えば証拠の意思と関係なく、自分のところへ引き戻すことが可能なのだが、愁斗もそこまでやばなことはしない。

翔子に絡み付いている妖系はどんどん伸びて行く。愁斗が全色力で走ればすぐに翔子に追いつくことができたが、愁斗はそれをせずに翔子が走るのを止めてどこかに辿り着くのを待った。

妖系が翔子が止まったことを愁斗の指先に伝えて来た。それを確認した愁斗は安心して走るのを止めて歩き出した。今すぐ翔子に会っても彼女の気がまだ静まっていなだろうと判断したからだ。翔子にもいろいろと考える時間が必要だろうと思いい、それは自分にも必要だと愁斗は思った。

愁斗は夜空を見上げながらゆっくりと歩いた。彼の心にはもやもやしたものがあつた。だが、それが何であるかわからなかった。

最近の自分は少し変だと愁斗は思う。それは星稜中学に転校して来てからだ。そう、具体的に言うと翔子と出逢った頃からだ。

愁斗は父 秋葉蘭魔とともに組織から逃げ出した後、いろいろな人々の心を観て来た。だが、観て来た感情の中でも人を想うという感情は翔子と出逢ってから愁斗の心に芽生えたものだった。

翔子は自宅の玄関でひざを抱えて座っていた。

愁斗は優しく声をかけた。

「瀬名さん」

ゆっくりと顔を上げた翔子はすでに泣き止んだ後のようだった。

「何で追いかけて来たの？」

追いかけて来ることをどこか期待していたのにも関わらず反発してしまった。

「どうしてって言われても、心配だったからとしか答えられないよ」「わかってるよ、そんなの……」

愁斗は翔子の横にゆっくりと座った。

「こんなところにいると風邪引くよ」

「それもわかってる、だって家のカギ愁斗くんちに置いて来ちゃったんだもん」

「翔子ちゃんらしいね」

「それってばかにしてるの!？」

怒った翔子を見て愁斗は微笑んだ。

「少し元気になった？」

「ならない!」

翔子は顔を伏せてしまった。

星を眺めて愁斗が黙っていると、顔を伏せながら翔子は小さな声で話しはじめた。

「どうしてキスしたの？」

「だからね、寝ている時っていうのは誤解で……」

口ごもる愁斗を翔子はちらつと見た。

「どうしてそこで口ごもるの？」

翔子を傀儡として蘇らせたこと、それが正しい行いだっただけの愁斗にはまだ判断できていなかった。

他の傀儡と違って翔子は人間の感情がある。傀儡に感情を与えたのは初めてのことであり、唯一の成功例だった。もう一人の感情は未だ愁斗の力では戻すことができていなかった。

だが、一度死んだ人間をこの世に呼び戻すことは正しい行いだっただけか？

同じ問いが愁斗の心を回り続ける。

あの時は感情に任せて翔子を躊躇うことなく蘇らせた。身体は翔子のものと使ったとはいえ傀儡であることには変わりない。

「僕は、瀬名さんを傀儡として蘇らせた……その時に僕の魔導力を分け与えるために口移しをしたんだ」

「……傀儡」

傀儡になる前と今の翔子は何も変わっていないのと同じように見える。だが、翔子の心臓には魔導の源が埋め込まれ、胸には契約を交わした印が刻まれている。

翔子は服を脱いだ時にいつも胸にある印が気になってしまいが、それ以外の時は自分が傀儡である実感はない。普通の人のように普通の生活を送っている。

「愁斗くん、傀儡って何なの？ 私自分でもあまり実感が湧かないんだけど傀儡なんだよね？」

「ああ、瀬名さんは僕の傀儡だよ。傀儡は傀儡師の道具であり、武器だ。敵と戦い傀儡師の代わりに朽ち果てる運命なんだ……でも、瀬名さんは違う、瀬名さんには人間の感情がある、ただの道具なんかじゃない」

「私は人間だよ、瀬名翔子、十四歳のどこにでもいる中学生。自分でそう思ってるからそれでいいよ」

「瀬名さん……」

「キスのことは許してあげるね。でも、それはなかったことにして、これが……」

翔子の唇が愁斗の唇に軽く触れてすぐに離れた。

「こっちが二人の初キスってことにしようね」

「あ、うん」

「愁斗くんち帰ろう！」

翔子はドキドキした気持ちを抑えながら愁斗の手を握んだ。

立ち上がった愁斗は彼にできる最高の微笑で翔子の顔を見つめた。

未完成の城（12）

結局、翔子は愁斗宅で一晩を過ごすこととなったのだが、寝る場所がないということで亜季菜と一つのベッドで寝ることになってしまった。

「く、苦しい……」

朝、翔子が目を覚ますと彼女の身体は亜季菜の腕や脚によって拘束されていた。

翔子は自分に絡みついた亜季菜の身体を丁重に外した。そして、相手を起こさないように慎重にベッドから起きた。

「逃げる気！」

翔子の身体がビクッと震えて、心臓がぎゅっと驚掴みにされたような感覚を覚えた。

身体をカクカクさせながら翔子が振り返ると、亜季菜は寝返りを打ちながら安らかに眠っている。

「……寝言か」

安心した翔子は忍び足で移動してドアノブに手を掛けたその瞬間！
「逃がさないわよ！」

思わず翔子はドアノブから勢いよく手を離れた。そして、再び後ろを振り向くと、やはり亜季菜は眠っていた。

「……また寝言か」

今度こそ部屋の外に出ようと翔子がした時、
「翔子ちゃん！」

ビクッと震えながらも翔子が振り向くと、亜季菜が脚を組みながらベッドに座っていた。

「おはよう、翔子ちゃん」

「お、おはようございます」

「やっぱり翔子ちゃんはからかい甲斐があるわね」

「……寝言じゃなかったんですか？」

「そつよ」

亜季菜は翔子よりも先に起きていたのだ。これから先も翔子は亜季菜にからかわれ続けるに違いない。

これ以上からかわれないうちに翔子は部屋を出ようとしたのだが、亜季菜の攻撃は止まらなかった。

「そつだ、寝言を言うのは止めた方がいいわね」

「……私、寝言なんて言っていましたか？」

「愁斗クン愁斗クン愁斗クンって連発してたわよ」

「本当ですか？」

慌てはじめた翔子を見て不敵な笑みを浮かべる亜季菜はさらっと呟いた。

「嘘よ」

翔子は無言で部屋を足早に退室した。

ダイニングに翔子が入ると、ダイニングキッチンからいい匂いがして来た。ここでは愁斗が朝食の準備をしていた。

「おはよう瀬名さん」

「うん、おはよう」

「亜季菜さんと一緒によく眠れた？」

愁斗の質問に翔子は首を横に振って答えた。あの亜季菜が簡単に寝かせてくれるはずがなかった。逃げようにも逃がしてくれなかったのだ。

翔子の表情を見て全てを見通した愁斗はうなずいた。

「ごめん、後で僕から亜季菜さんちゃんと言っておくから」

「ありがとう」

「もうすぐ朝食できるからそつちで座って待ってて」

「うん」

ぼーっとしながら翔子がくつろいでいるとテーブルの上に朝食が運ばれて来た。

「あ、私も何か手伝う」

「いや、もう全部運び終わっちゃったよ」

「ああ……ごめん」

テーブルの上にはトーストやサラダが置かれていたが二人分しかないようだ。亜季菜の分がないのだろうか？

「愁斗くん、亜季菜さんは食べないの？」

「あのひと、朝食は食べないひとだから。それに生活が不規則だから、頼まれない限りはあのひとの分の食事は作らない」

「もしかして、毎日愁斗くん自分で食事作ってるの？」

「まあね、誰も作ってくれるひといないから、必然的にね」

作ってくれるひと、という言葉に翔子は反応して、自分が作ってあげたいと思っただが、翔子は料理ができなかった。

朝食をとり終えて翔子が皿などをキッチンに運ぼうとすると、愁斗が立ち上がって自分の皿と翔子の皿をまとめてトレイに乗せた。

「僕がまとめて運んでいくから」

「じゃあ、洗い物する」

「いいよ、僕がやっておくから」

「じゃあ……」

翔子は何か手伝いをしないと悪い気がしてしまっているのだが、何もすることが見つからなかった。

「私、一度家に帰って荷物持って来るね」

「気をつけてね」

愁斗の笑顔をもらった翔子はさっそく着替えを済ませて出かけた。家に一度帰って着替えなどの荷物を持って来る。つまり、翔子は数日間、愁斗宅にお泊まりする気満々なのだ

翔子は持つて来たスポーツバッグを抱えながら玄関を出たところで、ふらふらこちらへ歩いて来る撫子とばったり出会った。

「撫子、おはよう」

「今、何日何時何分何十秒？」

虚ろな目をした撫子は出会ってすぐにこんな質問をして来た。翔子は少し不思議な顔をした。

「二十三日八時半過ぎ……くらいだけど？」

「ふにゃ〜、うげ〜、うぴょ〜ん」

「……大丈夫？」

「ダメ」

今の撫子は心身ともに衰弱しきっていて、自分が何を言っているのかすらもわかっていない。

「撫子、ひとつだけ聞いていいかな？」

「おひとつどーぞー」

「何で昨日と同じ服装なの？」

昨日、翔子が撫子宅を訪ねた時と同じ格好を撫子はしていた。それにはちゃんとした理由があるのだが、撫子は翔子に教えなかった。「そこら辺の件についてはノーコメントってことで」

組織の任務に関係する事柄だったので口外することができないのだ。そう、撫子は今日の朝まで雪夜の家で遭難していたのだ。

腕を地面に垂らしてぶらんぶらんしている撫子はそのまます自分の部屋に帰ろうとしたのだが、翔子は撫子の背中を引っ張って強引にそれ阻止した。

「ちよつと待って」

「にゃあに？」

「料理作ってるって言ってたよね？」

今の今まで元気のなかった撫子が突然、胸を張って大きな声を出した。

「おうよ、料理だったら人に教えられるくらいの腕前さ」

「じゃあさ、私に教えて！」

「食べるの専門って言うてにゃかったけ？」

昨日は撫子に料理作りを勧められた時、『私は食べる専門でいいや』と言っていた翔子であるが、好きな人に自分の料理を食べさせてあげたいという気持ち芽生えて翔子は料理の勉強をすることを決意した。

「昨日は昨日、今日は今日。私は料理の上手な女の子に生まれ変わるの」

「ふ〜ん、愁斗くんが翔子料理食べたいにや〜って言ったとか？」
「ううん、違うの、そうじゃないんだけど、愁斗くんに食べてもらいたっていうのは本当かな」

「爆裂花嫁街道まっしぐら修行中瀬名翔子中学二年生の乙女って感じだね。青春を桜花爛漫してるねえ。そんな翔子にアタシからのビッグプレゼント！」

ある物を思い出した撫子はポケットからそれを出して翔子に手渡した。

「なにこれ？」

「新しくできたテーマパークペアチケット、クリスマス・イヴだけ有効だからね。愁斗くんとデートを満喫しておいで」

「ありがとう、本当にもらっちゃっていいの？」

「どーぞ、どーぞ、持ってけ泥棒」

大喜びをして翔子はチケットをポケットにしまった。その顔はにやにやしている。

「ありがとう、がんばるね！」

「おう、じゃ、アタシは寝るから」

再びだらんと腕を垂らした撫子は自分の部屋に帰って行った。

ぶらぶら翔子が歩いていると前方から二人組みの女の子歩いて来た。いつもは三人一緒にいることが多いのだが、今日は久美と麻衣子しかない。

久美は無言で翔子に頭を下げて、麻衣子が挨拶をして来た。

「翔子先輩おはようございます」

聞くほどのことでもないので、いつも三人いるのになぜだろうと思ひ、翔子は聞いてしまった。

「沙織ちゃんはどうしたの？」

久美と麻衣子は顔を見合わせた。二人だけの時も当然あるだろうが、本当は『三人』でいるはずだったのだ。

麻衣子が少し不安そうな顔をして翔子に事情を話しはじめた。

「実は沙織さんと一緒に遊ぶ約束していたのですが、どこにいるか

わからないんです」

「翔子先輩は沙織見かけませんでした？ ケータイも出ないし、家にもいないみたいなのよね。沙織が約束破るなんてあんまりないから、少し心配で……」

沙織は人に嫌われたりすることを恐れていて、大事な約束を破るようなことはしたことがなかった。だが今、沙織は友達との約束を忘れてしまうような場所にいた。

翔子は時にはそんなこともあるだろうと軽く考えていた。

「何か急用ができたんだよ、きつと」

「でも、そうでしたら連絡をして来るはずですよ」

麻衣子は少し強い口調でそう言った。彼女は沙織に絶対の信頼を置いていて、連絡がないということは事件や事故に沙織が遭ってしまったのではないかと考えていたのだ。

それは久美も同じだった。

「この子のことだから、変な人に行っちゃったとかありえるのよね」
本当に友人のことを心配する二人の表情を見て、翔子は先ほどの自分の考えを撤回した。

「私も沙織ちゃんのこと見つけたら二人に連絡するから、ね？」

「ご迷惑をおかけして本当に申し訳ありません」

麻衣子は翔子に頭を下げて、久美もすぐにこう頼みながら少しだけ頭を下げた。

「よろしくお願いします」

「うん、じゃあ、二人ともバイバイ！」

二人と別れて翔子は歩き出した。

しばらくして、後ろから人の驚くような声が聞こえたような気がして、翔子は急いで振り返ったが何もなかった。

「気のせいかな、二人とも、もう行っちゃったのかあ」

翔子は気がついていない様子だが、久美と麻衣子は翔子が見ていないうちに空間に溶けるようにして姿を消してしまっていたのだ。

何も知らないまま再び歩き出す翔子。

「早く荷物持って愁斗くんち行かなきゃ」

早くと言いながらものんびりと歩いてやっと翔子の家が見えて来た。

自宅に辿り着いた翔子はすぐに玄関を開けて家の中に入った。一日しか経っていないけれど、懐かしいというか、新鮮な感じがする。翔子はまずスポーツバッグの中に入った洗濯物を洗濯機の中に放り込んで、洗濯機を回してから二階の自分の部屋に向かった。静かな家の中に階段を上る音が響く。

自分の部屋に戻った翔子は服を適当にバッグの中に詰め込んでいて、最後にお気に入りの服をデイト用に入れた。

バッグを抱えた翔子がふと窓の外を見ると雪村麗慈がいた。

翔子は慌てた。まさか、あの麗慈が現れるなんて！

道路を歩いている麗慈はどこに向かっていているのか歩き去ってしまった。

急いで翔子は家を飛び出して麗慈を追った。

「麗慈くん待つて！」

麗慈の背中に向かって大きな声を出した。

足が止まり微笑んだ麗慈の顔が振り向いた。

「やあ、翔子ちゃん久しぶり」

「あ、あの……」

追いかけて来たが、何をしゃべっているのかわからなかった。

翔子は以前、麗慈の命令で撫子にさらわれたことがある。だが、翔子はさらわれた時、ほとんど気を失っていたので、後で愁斗からいろいろな話を聞いたが、麗慈が悪い人だったという実感があまりしなかった。翔子は学校や部活での麗慈の顔しか知らないのだ。

「何も無いなら俺は行くよ」

「あ、麗慈くんって本当に愁斗くんのこと殺そうとしてたの？」

「ククッ、そうだよ」

嗤った麗慈の醜悪な顔。こんな麗慈の表情を見たのは翔子にとってはじめてであった。いや、翔子は朦朧とする意識の中でこの顔を

見たことがあったことを思い出した。

翔子の背筋に冷たいものが走った。

「……………どうしてこんなところにいるの？」

「リベンジだよ、俺は愁斗を殺り損ねたからな。次は絶対に仕留めてヤルよ」

「もしかして、今から愁斗くんに会いに行く気なの!？」

麗慈の歩いていった方向には愁斗のマンションがある。麗慈は愁斗に『挨拶』をしに行くつもりだったのだ。

「ククク……………だったらどうする？」

嗤って聞いた。翔子には何もできないことを麗慈は知っている。

『止める』と翔子は言いたかった。だが、それを自分ができるのだろうか？

「愁斗くんのところには行かせない」

「強がりはやせよ、おまえじゃ無理」

「やってみないとわからないでしょ!」

やってみなくても答えは出ている。翔子は愁斗と麗慈が戦っているのを直接見ていたわけではないが、本気を出した麗慈が別の者と戦っているのは朦朧とした意識の中で見たことがあった。あれを見てしまつては普通の人間ならば麗慈に逆らつたりはしない。

麗慈の手が煌きを放つた次の瞬間、翔子の手に赤い線が走った。

「痛っ!」

「今は軽く切つただけだけどさ、首を跳ね飛ばすのだから簡単だし、そつだなあ、服だけを切り裂いて裸にするって芸当もできるよ」

「……………」

翔子は何もできず、何も言えなかった。今、変なマネすれば絶対に殺される。

麗慈はわざと翔子に背を向けて言った。

「かかって来たいなら来なよ、いつでもヤッてやるよ。まあ、俺がどっか行くまで動かなければ手は出さない。最近は無駄に切り刻むのも飽きたからな、生かしてやるよ」

背中越しに手を振りながら麗慈は行ってしまった。

動かなければ殺されない。だが、翔子はそれ以前に足がすくんで動くことができなかった。

麗慈の姿が見えなくなっただいぶ経ってから翔子は地面にへたり込んだ。全身の力が抜けて今度は立ち上がることができない。

「ダメ……動けない。でも、早く愁斗くんのところ行かなくちゃ」
だが、やはり立ち上がることができなかった。

未完成の城（13）

愁斗は自分の部屋のクローゼットを開けた。

クローゼットの中で永遠の眠りにいている傀儡。人間とは思えないほど妖艶で美しい女性を模った愁斗の大切な存在。ここで眠る銀髪の美女は人間を模った傀儡ではなかった。

ここで眠る女性のもととなった人間は魔女や悪魔と呼ばれることもあった。ある意味それは真実であったかもしれない。その女性はこの世界の住人ではなかった。

秋葉蘭魔 すなわち愁斗の父に召喚された者。それがここで眠る傀儡のもとになった女性だった。

座るように置かれている傀儡の衣服が乱れていて胸が露になっていた。

「誰の仕業だ……？」

呟く愁斗の脳裏に翔子の顔が浮かんだ。

昨日、翔子は愁斗の部屋に忍び込んで傀儡を発見した時、胸の印を確かめてそのまま服をもとに戻さずにクローゼットを閉めてしまったのだ。

「翔子が紫苑を見たのか……？」

紫苑という名の傀儡の乱れた服を綺麗に整えて、愁斗は氷のように冷たい紫苑の頬に優しく触れた。

愛しい者を見る瞳で愁斗は紫苑を見つめた。だが、その想いは翔子に抱く想いとは別のものだった。

愁斗は紫苑を見つめ何を想う？

この傀儡は愁斗にとってどのような存在なのだろうか？

愁斗は冷たい唇に自分の唇を重ね合わせた。そっと離れた愁斗の哀しみの表情を浮かべ、瞳から流れた涙は頬を伝って地面に零れた。

「いつか……必ず……」

傀儡でなければならぬ理由。愁斗が傀儡師であり続ける理由、

それは。

突然、玄関が開かれた音が愁斗の耳に届いた。

翔子が出かけた時に愁斗が自分で玄関の鍵を閉めたはずだ。それに亜季菜はまだ眠っている。

クローゼットをゆっくりと閉めた愁斗は廊下に飛び出した。

廊下で奴が待っていた。そこには麗慈が立っていた。

「久しぶりだな紫苑」

「再び私の前に現れるとはどのような用件だ？」

冷たく響く愁斗の声。これが彼の内に秘められた彼だ。

「決着をつけようと思つてな……ククク」

「決着ならすでについている。私に手首を切り落とされたこと、忘れたとは言わせない」

以前の二人が直接決戦をした時、勝利を収めたのは愁斗であった。麗慈は妖系を放つことのできる右手を手首から切断されて戦闘不能になった。今、麗慈の右手がもとに戻っているのは愁斗が縫合したためだ。

「ククツ、あの時の俺と今の俺様を一緒にしてもらっちゃ困るおまえの見よう見まねで変なのを呼び出せるようになったぜ」

これは 闇 のことを言っている。愁斗は 闇 を呼び出すだけでなく、召喚も行えるが麗慈にはまだできない。だが、 闇 を呼べるだけでも脅威だ。

「何が呼べるというのだ？ それは 闇 のことを言っているのか？」

「よくは知らねえが、闇色をしたやつだから、その 闇 ってるやつなんだろうよ」

「貴様が 闇 をか……召喚は使えるのか？」

「いいや、でも今の俺ならおまえに勝てる」

「それだけでは私には勝てぬな。貴様は 闇 を知らずして使っている、いつか己が 闇 に喰われる……いや、貴様が喰われるだけならば何も言うまい。 闇 を使うのを止める」

「ククク……ヤダね。こんなおもしろい力、使わない手はない」
嗤う麗慈に対して愁斗は冷笑を浮かべた。

「先ほど『今の俺ならおまえに勝てる』と言っていたが、確かにあの時の私なら勝っていただろう。だが、あの時の私は重症を負いながらも貴様に勝った。つまり貴様は弱者でしかない。貴様がどのような力を手に入れようと私は貴様に負けない」

玄関のドアが開けられ二人が麗慈を挟み撃ちにした。ひとりは愁斗、そして、もうひとりは紫苑だった。

麗慈は後ろを振り返って紫苑の顔を確認した。

「あの時の顔か!？」

麗慈が見た紫苑の顔。それはいつか紫苑の仮面を剥ぎ取った時に見た顔であった。

愁斗は高らかな声をあげた。

「私を含むもの、それが『紫苑』だ」

「ククク……二人掛かりとは卑怯だな」

「私は善良なる者ではないのでな、そうでなくては 闇 も使いこなせん」

麗慈の身体が揺らめいて霞んだ。逃げる気だ。

「逃がすか!」

愁斗と紫苑の手から同時に妖系が放たれたが、それは麗慈が消えた後だった。

麗慈が消えた後、その声だけがこの場に残ってこう告げた。

「明日、ジゴローランドっていうテーマパークで待ってるぜ。時間はいつでもいい、必ず来い、おまえと俺のデートを楽しもうぜ!」

クククククククク……」

声が消えた後、愁斗は紫苑のもとへ行き、彼女を抱きかかえて自分の部屋に戻った。

愁斗の部屋の窓が開いていた。先ほどは閉まっていたはずだ。麗慈が愁斗の前に姿を現してすぐに、紫苑をこの窓から外に出して玄関に向かわせたのだ。

クローゼットの中に紫苑は再び入れられた。

「あんな奴に紫苑の素顔を見せてしまつてごめんよ」

そう傀儡に語りかける愁斗。紫苑の素顔は愁斗だけのものであり、他の者に見せたくなかつたのだ。

また、ドアの開かれる音がした。そういえば鍵をまだ掛けていなかった。

ゆっくりとクローゼットのドアが閉められるのと同時に愁斗の部屋に翔子が駆け込んで来た。

「ごめん、勝つてお邪魔します！ いた、愁斗くん、ここにいたのね」

「どうしたのそんなに慌てて？」

先ほど麗慈と対峙していた愁斗はもういなかった。愁斗は笑顔で翔子を出迎えた。

落ち着き払っている愁斗だが、翔子はそれどころではなかった。

「大変なの、麗慈くんに会つたの！」

「そう、なんだ。大丈夫、何もされなかつた？」

「ううん、ちょっと手を切られたけど平気。それよりも愁斗くん気をつけて、きつと愁斗くんのこと殺しに来るよ」

もう来た後だったが、愁斗そのことを翔子に黙っていることにした。

「大丈夫だよ、僕の心配はいいから」

「よくないよ、愁斗くんにもしものことがあつたら……」

翔子は目に涙を溜めはじめた。そんな翔子の手を愁斗が取った。

「消毒とかしておこうか？」

「消毒なんて今はどうでもいいよ、それよりも私は愁斗くんのご心配なの」

「でも、消毒はしなくてもおまじないはしておこう」

愁斗は翔子の手を持ち上げて、傷口に軽くキスをした。

「すぐに治るよ、きつと」

「ばかあ」

涙を止めた翔子は顔を赤くした。こんなキザなことをしても愁斗の容姿を持つてすれば許されてしまう。

翔子は愁斗に微笑みかけられて、自分も微笑んでしまっていた。だが、愁斗の後ろにあったクローゼットに視線が行ってしまった。少し表情を曇らせてしまった。彼女が表情を曇らせたのは本当に一瞬のことであつたが、愁斗にそれを見られた。

「瀬名さん、クローゼットの中、見たよね？」

「ううん、見てないよ」

決して嘘をつこうとしたわけではなく、反射的に嘘をついてしまっていた。

「嘘をついてもわかるよ」

「あ、あの、だから……」

「服を脱がせたままだったよ、印を確認したんでしょ？」

翔子は小さくうなずいた。

「ごめん、見るつもりはなかったの……でもね、でも聞いて、私と同じ模様があるの、私もあれと同じなの？」

とても翔子は不安そうな顔をしていた。

真剣な顔をした愁斗が翔子の手を引いてクローゼットの前まで行った。

愁斗の手によってゆっくりと開けられるクローゼット。中にいた紫苑はまるで眠っているようだった。

「彼女の名前は紫苑　瀬名さんと同じ傀儡だ。でも、瀬名さんと紫苑は根本的に違うところがある」

愁斗は翔子の手を導いて紫苑の頬を触らせた。とても冷たい頬だ。翔子はそれを知っていたが、改めて声に出して呟いた。

「冷たい頬……感触はまるで人間のようだけど、この冷たさを感じると人間じゃないことがわかる」

「この紫苑には血も流れている。けれど、その血は氷のように冷たい。そして、何よりもこの身体は作り物に過ぎない、瀬名さんの身体は正真正銘、人間の身体だよ」

愁斗の言葉を聴いて翔子はそつと自分の胸に手を当てた。心臓の音とともに温かさが手を伝わって感じられた。

「私、実はこの人形を見た時、自分も人形の身体なんじゃないかって心配になったの」

「身体は瀬名さんのものだし、瀬名さんには紫苑の持っていない人間の『心』を持っている。だから……瀬名さんは……この紫苑とは違う」

愁斗は紫苑を見ながら涙を流した。これは誰に対して泣いているのだろうか？ 翔子には紫苑に対して愁斗が泣いているように見えただ。

「愁斗くん、この女の人、誰……なの？」

聞かない方がよかったかもしれない。でも、ここまで来たら聞かずにはいられなかった。

愁斗が答えるまでしばらく時間があつた。その間、翔子は声を出不さずに涙を流す愁斗の横顔を見つめていた。

「……今は言えない。でも、きっといつかは言うよ、全部」

全部という言葉にはこの紫苑以外のことも含まれていた。だが、愁斗が翔子に話さない全ての話は糸を手繰り寄せていくと、その糸は全てどこかで紫苑に繋がっている。

翔子は愁斗に何もかも話して欲しかった。愁斗のことを知りたかった。翔子は自分の見て来た愁斗しか知らない。

寂しい気持ちを感じながらも翔子はそれ以上聞かなかつた。そして、彼女は泣き止まぬ愁斗の手に自分の手を重ねた。

「愁斗くんのこと好きだよ」

「ありがとう……だから、話したくないんだ。瀬名さんは今の僕を好きになってくれた……だから、瀬名さんの知らない僕を見せたくない」

「いいよ、今は見せてくれなくても。私だって例えば、家にいる時にだらしないう格好してるの愁斗くんに見られたくないし……ごめん、あんまりおもしろくなかつた？」

「うっん、瀬名さんのだらしない格好見てみたいな」

愁斗は微笑んだ。そして、翔子も微笑を返す。

「じゃあ、そのうち見せてあげるね」

『そのうち見せてあげる』だから愁斗にもそのうち見せて欲しかった。翔子は愁斗の全てを好きになりたかった。だから知るところからはじめたかった。

「瀬名さんのだらしない格好、楽しみにしてるね」

「楽しみにされても困るよお」

「でも、楽しみにしてる」

「だから、そんなにいいものじゃないよ。髪の毛爆発してるし、たまになぜか起きたらパジャマ脱いでる時とかもあって、本当に恥ずかしいんだから」

二人がいい感じに話していると邪魔が入った。

「愁斗クーン！」

ダイニングの方から亜季菜の声がした。

愁斗は軽いため息をついた。

「はあ、起きちゃったのか」

「ほら、ため息なんかついてないで行こう」

翔子に背中を押されて愁斗はダイニングに重い足取りで向かった。

「何ですか翔子さん？」

「飯！」

ソファで寛ぐ亜季菜はすでにスーツに着替えて、超ミニスカから覗く長い足を見せ付けるように座っていた。

「僕に命令しないで出前取ればいいじゃないですか」

「だってえ〜、愁斗くんお料理上手だし〜、あたしって外食多いでしょ、だから家庭の味が恋しくなるのよねえ〜」

「だったら、自分料理覚えたらどうですか？」

「そんな時間ないわよ」

翔子は二人の会話を聞いていて、ある物を撫子からもらったことを思い出した。そして、それを出す勢いに合わせて勢い任せで叫ん

だ。

「愁斗くんデート行こう」

愁斗の前に差し出されたチケット。それを見た愁斗はすぐに答えた。

「いいよ、それでいつ？」

「明日、明日テーマパークでデート。クリスマス・イヴだから、そのなんていうか、ロマンチックでしょ？」

「……………」

愁斗は黙り込んでしまった。明日と言えば、麗慈に決闘を申し込まれた日だ。そして、愁斗は『クリスマス』という単語を聞いて、あることを思い出してしまった。クリスマスは愁斗の母の命日でもあったのだ。

黙りこんだ愁斗の顔を翔子は不安そうに見つめていた。

「ダメかな…………？」

「いや…………」

翔子を危険な目に巻き込みたくない。だが、目の前にいる翔子を見ていると断りづらい。

あの場にちょうど居合わせた亜季菜は、この時ばかりは翔子の見方になってくれた。

「イヴにデートなんていいじゃない、行って来なさいよあたしが許可するわ」

「亜季菜さんが許可するとかしないとかの問題ではなくて」

ふと愁斗が横を見ると翔子が泣きそうな顔をしていた。

「だって、だって、私たちデートって言うこと一度もしたことないんだよ。それにこのチケット明日限り有効のディナー付き招待券なんだよ」

翔子はチケットがよく見えるように愁斗の眼前に突き付けた。だが、それで愁斗の表情が余計に曇ってしまった。

チケットにはジゴローランドと書かれている。偶然にも麗慈がして指定して来た場所と重なってしまった。

「駄目だよ、やっぱりごめん」

「どうしても？」

「ごめん」

「じゃあクリスマス前日は？」

「それも……」

「口ごもった愁斗の代わりに亜季菜が言った。

「クリスマスは愁斗ひとりにさせてあげて、毎年クリスマスはそう決まってるから」

クリスマスは愁斗はひとりで 正確には紫苑とともに母の墓参りに行く決めていた。その時間は誰にも邪魔されたくない時間だった。

昔の愁斗だったならば冷たい言葉で断れた。だが、今の愁斗はいろいろなものを恐れるようになっていた。

「明日デートに行こう」

大丈夫、何があるうとも絶対に僕が守ってみせる。

そう愁斗は何でも自分に言い聴かせた。

「愁斗くん大好き」

嬉しさのあまり翔子は愁斗に抱きついた。

「若いつていいわね、羞恥心もどこ吹く風ね」

抱き合う若いカップルを見ながら亜季菜はビール飲んでいた。

「あーっ！」

翔子が突然叫んだ。

「私のスポーツバッグ玄関に置きっぱなしだった。あーっ！ 家の鍵閉めて来るの忘れたし洗濯機に洗濯物いれっぱなしだ！ ごめん、もう一回家に行行って来る」

翔子は慌てた様子で走って行ってしまった。

「青春だわね」

微笑を浮かべながら亜季菜はビールを飲み干した。

未完成の城（14）

翔子と別れてすぐに久美と麻衣子は不思議な現象に襲われた。

「あ
」

麻衣子が叫ぼうと思った時には彼女の身体は別の場所に飛ばされ、久美の身体も空間に溶け込むようにどこかに飛ばされた。

二人が飛ばされた場所は沙織によって新しく生まれ変わったネバーランドだった。

ベンチでクレープを頬張る沙織の前に久美と麻衣子は強制的に呼び出された。沙織の横には雪夜もいる。

「はじめまして、僕の名前は芳賀雪夜です」

「久美ちゃん麻衣子ちゃん沙織の国へようこそお！」

麻衣子は沙織が見つかったことよりも、自分が現在置かれている状況を確認した。

「遊園地？」

久美は沙織に少し怒った様子で詰め寄った。

「あんた、こんなところで何してんのよ、私たちと遊ぶ約束してたのに！」

「久美ちゃん怒らないでよぉ、だからここで遊ぼう」

『ここ』と言われて久美は改めて辺りを見回した。

「どこよ、ここ？」

この質問には雪夜が答えた。

「ここはね久美さん、子供の楽園ネバーランドだよ。ボクが基礎を創り出して沙織さんが可愛らしく造り変えてくれたんだ。ここにいれば歳を取らずに子供のままいられる」

「そんなバカな話あるわけじゃない！」

怒った口調で久美は大声を出したが、麻衣子はずーっと辺りを行き交う者たちに目を奪われていた。動物のようだがきぐるみだと思われる。だが、異様としか言いようがない光景だった。

「普通の遊園地には不気味ですね」

沙織は麻衣子のところに小走りで駆け寄った。

「そうかなあ、可愛いと思うけど？ ほら、あそこにいるピンクのうさぎとかとってもキュートでしょ？」

雪夜の顔つきが急に変わった。

「誰かが侵入したのか……。沙織ちゃんにお二人さん、ボクは少し出かけて来ますから、どうぞこの世界を楽しんでいてください」

雪夜の姿が突如消えた。それを目の当たりにした久美と麻衣子は目を丸くした。

「なに今の！？」

「私たちも突然この場所に来ましたけど……」

麻衣子何か答えを求めるように沙織を見つめた。

「え」とねえ、見たまんまだよ。雪夜くんは魔法使いなの、それで沙織も魔法使い見習いつて感じかなあ？」

こんなことを言われても信じられるはずがない。だが、久美と麻衣子はここに連れて来られ、雪夜も目の前で姿を消した。体験してしまつては信じるしかなかった。

麻衣子は考え込んで黙つてしまい、久美は沙織に詰め寄った。

「魔法使いつてどういうことよ、そんなこと信じられるわけないでしょ？」

「久美ちゃん夢ないねえ、だって雪夜くんが消えるの見たでしょ？」

「そ、それは……。麻衣子パス！」

久美は何も言えなくなつて後は麻衣子に任せた。

「可笑しいことが起こっているのは確かなようです。私たち以外、普通の人間がいませんし、あの雪夜くんが消えたのも事実ですし、私たちも突然ここに連れて来られました」

「麻衣子ちゃん物分りEーっ！」

沙織ははしゃいで嬉しそうな顔をしている。だが、久美は納得がいかない。

「でも、そんなのありえないわ。いいわ、千歩譲ってあつたとして、だからここはどこなの？ 日本なの？ じゃあ他の星とかそういうオチ？」

少し久美はヤケクソだった。

「もお、久美ちゃん物分り悪いなあ、だからここはネバーランドだよ、結構有名でしょネバーランドって？」

「知ってるけど、歳を取らないなんてありえないわ」

歳を取るか取らないかは長い時間をかけなければわからない。目に見えないことはどうしても信じにくい。

「久美ちゃんも麻衣子ちゃんも早く遊ぼうよお」

沙織は久美腕を引つ張つて麻衣子のもとへ行つた。だが、久美は強引に引きずられて機嫌が悪そうな顔をして、麻衣子の表情もあまり乗り気ではない。

沙織はこんなに楽しい世界なのに何で二人がそんな顔をしているのかわからなかった。

「ねえ、二人とも具合悪いの？ 医務室もちゃんとお腹空いてるなら何でも食べ物あるんだよ、お菓子もジュースもいっぱい、いくつぱいあるよ。沙織が今食べてるクレープもストイおいしいよ、食べに行く？」

難しい顔をしながら麻衣子は沙織を見つめた。

「いつもと変わらな沙織だけど、何かが違うような気がする」

「私もそう思うわ」

急に不安な顔をする沙織。まさかそんなことを言われると思つてみなかった。

「沙織はいつもの沙織だよ！」

それでも麻衣子は難しい顔をしていた。

「じゃあ、なぜ私たちとの約束を破つたんですか？ 待ち合わせした場所に来ませんでしたよね、私たち心配したんですよ」

「私たちね、あんたのこと心配してケータイにも自宅に電話したのよ。その後、いろんなところを捜し歩いてたら、いきなりここに連

れて来られて、どういうつもり？」

なぜ二人に攻められなくてはいけないだろう。自分は二人を楽しませようとしただけに、どうして？

沙織は怒った久美と哀しい顔をしている麻衣子に見つめられ後ろに足を引いた。

「沙織は三人でここで遊んだら楽しいなと思ったただだよお、だから三人で遊ぼうよ」

泣きそうな顔をしている沙織に久美は追い討ちをかけた。

「私が怒ってるの見てわかるでしょ？ 心配してた相手に呑気に遊ぼうって言われて、はいそうですかって言える性格してないのよ」

「久美さん、そんな言い方したら沙織さんがかわいそうじゃないですか。ごめんなさい沙織さん、私たち本当に沙織さんのこと心配してから、だから久美さんも怒ってるんだと思う。久美さんって素直じゃないから」

「私が素直じゃないってどういうことよ！」

沙織は今さっきの仕返しとして久美に言ってやった。

「久美ちゃん二年後には麻那センパイみたいになるよ絶対」

そう言って沙織はあっかんべーをした。それを見た久美は余計に腹を立てて怒った。

「もういい、勝手にしなさい！」

怒鳴った久美は走って行ってしまった。

「久美さん！」

「久美ちゃん待つてよお！」

二人はすぐに久美の後を追った。

少し走ったところで久美は足を急に止めて振り返って大声を出した。

「止まちなさい！」

身体をビクつとさせながら沙織と麻衣子は足を止めた。

久美は自分でもなぜ怒っているのかわからないほど怒っていた。

「怒りたくって怒ってるんじゃないのよ、ただ、心配かけてゴメン

って沙織が言ってくれたらそれで気が済んだのよ」

「ごめんねえ、久美ちゃん。約束破る気なんてなかったんだよお、でも、ここが楽しくて時間の感覚がなくなっちゃだけなの」

永遠に子供のままでいられる世界は肉体に時間を忘れさせる世界だった。そのため沙織には本当に時間の感覚がなかった。

麻衣子は沙織の手を引いて久美の前まで行った。

「久美さんも沙織さんにごめんなさいって言いましょうね」

「ごめん。沙織が相手だとさ、強く言っちゃうのよね。別に嫌いってわけじゃないのよ、ただ、心配なのよ沙織は」

「そんな心配しなくても平気だよお」

二人は仲直りをしたようなので麻衣子にはこやかに笑った。

「はい、一件落着」

だが、久美はちよつとだけ気にかかることがあった。

「あのさ、麻衣子も私に謝ってよ」

「どうして？」

「だって、素直じゃないって……」

素直じゃないのは自分でもわかっていたが、直接そう言われると恥ずかしいので久美は麻衣子に発言を撤回して欲しかったのだ。だが、麻衣子は悪戯っぽく笑ってこう言った。

「素直じゃないのは本当だから謝らないよ。これを機会に久美には素直な性格になって欲しいかな」

「私のどこが素直じゃないって言うのよ、例を挙げてみなさいよ！」

こう言った後にすぐ久美は後悔した。麻衣子ならばすぐに例を挙げて来ると思ったからだ。予想は的中した。

「そうやって怒るのは本当の気持ちをカモフラージュするためですよ？」

「……………」

的を射た答えに久美は何も言い返せなかった。そこに沙織が空かさず傷に塩を塗りこむようなまねをする。

「黙ったってことは認めてるのと同じだよお」

「違つわよ!」

こうやって怒って見せるのが認めているいい証拠だった。顔を見合わせて笑いを堪える二人を見て久美は恥ずかしくなって話題を変えた。

「もう、ほら沙織遊びたいんでしょ、行くわよ遊びに。麻衣子も付き合つて、ほら!」

今のも笑いそうな二人の腕を久美が掴んだ瞬間、二人は大笑いしはじめた。

「久美ちゃんおもいろ〜い、あはは」

「……………くっ……………久美つて結構単純」

麻衣子は笑いを堪えるのが精一杯だった。

「もう、笑いたいたいなら笑えばいいでしょ?」

「もおダメ、あはは、今日の久美最高。本当の気持ちを隠そうとしてるのに、それがバレバレなのがおもしろいね」

久美は笑われることをあきらめて、何かが自分の中で吹っ切れた。「はいはい、これから素直になるように努力しますから、今のうちに存分に笑っておきなさいよ。じゃ、とりあえず、あれ乗りに行くわよ」

さつさと歩き出した久美の後ろを二人はクスクス笑いながらついて行った。

未完成の城（15）

明日開園のテーマパークではアトラクションの最終整備やパレードの練習などが余念なく行われていた。

彪彦はそのテーマパーク内を堂々と歩き回っていた。彼の姿は人々の死角に入ってしまったので普通の人間には見る事ができないのだ。

「撫子さんの調査でもやはりここが怪しいと出ましたが、さて……」

彪彦は辺りを見回した。一般客の姿がない以外は普通のテーマパークだ。

立ち止まった彪彦は思考を巡らせた。

世界を三次元で現すことはできないが、解り易く例えるならば、こことあの世界は同じラインにあると言える。

「距離や時間という概念は無用の長物　遠いようで近くにある。ここが入り易そうですね」

伸ばされた彪彦の手の先から肘までが消失した。いや、正確には消えた部分は別の世界に入ったのだ。

空間の境目に彪彦の身体が入っていく。傍から見たら人間が消失していくようにしか見えない。

雪夜の創り出した世界に彪彦の指先が突如現れ、あっちの世界で消えた順にこちらの世界に身体が出て来る。

「前に来た時とは随分と雰囲気が変わりましたが、様相は同じようですね」

前に彪彦が来た時とは違ってこの世界が華やいている。動物たちがテーマパーク内を歩き回り活気に満ち溢れて、外面的には変わっている。だが、彪彦は内面的変化は何もないと感じ取った。

「……拒絶と空虚ですね」

拒絶と空虚が世界から感じられる。外面的に変わっていても何か足りない。この世界の外面的なものは沙織によって創られたが、

内面的なものは雪夜が最初に創り出したままの世界だ。

このテーマパークを散策しながら雪夜の意図を探ろうとしたが、創り上げた動機は恐らく彪彦の感じ取ったものだろうが、その使用目的までがわからない。きっと、雪夜自身も何に使用するのかかわらずにこの世界を創り上げたに違いない。

テーマパーク内に設置された小さなお店で食べ物や飲み物を配っている。無料で配っているようなので店とは言えないかもしれない。彪彦も動物たちが並んでいる列に並んで飲み物を注文しようとした。

「いらつしゃいませ」

と動物の店員が日本語をしゃべる。きぐるみのようにも見えるがデフォルメされた『本物』のようだ。

「それをお一つ頂けますか？」

彪彦は適当な飲み物を注文して受け取ると近くにあったベンチに腰を掛けた。

「一休みでもして、あちらからやって来てもらうのを待ちますかね」

彪彦は手に持ったジュースに刺さったストローを自分の肩に止まっている鴉に向けた。鴉は上手にくちばしでストローを挟みジュースを飲みはじめた。

「なかなかおいしいですね」

ジュースを飲みながらしばらく待っていると、あちらから現れた。

「おはようございます、影山さんでしたよね？」

「そうです影山彪彦です」

空になったコップを鴉に喰わせて彪彦はベンチから立ち上がった。すでに彪彦の手には鉤爪が装着されている。

「残念なことにこの世界の破壊とあなたの処分命令が正式に組織から下されました」

「処分ってどんなですか？」

「捕らえることが第一、無理な場合は殺してしまっても止むを得ないそうです」

「このボクの世界でボクに挑む気とは、勇気ありますね」

「ここが雪夜さんの世界だとしても、全ての法則があなたの自由にはなりません」

鉤爪の口が大きく開かれた。そして、闇色をした口の中に風が轟々と吸い込まれはじめた。彪彦は全てを鴉に喰らわすつもりだった。周りにした動物たちが鴉に喰らわれる中、雪夜は足を踏ん張らせるが、その身体は徐々に鴉の口の中に吸い込まれて行こうとしている。

雪夜は近くいた動物の身体を掴んで叫んだ。

「トウーンマジック！」

巨大化させられた動物はクマの形をしている。その巨大さは全長二〇メートルを超えた。

鉤爪が吸い込む出力を上げる。

巨大なクマに比べて明らかに小さな鉤爪が勝っている。巨大なクマの身体が吸い込まれていくではないか！？

鉤爪が巨大なクマに吸い付いているような形となった。やはり、大きさが違い過ぎて吸い込むことができないのか。いや、少し時間がかかっているに過ぎなかった。

鉤爪が吸い込もうとするたびに巨大なクマがぶるぶると振動し、やがて少しずつ巨大なクマが明らかに大きさの違う鉤爪の中に喰われていった。

「少し喰らい過ぎましたね」

有りとあらゆるものを喰らうことのできる鉤爪だが、その要領は有限でも無限でもない。喰らえる量は変化し続けるのだ。

彪彦が辺りを見回すと雪夜の姿はすでになく、動物たちは何事もなかったように行き交っている。

「彼がどこにいるかわかりませんね」

強い魔導力を持った者を見つけるのには、その強い魔導力を感知すればいいのだが、それなりの魔導士などになると魔導力を隠すことができる。だが、雪夜の場合は自分の魔導力を隠す術を知らない。

では、なぜ彪彦に感知できないのか？

この世界を創り上げたのは雪夜であり、この世界には雪夜の魔導力が充満していてどこからでも雪夜の魔導力が感じられてしまうのだ。

ずれたサングラスを直す彪彦の視線に、巨大化された玩具の戦車が飛び込んで来た。

轟音とともに戦車から砲弾が発射された。

彪彦の口の端がつり上がった。

凄い速さで飛んで来た砲弾は開かれた鉤爪の中に吸い込まれるようにして飛び込んだ。衝撃で彪彦の身体が地面を擦り動きながら後退する。

「こんなこともできるのですよ」

轟音が鳴り響いた。砲弾が鉤爪の内から撃ち返されたのだ。

砲弾は見事に戦車を大破させた。

人間サイズの玩具の兵隊数体が一列に並んで銃を構えた。次の瞬間、玩具の銃が火を吹いた。

向かって来る銃弾を避けるために彪彦は鉤爪を瞬時に黒い翼に変化させて天高く舞い上がった。

彪彦の手首に生えるように付いている翼は上空で鉤爪に再び戻された。

約三〇〇メートルから落下する彪彦は風に煽られながら、照準を合わせるようにして鉤爪を兵隊たちに向けた。

高らかに彪彦は命じた。

「お行きなさい！」

鉤爪の内から闇色の何かが撃ち放たれた。それは闇だった。悲痛な叫び声をあげて闇は兵士たちを喰らった。

彪彦は地面に軽やかに着地して闇が兵士たちを喰らい終わるの待った

頃合いを見計らって彪彦が鉤爪の口を開くと、闇はその中に還っていった。そして、闇は鴉の内で消化された。

鴉に喰われたものは普通ならば消化されてしまう。だが、消化せずに保管しとくことも可能だった。

今、彪彦が扱った 闇 は昨日の麗慈との戦闘で喰らった 闇 を保管して置いたものだ。

辺りを静寂が包み込んだ。

「近くにいるのはわかってはいるのですが、いったいどこに？」

バギー乗り場から一台のバギーカーが勢いよく柵を越えて歩道に飛び出して来た。それに乗っているのは雪夜だった。

「逃がしませんよ！」

バギーカー程度のスピードであれば彪彦の走りで追いつけぬはずがない。だが、彪彦があと少しでバギーカーに追いつくという時に相手がスピードを上げた。バギーカーはトゥーンマジックにかけてある特別製だったのだ。

バギーカーが通る道は動物たちが避けてくれるのだが、彪彦の場合は避けてくれない。已む無く彪彦は鉤爪で動物たちを切り裂いて先を急ぐ。

バギーカーはドラフト走行でうまく急カーブを曲がり逃げる。彪彦の走る速度は時速八〇キロメートルを越えている。それなのにバギーカーとはいい勝負だ。

雪夜はバギーカーで逃げながら時間稼ぎをしていた。自分では彪彦に敵わない。となるとあの男が帰って来るのを待つしかない。

猛スピードで走るバギーカーがメリーゴーランドの横を通った時に、メリーゴーランドの馬に乗っていた沙織が雪夜に嬉しそうに手を振った。

「あっ、雪夜くん！」

一瞬であったが雪夜も手を振って返した。その後ろを走る彪彦は不思議そうな顔をした。

「部外者が三人もいたのですか……」

女子三人組はひとまず保留として彪彦はバギーカーを追った。雪夜はバギーカーをテーマパーク内にある湖の横を走らせた。

前方に客船の乗り場が見えて来た。

雪夜はアクセルを強く踏んだ。加速するバギーカー。客船が汽笛をあげて動き出した。

橋げたの上にバギーカーが乗り上げた。その橋の先は湖で、そのまた先には動き出した客船がある。

ガタガタと橋を走るバギーカーが揺れる。そして、バギーカーは途切れた橋からジャンプした。

いくら加速していたとはいえ、船と同じ高さから飛んだのでは船には届かない。

勢いでどうにか船の近くまで行くことができたが、バギーカーが落下をはじめてしまった。それと同時に雪夜はバギーカーから全力で船に向かってジャンプした。

船に手を伸ばす雪夜。あと、少し。

ガシツと船の縁を雪夜は両手で掴んだ。身体が宙ぶらりんになる。「くっ……くっ……くっ……」

雪夜は手と腕に力を込めてどうにか客船の中に乗り込み、木でできた床の上に転がり込んだ。もし、手を離して水の中に落ちていたら、船の後ろのモーターに巻き込まれていたかもしれない。

雪夜は立ち上がって遠くの橋を見た。そこには彪彦が立っていて鉤爪を装着した腕を上げて何かをしようとしていた。

「まさか、追ってくるのか？」

そのまさかだった。

遠くにいる彪彦は腕に装着されていた鉤爪を黒い翼に変えて飛翔した。先ほど彪彦が同じ方法で空を飛んだのを雪夜は見えていなかった。雪夜はバギー乗り場でバギーカーを調達していたのだ。

「空も飛べるのか!？」

着実に船に追いついて来る彪彦から逃げるために雪夜は甲板に走った。

甲板には動物たちが数体いる。それ全てに雪夜はトゥーンマジックをかけた。

「トウーンマジック！」

動物たちに外的変化はないが雪夜の護衛と化している。

黒衣を纏った彪彦が空から舞い降りて来た。その姿はそれ自体が巨大な鴉のように見える。

甲板に軽やかに降り立つた彪彦に動物たちが襲い掛かる。

彪彦は襲い掛かって来る動物たちを揺れるようにかわし、瞬時に変化させた鉤爪で切り裂いた。切り裂かれた動物の中身は綿だった。動物たちが全て倒されてしまい、逃げ場も失った雪夜は両手を上げて見せた。

「ボクは負けを認めるよ。ボクって戦闘が苦手で、ボク的能力をどう使って相手と戦っていいのかわからないんだよね」

「なるほど、良い心がけですが」

彪彦は鉤爪を横に振り回して後ろにいた敵を攻撃した。

「危ねえっ！」

声をあげながら麗慈は間一髪で後ろにジャンプした。

「ククク……気配を消してたつもりだったんだがな」

「麗慈くんはまだまだですね。気配が消しきれいていませんでしたよ。戦いは二対一となった。」

「ククツ、雪夜はそこで指をくわえて見物してな」

「言われなくてもわかってるさ、ボクは戦闘タイプじゃないからね」

雪夜は彪彦から視線を外さないようにしながら後退した。

戦線離脱したように思えても、いつまた襲い掛かって来るかわからないうちは、彪彦は雪夜から注意を逸らせない。

戦力から言えば彪彦にとって雪夜よりも麗慈の方が厄介だった。

雪夜は自分でも言っているとおりの戦闘タイプではない。だが、麗慈はまさに戦闘タイプだ。

麗慈の手が煌いた。妖系が針のように彪彦に襲い掛かる。

「あなたの攻撃など簡単にかわすことができますよ」

妖系は鉤爪によって弾かれ、彪彦は速攻を決めた。

だが、雪夜はそのチャンスを見逃さなかった。

一瞬の彪彦の隙をついて雪夜が飛びかかった。いったい雪夜は何をしようとしているのか？

雪夜は彪彦の鉤爪を掴んで高らかに声をあげた。

「トウーンマジック！」

なんと雪夜は鉤爪にトウーンマジックをかけたではないか！？

いったい、鉤爪にトウーンマジックをかけるとどんな反応が起こるのであるのか？

反応はすぐに出た。鉤爪はブリキの鴉の人形となって地面に音を立てながら落ちた。そして、彪彦もゆっくりと地面に崩れ落ちたではないか？

「わたくしとしたことが大きな失態をしまいましたね。まさか正体を見破られようとは……」

この声はブリキとなった鴉から発せられていた。

ブリキになった鴉を見て麗慈が嗤った。

「クククク……これがこいつの本体ってわけか、俺も知らなかったぜ」

そう、鴉が彪彦本人であったのだ。彪彦だと思われていた人間は腹話術の人形に過ぎなかったのだ。

ブリキの人形にされた彪彦は魔導力が少しは残っているようで、動いて逃げようとしたが麗慈の妖系で縛り上げられてしまった。

「逃げようとしても無駄だ、ククク……」

雪夜はブリキの鴉を指で弾いてブリキの音を響かせた。

「トウーンマジックは生き物にかけると玩具になっちゃうんだよ。

でも、彼を玩具に変えるのにはだいぶ力を消費してしまった……みたい……」

雪夜は地面に膝をついた。

「ボクはちよつと休むから……彪彦さんのことは麗慈に任せたから、じゃ」

甲板の上に寝転んだ雪夜は眠りに落ちた。

「だだよ、おまえの処理は俺に一任されたわけだ、ククッ」

「まあ、それは大変なことですね。可能性としては殺されるのが確率として一番高いでしょうか？」

他人事のようにしゃべる彪彦に対して、雪夜は弄ったらしく首を横にゆっくりと振った。

「いいや、殺しちまったらそれでお終いだろうが。おまえはこのままの姿で鳥かごの中で一生暮らすんだ。ククク……まるで昔の俺のようだ」

「それはそれは何と慈悲深い寛大な処置ですね」

圧倒的に不利な状況であっても彪彦はわざとらしく言葉を吐いて麗慈をおちよくった。

「ククククククク……」

可愛らしい動物が行き交う中でそこだけが異様な雰囲気に見えた。

未完成の城（16）

「き、今日も、く、苦しい……」

今日も翔子は亜季菜と一緒に寝ることになってしまった。

今朝も亜季菜の腕や脚によって翔子の身体は拘束されている。

「起きないでくださいよぉ」

翔子は自分に絡みついた亜季菜の身体を丁重に外した。そして、相手を起こさないように慎重にベッドから起きた。

「逃げる気！」

翔子の身体がビクッと震えて、心臓がぎゅっと驚掴みにされたような感覚を覚えた。今朝もか、と正直思った。

「起きてるんでしょ亜季菜さん？」

「ええ」

ムクツと起き上がった亜季菜はすんなり認めた。しかも、よく見ると着替えが終わっている。

翔子よりも早く起きた亜季菜は着替えを済ませた後に、わざわざ翔子に抱きついて翔子が起きるのを待っていたのだ。

「あたし今朝は早いから、じゃ、出かけて来るわ」

亜季菜はきびきびとした動きで部屋を出て行ってしまった。

「……わかない、亜季菜さんってひとがわからない」

翔子は亜季菜という人間について考えながら着替えを済ませて部屋を出た。

キッチンでは今日も愁斗が朝食の準備をしていた。

「あ、瀬名さん、おはよう」

「おはよう愁斗くん。今日も朝食の準備してもらっちゃってごめんね」

ちなみに昨日は、翔子は家の中で愁斗と二人っきりで過ごし、昼食は愁斗に作ってもらい、夕食は帰って来た亜季菜が出前を取った。

「瀬名さんはテーブルで待っていてすぐに料理を運ぶから」

「ありがとう」

翔子に手伝うという気は全くなかった。昨日から翔子は愁斗に甘えっぱなしで、全て愁斗に任せっきりだった。唯一、翔子がしたことを言えば自分の下着を洗ったことぐらいだった。

すっかり気分はお姫様の翔子の前のテーブルには料理が運ばれ、愁斗は飲み物まで注いでくれた。

「もう、愁斗くん優しくくて大好き！」

昨日もほとんど二人っきりだったためか、翔子のテンションは上がりっぱなしだった。後で振り返ると、翔子は今の自分のことを恥ずかしがるだろうが、今の翔子はそんな気持ちなど微塵も感じない。朝食をとりながら愁斗はまだあのことが頭に引っかかっていた。

「瀬名さん、やっぱり……」

「なあに？」

翔子は満面の笑みだった。それを見た愁斗は言い出せなかった。

「いや、別に。そうだ、何時に出発する？」

「朝食を食べたらすぐに行こう」

「そうすると正午ごろに着くけね」

朝食を食べ終えて、二人は身支度を済ませると、さっそくバスと電車乗り継いでテーマパークに向かった。

テーマパークのある駅に近づくにつれて、愁斗たちと同じ場所に向かうであろう家族連れやカップルが多くなって来た。

電車の座席に愁斗と並んで座るといのは、翔子にとってなかなかドキドキする体験だった。

肩と肩が触れ合って相手の体温が伝わって来る。

「愁斗くん？」

「なに？」

「別に何でもないんだけど、名前が呼びたかっただけ」

相手に身体を寄せて存在を実感し、それでも満足できずに名前を呼んで相手がそこにいることを確認する。幸せが大きくなるに比例して不安も大きくなっていく。

「名前を呼びたかっただけ？」

愁斗は不思議な顔をしている。愁斗には翔子の微妙な気持ちは理解できていなかった。

「そう、名前を呼びたかっただけなの。愁斗くんも私の名前を呼んで」

「瀬名さん？」

不思議に思いながら愁斗は翔子の名前を呼んだ。それで翔子は満足した。相手に名前を呼んでもらって、自分が今ここにいることを実感できた。

「ありがとう愁斗くん、いつまでも一緒にいようね」

「いつでも傍にいるよ」

相手がこんなにも近くににいるのに、どうしてこんなに不安なのだろうか？

翔子は愁斗の愛しい横顔を見てみると胸がしめつけられる。未来の不安よりも今の不安を解消したい。

愁斗の肩にそっと翔子は自分の頭を乗せた。愁斗は少し驚いた顔をした。

「瀬名さん？」

「少しの間だけ、このままでいさせて……」

ゆっくりと目をつぶった翔子は愁斗の息遣いを感じながら眠りに落ちてしまった。

しばらくして電車がテーマパークの最寄り駅に着いた。

「瀬名さん、起きて」

愁斗に優しく声をかけられて翔子は健やかな眠りから目を覚ました。

「……ううん……おはよう」

「着いたよ」

「……うん」

もう少し寝ていたかったような気もしたが、翔子は愁斗とともに電車から降りた。

駅のホームは人々で混雑している。この駅は新しくできたテーマパークやショッピングタウンと隣接していて、今日も多くの人々がここに訪れている。

テーマパークに向かう人々の流れに乗って翔子は愁斗と歩いていったが、周りを見てちよっぴり恥ずかしくなった。家族連れも多いうるが、今日という日のせいだろうか、カップルの数が多い。それを見て翔子はちよっぴり恥ずかしくなった。

この場所に新しくできたテーマパークの総面積は国内最大とされ、開園前からテレビや雑誌の取材を多くされ、人々の話題を集める大テーマパーク、それが新しくできたジゴローランドだった。

二人がここに到着したのは十一時半過ぎで、そろそろ昼食を食べてもいい時間帯だった。

「愁斗くん、お昼どうしようか？」

「そうだね、テーマパークの中で食べる？ それとも食べてから中に入ろうか？」

テーマパークの近くも飲食街やテーマパークの関連グッズを販売する店が点在している。

「うーん、せつかくだから中で食べたいなあ」

「じゃあ、そうしよう」

などと二人が話しているとテーマパークのセントラルゲートが見えて来た。

翔子は愁斗にチケットを手渡して、二人は幾つもある列の一つに並んだ。

「中に入るだけなのにドキドキするね」

心底嬉しそうな翔子だが、愁斗は中に入るだけで何でそんなに嬉しいのか理解できなかった。

「まだ中に入っていないのに、どうしてそんなに楽しそうな顔をするの？」

「愁斗くんはドキドキしないの？ 何かさあ、愁斗くんっていい言い方すればクールだけど、子供みたいにはしゃいでるの見たことな

いよね」

「うん」

考え込んでしまった愁斗の手を引いて翔子はテーマパークの中に入ろうとした。その瞬間、愁斗はもの凄い魔導を感じて翔子の手を引こうとした。だが、すでに遅かった。

そこは雪夜の創り出した世界だった。

一般客も知らないうちに紛れ込んでしまっている。誰も気づいていない。大きな魔導力の人々は自然と心を奪われてしまっているのだ。

二つの世界のテーマパークが混ざり合った世界。そこには人々もいれば、動物たちもいる。みんな何も考えずに楽しむことだけを考えている。

身体は大人でも、心は純粋な子供に戻ってしまっている。もう、誰も外の世界に帰ろうとは考えなかった。

異様な世界に目を奪われてしまっている翔子と愁斗の前にピエロが現れた。

「夢と冒険の世界、ネバーランドへようこそ！」

ピエロは大きな口で笑った。

未完成の城（18）

愁斗は翔子の前に腕を出して、そのまま自分の後ろに翔子を導いた。

「ごめん瀬名さん、やっぱりこうなった」

「こうなったってどういうこと？」

この世界の異様さはわかった。だが、翔子には何が起きているのかわからなかった。

「デートは断るべきだった。僕らは自ら麗慈の罠に飛び込んでしまった」

この世界に迷い込んだ人々は、この世界にこもっている魔導に魅了されてしまっている。だが、魔導に耐性のある愁斗と造り変えられた躰を持つ翔子は異変に気づくことができた。

ピエロは嗤った。

「クククク……恋人を連れて来るなんてバカなヤロウだな」

愁斗と翔子の前に現れたのは麗慈であった。濃いピエロの化粧に下にある顔は確かに麗慈の顔だった。

麗慈の手が煌き、愁斗の手も煌いた。

空中で交じり合った光はゆらりゆらりと地面に落ちた。

「ククク……外したか」

「瀬名さんを狙ったな？」

今の麗慈の一撃は愁斗を狙ったように見せかけて、その後ろから顔を覗かせている翔子を狙ったものだった。

恐怖を覚えた翔子は愁斗の服をぎゅっと掴んで震えた。

「愁斗くん……」

「大丈夫だよ、瀬名さんは僕が守る」

「ククツ、ベタベタな熱い仲だな……クククククククク」

愁斗は氷の瞳で麗慈を見つめた。

「この世界は何だ？ 組織が創り出した世界なのか？」

「いいや、俺は組織から追いかけて回されてる身だからな。この世界を創ったのは芳賀雪夜っていう小六のガキだ」

この話を聞いた愁斗の眉がピクリと動いた。

「個人が創り出したのか!? まさか、そんなことがあり得るはずがない。それは神と同等の力を手に入れるに等しいことだぞ!」

その時、愁斗は思い出した。いつか出逢った少年のことを。

その少年は組織の一員である影山彪彦に追われていた。世界を創り出す力を持つ少年を組織が見逃すはずがない。

「ククク……だから雪夜も組織から追われるハメになったがな、一人目の刺客は捕まえてカゴの中だ」

カゴというのは牢屋の比喩だと愁斗や翔子は思ったが、彪彦は本当に鳥かごの中に入れられている。

愁斗は驚いていた。雪夜を追っていた組織の人間とは恐らく彪彦のことだろう。だが、あの男が捕まるとは思っても見なかった。

「それはあの影山彪彦という男のことか?」

「そーだ、あいつだ。雪夜にブリキの人形に変えられちゃった」

愁斗が彪彦に出会った時、愁斗は彪彦から底知れぬ魔導力を感じた。もし、戦ったら自分でも勝てるかわからない相手がやられた。

そのことが愁斗に大きな衝撃を与えた。

だが、その衝撃が愁斗は冷たいほどに冷静にさせた。

「質問がある。この世界を創ったのは芳賀雪夜と言う人物だと言っただけだ?」

「ああ、あいつが創った」

「では、私の知り合いの力を混じっているのはなぜだ?」

愁斗がこの世界から感じた魔導力はひとつではなかった。そこには沙織の力も混じっていたのだ。

「クククク……よく気づいたな。この世界の基盤を創り出したのは雪夜だが、そこに手を加えたのはおまえらもよく知ってる沙織って女だよ」

愁斗は表情を崩さなかったが、翔子は心底驚いた。

「どういうこと？ 沙織ちゃんがいるって……」

そういえば翔子は久美と麻衣子から沙織と連絡がつかないと聞いていた。だが、どうして沙織がここにいるのかわからない。

「ククク……雪夜に気に入られて連れて来られた。そう言えば沙織の友達二人もこの世界を満喫してるぜ」

翔子は愁斗の背中を引つ張った。

「愁斗くん、三人をこの世界から出してあげて」

「わかっている、だが、今はこいつの相手が先だ」

「さつさとやり合おうぜ、クククク……」

「瀬名さんは遠くで隠れていて」

愁斗が腕を伸ばした方向に翔子が走り、その背中を麗慈が狙おうとした。

「あの時はヤツてやらなかったが、ククツ、愁斗の前じゃ話は別だ！」

麗慈の手から針と化した妖系が放たれた。

「彼女に手を出すな！」

愁斗の手から放たれた妖系は麗慈の放った妖系を切り裂いた。

「ククク……逃げられちゃったか。まあ、最初からあんなメスには興味はねえ。俺がやりたいのはおまえだ紫苑！」

幾本もの妖系が蛇のように動きながら愁斗に襲い掛かった。

「貴様は私には勝てない！」

襲い来る幾本もの妖系を愁斗は一本の妖系で華麗に切り裂き、すぐに空間を切り裂いた。闇 が来る！

空間にできた闇色の傷が悲鳴のような音を立てながら空気を吸い込み大きくなっていく。

闇色の奥に潜む 闇 は慟哭した。苦痛が空気を伝わって世界に満ちる。

だが、愁斗や麗慈の周りを行き交う人々や動物たちは、笑みを浮かべながら何事もないようにテーマパークを満喫している。この世界は狂っていた。

「クククク……」

嗤った麗慈は愁斗と同じことをした。

空間に二つ目の闇色の傷ができた。闇と闇が互いを喰らい合うのか!?

闇色の裂け目から悲鳴が聴こえる。泣き声が聴こえる。呻き声が聴こえる。どれも苦痛に満ちている。

愁斗の腕が前に伸びた。

「行け！」

裂けた空間から闇が叫びながら飛び出した。それは麗慈に襲い掛かった。

「ククク……同じ手が何度も通用するか！喰らってやれ！」

放たれた二つの闇は互いに泣き叫んだ。そして、ぶつかつた。轟々と交じり合う闇と闇は巨大な渦を造り上げ、中から激しい呻き声が聴こえて来た。

愁斗は冷ややかな目をして闇を見つめた。

「麗慈、貴様は闇が何であるかを知らない。闇の恐ろしさを身をもって知るがいい！」

唸り声をあげていた闇が突如、麗慈に襲い掛かったではないか!?

「真物を知れ！」

愁斗がそう叫んだのと同時に闇は麗慈の身体に絡みついた。

黒い触手のようになった闇は麗慈の腕を掴み、脚を掴み、胴を掴んだ。

「放せーっ！」

口を開けたその中に闇色の触手が入り込んだ。闇が麗慈の体内を侵食しはじめた。

「クククククククク……ククク……」

麗慈は口に入った闇を喰いちぎった。

「ヤラれてたまるか……ククク……ククク……」

闇の侵食が途中で止まった。次の瞬間、麗慈の身体を包み込

んでいた 闇 が辺りに撒き散らされはじめた。

闇 が麗慈から離れた 闇 は周りにいた人々や動物たちを喰らいはじめた。

「麗慈、何をした！」

「クククク…… 闇 を支配した。 闇 は強い者には絶対の服従をすることを知った」

闇 に身体を包まれた麗慈は悟りを得たのだ。

喰われはじめた者たちは、それでも笑っていた。自分たちの身に何が起きているのかわかっていないのだ。何が起ころうともテーマパークを楽しんでいるのだ。

周りの者たちを十分に喰らった 闇 は裂けた空間の内へ還っていった。

「クククク…… 闇 には決して自分の弱さを見せてはいけないよ。うだ。絶対者は自分であると 闇 に知らしめることが 闇 を操るコツだな、そうだな紫苑？」

「貴様は真理に近づいた。だが、 闇 が何であるかを知らない以上は私には勝てない。奴らは支配するだけでは駄目なのだ」

「あれが何だつて構わねえよ、俺の力になりやあそれでいい、ククク……」

「貴様はいつまでも真物にはなれんな」

愁斗の手から妖系が放たれた。麗慈がそれを余裕の表情で避けると、妖系は鞭のようにしなって地面を砕き、その反動で再び麗慈に襲い掛かった。

麗慈の肩から紅い血が滲んだ。

「妖系を放つスピードが上がってやがる」

そう言ったのもつかの間に、再び愁斗の手から妖系が放たれた。空かさず麗慈も妖系を放った。

光が交差し、互いに放った妖系を避け合った。だが、そのことにより、近くにいた人々や動物たちが切り裂かれてしまった。

愁斗も麗慈も顔色一つ変えない。二人とも自分に関係ないものが

いくら死のうが構わないのだ。

二人が妖系を放ち、それを避け合うことによって、周りの者たちが次々と殺され、辺りには身体のパーツや綿が散乱していった。

目を覆うような光景が辺りに広がった。その中で二人は戦い続ける。

「ククツ、クククク……いい眺めだ。血に餓える俺には最高の眺めだ」

「貴様は狂っている」

「おまえも人のこと言えねえだろ？」

「そうだ」

愁斗は疾走した。麗慈の周りを素早く回り、網を作り上げた。

網が急速に縮み中心にいた麗慈を捕らえようとした。だが、麗慈は高く飛び上がり、そこから妖系を放った。

針と化した妖系が愁斗の太ももを貫いた。愁斗の表情は変わらなかった。決して痛みがないわけではない。敵と戦っている最中は痛みを忘れなければならないのだ。

愁斗は空に奇怪な魔方陣を瞬時に描いた。召喚を行う気だ。

奇怪な紋様が空に描かれ、それが呻き声をあげた。

愁斗の作った網は網ではなく、これと呼び出すための『巣』であった。

それは汚らしい嗚咽を漏らし、この世に巨大な蜘蛛の怪物を生み出した。

大蜘蛛は麗慈に向かって糸を吐き出した。

宙に網のように広がった蜘蛛の糸を麗慈は切ろうとした。しかし、放った妖系は蜘蛛の巣を切ることができず、へばり付いてしまった。「クソツ！」

ベトベトした蜘蛛の巣は麗慈の身体に巻きつき、彼の動きを完全に封じた。妖系を放つ左手も動かせない状態だった。

愁斗は巨大蜘蛛に強い念を送った。召喚したものは召喚者が魔導力によって支配しなければならぬ。支配できぬ場合は召喚されたも

のが自らの意思で動くことになる。

愁斗は命じた。

「喰らってやるがいい」

大蜘蛛は麗慈の左腕に喰らいついた。肉が剥ぎ取られ、血が大量に流れ出る。

「クククク……うまそうに喰ってやがる」

大蜘蛛は咀嚼を終えて肉を呑み込むと、もう一度、麗慈に喰らい付こうとした。

「食事は終わりだ！」

自由を奪われていた麗慈の身体が強引に動かされ、大蜘蛛の身体に一筋の光が走った。

奇声を発した大蜘蛛は真つ二つに割れた。

「クククククククク……」

麗慈は喰われた腕から血がこれ以上出ないように妖糸で縛って止血した。

それが呻き声をあげた。愁斗はすでに二つ目の召喚をしていた。これにはさすがの麗慈も苦笑を浮かべた。

その呻き声に合わせて何かか遠吠えをあげ、四つ足の獣がこの世に迷い込んだ。

魔方阵の中か現れたのは漆黒の毛を持ち三つの頭を持つ巨大な狼であった。

狼は喉を鳴らしながら歩き回ると、辺りに散乱していた肉片を喰らった。

愁斗は辺りに散らばっていた人肉をエサに召喚を行ったのだ。

「地獄の番犬は気性が荒いのでな、心して戦うがいい！」

三つの頭が同時に咆哮をあげた。その声自体に魔導がこもっている。

咆哮を聴いてしまった麗慈の身体を痺れが襲った。だが、麗慈は並みの人間ではない。

涎を垂らしながら狼は麗慈の襲い掛かった。

麗慈も妖系を放とうとしたが、腕が痺れてワンテンポ遅れた。それでも頭の一つに付いた目を切り裂いてやった。

咆哮をあげながら激怒する狼は麗慈の身体に喰らい付こうとした。だが、麗慈は素早くジャンプして狼の頭の上に乗った。

「ククク、死ね！」

麗慈の手が煌き狼の頭が一つ大きな音を立てて地面に落ちた。

妖系が放たれた。それを放ったのは同じく狼の身体の上にいた愁斗であった。

麗慈の右腕が宙を舞った。そして、何かが叫んだ。

「ぐあぁっ！」

痛みに悶える麗慈に 闇 が襲い掛かっていた。叫び声をあげたのは麗慈一人ではなかったのだ。

「……恐怖」

愁斗が小さく呟いた瞬間、麗慈の身体は全て 闇 に呑み込まれた。

闇 が苦しそうに泣き叫びながら闇色の裂け目に還っていった。

「これで終わりだ」

以前、麗慈は 闇 に呑まれて連れて行かれたことがあった。その時は、妖系を使って空間を切り裂いて帰還した。だが、今呑み込まれた麗慈は妖系を放てる右腕を失っていた。

狼の身体から地面に降り立った愁斗は、地面に転がる狼の頭をもとの位置に縫合してやった。

咆哮をあげた狼は地面に転がった麗慈の腕を喰らいながら、愁斗の手を煩わせることなく自ら還っていった。

戦いを終えた愁斗は一息ついて安らかな顔つきに戻った。

「瀬名さん！」

大声で呼んだ。だが、翔子の姿はどこにも見当たらなかった。

翔子が消えた！？

愁斗は辺りを隈なく探したが見つかることはできなかった。そこでケータイで翔子に電話をかけようとしたが、この世界のせいであ

ろう、ケータイのディスプレイには圏外の文字が表示されていた。
さすがの愁斗の顔にも動揺と焦りが走った。

未完成の城（19）

物陰に隠れて愁斗を見守る翔子の背後から誰かが近づいて来た。

翔子は全く気がついていない。

「にやば〜ん！ 翔子ちゅあ〜ん！」

「はあぁっ!？」

翔子は変な声をあげて驚き、後ろを振り向いた。そこに立っていたのは撫子だった。

「翔子奇遇だねえ〜、こんじゃ世界で出逢うにやんて運命ビリビリ感じちゃうよねえ」

「……何で撫子がいるの？」

「ちよつくら仕事に来ただけど、まさか翔子プラスアルファに出会うとは思ってもみにやかったよ」

プラスアルファとは愁斗と麗慈のことである。

撫子の任務の中には麗慈を捕まえることも含まれているが、できれば相手にしたくない。ここは愁斗に任せようと撫子は考えた。

「あの、撫子どうにかしてよ」

翔子は戦いをはじめている二人を指差して言った。だが、そんなことを言われても撫子は困るだけだ。はっきり言って撫子の力では二人をどうすることもできない。

「ムリムリイ、アタシはか弱い女の子だもん。それに仕事もあるしい〜。どうする翔子？」

「どうするって何が？」

「ここにいてもきつと巻き添え喰うと思うしい、見たくないものまで見ることになるかもしれないよ」

途中から撫子の口調は真剣なものに変わっていたのを翔子は気づいただろうか？

『見たくないもの』とはいったい何なのであるつかと翔子は考えた。今の自分が知るべきではないものなのか。

「見たくないものって何？」

「それはひ・み・つ。知らにゃい方が翔子のためだよ。だから、アタシと一緒にここを離れるか、それともここに残るか」

「うん」

見てはいけないと言われると恐いも見たさで見たくなる。

「早く決めてよ、アタシここにいるの嫌だから。今でも吐きそうにやくらいツライ」

「でも……」

「アタシに付いて来ても危険な目に合うようにや気がするけど、ここよりはマシだと思うよ。決めるのは翔子だよ」

選択肢はいくつかあった。この場に残るか、撫子と行くか、それとも自分ひとりどこかに行くか。

翔子は決めた。

「撫子と行く。だって、聞いた話だと撫子も結構強いんでしょ？」

私のこと守ってね」

「大丈夫、翔子はアタシが命に代えても守るから」

撫子は翔子の手を掴んでこの場から急いで逃げた。

走り出してすぐに電気が身体を走るような感覚を撫子が感じた。

「翔子耳塞いで！」

わけもわからず翔子は撫子に言われて耳を塞いだ。この時、闇がこの世に呼ばれていた。

撫子は耳を塞いでいるのにも関わらず身体がビリビリした。

耳を塞ぎながらだいぶ走ったところで、やっと撫子が耳から手を外したのを見て、翔子も耳から手を離れた。

「どうして耳を塞いだの？」

「この世のものじゃにゃい声が聴こえるから……ぶるぶるうん」

撫子が闇を見たことがあるのは一度だけだが、その恐怖は今でも鮮明に忘れることのできない記憶として身体に染み付いている。身体に巻きついた闇の感触は忘れることができなかった。

二人は走るのを止めて歩くことにした。撫子は体力が有り余って

いるが、翔子は息が上がってしまったている。

「翔子死ぬ間際の表情してるよ、体力ナサナサ」

「だって撫子に合わせて走るのに全速力で走ったから、息が切れるのも当たり前でしょ」

「あれでも低速で走ったんだけどにゃ」

「十分私の全速力だった」

息を落ち着いてきたところで翔子は改めて辺りを見回した。

人々やきぐるみと思われる動物たちが、無邪気な子供のように歩いたり乗り物に乗ったりしている。多くのきぐるみが歩いていて、時点で不自然な感じがするが、それよりも空気を伝わって来る何が可笑しい。

「撫子、いったいここは何なの？」

「異世界って感じかにゃ、見たまんまの世界だよ。小学六年生の芳賀雪夜くんが創り出した世界としか今のところ知らにゃいけど」

「沙織ちゃんたちがいるのは知らないの？」

撫子はいったん歩くのを止めて翔子の顔を思いつきり見た。

「にゃにゃっ!？」

「麗慈くんが、沙織ちゃんたちがいるって言ってから」

「オーマイゴッド! にゃんでどうという経緯で!？」

「私に聞かれても知らないって……沙織ちゃんの友達が二人って言うてから、たぶん久美ちゃんと麻衣子ちゃんもいるんだと思う。それも、どうやら沙織ちゃんはその芳賀くんって子に好かれてるみたいで、ここに連れて来られたみたい」

「……はあ、助けにゃきゃね」

撫子は頭を抱える動作をして『う』と唸った。翔子と愁斗に出会っただけでも予定外の出来事だったのだが、そこに加えて女子三人組までもがいるとは、撫子は困り果てた。

赤の他人であれば撫子は冷たく見捨て、平気で殺すこともできる。だが、それが知り合いとなると撫子はどうにかしなければと使命感に燃えてしまう。撫子は友達とか友情と言っ言葉に弱かった。

うな垂れる撫子に翔子はガッツポーズをした。

「撫子ファイト！」

「……あのさあ、芳賀クンに連れて来られたってことはさあ、今回の事件のど真ん中にいるってことだよねえ」

余計に撫子はうな垂れた。

しばらく歩いていて翔子はどこに向かっているのか気になった。

「あのさ、私たちってどこに向かって歩いてるの？ 適当ってことはないよね？」

「あれ」

撫子は遠くに見える城を指差した。

二つの世界のテーマパークが混ざり合っても、あの城がこの世界の象徴であった。そして、あの城は雪夜の象徴でもある。

城を眺めた翔子は小さく呟いた。

「寂しい感じのする城だね。周りは全部明るくて楽しそうなのに、あの城だけが周りから隔離されてる感じ」

「あの城にやにかあるって報告受けてるんだけど、できれば行きたくにやい」

「どうして？」

「翔子はわからにやいかもしれにやいけど、城に近づくと連れて身体がビリビリするんだよ」

「嫌な感じがするってこと？」

「それはわからにやいけど、大きな力があそこに溜まってるのはたしかだね」

だいぶ城に近づいて来たところにあつた観覧車乗り場を翔子はふと見て叫んだ。

「久美ちゃんと麻衣子ちゃんだ！」

「ドドドコ！？」

「観覧車乗り場から出て来た」

「行くよ翔子！」

撫子は翔子を置いて全速力で走った。

久美と麻衣子がちょうどベンチで休もうとした時に撫子は二人の前に到着した。

「二人とも久しぶりい〜!」

撫子に気がついた二人は少し驚いた顔をしながらも嬉しそうな顔をした。

「撫子先輩こんにちは」

麻衣子が丁重にお辞儀をしながら挨拶をするのに対して、久美はちよつと頭を下げた挨拶をした。

「お久しぶり」

この場に翔子が息を切らせながらやつと到着した。

「二人とも……こんにちは……」

両膝に手を置いて肩で息をする翔子を心配してすぐに麻衣子が駆け寄って来た。

「大丈夫でしょうか?」

「うん、私なら平気。それよりも二人とも私たちと一緒にこの世界から出ましょう」

にこやかだった麻衣子と久美の表情が急に冷たくなった。

「出るのでしたら勝手に翔子先輩だけで出てください」

冷たい口調で麻衣子が言い、それに続いて久美も冷たい口調で言った。

「私たち、ずっとこの世界で遊びながら暮らすって決めたんです」

二人はこの世界にすでに魅了されていたのだ。今の状態では自らの意思でこの世界を出たいとも思わない。

翔子は心配そうな表情で二人を見つめた。

「二人とも帰ろうよ」

麻衣子と久美は翔子の言葉を無視して歩き出してしまった。それを追おうとした翔子の腕を撫子が掴んだ。

「追いかけても無駄だよ」

「何で!?!」

「今の彼女たちはこの世界に魅了されてる。何を言っても無駄にや

んだよ。だから、まずはこの世界のもとをどうにかしにゃきゃいけにゃい」

「……うん、わかった」

そう口では言いながらも翔子は去って行ってしまった二人の背中を見つめていた。近くににいるのに何もできない歯がゆさを翔子は感じてしまった。

「翔子、いつでもでも見てにゃいで行くよ！」

撫子は強引に翔子の腕を引っ張って歩き出した。

突然、翔子は愁斗のことを想ってしまった。自分が困った時、頼りにしているひとのことを思い出したのだ。

「愁斗くん、平気かな……そうだよ、勝手に撫子について来ちゃったけど、愁斗くん心配してるかも」

「愁斗クンのことだったら問題にゃいって。心配はしてるかもしれないにゃいけど、他は大丈夫、翔子の彼氏にゃんだから」

「その彼氏って言い方、何かいいね。そうだよね、愁斗くんって私の彼氏なんだよね」

こんな状況で翔子はラヴラヴな気持ちに浸った。愁斗のことを思うだけで勇気が湧いて来る。

想いを馳せて上の空になっている翔子は見て撫子は少し羨ましくなった。

「彼氏彼氏彼氏彼氏彼氏彼氏彼氏、愁斗クンは翔子の彼氏」

「それってからかってるの？」

「もちろんそうだよ。にゃんか嫉妬」

撫子は顔を膨らませてそっぽを向いた。

「どうして嫉妬何てるのよ」

「だって、だってアタシの翔子ちゃんが愁斗クンに盗られちゃったんだもん」

「……あっそ」

翔子は撫子の言葉を軽く受け流して早歩きをした。

「待ってよ翔子！」

撫子は慌てて翔子を追いかけるが、翔子は背中を向けたまま怒っている。

「撫子さ、前も私のこと襲いたいと言ったよね？ やっぱりそういう趣味あるわけ？」

「それはどーかにや〜」

「絶交」

翔子は走り出したが、撫子はすぐに追いついてしまった。

「絶交にやんて言わにやいでよ。撫子、涙が出ちゃう、ウルウル」

口調はわざとらしいが撫子は本気で号泣していた。

「もお、泣くのってズルイよ。許すから、泣かないで」

「爆マジ？」

「うんうん、爆マジ」

すぐに撫子は泣くのを止めて満面の笑みになった。

「じゃあ、翔子のこと襲ってもいい？」

「それしたら絶交だからね」

「にやんで〜、スキンシップだよ〜」

「とにかく絶交」

「う〜、しかたにやいか……」

二人が自分たちの置かれている状況を忘れて会話をしていると、ついに城の目の前まで来てしまった。

「にやんかスゴイ力を感じるんだけど……にやにかが可笑的い」

撫子が城から感じる力は内から響いて来る力ではなかった。本来エネルギーソースは内にあるもののだが、この城はまるで虚勢を張っているようだった。

城の入り口は真っ暗の闇で中が見えない。

「翔子、行くよ」

撫子が城の中に飛び込んで行ってすぐに翔子も中に入った。

二人は驚きの表情を浮かべてしまった。彪彦の時と全く同じで中身が空っぽだったのだ。ただ、今度は中に人がいた。

「センパイこんにちわぁ！」

「沙織さんの知り合いか」

中にいたのは沙織と雪夜であった。空っぽの中に二人がぽつんと立っていたのだ。

この場にいる四人のほかにも彼がいた。

「撫子さん、可及的速やかにわたくしを救出していただきたい」

「うつそ〜、爆マジ!? 彪彦さん捕まっちゃったのってゆうか、その格好にやに?」

「その件に関してはお話できません。ここはひとつ相手をうまく丸め込んで示談で解決していただきたい」

鳥かごに入れられたブリキの鴉としゃべる撫子の服を引っ張りながら翔子は聞いた。

「オモチャと知り合いなの?」

「そにゃとこ」

沙織は小走りで翔子と撫子に近づくと、二人の腕に手を回して腕組みをした。

「センパイ二人もこれから沙織と遊びに行こう!」

翔子と撫子は同時に沙織の腕を外した。

「私たち遊びに来たんじゃないの」

「沙織と一緒に遊びましょうよお〜」

雪夜は翔子たちに駄々をこねる沙織の手を取って目の前にいる二人に話しかけた。

「お二人はここに遊びに来たんですか? それとも他の理由でこの城に?」

この世界に魅了された者たちは自らの意思ではこの城には入れないはずだった。

「アタシはとりあえず、そのカゴに入った知り合いを助けることと、アナタとこの世界の処理」

「私はその付き添いです」

雪夜は二人の話を聞いて納得した。

「やはり、ボクの敵か」

沙織も撫子の言葉を聞いて怒り出した。

「雪夜くんとこの世界の処理ってどういうことですか撫子センパイ！」

「にゃんつーか、とりあえずこの世界は壊さにゃきゃいけにゃいかにゃ〜」

この世界が壊される。その言葉を聞いた瞬間、沙織の内に秘めたチカラが目覚めた。

「センパイ嫌いですう、この世界は沙織の世界だもん！」

大泣きをはじめた沙織の身体を中心に爆風が巻き起こった。近くにいた三人の身体が大きく吹き飛ばされた。

地面に尻から落ちた撫子はお尻を擦りながら起き上がった。

「にゃんで沙織ちゃんが!？」

魔導の力を沙織が持っていたとは撫子にとって完全な誤算であった。そんな力を内に秘めていたとは今まで気がつきもしなかった。

雪夜は哀しい顔をしていた。

「誰も邪魔さえしなければ、いつまでも楽しく暮らせたのに……。世界が崩れる……」

大地震にでも見舞われたように世界が激しく揺れた。

撫子の頭上に石の塊が落下して来た。

「にゃ〜っ!？」

揺れで自由に身動きができなかったが、撫子は辛うじて石を避けた。石は地面に激突して砕け飛んだ。このような現象が城のあちらこちらで起こっている。

沙織が激しく泣くとともに世界が振動する。沙織が肩を震わせるたびに世界が上下に揺れる。

揺れは激しさを増していき、立つことはおろか、座っていても身体が地面を滑る。

翔子は自分の方に転がって来る鳥かごをつまぐキャッチすることに成功した。

「大丈夫ですか？」

翔子の問いに、鳥かごの中に入っている彪彦は目を回しながらも、しつかりとした口調で答えた。

「ええ、助けていただいてありがとうございます」

「あの、もしかして私たちどこかで会ってませんか？」

翔子の知り合いにブリキの人形などいなかったが、どこかで翔子は会っているような気がした。

「ええ、アーケード街で愁斗くんとあなたが一緒にいるところでお会いしましたよ。あの時は人間の姿でしたかね」

「ああつ、あの時の！？」

また世界が激しく揺れて翔子は掴んでいたはずの鳥かごを大きく投げ飛ばしてしまった。

鳥かごは地面に落ちた衝撃で扉が開き、ブリキの鴉は自ら外に出た。人形にされていても彪彦は自らの意思で身体を動かすことが可能だった。

空を飛ばたい彪彦は揺れの影響を受けなかった。そして、彪彦は雪夜のもとに行った。

「雪夜さん、わたくしの身体を元に戻していただきたい」

「嫌だ」

「あの女の子の暴走を止めなくては大変なことになるのですよ」

「ボクはそれでもいいさ」

雪夜は上空を飛んでいた彪彦を素早く掴んで捕獲した。

「放しなさい！」

「それはできないね」

彪彦は必死の抵抗をするが所詮はブリキの人形だ。身動き一つすることはできなかった。

この城の外では世界は完全なる崩壊を迎えていた。

二つの世界が切り離され、沙織のイメージした世界が崩れていく。楽しそうな顔をしながら動物たちが消えていく。アトラクションが崩れていく。空が落ち、地面が砕け飛んだ。

この世界に残ったものは、闇の中に浮かぶ壊れた城だけであった。

未完成の城（19）

翔子がないという事実には愁斗は動揺した。本当に行方がわからなくなってしまう。

普段ならば愁斗は念のために翔子に自分の妖系を巻きつけていた。だが、麗慈との戦闘に全力で挑むためにその妖系を切ってしまった。翔子の居場所を探る方法はもうひとつあるのだが、その方法はこの世界では無効とされてしまっていた。

もうひとつの方法とは、愁斗が所有する全ての傀儡の身体に埋め込まれた魔導具の発する気を探ること。だが、この世界の中ではその気が完全に掻き消されていた。

「さらわれたのか、それとも自らの意思で……」
自らの意思でどこかに消えるとは考えにくかった。きっと誰かに連れ去られたのだろうと愁斗考えた。愁斗は撫子がこの世界にいることを知らなかった。

どこに翔子が行ってしまったのかと愁斗が考えた時、遙か遠くに微かだが城の一部が見えた。愁斗はその城に何かを感じた。

あの城に翔子がいるとは限らない。だが、何も手がかりがない以上は城に行ってみる価値はありそうだ。

愁斗は城に向かって走り出した。

走りながら愁斗は自分を責めた。翔子を守ると決めたのに、もし、翔子に何かあったら……。

大切なものを守りたい。愁斗は失うことを何よりも恐れた。愁斗はまだ悪夢から覚めていなかった。

愁斗の悪夢のはじまりは母が死んだところからはじまった。そこから全て狂いはじめた。

いつ悪夢から覚めるのだろうか？

翔子を守らなくてはいけない。そう愁斗は何でも自分に言い聴かせた。

しばらく愁斗が走っていると誰かに声をかけられた。

「愁斗先輩！」

それは麻衣子だった。すぐ横には久美もいる。足を止めた愁斗に麻衣子が近づいて来た。

「愁斗先輩もここに遊びに来たんですか？」

「いや」

麻衣子の顔つきが変わった。

「私たちをもとの世界に帰す気ですか？」

「そうだ」

この言葉を聞いた久美が麻衣子の腕を引いて歩き出した。

「行くわよ麻衣子」

「ええ、行きましょう」

怒った様子の二人は愁斗から離れようとした。

愁斗は二人を追おうとはしなかった。今は一緒にいても足手まといになるだけだ。それよりも今は翔子を見つけて、この世界を創った者に会わなければならぬ。

愁斗は何かを感じた。何かが起こる。

世界が急に激しく揺れた。

この時ばかりはこの世界にいた者たちも慌てふためき出した。

笑顔で遊んでいた者たちの顔が怒りつき、創られた動物たちは自分たちが消えて、世界も消えることを知った。

揺れているのは地面だけではない。空気も空も地面も、全てが激しく泣いているように揺れる。

「混ざり合っていた世界が切り離された。」

次の瞬間、愁斗たちはもとの世界のテーマパークにいた。他の人々も帰って来ている。あの世界が崩壊する直前にもとの世界に戻されたのだ。

テーマパークは本来あるべき姿に戻り、帰って来た人々の記憶からはあの世界のこととはなかったことにされた。

大きな物事の変動により、人々の記憶は大きく改ざんされた。

何事もなかったようにこのテーマパークを楽しむ人々。その中には愁斗たちも含まれていた。

「愁斗先輩、次何に乗りましょうか？」

麻衣子が愁斗に尋ねた。

今日は愁斗と麻衣子と久美の三人で新しくできたテーマパークに遊びに来た。

「そうだな、次はねえ……」

次に乗る乗り物を決めようとした時、愁斗は不思議な違和感を覚えた。本当にこの二人とこのテーマパークに来たのか？

愁斗は急に激しい頭痛と吐き気に襲われてよろめいた。

倒れそうになった愁斗の身体を素早く久美が支えた。

「大丈夫ですか愁斗先輩。気分でも悪くなりました？」

「あ、うん、ちょっと何だか気分が……」

愁斗は久美に支えられながら近くのベンチに座った。

二人に心配そうに見つめられて愁斗は苦笑いを浮かべた。

「そんなに心配しなくても平気だよ」

「ですけど、もし愁斗先輩にもしものことがあったら沙織さんが悲しみますから」

麻衣子は自分の言葉にはっとした。沙織とは誰のことだったか思い出せない。そんな知り合いはいないはずだ。

久美も沙織のことを忘れていた。

「沙織って誰だれのことよ、麻衣子の新しい友達？」

「いえ、そんな名前の知り合いはいません。変ですね、どうしてそんな名前が出てきたんでしょうね」

その名前に聞き覚えは三人ともあったが誰だったのか思い出せない。

考え込んでしまった三人は黙り込んでしまった。

愁斗は先ほどから大切なものをどこかに置いて来てしまったような感覚に襲われていた。しかし、何をどこに？

「僕たち電車でここまで来たよね？」

馬鹿げた質問だと思いつつも愁斗は二人に聞いた。

「ええ、電車を使って三人で来ましたけど」

麻衣子は不思議な顔をしながら答えた。

久美も同じことを言う。

「駅で待ち合わせして来ましたよね？」

久美も自分の言っていることに違和感を覚えた。

三人とも記憶は駅で待ち合わせして電車に乗ってここまで来たと言っている。映像としては夢のように漠然としてしか思い出せないが、三人で来たのは確かなようだった。

では、なぜ違和感を感じるのだろうか。

愁斗は三人で来た電車の風景を思い出そうとした。

最初は座れなかったが途中から並んで座った。そして、自分の名前を誰かが呼んだ。それが誰だったのか、愁斗は思い出そうとしたが急に頭痛に襲われた。

「あれは……誰……？」

愁斗の頭の中で誰かが『愁斗くん』と呼んでいる。自分は誰に呼ばれているのか。それはとても大切なひとだったような気がする。

少しの間だけ、このままでいさせて……。

そう言った彼女はゆっくりと目をつぶって愁斗の肩に頭を乗せながら眠った。

自分の肩で眠るひとを愁斗は優しい眼差しで見守り続けた。

ベンチに座っていた愁斗が急に立ち上がった。

「どうして、どうして僕は大切なひとのことを忘れてしまったのだろうか……。僕が魔導に魅せられるとは……。」

封じ込められていた愁斗の記憶が全て蘇った。

麻衣子は不思議な顔をして愁斗を見ている。

「愁斗先輩、どうしたのですか？」

愁斗の記憶を取り戻せたのは彼が魔導士であり傀儡師だったからだ。魔導の力を持っていない者は魔導によって封じられた記憶を取り戻すことはできない。

「僕は行くところがあるから、ごめん、また今度」

行こうとした愁斗の服を久美が引つ張った。

「待ってくださいよ、どうしたんですか？」

「急用ができたんだ」

「急用って何ですか？ 私たちも連れて行ってくださいよ」

久美は愁斗の服を放さなかった。久美は自分でもなぜこのようなまねをしているのかわからなかった。ただ、愁斗ひとりで行かせたくなかった。

麻衣子も久美と同じ気持ちだった。

「愁斗先輩、どこに行くのでしたら私たちを連れて行ってください。なぜだかわからないのですが、私たちも行きたいんです。そして、誰かに会わなきゃいけないような……」

記憶が嘘をついていても、身体や心は覚えていた。

愁斗は迷った。自分の力を使えば二人の記憶を解き放つことができるだろう。だが、今ここでそれをする意味があるのか？

向こうの世界に行つて問題を解決すればこの二人の記憶は自然に戻るだろう。わざわざ危険なところに二人を連れて行くべきではないと愁斗は考えた。

「僕ひとりで行きますから」

久美が愁斗の服をより一層力を込めて掴んだ。

「ひとりじゃ行かせないわ」

麻衣子が愁斗の腕を掴んだ。

「私たちも行きます」

「わかった、仕方ない」

愁斗は自分でもなぜそう言ったのかわからなかった。無理やり二人を突き放すこともできたはずだ。

「二人とも僕の目をしっかりと見るんだ」

言われるままに二人は愁斗の瞳を見た。

真っ黒で吸い込まれそうな瞳。瞳を見ているだけで不思議な術にかかってしまいそうだ。

急に久美と麻衣子が一瞬気を失って倒れそうになった。それを愁斗が同時に抱きかかえる。

「大丈夫？」

久美と麻衣子はうなずいた。二人の記憶は一瞬にして戻っていた。

「思い出したわ、こことは違う変なテーマパークにいたこと」

「沙織さんが少し変だったのですが、だんだんそんなことどうでもよくなって、いろんな乗り物などに乗って遊んでいたんです。でも、どうして愁斗先輩が？」

「二人はあの世界で不思議な体験をしたと思う、僕もそんなことができるのさ」

愁斗は近くを歩き回りながら『接点』を探した。

「ここか！」

愁斗の手が妖糸を放ち空間が煌いた。それは開かれた世界の扉。

二つの世界は繋がっている。それは距離や時間を超越し、そこにある。

開かれた扉の中へ愁斗は飛び込んだ。

二人も裂かれた空間の中に飛び込んだ。それを見ていた周りの人々は自分たちの目を疑った。

未完成の城（20）

揺れが治まり、翔子はやっと立ち上がることができた。

「沙織ちゃん、私たちと元の世界に帰ろう！」

「ヤダもん、沙織帰らない」

「家族の人たちも心配してるよきつと」

沙織を説得しようとして言ったこの言葉が逆効果となった。これこそが帰りたくない理由。

「パパとママなんかいらさない、沙織は帰らない！」

「帰る必要なんてないさ、ボクらはずっと子供のまま、未完成のままでもいい……」

そこには雪夜が立っていた。その手には彪彦の入られた鳥かごを持っていた。

雪夜は沙織を手放したくなかった。

「ボクらは同じ、同じ痛みを分かち合える……。ボクはボクが創り出したこの城の意味がやっと理解できた」

鳥かごを床に下ろした雪夜は微笑んだ。そして、沙織の傍らにそっと近づいた。

「ボクらにあるものは過去と現在。この空虚な城の中にはいつも誰かが必要なんだ」

この城は雪夜を象徴するもの。城とは雪夜の心であり、その中には常に誰かがいること必要だった。それが沙織だった。

沙織は涙ぐんだ瞳で雪夜を見つめた。

「雪夜くん……」

「世界は壊れてしまったけど、また創ればいいさ。けど、その前に彼女らをどうにかしなきゃいけない」

雪夜の言葉に沙織は無言でうなずいた。

撫子は雪夜に見据えられて身構えた。

「にゃ、にゃに？ このスーパー美少女撫子ちゃんとヤル気！？」

戦闘体勢に入っている撫子を見ながら雪夜沙織に聞いた。

「彼女らをどうしたらいいと思う？ きつとあっちの世界に還してもすぐにまたここに来ようと思うんだ」

「捕まえて牢屋とかに入れて置こうよ」

そう沙織は屈託のない笑みで言った。

魔導を使う才能があつたとしても、目覚めたばかりの沙織には耐性がなかった。恐らく沙織も魔導に魅了されているに違いない。

雪夜は沙織の手をぎゅっと握り締めた。

「新しいマジックを見せてあげるよ」

新しいとはいったいどのようなものなのか？

雪夜の使うトウーンマジックや世界を創り出す能力はもとなる材料が必要だった。

今は崩壊してしまつたあのテーマパークも、雪夜がパソコン上でデータとして作つたテーマパークを実体化したのだ。新たな『マジック』も原理は近かつた。

「ボクが沙織さんのイメージを具現化する。だから、沙織さんは彼女たちを捕まえる何かをイメージして」

それはテーマパーク造り変えた時の応用技だった。

沙織はたくさんぬいぐるみを想像した。それを雪夜は握り締めた沙織の手から感じ取って創造する。

大中小いくつものぬいぐるみが突如いろいろな場所から現れた。

この魔導を使えば銃でも戦車でも出せるかもしれない。だが、沙織の出したものはぬいぐるみだった。

ぬいぐるみが撫子に襲い掛かる。

「こんにゃのと戦うの!？」

鋭い撫子の爪がぬいぐるみを切り裂き、彼女の周りに綿が散乱する。

ぬいぐるみは決して強くもなく、攻撃をされても痛くもない。だが、その数は無限と思えるほど、次から次へと現れる。

「撫子ーっ!」

翔子が助けを求めた。撫子が翔子の方を振り向くと、翔子は人間サイズのクマのぬいぐるみに捕まっていた。ぬいぐるみと云えど、普通の女の子と変わらない翔子を捕まえるだけならば、何の問題もなかった。

「翔子のばかあ！ 捕まっつてどうするのって、わあ！？」

撫子が後ろを振り返ると大波のようなぬいぐるみを押し寄せた。これに立ち向かっても勝てない。撫子は逃げた。

幸い中身の全くない城の中は広がった。逃げ場ならばいくらでもある。

押し寄せて来るぬいぐるみから逃げ回る撫子。いつまでも逃げていてもしょうがない。この元を断たなければ。

撫子は沙織に向かって走り出した。その前に大きなぬいぐるみたちが立ちほだかる。

鋭い爪を振り回しながら撫子は沙織に接近していく。

もう、手を伸ばせば沙織に。

「センパイ来ないで！」

沙織が叫んだのとともに撫子の身体が後ろに大きく吹き飛ばされた。

上空をくるくると回りながら吹き飛ばされた撫子は自慢の運動神経で軽やかに地面に着地した。

「近づくこともできにゃい」

それに近づいたとしても、撫子はその後どうしたらいいのかわからなかった。

できることならば撫子は沙織を傷つけない。では、雪夜ならば？

撫子は雪夜に狙いを定めた。だが、雪夜は沙織の近くにいます。どうやって近づけばいいの？

やはり近づくことは無理だった。撫子は追って来るぬいぐるみから逃げ回ることしかできなかった。

辺りを走り回る撫子を見て雪夜は沙織に言った。

「このままじゃいつまで経っても捕まえられない。他のものを想像して！」

「他のもの？」

雪夜は撫子を捕まえることのできる何か的確に沙織に説明することができた。だが、雪夜は沙織に任せた。

沙織が考えごとをはじめたことによつて、新たなぬいぐるみが現れなくなった。そして、隙もできた。

全速力で走つた撫子は雪夜に近づき鋭い爪を大きく振り上げた。接近して来た撫子に気がついた沙織が叫ぶ。

「センパイダメ！」

再び撫子の身体が吹き飛ばされそうになつたが、撫子はその瞬間に雪夜の腕を掴んでいた。

吹き飛ばされる撫子に巻き添えを喰らつた雪夜は思わず沙織の手を放してしまった。

大きく吹き飛ばされる二人。叫ぶ沙織。

「雪夜くん！」

吹き飛ばされつつ雪夜は掴まれた腕を掴む撫子の腕を掴み返した。高らかに雪夜は声をあげた。

「トウーンマジック！」

「にゃ〜っ!？」

撫子はねこのぬいぐるみにされてしまった。

相手がこんな技を使えるなど撫子は全く知らなかった。どうりで彪彦がブリキの人形にされていたはずだと今になって思った。

ぬいぐるみにされた撫子は辛うじてしゃべることができたが、彪彦と違って動くことはできない。撫子は魔導士ではないので魔導力があるわけではない。撫子が持っているのは多少の耐性とズバ抜けた感知能力だけで、彪彦のように無理やり魔導力で身体を動かすよくなまねはできないのだ。

「にゃーにゃーもおヤダーっ！早くプリティ美少女の身体に戻してよー！」

「それはできないよ」

この場に駆け寄って来た沙織は嬉しそうな顔をしてねこの人形と化した撫子を抱きかかえた。

「可愛いですうセンパイ！ 沙織が大事にしますからねっ！」

「大事にしにやけてもいいから、もとに戻して！」

「だから、できないって　！？」

雪夜は首に違和感を感じ、何を見た翔子が声をあげた。

「愁斗くん！ それに二人も！？」

全員の視線が愁斗と久美と麻衣子に集まった。

愁斗は妖系をしっかりと手で握り締めている。その妖系の先はしっかりと雪夜の首に巻きつけられていた。

「動くな、動くと貴様の首を飛ぶことになる」

冷たく言い放つ愁斗は本気だった。

雪夜は何もすることができず、近くにいる沙織も動けずにいた。

愁斗は命じた。

「まずは瀬名さんを解放してもらおう」

この言葉の後に翔子は身体を掴まれていたクマのぬいぐるみから開放された。

「あゝ、助かった」

緊張の糸が解れて翔子は地面にへたり込んだ。

ぬいぐるみにされた撫子が沙織の腕の中で叫んだ。

「アタシも早く人間に戻してーっ！」

「ボクの首に巻きついた何かをどうにかしてもらえないと無理だよ」

「愁斗クーン、この子に巻きつけた糸解いてよ〜ん！」

「駄目だ」

撫子の言葉に愁斗は即答した。

「そんなにや〜」

愁斗の手から妖系が放たれた。それは雪夜を操る妖系であった。

人形のように操られる雪夜は自分の意思とは関係なく沙織から撫子を受け取った。そして、愁斗が命じる。

「撫子を人間に戻せ」

「しかないな、トウーンマジック！」

撫子は人間の姿に戻ってすぐに翔子のもとへ駆け寄って行った。床に置いてあった鳥かごがガタガタと揺らされた。

「わたくしももとの姿に戻していただきたい」

「　だそうだよ」

雪夜はそう愁斗に告げたが、愁斗の反応は冷ややかだった。

「彼は……影山彪彦か、彼はもとの戻さなくてもいいだろう」

「にやにやにやに言うの！？　ちゃんと戻してくれにやいとアタシが後で困るよお」

喚き散らす撫子を翔子が後押しした。

「愁斗くんお願い」

雪夜の身体が動き出し鳥かごの中に入っている彪彦を抱きかかえた。

「トウーンマジック！」

彪彦の身体がもとの鴉に戻った。

「助かりました愁斗さん、ありがとうございます」

鴉の姿をしている彪彦を見て愁斗は何も思わなかった。すでに彪彦の本体が鴉であることには気づいていたのだ。

一段落ついたところで麻衣子がしゃべりだした。

「帰りましょう沙織さん」

「沙織帰りたくない」

後退りをする沙織に久美は怒鳴るような口調で言った。

「あんたね、せっかく私たちが迎えに来てあげたんだから、一緒に帰るわよ！」

「ヤダヤダヤダヤダ！　沙織はこの世界から出たくない。ずっと子供のままでもいいんだもん！」

「あんたわがまま言っていないで私たちと帰るのよ！」

久美は怒りながら沙織に詰め寄ろうとした。だが、沙織が叫んだ。
「来ないで！」

久美の身体が吹き飛ばされ、麻衣子が地面に倒れながらそれを受け止めた。

「久美さん大丈夫ですか？ 沙織さんなんてことするんですか！」

「ヤダヤダヤダヤダ！ 沙織は久美ちゃんと麻衣子ちゃんとの世界で暮らしたいの！」

起き上がった久美は再び沙織に詰め寄った。

「私はもとの世界に帰るわよ、あんたを連れてね」

麻衣子も沙織に向かって歩き出した。

「一緒に帰りましょうよ沙織さん。なぜ、帰りたくないのですか？」

「あんな世界つまらないもん！」

沙織の言葉を聞いて怒った顔をした久美の手が沙織を掴もうとしたが、沙織はまた叫んだ。

「だから、帰りたくないの！」

久美の身体が再び後ろに飛ばされて麻衣子に受け止められた。

今ので久美は足をひねってしまったが、それでも再び沙織に近づこうとした。

「あんな世界ってどういうことよ！ それって私や麻衣子と遊んでる時もつまらなかったってこと！」

「そ、そうじゃないよお」

「だったら私たちと帰って、あつちで遊べばいいでしょ？」

「だから、違うの違うの違うのぉ！」

再び久美の身体が吹き飛ばされた。

状況を静かに見守っていた愁斗が静かに口を開いた。

「この世界さえ消えれば、沙織がここにいる意味がなくなる」

それはつまり、雪夜を殺すということだった。

妖系を持つ手に力が込められた。

愁斗が何をしようとしているのかを察した翔子は静かに言った。

「その子のこと殺さないよね」

こう翔子に言われなければ愁斗は殺していたに違いない。

雪夜の首に巻きついていた妖系が地面に落ちた。

ため息をついた雪夜は微笑んだ。

「ボクは帰ろうと思う場所がない。けど、沙織さんは違うようだ」
何を感じ取ったのか沙織は雪夜を見つめた。

「どういうこと、沙織は帰りたくないよお。ねえみんなもこの世界で住もうよ！」

久美と麻衣子は沙織のもとに駆け寄って、沙織の腕を掴んだ。

「帰るわよ」

「帰りましょう沙織さん」

「ヤダよ、沙織帰りたくない！」

沙織は二人の腕を振り払って雪夜の手を掴んだ。しかし、その手は雪夜によって振り払われた。

「どうしてなの雪夜くん!？」

「どうしてかな、ボクにもわからないよ。でもさ……」

雪夜は魔力のこもった瞳で沙織を見つめた。すると、沙織の身体から力が抜けていき地面にゆっくりと倒れ込んだ。

近くで見ていた久美が叫んだ。

「何した!？」

「大丈夫だよ、ちょっと眠ってもらっただけだから」

静かに言った雪夜は背を向けて手をかざした。すると、雪夜の前に闇色の扉が現れた。そして、彼は背を向けながら言った。

「なんだかどうでもよくなっちゃたよ。沙織さんを連れて帰るといい……ボクはもっと深い世界で誰にも邪魔されずに暮らすことするよ」

闇の中へ雪夜の身体が溶けて行った。

雪夜が消えたことにより世界が溶けていく。

愁斗の手が煌きを放ち、自分たちの世界の扉を開けた。

「早く出よう、世界が消える」

愁斗は気を失っている沙織の身体を抱きかかえて空間にできた裂け目の中に飛び込んだ。それに続いて全員が裂け目の中に飛び込んだ。

気がつくとその前はもとの世界のテーマパーク内だった。全ては何もなかったようになってしまった。

彪彦は最後の仕上げとして、沙織と久美と麻衣子　この三人組の記憶を催眠術で封じた。これで事件のことは全て忘れてしまった。これで本当に三人には何もなかったことになった。

催眠術をかけられた時に同時に気を失った久美と麻衣子、それにまだ気絶したままの沙織を彪彦と撫子に任せて、愁斗と翔子は歩き出した。

「瀬名さん、デートどうしようか？」

「もう、デートって気分じゃなくなっちゃった」

「そうだね、じゃあ帰ろうか」

「うん」

全ては終わってしまった。だから二人は何事もなかったように互いの手をしっかりと握り締めて帰路に着いた。

未完成の城（完）

クリスマス当日、愁斗と翔子は色取り取りに飾られた街を出て、人里離れた静かな墓地に来た。

大きな墓地だが人の姿は二人以外ない。おぼんでもなければ人がいないのは当然かもしれない。

愁斗は途中の花屋で買った花束を持って墓地の中を歩き、翔子は誰の墓に行くのだろうと考えながら愁斗の横を歩いた。

今朝、食事をとっている時、愁斗と翔子はこんな会話をした。

「ごめんね、昨日は散々なデートになっちゃったね。あのさ、デートじゃないんだけど、今日一緒に行きたいところがあるんだ。」

今日はひとりで過ごすって言ってなかったけ？

瀬名さんは特別なひとだから、会って欲しい人がいるんだ。

そして、翔子が愁斗に連れて来られたのは墓地であった。

愁斗の大切な人とは誰なのだろうか？

しばらく歩いたところで愁斗が足を止めた。

「着いたよ。」

愁斗が見つめる墓石には『秋葉家』と刻まれていた。愁斗の家族の誰かの墓ということだろうか。

目の前にある墓が誰の墓石なのか、聞かなくても翔子は理解した。きつと、愁斗の母親の墓だ。

愁斗が小さい時に母親を亡くしたと翔子は聞いていた。そして、父親は現在行方不明らしい。

翔子は静かに尋ねた。

「愁斗くんのお母さんのお墓でしょ？」

「そう、僕の母の墓だよ。亡くなって随分になる。」

愁斗母親とどんな人物だったのだろうか、翔子は想いを馳せた。きつと、愁斗は母親似に違いないと翔子は何となくだが思った。

きつと、美人で優しく、自分の母親と比べものにならないほど

いいお母さんだったに違いないと翔子は勝手に思った。美人で優しくて、というのは翔子が想う愁斗のイメージでもあった。

愁斗はしゃがみ込んで花束を墓石に供え、そのまま手を合わせて目をつぶった。翔子も愁斗に合わせてしゃがみ込んで手を合わせて目をつぶりお祈りをした。

翔子は愁斗との仲をざっと愁斗の母に伝えて目を開けた。愁斗はまだ手を合わせて目をつぶっていた。

しばらくの間、翔子は愁斗の横顔を見つめていた。

翔子が見守る中、愁斗がゆっくりと目を開けて、呟くように話をはじめた。

「前に母は僕が小さい頃に死んだって言ったでしょ？」

「うん」

「僕が四歳の時に死んだから、断片的な母の記憶しか残ってないんだ。でも、はつきりと目に焼きついた母親の笑顔があるんだ。僕はあの笑顔を忘れない」

「やっぱり優しいお母さんだったんだね」

笑顔でそう言った翔子に対して、愁斗は浮かない表情をしている。

「優しい母だったと思う……、けど、その笑顔は違うんだ」

「違うって何が？」

「死ぬ間際だつて言うのに母は僕に向かって笑いかけてくれた」

「……………」

「体中、血まみれで苦しくかったはずなのに、血に染まった真っ赤な手で僕を抱きしめながら笑ったんだ」

「……………」

翔子は何も言えなかった。

血まみれとはどういうことなのだろうか？

愁斗の母はなぜ死んだのだろうか？

愁斗の過去に何があったのだろうか？

翔子は何とも言えない不安に襲われた。胸が苦しくて、悲しくて、翔子はどうしていいのかわからなかった。

「愁斗くん……」

やっと出せた声はこの一言だった。

愁斗は静かに呟いた。

「僕の母は殺されたんだ。それも僕の目の前で……」

翔子には考えられない不幸であった。

「瀬名さんには僕の全てを話さなきゃいけないと思ったんだけど、ごめん、これ以上は辛くて話せないみたいだ……」

愁斗は泣いていた。翔子は愁斗が泣くのを見たのはこれで二度目だった。

声を噛み殺して泣いている愁斗見ているうちに、翔子も涙が溢れて来て止まらなくなってしまった。

脳裏に焼きついた母の死に顔を愁斗は思い出して泣いていた。あの時の母の微笑を思い出すことによって、別の記憶も蘇って来る。それは、翔子が死んだ時の記憶だった。

翔子が腹を剣で突き刺され死んだ時、あの時の翔子も死ぬ間際に愁斗に向かって微笑んだのだ。だから、愁斗は翔子を蘇らせてしまったのかもしれない。その微笑を見てしまったから……。

愁斗は涙拭いて立ち上がった。

「僕さ、母が死んでから辛いことばかりで……。翔子ちゃんに出逢えてよかったよ、本当によかった」

しゃがみ込んでいる翔子は潤んだ瞳で愁斗を見つめた。

「私も愁斗くんに出逢えてよかったよ」

「こんなに人生が楽しいと思えるようになったのは翔子ちゃんのお陰だと思う。翔子ちゃんが傍にいてくれなかったら、僕は何も変われなかった」

翔子は泣きながら愁斗に抱きついた。ずっと傍にいて欲しくて、絶対放してはいけない存在だと翔子は思った。

愁斗は翔子の顔を自分の顔に向けさせて指で涙を拭き取った。

「ごめん、僕のせいで泣いてるんだよね」

「なんで謝るの？ いいんだよ謝らなくても。私は愁斗くんのこと

理解したいの、だから愁斗くんの気持ちを考えたら涙が出て来たの。愁斗くんだって泣いてたじゃん、だから私も泣くんだよ」

翔子は愁斗に抱きついてお互いを支えあう存在なのだと実感できた。

愁斗は翔子を強く抱きしめた。とても温かくて、翔子の心臓の鼓動が伝わって来るのがわかる。

「あっ!？」

翔子が声をあげた。

「どうしたの？」

「見て、雪だよ雪!」

愁斗が空を見上げると、灰色の雲の中から小さな雪がたくさん降って来て、手のひらを出すとその上に落ちて、すぐに消えてしまっ
てなくなってしまった。

ひとつひとつは儂い雪 この雪は積もるのだろうか？

「愁斗くん？」

「何？」

「ホワイトクリスマスなんて滅多にないよ」

「そうだね」

「ロマンチックだよね」

ねだるようにして翔子は目をつぶった。そして、話を続ける。

「雪が消えないうちに……」

翔子は最期まで言わなかったが、愁斗の唇は翔子の唇にそっと触れた。

目を開けた翔子に愁斗は笑いながら言った。

「積もるといいね」

「そうだね」

雪降る中で二人は手を繋いで帰路についた。

未完成の城（完）（後書き）

「傀儡師紫苑アナザー」という、このシリーズの短編集も連載しています。

時間があるときに読んでくださいね。

似たタイトルの「傀儡士紫苑アナザー」も連載していますが、こちらは舞台が大きくことなる近未来世界でのお話で、ほかの設定は似ているところもありますが、あくまで別の世界のお話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0785e/>

傀儡師紫苑

2010年10月8日13時53分発行